

# 大発見！ 主イエスの血潮

## ／目次

第1章 罪を赦す

第2章 聖霊を注ぐ力

第3章 呪いからの解放

第4章 いやしと健康

第5章 信仰と献身する力

第6章 栄光の体

第7章 天の御国

はじめに

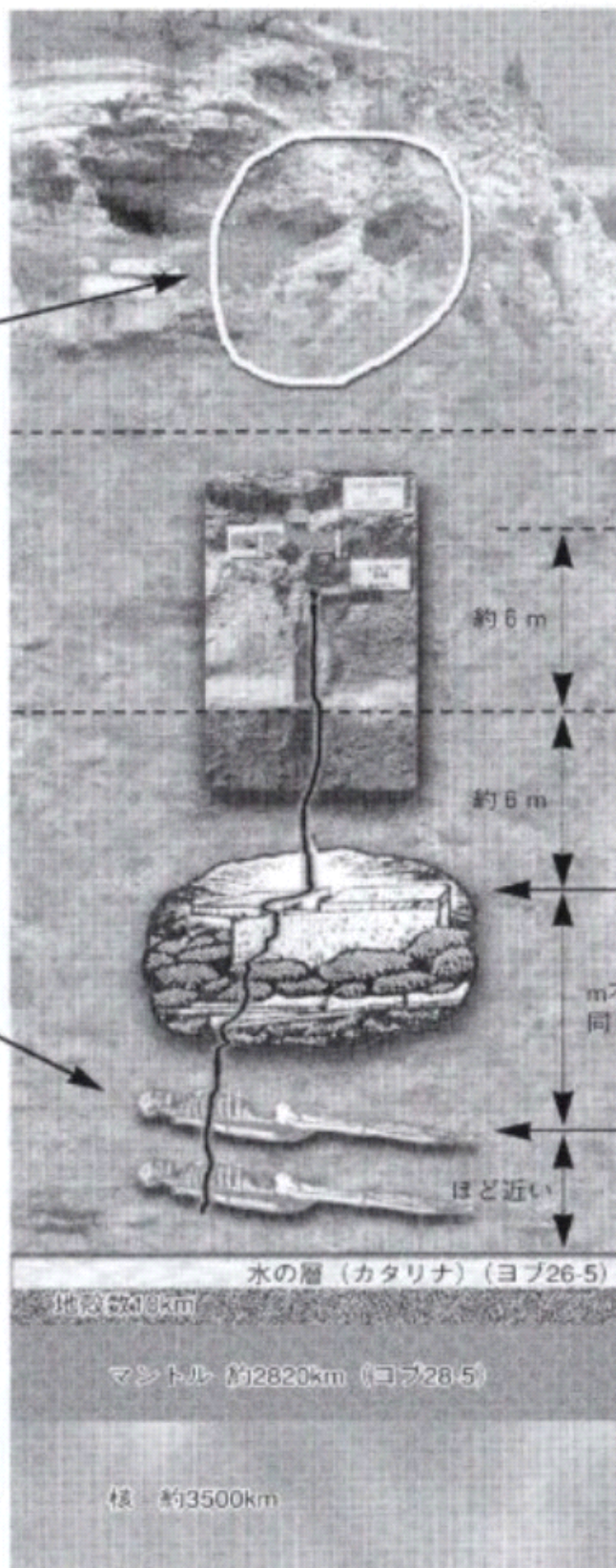
この書は奇蹟と祝福の源であるイエスの血潮の力を、聖書の解き明かしを始め、夢、幻、体験談、考古学的資料、聖骸布、そして本当のゴルゴダの地で発見採取された二千年前の生きて働くイエスの血潮など、あらゆる角度から研究レポートしたものです。主の真理探求に、日々熱心なクリスチャンの皆様にとって、少しでも信仰生活の益になればと願いつつ、私にとってこれら一連の働きは至難のわざでしたが、ただ祈りながら聖霊さまの力でまとめました。どうか信仰と忍耐と御霊による優れた理解力で最後までお読みくださり、あなたご自身でこれらのレポートに対して、自由な判断をくだして

ください。強調したいことはイエスの血潮について、あくまで聖書だけがいのちであり、真理であり、教科書です。手にしたこの書については、ほんの参考書としてご覧ください。父・子・聖霊の神さまにすべての栄光をお帰しいたします。

ユダヤ地方の伝承で昔からアダムの墓と言われていた地をゴードン元将軍が発掘し、どくろ岩を発見、この地を本当のゴルゴダと特定した。

AD2001年現在でも岩のおうとつがどくろの面に見えるが浸食のより少ない2千年前にはもっとリアルなどくろ岩だったかもしれない。

身長約2~3m寿命930年「かの大洪水以前創世当初の墳人の身長はもっと大きかったであろう。このころの人体の大きさについて昔の墓が年月が経ちまた洪水やその他の原因によって地表に表れ、そこに見出される死者の骨がほとんど信じられないほど大きいことから、多くの懐疑論者すら疑い得ないことである。」(アウグスチヌス)



現在、これより下は土砂に埋もれ政府より発掘も禁止されている。

罪状書をすえた岩だな (ロン・ワイアット/ジョナサン・グレイ)

2千年前の大地 (ロン・ワイアット/カタリナ・エンメリック)

BC586頃 (ロン・カタリナ) 契約の箱

m不明・小洞窟内 同じ洞窟かもしれない。

BC3070頃埋葬 アダムとエバの骨 ユダヤ暦930頃埋葬 (カタリナ)

ゴルゴダの地はかつてのソロモン石切場であり、エレミヤの洞窟とも呼ばれ地下に大貯水池がある。

(エゼ31-16  
ヨブ7-9  
イザヤ14-9  
詩49-14  
箴9-18)

下界のよみ (メアリー・バクスター)



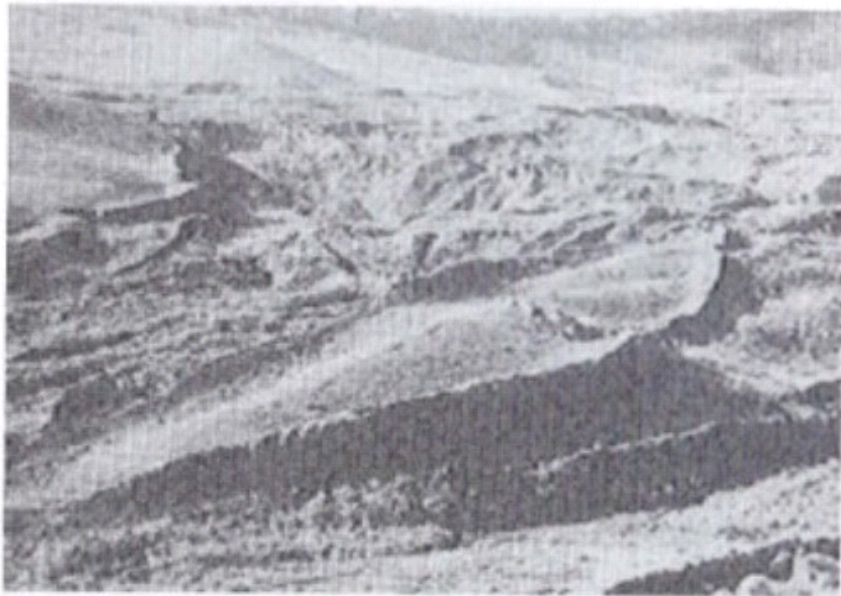


図1 ノアの箱船の残骸

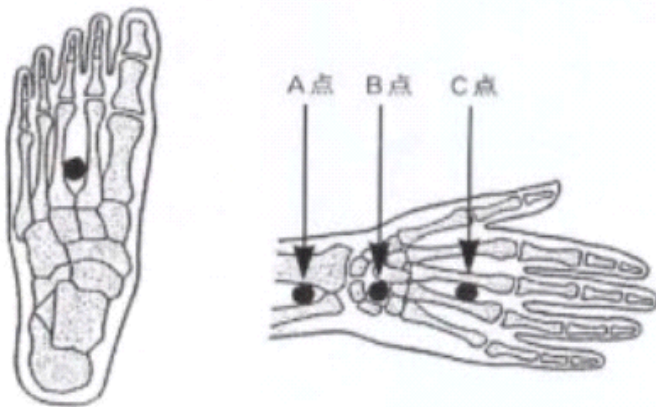
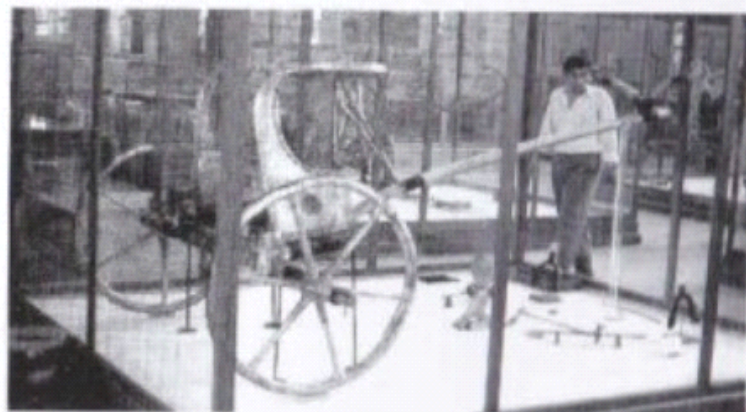


図2 エジプト戦車の車輪



図4 契約の箱の模型

図3 戦車全体



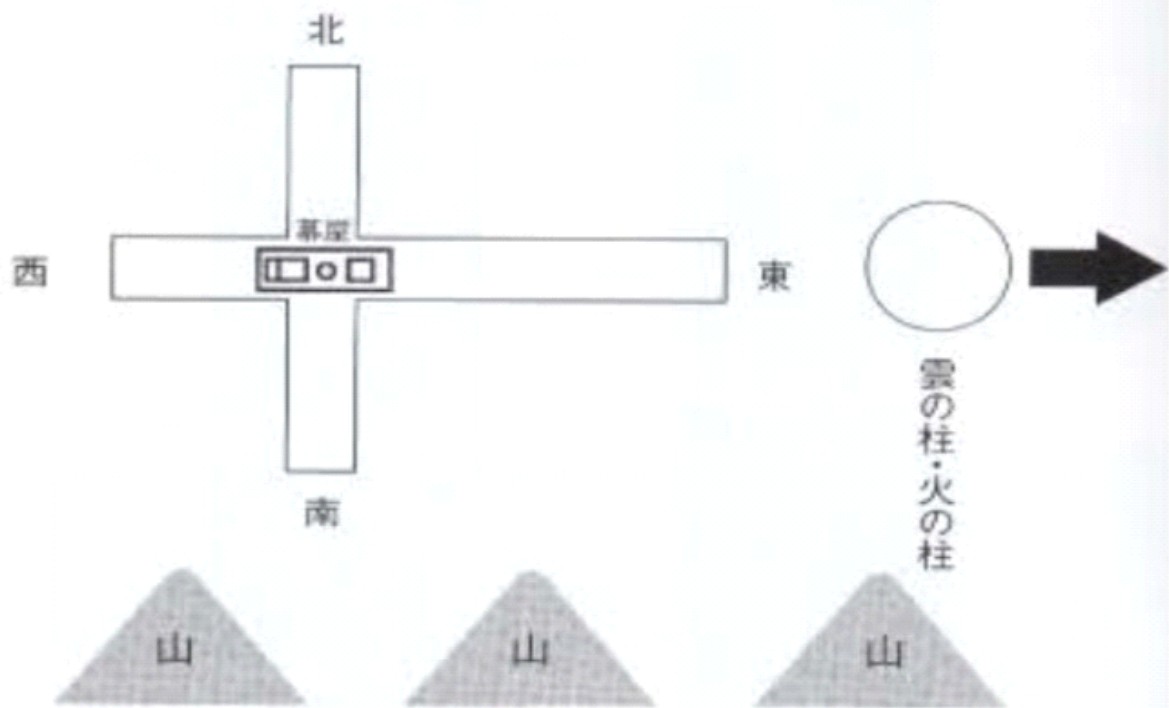


図6 12部族の宿営地全体を山から見た図



図5 くびきをつけて荷をひく牛





圖9



圖8 聖骸布



圖11



圖10

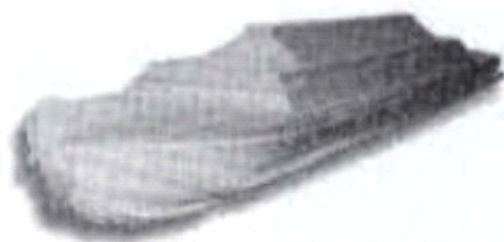


図12  
ノアの箱船の全体  
復元予想図

図13 側面からみた箱船とそのサイズ



図14 箱船の残骸、ひも  
は計測のためのもの



図15 どくろの地カルバリ



図16  
どくろの真下、  
罪状書きの岩  
だな前に立つ  
ロン氏

図18 上からみた1世紀の遺構の見取り図

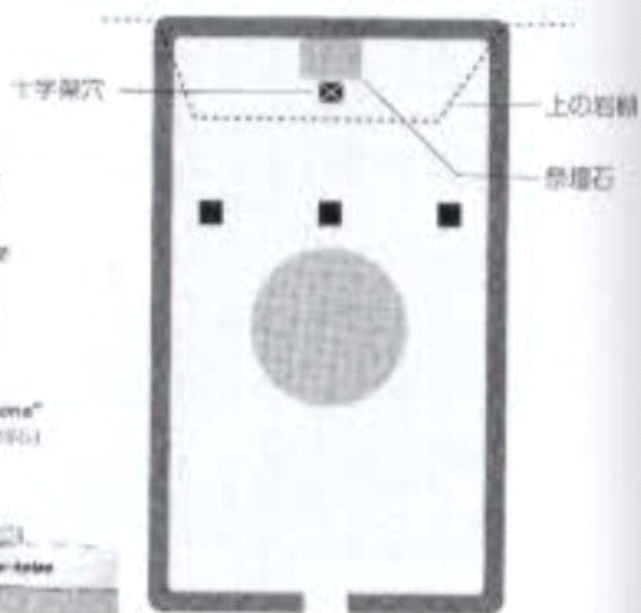


図17 十字架の現場を側面からみた見取り図

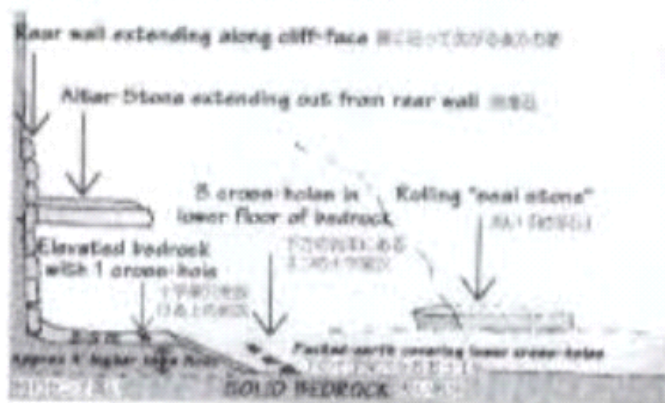






図20  
イエスの葬られた墓  
A B付近に封印石の  
痕跡がある。

図19  
1世紀につく  
られた祭壇石



図21 十字架の建てられた穴と  
そこから広がる地震後の炸裂



図22 十字架穴から広がる炸裂。拡大写真

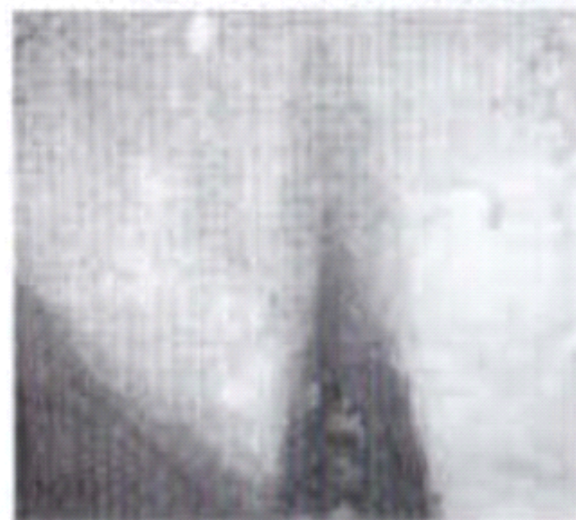




図23  
十字架の穴に  
入っていた石



図24 ロン氏の書いた契約の箱

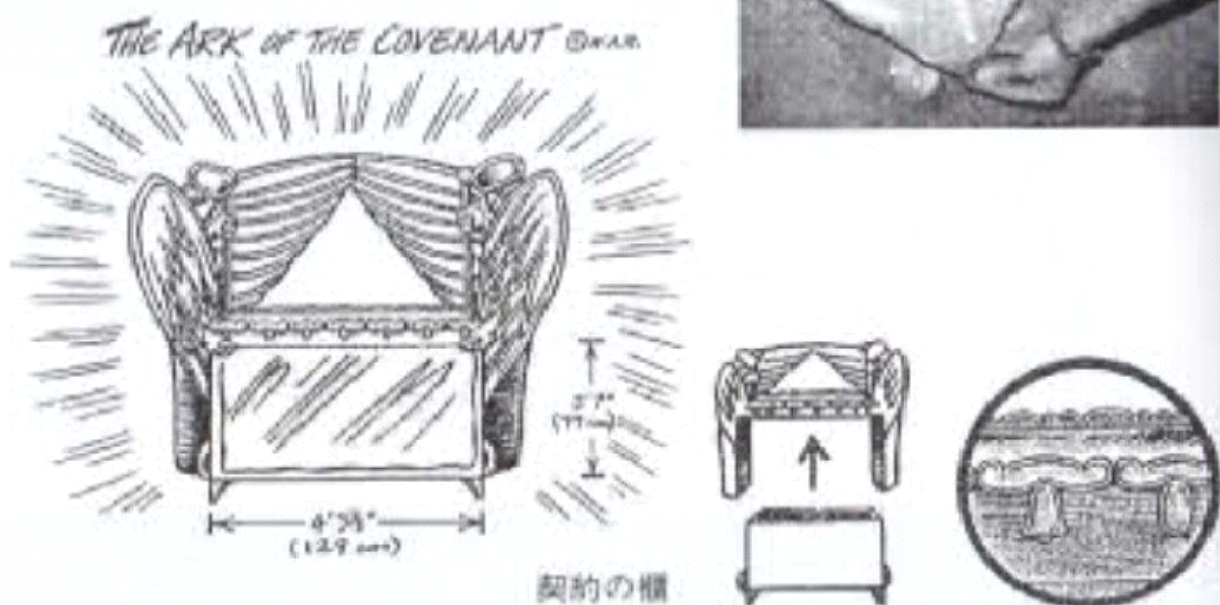


図25 契約の箱を入れた石棺のふたは二つに裂けて、隙間から中までイエスの血は注がれていた。

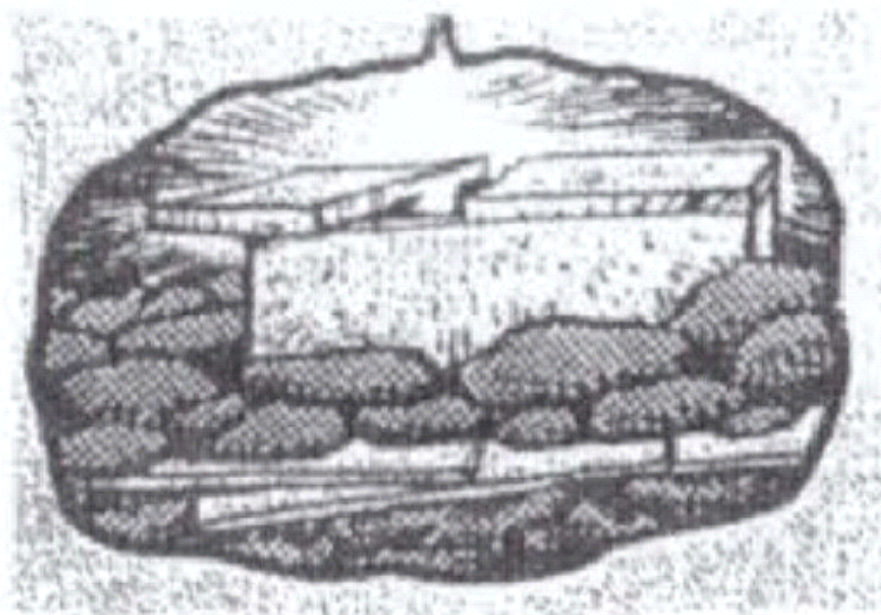




図26 ロン氏が写した神秘的ペールにつつまれたままの聖約の織の写真



Copyright 1996 Richard Rives and Wyatt Archaeological Research

図27 採取された強きで動いているイエスの血のマイクロスコープ映像



人間の血液とは実に不思議なもので、同じ血液型どおし輸血は出来ても、人工的に造ることも他の何かを代用することも出来ないものです。聖書では「肉のいのちは血の中にある」(レビ記 17:11)と定義します。

かつてアメリカで病の原因は悪い血にあると考えられ、採血が公認の最新治療法であったため、この治療で多くの尊い命が失われました。有名人に当時の大統領ジョージ・ワシントンも風邪をひいた時、採血治療に基づきどんどん血を抜き、あとは出血多量で召天しました。聖書の言葉は真理であり「血はいのち」です。

また、聖書は「血は語る」と教えています  
(創世記 4:10、ヘブル 12:24)。

言葉を語る存在は人間以外にもあります。  
父・子・聖霊の神さまは語られます。天使も  
語ります。悪魔もしゃべり、祭壇も神の義を  
語り(黙示録 16:7)、そこで流れた血も語り  
ます。私たちが怪我をして血を流す時、そ  
の血は無言のうちに「激しく動いてはいけま  
せん。薬をぬりなさい、病院へ行きなさい」と  
命の危険性を語りかけます。男女が結婚後、  
初夜に処女のしるしを見るならば、この血は  
聖なる結婚契約の血、夫婦間の純潔性と愛  
を語りかけます。殺傷事件の裁判などで現  
場に残された血痕が、DNA鑑定から犯人

逮捕の決め手の証拠になることもあります。  
血は流された性質上、報復も語りかけます。  
「血に報いる方は、彼らを心に留め、貧しい  
者の叫びをお忘れにならない。」

(詩篇 9:12)。

人類最初の殉教者アベルの血もまた、土地から神さまへ無実の死に対する報復を叫んでいました(創世記 4:10)。イエスさまは義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ゼカリヤの血に至るまで、地上で流されたすべての正しい血には報復があることを教えられました(マタイ 23:5)。

ヘブル 11 章 24 節ではイエスさまの十字架



で流された正義の血潮について「アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血である」と記されています。

私の妻が聖霊のバプテスマを受けた時、イエスさまの十字架を見ました。その証しによると妻は始め、聖霊さまを求めて一人部屋にこもり、正座しながら壁に向かって真剣に祈りました。するとほどなく目の前に開かれた幻が見えてきました。道行く前方に十字架にかけられたイエスさまが現われ、妻の心に衝撃が走りました。今までイエスさまの十字架について目にしたどんな美しい聖画とも異なり、幻で直視した実際のイエスさまは、全身が血潮にまみれたひどい悲惨な

状態だったからです。いばらの冠を受けた御頭から大量の血が長い髪の毛をぬらしながらしたたり落ち、イエスさまご自身目を開けられないほど御顔を赤く染めていました。妻はその時、イエスの血潮の注ぎを受けて聖霊のバプテスマを体験しました。

すると目の前に異なった二つの道が現われました。一つは広い道、もう一つは狭い道です。御言葉を思いながら狭い道を選択して歩き出すと、やがて険しく曲がりくねった危険な道に、数頭のほえたける大きなライオンが現われ、繰り返し幻の自分に襲いかかろうとジャンプしながら接近し、おびやかして

きました。ライオンたちが前後に妻を包囲し、もうこれ以上進むことも戻ることもできなくなった恐怖の只中、突然、神さまの御声が天からはっきりと聞こえて来ました。

「わが子よ。恐れてはいけません。そのライオンをよく観察しなさい。その口を見なさい。すべての牙はすでに抜かれているではありませんか。その足を見なさい。すべてのつめもすでに抜かれているではありませんか」よく見ると確かに危害を加えることのできるあらゆる鋭いものはすべて除かれており、ただジャンプとほえたける大声でおどかしているだけであることに気付かされました。

そこで思いきって前進すると、その瞬間ラ



イオンは一匹残らずその場から消え去り、かわりに場面は一変して、美しく輝く天国の情景が現われました。そこは大いなる空が無限に広がり、この世で見たこともない美しい花々がすばらしい香りを放ちながら咲き乱れ、聖なる讃美が天国中に鳴り響き、表現できないレベルの幸福感が心を支配しました。ところが、幸福もつかのま足元のはるかに低くなった外側の別世界を眺めると正反対の色彩を放つ暗闇の地獄が実在するではありませんか。

幻を見つめているうちに、人々の大群衆が列を成して広い道を行進するのが見えてきました。

人々は互いに楽しそうな日常会話に夢中になって、一体自分が今何処に居るのか何処に向かって行進しているのかも分からずに、ただひたすら目先の会話に夢中になって、恐ろしい絶壁をもつ崖に向かって勢い良く行進しているのです。

「これは大変だ！誰かがこの滅びに突き進む大行進を止めなければいけない！」と思いつつ、涙で力の限り大声で叫んで彼らに警告しました。イエスの血潮を受けた妻自身が十字架の救いを語るメッセンジャーとなり、血潮の声となりました。しかし、人々は一向に会話に夢中になって歩き続け、崖の下にはすでに滅びた多くの魂が恐ろしい骸

骨となって積み重なっては焼かれていたそうです。滅びに至る道は広く多くの人々がそこを歩みます。しかし、どうしても強い決断を持って、この世と調子を合わせることなく、勇気と信仰を持って進み行かねばならない唯一真の細く険しい道こそ、イエスさまのおられる十字架の道、血潮の道、天国の道です。

今、午前九時から午後三時までの六時間、荒削りの十字架へさびた釘で手足を打ち付けられたイエスさまから流れ出た聖なる血潮が、私たちに語りかけている七つのメッセージに耳を傾け、広い深い御言葉の奥義を共

に学びましょう。イエスの血潮の力の本質を悟ると信仰生活が実質あるものとなり、必ず祝福と奇蹟がともないます。

罪を赦す

第一に、イエス・キリストの血潮は、私たちの罪を赦し、義人として神さまの子供になさせる力があります。

義認・聖化・栄化

神の法律である律法では「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはない」(ヘブル 9:22、レビ 17:11)と定まっています。旧約

時代、人々は罪赦されて神さまに受け入れられる礼拝を捧げようと人の代わりに罪なき小羊や子牛などの動物を祭壇上でほふり、その流された動物の血をもって赦しと清め、神さまとの和解を求めました。その時に捧げることのできる動物の条件は子牛のような高価な動物ほど細かい規定が多く、律法によるとまず皮をはぎ、見える所の外面の傷がないばかりでなく、皮をはいだことにより、初めて現われる内面の傷やシミや病気もないかを十分に吟味した上で、ただ傷のない完全な動物だけを捧げることができ、神さまにその血は受け入れられたのです  
(レビ記 1:6)。



新約時代、ただ一度、人々の罪を身代わりに背負う罪なき神の小羊イエスさまの場合にも同じ規定が成立しました。神さまに受け入れられる捧げ物は、絶対罪の傷や呪いのシミがあってはなりません。通常のすべての人間には罪があります。しかし、唯一イエスさまのご生涯だけは外なる人前での行動や発言において、全く罪や欠点などが見られない完全なふるまいをされ、さらには皮をはいた内なる人としても心底聖い霊と心と思いをもち、生まれながらにして全く罪の支配も影響もなく、罪の要素を持たない、聖なる驚くべき完全なお方でした。人は心に満ちるものを口から語ります。イエスさまの人と

しての公生涯、語られた数々の聖いメッセージからその内なる人の聖さは十分に立証出来ますが、その中でも最大級にキリストの内なる人の聖さを立証した出来事とは十字架です。イエスさまは背中にムチ打たれ、十字架の木に釘打たれ、執拗に肉体の皮がはがされて、血潮が流れ出る、壮絶な死の体験をされましたが、そのような死の地と死の陰にみまわれた窮地に立たされ、本当の内なる人が現われる時でさえ、イエスさまの心には自分を迫害し、釘打つ者への呪いや復讐心、憎しみのような、内なる隠されたシミも傷も全くなく、むしろそこには完全に聖く純粹な愛から生じる迫害者への深い哀

れみと、赦しととりなしの祈りがあったのです。  
「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何を  
しているのが自分でわからないのです。」  
(ルカ 23:34)

人は自分が豊かで安全な時、外なる人として義人を装うことも十分に出来ますが、落とされて激しい試練と患難が自らを襲い、絶体絶命の窮地に追い込まれた時、その人の内なる本当の人間性が見えてきます。  
あるいは「るつぼは銀のため、炉は金のためにあるように、他人の称賛によって人はためめされる。」(箴言 27:21)とある通り、反対に極端に高く、高められた有頂天になりそうな

ほどの繁栄の時、内なる本当の人間性が見えてきます。そう考えると群衆から「ホサナ、ホサナ！」と王様のように称賛された時も、犯罪人のように十字架に掛けられた時にも、いつも変わらず愛と聖さを保たれたイエスさまこそ、まさに全世界の救い主として、私たちにおくられた外も内も驚くほど、聖い父なる神に喜んで受け入れられる神の小羊なのです。十字架という祭壇に捧げられた神の小羊イエスの血潮は今も信じるすべての人の罪を聖め、神の子供とする(エペソ 2:13, 16)あがないの力です。

天国を実際に見たメアリ・K・バクスターの

証しによると、天国ではたくさんの天使が役割分担しながら忙しく働いており、地上でイエスさまを信じ、救われた人々のために、過去の生活のすべてが記されている本を取りだして、その罪の記録の1ページ、1ページを金のバケツからすくいあげたイエスの血潮で洗っていたといいます。そして天使が洗うと、その本のページは真っ赤になって見えなくなり、すべての記録を洗い終えた時、本のページの色が変わって、生まれた日以来、行なってきたすべての罪の記録は何一つ残らず文字通り洗い清められていたといいます。

「御子イエスの血はすべての罪から私たち



をきよめます。」(第一ヨハネ 1:7)

聖書はイエスの血潮により契約します。

「さあ、来たれ。論じ合おう。たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。」(イザヤ 1:18)

北国で白い雪がだんだん降り積もって、やがてすべての大地を厚く真っ白におおいかぶせて、まぶしく輝かせるように私たちの心も真っ白くなれます。しかも、顕微鏡で雪の結晶を見ると多種多様な形があり、どれも驚くほど芸術的で美しいバランスのとれた形を持っています。イエスの血潮は、私たちの心をこのような美しい状態まで磨き上げてくださいます。聖なる純白な美しい心です。

そして雪は必ず天から降り注がれるように、私たちの聖めも同様に人から生じるのではなく天からの恵みです。美しい雪の結晶とは、天国は美しいという手紙です。その聖い美しさの源は、私たちの過去を赦して義と認め、現在を聖と変化し、未来は栄光と変化するまですべての罪を赦し清めるイエスの血潮にあります。

## 水浴した者

ある日の夕食の間のことです。弟子たちと食事を共にされたイエスさまは、席から立ち上がって上着を脱がれ、手ぬぐいをとって

腰にまとわれてから、たらいに水をいっぱい入れて一人ひとり弟子たちの足をきれいに洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいでふき始められました。

これは通常、主人が外から帰宅した時にその家で給仕するしもべがなすべき仕事です。ところがあの、主であり、師であるイエスさまご自身が、畏れ多くも弟子たち一人ひとりの汚れに満ちた汚い足に御手をつけるとは、弟子たちはイエスさまがなぜそうなさるのか全く理解出来ず、ただただ顔を見合わせながら当惑するばかりでした。そこでペテロの順が来た時、ペテロは思いきって質問しました。

「主よ、あなたが私の足を洗って下さるのですか」

イエスさまはこれに答えて

「わたしがしていることは今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります」

するとペテロは

「決して私の足をお洗いにならないでください」

イエスさまは言われました。

「もし私が洗わなければ、あなたは私と何の関係もありません」

するとペテロは

「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください」

イエスさまはこの時、大切な教えを言われました。

「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」(ヨハネ 13:6-10)

イエスさまはここで弟子たちが互いに人を自分よりもまさった存在と考えて尊重し、赦し合い、仕え合うことの大切さを教訓され、加えてもう一つ大切な霊的教訓も宣言されました。水浴した者はすでに清いということです。一度イエスさまを信じて救われたクリスチャンは、すでに全身水浴した者のようにその霊魂はすでに清い状態です。ただ、汚



れた足だけ洗う必要があるというのです。

中東社会は当時砂ぼこりの多い所をサンダルで歩きまわったため、その足は毎日汚れ、帰宅後、玄関にある水を張ったたらいで洗う必要がありました。足というのは日常生活での行動の基本です。それゆえ「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません」とイエスさまが教訓されたこの意味は、すでに救われたクリスチャンにとって、日常生活の行動上、自然と足についてしまったような汚い罪のほこり、これだけを日々洗い清めれば良いことを教えられたのです。

外から帰宅したら、まずイエスの血潮を讃美

して罪の汚れを洗い清めることです。クリスチャンが救われて後、日常生活の中で一度、罪を犯して失敗した行動があったとしても、それは行動上の足だけが汚れたのであって、清まるために初めからもう一度水のバプテスマを受け直して一からやり直す必要はないということです。それはペテロが「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください」とイエスさまに頼み、拒まれたのと同じことです。

ただ汚れた部分の罪だけを告白して悔い改め、イエスの血潮で日毎に洗われれば、すでにその人は全身清くなっている救われた神の子供です。一度救いを体験したクリ

スチャンはすでに全身清い人です。たとえ  
どんなに大きな失敗をしても、転んでも倒れ  
ても清い神さまの子供であることは不変の  
真理です。倒れたら起きあがり、つまづいた  
ら、もう一度立ち上がればいいように、罪を  
犯したら悔い改めて、イエスの血潮で汚れ  
から清まればそれで良いのです。イエスさま  
がへりくだって、私たちの罪の汚れを洗って  
下さるからです。玄関にある水の入ったたら  
いのように、天国では金のバケツがあって、  
その中のイエスの血潮が、すでに神さまの  
子供とされた私たちの罪の汚れを、永遠に  
至るまで洗い清めて下さります。肉体の汚  
れは水で洗えば清まります。心の罪の汚れ

はイエスの血潮で洗えば完全に清まります。  
イエスの血潮を日々、繰り返し讃美しましよ  
う。たとえばこのようにです。

「♪ つみのけがれを、あらいきよむるは、イ  
エス・キリストのちしおのほかなし。イエスの  
ちしお、ほむべきかな、われをあらい、ゆき  
のごとくせり ♪」(聖歌四四七番)

私たちが温泉に行くと、よく体を洗い場で  
きれいに洗ってから浴槽に入る人と、体をよ  
く洗わないままお湯だけ部分的にかけてす  
ぐ浴槽に入ってくる人も見かけます。どちら  
も温泉気分を味わって帰りますが、事前に

洗い場で体を真剣にこすって洗った人は、その後の温泉効果も良く、彼らは本当に綺麗な人です。しかし、体を洗わなかった人には、依然きたない垢がくっついたままで浴槽に入るため公衆の迷惑であり、彼らはただ温泉という雰囲気味わって温まっただけの人です。教会でも、さまざまの人が集いますが、十字架のもとで悔い改めと感謝の祈りで、イエスの血潮をあがめる罪の垢から綺麗さっぱり清められた人と、悔い改めの祈りがなく依然、罪の汚れが付いたままの人もあります。いずれも教会という雰囲気味わって温まって帰りますが、血潮信仰を持つか否かは、教会効果ともいうべきその



後の霊的成長と祝福に大きな影響を与えます。

## 24 人の長老

彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱい入った金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。」(黙示録 5:8)

黙示録五章八節では、天国で四つの生き物と二十四人の長老が神さまを賛美礼拝する姿が書かれています。四つの生き物は

四福音書を象徴する四人の特別な御使いで、二十四人の長老は旧約の十二部族長と新約の十二使徒の合計二十四人と思われます。彼ら長老たちは元、地上に住んだ人間であり、今は死後に移された神の国で天国人です。この人たちが優先的に最初に神様を賛美しています。

「彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭

司とされました。彼らは地上を治めるのです。」(黙示録 5:9、10)

これら二十四人の長老たちの賛美に続いて無数の天使たちも賛美します。

「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」(黙示録 5:11、12)

最後は生き物たちも天国において神さまを賛美します。

「また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

(黙示録 5:13)

ここで大きな違いは優先順位第一に二十四人の長老たちが賛美できることです。天国で私たち聖徒は出世した者のように神様に認められて将来、御使いたちよりも偉くな

ります。

「私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。」(第一コリント 6:3)

さばかれる御使いは、墮落した天使の悪霊が私たち聖徒によって裁かれるという意味ですが、かの日には上下関係が変わります。現在では命のくらいが第一に神さま、第二に御使い、第三に人間、第四に動物、虫、植物となっていますが、将来の天国では、第一に神さま、第二に人間、第三に御使い、第四に動物、虫、植物と変わります。



また、賛美に特徴点があります。その歌詞には「その血により」という言葉で聖徒だけがイエスの血潮を賛美しています。無数の御使いも生き物もイエスの血潮を賛美する特権には預かれません。なぜなら私たち人間だけが唯一、罪を犯して墮落した後、悔い改め、イエスの血潮で赦され、清められて救われた体験ある、特別な存在だからです。天国の御使いたちは墮落もあがない体験もありません。墮落した悪魔に救いは永遠にありません。ただ人間だけがイエスの血潮で救われ、人間のためにイエスの血潮は流されたのです。

こういう訳で天国では我ら聖徒だけがイエス

の血潮を賛美できる特権があります。その  
賛美の歌詞も御使いや生き物の賛美と比  
較して文字数が一番多くて長く、優先的に  
神さまを最初に賛美礼拝できる立場にあり  
ます。ハレルヤ！

地上でもイエスの血潮を歌詞に導入した賛  
美を沢山歌いましょう。最も力ある特別な賛  
美がイエスの血潮だからです。

コロサイ人への手紙 1 章 15 節にはイエス  
さまについて「御子は、見えない神のかたち  
である」とあり、イエスさまは父なる神と一つ  
であって、その肉体の命なる血潮は、人の  
罪を清める父なる神の清さをそのまま直接

受け継いだ特別な血統だったということを理解するために、一つのたとえ話をしたいと思います。

最近バイオテクノロジーの分野で、特に日本が盛んに研究実践している遺伝子組替えによるクローン牛というものがあります。高品質の霜降り牛を安定的に大量供給できる日を夢見て実験されていますが、その生産方法は通常の交尾による牛の受胎法とは根本的に異なるものです。

まず優秀な血統を持つ、霜降りの高級オス牛の耳や背中のような皮膚からDNA細胞を取り出します。次にメス牛から卵細胞を

取り出し、これを弱い電気刺激の力で電子顕微鏡で見ながら卵細胞の中に直接オス牛のDNA細胞を入れて受精させます。これが成功すると卵細胞は核分裂を始めます。そしてこのような状態になった卵細胞をメス牛の胎内に再び戻すと、そのまま身ごもり出産出来ます。しかもこの場合、クローン胚は精子を使わず、卵子からも核を除いているので、これら生殖細胞から遺伝情報は引き継がず、生まれた子牛には父親のオス牛から体細胞の遺伝情報による血統だけがそのまま受け継がれ、母親のメス牛の性質は一切受け継がない、父牛と全く同じコピーのような子牛だけが誕生出来るのです。

そのため父牛が優れていればそのまま血統ある父牛どおりの優れた高級牛だけが大量生産可能となるのです。現在、この試みは動物実験に限られ、人体実験においては全世界的に禁止しておりますが、実に理論的には全く同じことが人間にも成り立つそうです。

詩篇 139 章 15-18 節では人間について「私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠されてはいませんでした。あなたの目は胎見の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々

が、しかも、その一日もないうちに。神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。」とありますが、天国の神さまの書物には文字通り個人情報すべてが書きしるされており、地上でもこれに似た設計図のようなDNAが人体にあります。それは私たちの脳内細胞は約三十億もあり、その一つひとつの細胞の中にはさらに染色体があり、染色体の中には三万から四万個ほどの遺伝子が収まっています。その遺伝子の実体はDNAという物質の連なりであり、これは血液細胞から白血球を取り出して特

殊な処理をすると砂よりも数多い個人的な遺伝情報を書きしるされたヒトゲノムというタイトルが付いた書物のようなDNA(デオキシリボ核酸)が出てきます。このDNA細胞という設計図を使った繁殖技術です。すなわち人間の受胎法にも二通りありうるのです。一つは通常どおり、結婚した男女間の結合により種を受けた女性が身ごもるものであり、この場合、生まれる子供は父親と母親の両者の性質を掛け合わせ持つことになります。

しかし、もう一つの受胎法は、男女の結合なきマリヤのような処女でも可能なものであり、それは男性のDNA細胞を皮膚から取



ったものを、女性から直接取り出した卵細胞に弱い電気刺激の力で直接入れてから核分裂させ、これを再び女性の胎内に戻す方法です。もし、この受胎に成功すれば、理論的には母親の性質は全く持たない、父親のDNA細胞の設計図どおりのコピーのような完全な現われとして、全く父親と同じ性質を持つ子供を出産出来るのです。

イエスさまの生誕は、たとえてみると、これに少し似た面を持っており、母親マリヤの子宮内には一つの生命が宿る過程で、人間の種以外の何らかの神さまよりの神秘的な直接の働きかけがあったことは確かです。

「私は生まれたときから、あなたにいだかれ

ています。あなたは私を母の胎から取り上げた方。私はいつもあなたを賛美しています。私は多くの人にとっては奇蹟と思われました。あなたが、私の力強い避け所だからです。」(詩篇 71:6、7)

その奇蹟とは旧約聖書中、繰り返し預言されていた救い主キリストの生誕についてのロゴスの御言葉が、ある日、突然、天の御使いによりレイマの直接の父なる神よりの御言葉となってマリヤに受胎告知されました。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」(ルカ 1:28)

「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」

(ルカ 1:31)

このレイマの御言葉が、父なる神よりのDNA細胞のごとく生きた種となってマリヤに入り、その瞬間、処女マリヤの胎内に働きかけた弱い電気刺激のような働きかけが、聖霊さまの感動、感化だったのです。それゆえ、マリヤは処女にもかかわらず身ごもることができ、やがて、時満ちて生まれ出たお方、キリストは生まれつき人間の罪の種を全く受けずに、父なる神より直接レイマの御言葉の種だけを受けた「神の言葉」として父なる神と同一のご性質を合わせ持ち、ヨセフの種もマリヤの性質も一切受け継ぐことなく、ただ父なる神さまのコピーのように同一のイメ

ージと栄光の完全な現われとして御父と全く一つになって世に産まれて来ることが出来た、まさに神さまがそのまま人間となった救い主なのです。そのためその命であるイエスの血潮こそ正統的に純粹な父なる神よりの由緒正しい血統であり、人間の罪が全く交わらなかつた聖なる命の源流であり、このような尊い血潮が十字架に注がれたのです。

## 旅人のそばめ

士師記二十章には驚くような現実の人間の罪悪の歴史が記録されています。始め私がこの聖書箇所を読んだときは正直気持ち

が悪いと思いましたが、よく祈ってから十字架の血潮を照らし合わせて霊的に解釈してみると、ここも大切な無視できない真理を啓示する神の言葉であることが分かりました。

一人の老人がある晩、ベニヤミン族の住むギブアの町の広場で野宿しようとしている旅人を憐れみ、特別に自分の家に泊めてあげることにしました。その理由は町の広場には墮落した民が満ち、男色の風習さえある大変危険な所だったからです。老人は旅人を喜んで迎え入れ、ロバに馬草を与え、足を洗って、食べたり飲んだりしながら共に楽しんでいました。ところが夜もふけかけたころ、突然、家じゅうを揺さぶるような破壊的

なこぶしでドアを激しく叩き続ける音が鳴り響いてきました。

「ダン！ダン！ダン！」実にその町の男色の風習あるよこしまな男たちが情欲に満ちて、老人の家を取り囲んで叫んでいたのです。

「あなたの家に来たあの男を引き出せ、あの男が知りたい！」

執拗に迫り来る町の墮落した男たちに老人は必死に抵抗して叫びました。「いけない。兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでくれ……」しかし、老人の説得にも男たちが。一向に応じることなく、今や家のドアも力づく

で打ち破らんばかりになったため、老人は旅人を守るため残された最後の手段をとりました。旅人の身代わりにそばめをつかんで外の男たちの所へそのまま出したのです。情欲と汚れに満ちた男たちはいっせいにそのそばめに襲いかかり、夜通し朝まで暴行を加え、夜が明ける頃やっと彼女を放したのです。

翌朝、旅人が外に出ると、そばめが家の入り口に倒れたまま死んでいるのを確認しました。そこで旅人は家に入り、当時の風習によって刀を取りだし、驚くことにそばめの死体を十二の部分に切り分けて、それぞれ



の部分イスラエルの部族ごとに一つずつ輸送したのです。小包を受け取った族長たちは開いてびっくり仰天です。開いた口が閉まらない族長たちは事の重大さに目が覚めて、大至急イスラエル中の十一部族を召集して大会議場である「ミツパの主のところ」に集合しました。

イスラエルの全部族、民全体の頭たち、四十万の剣を使う戦士が神の民の集いに総動員されました。目的はただ一つ、男色の風習に身を委ね、全く悔い改めようとも恥ようともしない鉄面皮のようなギブアの町に住むベニヤミン族に対して、イスラエルの十一

部族は、主の御心を求めて後、一致団結して立ち上がり、イスラエルから悪を除き去るための聖戦をついに開戦したのです。今まで眠りについていていた十一部族が始めて目覚めて自発的に立ち上がったのです。まさに罪悪と戦うリバイバルの始まりです。彼らは必死に主にすがり、断食礼拝で身を清め、戦士たちは剣を手に手に聖戦を繰り広げ、最後に十一部族はこの戦争でイスラエルから墮落しきった一部族を聖絶して彼らの町ギブアを焼き払うこととなりました。

人間の罪はこのように恐ろしい燃える火のようです。罪と汚れはことごとく聖絶して、焼

き尽くすしかありません。しかしながら今の時代、いまだ多くの力ある神のイスラエルは、霊的に眠っている状態です。日々、展開されるべき聖戦である罪悪や肉欲との戦いに気づかないでのんびり妥協したまま参戦できないうでいます。本当は目覚めたら凄く力ある勇士たちが、あまりにもたくさん寝ています。眠れる神の民を目覚めさせ、勇士とならせる唯一の切り札があります。この国を目覚めさせ、教団教派を超越した教会の一致をもたらし、全クリスチャンを聖戦へと立ち上がらせるリバイバルの鍵がまだあります。もともと罪悪に対する戦いの認識が甘かったイスラエル十一部族でさえ本気で立ち上

がらせる動機づけを与えた起爆剤とは一体  
なんだったのでしょうか。

それは墮落したギブアの町の罪悪とは一  
切関係なく、ただ犠牲となりただ身代わりと  
なり殺された無実なそばめ、その人でした。  
皮肉にも元気に生きている時のそばめでは  
なく、死んだ後の悲惨なそばめです。そば  
めの死体をイスラエルの国中へ送りつけた  
そのことが引き金となって、十一部族の開  
眼となりリバイバルの原動力となったのです。  
死体の一部を実際に受け取って、直接見た  
十一部族が始めて事の重大性を悟り、本気  
に目覚めてミツパの町、主の所に集まり罪

悪に対する聖戦を開戦し勝利したのです。

今、私たちもまた絶対受け取り、見つめなければならない姿がここに 있습니다。それは十字架の上で手足を釘打たれ、血潮を流し、肉体をむちで裂かれた救い主イエスさまです。このお方を直視し、このお方を語らなければ、誰でも霊の深い睡眠状態から目覚めることはできません。罪なき神さまの御子が罪ある世界のために犠牲の死を遂げたのです。こんな偉大な神さまの御子の血潮にまみれたその姿こそ私たちを霊の眠りから目覚めさせ、罪悪の本質を悟らせ、罪を憎み、罪を敵として聖戦を始める聖なる勇士

へと変化させるのです。

十字架のイエス、その血潮にまみれた姿を恐れなくて真剣に見つめましょう。開かれた小包を自ら手にとってしっかり見つめる族長たちのように、ふるえながら、感動的な心をもってイエスの血潮と肉体を自分のものとして受け取ることです。必ず目覚めて、奮い立つ新鮮な命の力が流れてきます。今まで隠れていた罪悪が浮き彫りにされ、これと戦い、聖絶する勇気と信仰と行動力が流れてきます。そしてイエスの血潮は、私たちを世界の罪悪を滅ぼす、大きな神の軍隊へと成長させるのです。イエスの十字架を直視しましょう。私たちの心と体が弱い時、世

を歩んで疲れ倒れる時、神の愛が見えなくなった時、ただひとり十字架を見上げることです。私たちの愛するお方の傷ついた血潮にまみれた御姿を。どんなに深く大いなる犠牲愛でしょうか。罪を敵として罪に妥協することなく命をかけて戦いぬかれた勝利の主です。イエスの十字架の血潮を見続ければ、力ある主の勇士と変えられてどんな罪の誘惑にも打ち勝てます。イエスの血潮は私たちの清めで、積極的に聖戦にかりたさせる救いの力です。今の終末の時代こそ神さまの民は皆、教団、教派を越えてイエスの十字架を仰いで立ち上がり「ミツパの主のところ」へ、神のイスラエル軍として集合する



べきその時です。

一致団結して霊の戦いに奮い立つその時  
が今です。ミツパの町の名前の意味は「見  
張る場所」「物見やぐら」です。主は今、罪  
悪との戦いに昼も夜も本当に目覚めた霊的  
に戦う教会や戦う個人の所におられます。  
共に十字架で血潮にまみれたイエスさまの  
御姿を私たちの唯一の誇りとして信仰の目  
でしっかり直視して聖なる感化を受けて信  
仰が大きく覚醒されましょう。

「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流す  
まで抵抗したことはありません。」

(ヘブル 12:4)

十字架で血潮を流すまで私たちの罪と戦われたイエスさまを模範として見つめて目覚め、勇士となって罪を敵視して憎み、強く雄々しく聖戦に立ち上がって御言葉の剣を高く振りかざしましょう。ただイエスの血潮が正義の原動力です。

裂いて渡されたパン

ルカによる福音書二四章三〇節によると、エマオ途上にいた弟子たち二人は、復活されたイエスさまご自身に道で出会い、共に歩み、聖書の話しを聞き、心が熱く燃やされ、夕食の席まで共にしたのに、不思議な

ことに彼がイエスさまご自身であることがわからなかったと書かれてあります。世界最高水準の旧約聖書講解メッセージを直接イエスさまからお聞きする光栄に預かれたのに、霊的に鈍い二人はイエスさまが悟れなかったのです。しかしこのような二人の閉ざされた霊の目が開かれ、そこにおられるお方がなんと主イエスご自身であることを本当に悟れたきっかけとなった出来事は、イエスさまがパンを裂いて彼らに与えられたまさにその瞬間のことでした。

今の時代も繰り返し聖書の話しを聞き、心熱くされますが、私たちの霊の目が開かれ

救い主イエスさまを本当に知ることができる  
神さまとの劇的出会いの体験は十字架の  
言葉であり、イエスさまの肉が十字架上パン  
を裂くように裂かれて、血潮を流されたとい  
う神の御子の身代わりの犠牲愛、この真理  
をイエスさまより直接受け取るその時です。  
現実に十字架についてのイエスの血潮を見  
上げない限り、本当の信仰は生じません。

私は一度、夢でピラトの庭でムチ打たれた  
直後のイエスさまを見たことがあります。私  
は彼がイエスさまご自身であることが、なぜ  
か分からないけれど、霊のうちですぐわかり  
ました。イエスさまはムチ打たれた後、体を

ひきずるようにして私のそばに来てそこで倒れました。そのイエスの御体は驚くほど深い無数のムチ打ちの傷跡がついたまま真っ赤な血まみれ状態でした。そこで私は早く救急車を呼ばないと、このまま放っておけば出血多量のまま死んでしまうと思い、心が震えながら近づいてみました。

よく近くで見ると、イエスさまは当時の私のイメージとは少し違い、黒っぽい髪をしたユダヤ人の好青年という感じでした。私のイメージではもっと年配で金髪のイエスさまでしたが、まだ若い三十三歳の普通の若者でした。イエスさまのひとみには驚かされました。多

くの人を惹きつけるような本当に、清らかで聖なる美しい目でした。しかし、その表情はむち打ちと暴力により、激しい苦痛に満ちたものであり、白い歯を食いしばりながら、ひたすら耐え忍ばれているようでした。私はイエスさまの苦しみもがく御姿を見つめるうちに感情を制することができなくなって、そこで大声をあげて泣き出して「イエスさま！」と叫びながら彼に抱きつきました。するとその瞬間、イエスさまの全身驚くほど血まみれだったその赤い大量の血潮が、私の両手にも移ってしまい私も血まみれで真っ赤になったのです。ところがなんの不快感もなく、むしろイエスの血潮は人を清める力がありま

した。不思議なことにイエスの血潮を受けるや否や、私の唇からは次々と私自身の罪の告白が何の抵抗もなくスムーズに出てきたのです。普段ならば一時間位祈らないと、すぐには心底出来ない悔い改めもイエスの血潮を受けると速やかにしかも自発的にどンドン出てきたのです。私だけでなくイエスの血潮に触れられた人ならば、誰でも心からすぐに悔い改めたくなるものだと思います。悔い改めが自然に楽しくなるのです。そこで私は目覚めました。目覚めた後も心は熱く、目には涙でした。

イエスさまが十字架につけられ血潮にまみれて激痛を受けられたのは、私たちを罪



の世から救って、本当に神さまに仕えるご自身の聖なる民として聖別するためでした。イエスさまの犠牲を思う時、ただ感謝せずにはおられません。何を持ってしてこの純粹な聖い愛に答えてお返し出来ましょうか。十字架で身体が裂かれた命のパンなるイエスさまに触れれば、閉ざされた霊の目が開いて救いと清めが受けられます。

いちじく桑の木

取税人の頭ザアカイは、頭としての権力も地位も財産も充分ありましたが、これら環境的要因では心が依然満たされず、環境によ

らない普遍の愛と全き救いに対する飢え渴きが強くありました。そこでエリコに來られた愛の救い主イエスさまを一目見ようと群衆に紛れ込みましたが、背が低かったので群衆が壁となり、どんなに背伸びしても人々の背中しか見ることが出来ません。嫌われ者のザアカイを前方に出してくれる親切な人もありません。

この事実は象徴的に元來、ザアカイのように汚れた罪人が清い神さまに出会うことは、罪の呪いや不信仰が隔ての壁となり、どんなに背伸びをしてみても見ることさえ不可能であることを暗示しています。しかし、ここに希望の福音があります。誰であれ、真理を

求める熱心さえあれば、主との出会いの奇蹟を可能にする一つの救いも準備されていました。ザアカイの登ったいちじく桑の木です。

この木は幹が短く枝は四方に伸びているため、子供でもたやすく登れる木であり、小柄なザアカイでも登ることが出来ました。ごくありふれた木ですが、これにより、そこからイエスさまを見つめることができ、主との出会いを可能にし、救いの道が開かれたのです。

私たちにもこの木のような主なる神さまとの出会いを可能にする登りやすく、ありふれた木だけれど確かに不可能を可能にマイナ

スをプラスにする大切な木があるのです。それがイエスさまのつけられた荒削りの十字架の木です。十字架の言葉は滅びに至るものには愚かであっても、救いを受ける私たちには神の力であり、登りやすいいちじく桑の木のように、十字架による救いもたやすく、すべての人のために準備されており、子供にも理解出来る簡単な教理であって、ただ信じるだけで、罪赦され、救われるのです。人間の努力や苦行や善行によらず、ただ恵みのゆえに信仰だけで救われて、たやすく神さまの子供になれるのです。今、声に出してこう告白し、これを心で本当に信じてください。その時あなたはただで救いを受け

取れます。

「天の父なる神さま、感謝いたします。今、信仰を持って御前に進みます。私は今まで私を造られ命を下さった創造主の神さまから離れて罪人として生きてきました。私は罪を悔い改めます。罪なき神さまの一人子イエス・キリストが私の罪の身代わりとなって十字架にかかり、血潮を流して死んで、三日目に死人の中からよみがえられたことを私は信じます。イエスさまの貴い血潮で私を洗い清め、復活の命で満たしてください。私は救い主イエス・キリストを心の王座に受け入れます。助け主、聖霊さまを私の

心に与えてくださり、今から永遠まで主と共に生きていけますようにお導きください。すべての罪から私を守り、御言葉の力で成長を与えてください。イエスの血潮により契約が結ばれた今、神さまは永遠に私の父となり、私は永遠に神さまの子供とされたことを宣言いたします。私は救われました。私は勝利しました。感謝します。主イエス・キリストの御名によって、心からお祈りいたします。  
アーメン」

ある小学生がロッキーと名付けたドーベルマン犬を飼っていました。しかし、自分のことを馬鹿にしているように思えて、この犬が

あまり好きではありません。ある日のこと、近所の大きい川にロッキーと一緒に遊びに行った時、川の石を渡って中州まで行こうとして、コケで滑って川に転落、そのまま深みに流されて溺れました。釣り人たちは上流で気付かず、道路からも遠く、川の水は冷たく、段々力が抜けて死を覚悟し始めた頃、目の前にロッキーがいて、自分のシャツを噛んで川の岸に運んでくれました。リードを階段の手すりに結んでいたロッキーが助けに来るとは予想外。どうやってロッキーは来れたんだらろうと思い、水を吐いて落ち着いてからロッキーを見ると、リードが噛み切られ、首から余程暴れたように出血していて、

こんなに必死になって助けてくれたのかと  
思うと、小学生ながら感動し号泣しました。  
それ以来この小学生にとってロッキーは大  
好きなヒーローとなり、もしロッキーに何かあ  
ったら次は自分が助けてやりたいと決意し  
ました。ロッキーの首輪付近の血だらけで  
暴れた痕跡の傷跡、見るに美しくない傷つ  
いた姿、しかし、その理由を知った時、献身  
的な犠牲愛に感動します。イエスさまの十  
字架の血にまみれた姿も、お世辞にも美し  
くはない過酷な厳しく裁かれた姿、全身血  
だらけで人が顔をそむけるほど見下された  
姿、しかしその真意を知る私たちはイエスさ  
まの献身的な犠牲愛に感動します。今はこ



の愛に応じてイエスさまのお役に立ちたい。

## 第2章 聖霊を注ぐ力

第二にイエス・キリストの血潮は私たちに聖霊さまを注ぐ力となります。

### 女の子孫

罪赦された神さまの子供には次に聖霊さまが与えられます。初めの人間アダムは自由意志を乱用し、善悪の知識の木の実をとって食べる罪を犯したため、神さまから離れた罪人として墮落しました。ただ善だけ知っ

ていれば良かったはずのアダムは悪をも知る者となり、その内に罪悪を宿しました。そのためアダムより世界に広がった全人類は、皆、父から子へ代々、罪の血の種を遺伝的に与えながら身ごもり出産を繰り返してきたため、人々はこの内に巢食う原罪と戦いながらも生まれつき御怒りを受けるべき子らとして、誰一人これに打ち勝てる人はいませんでした。ダビデはこれを嘆いて告白しました。

「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私を身ごもりました。」

(詩篇 51:5)

しかし、最後のアダムなるイエスさまは、この人類共通の課題である原罪という大きな問題をみごとに全面解決した上で、世に生まれて来られた救い主です。イエスさまは、はじめの人間アダムのように肉の父親によらず特別な方法で生まれたお方です。聖霊さまにより処女マリヤを通して出産されたことにより、イエスさまは「女の子孫」(創世記 3:15)として肉の人間の父親の遺伝的な罪の血の種を受けることなく生まれることに成功したのです。普通はすべての人は「男の子孫」として肉の父親の罪の血を受けてから身ごもります。

しかし、イエスさまだけは肉の父親の種を受

けずに、聖霊さまによって身ごもりました。医学的には血液は必ず父親から遺伝し、母親からは一切胎児に入らないようにできています。もともと人の男性精子にも女性卵子にも血はありませんが、これらが輸卵管内で一つになる妊娠の瞬間、血液型が決定します。やがて胎児が胎内で成長する過程でも、母親の血が胎児に一切入らないように胎盤で保護されます。そのため血液は母親ではなくただ父親からだけ子供に遺伝するそうです。こういう訳で肉の父親と関係なく聖霊さまによって生まれたイエスさまは、人間に代々流れる原罪の要素が全くないお方であり、その血潮の中には、ただ天の

父なる神よりの正義と聖い命が流れており、  
天の父なる神の血統を直接受けて生まれる  
ことに成功した世界で唯一の罪なき救い主  
なのです。このような救い主として資格ある  
貴い血潮が十字架の上、私たちのために注  
がれたのです。

イエスさまの公生涯、周囲には信仰深い  
女たちが大勢いて仕えており(マタイ 27:55、  
マルコ 15:41、詩篇 68:11)、もし願われれ  
ば結婚し、子供たちをたくさんつくることも  
充分できたはずですが。しかし、イエスさまが  
父なる神の特別なご計画の中で、そうされ  
なかったのは、そのような肉による出産のか

たちで神さまの子孫を地上に増大させ、世を救うことを願わず、むしろ信仰によって御名を信じる者を救われることを願って御心の内に定められたからです。

「しかし、この方(イエス)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血(人間的な血筋)によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

(ヨハネ 1:12、13)

実に「義人は信仰によって生きる」からです。そのため今は唯一、神さまが人となられたイエスさまの御名を信じた人々に約束の

聖霊が注がれて、罪なき女の子孫イエスの信仰の子孫として罪なき神の子供たちに新生することが出来るのです。それが私たちの聖霊のバプテスマと呼ばれる生まれ変わりの貴重な体験です。

私は小学生の時、大変まじめでとても頭がさえました。そんなある日、ダイナマイトを作ろうと思いました。いつも使っている爆竹花火を大量購入し、人手不足解消に、お友達の家に行きました。そして温かいお友達の協力を得て爆竹花火の一本一本をカッターナイフで丁寧に切ってはほぐし、中身の火薬を全部かき集めました。一本の爆竹をほ

ぐしてもわずか0. 何グラム？しか採集できませんが、当時、私は大変まじめだったので一生懸命、おもてなしの心をこめて一本一本の爆竹を丁寧にほぐしては器に入れ、何時間もかけて最後には導火線も通して小型ダイナマイトが完成しました。

期待を胸にこれをベランダに設置して着火すると「ドカーン！」

想像以上の爆音と共にガラス全部が割れるかと思うほどベランダがビリビリ振動しました。そのとき私の心もビリビリ震えて感動し決意しました。

「よし、今度はもっと火薬増量版の大きなダイナマイトを作ろう！」



決意を新たに大量の爆竹を再購入し、また一本一本をほぐす気の遠くなるような作業を再開しました。まじめにほぐしては微量ずつ器に入れる。永遠とこの繰り返しの後、何時間たったでしょうか、両手と両鼻の穴が火薬で真っ黒になった頃、増量版第二号がついに完成しました！

「ヤッターー」

お友達と喜び踊りながら爆破場所を近所の曙公園に定めて全力で走り出しました。いつもお世話になっている曙公園を突き飛ばしてあげようと思ったからです。現場に到着するとちょうど子供たちの作った山が砂場に備えてありました。そこでその砂山を占拠し

て頂上付近から真っ直ぐ増量版第二号を差し込んでライター片手に叫びました。

「爆発するぞ！みんな逃げろ！」

そして導火線に着火して全速力で逃げ去りつつ振り返ると、その時！

「ポンッ」と低めの、にぶい音がして公園全体ではなく、砂山の頂上付近だけわずかに吹飛びました。

「あれ？」

その後のまじめな現場検証で私は悟りました。

「ダイナマイトは砂地のような柔らかい場所ではなく、ベランダのような硬い場所に固定設置して発破したほうが破壊力が絶大にな

るのだ！」

「イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(使徒 1:6、7)

イエス様が教えてくださった聖霊様があなたがたの上に臨まれるとき、受けられる「力」とは、ギリシャ語の「デュナミス」がここに使わ

れています。この言葉の派生語がダイナマイトです。そうです。聖霊様の国家を復興するほどの大きな力とは本来、ダイナマイトのような強烈な破壊力です。

聖霊様の力は心の地盤が砂地のように柔らかな、一見素直で容易に何でも受け入れる人よりもむしろ、時に福音宣教に対して頑固に敵対する迫害者のような人のほうが、いったんさく裂するとその壊れ方は凄まじく激変することがあります。絶対、聖書も聖霊様も受け入れないかたくなだった人が、壊されて福音化されると、誰よりも熱心な伝道者になるということがあります。

最も硬い律法的迫害者だったサウロが史上

最大の伝道者パウロへ生まれ変わったように！

大きな視野では頑固で硬い霊的状态の国家や地域や個人こそ、いったん聖霊様のデュナミス爆弾がダイナマイトのごとく、さく裂したならば「ドカーン」と大きく変えられる可能性があるのです。日本も近い将来、聖霊様の力で爆発的に激変できます！

アダム

人間は創世記一章二六節によると「われわれに似るように人を造ろう」と主が仰せられて父・子・聖霊の神に似せて造られた存

在です。それゆえ父・子・聖霊に似せて造られたわれわれ人間は雲・魂・肉の三拍子を持っている霊的な存在です。神さまが永遠に生きておられるように私たちも永遠に生きる存在です。霊魂が永遠の天国で幸福に暮らすか、永遠の地獄でそしりと忌みを受け苦しみながら滅びていくか、二つに一つの道を人間は永遠に行かねばなりません。テサロニケ人への第一手紙五章二三節では使徒パウロがこのように告白しました。

「あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。」

人間には霊・魂・肉があるといいました。またヨハネの第三の手紙では「愛する者よ。あ

あなたの魂が恵まれるようにすべてが恵まれ、健康であるように私は祈る」と使徒ヨハネは告白しました。

人間にはこれら三拍子があります。ところが動物には生き物としての霊はありますが(伝道者の書三章二一節に「獣の霊」と書かれてあるとおり)、動物が生きるための霊はありますが、魂がないのです。魂を口語訳聖書では「こころ」と訳しています。こころが動物にはないのです。それゆえ動物はただ理性がなく本能によってのみ動かされ、本能によって行動する存在です。しかし人間には魂こころがあります。この点において人間は全く根本的に動物とは違う存在として万物

の霊長として高価で尊い獣以上の存在なのです。創世記二章七節によると、最初の人間アダムを主が造られたときは「土地のちり」によって人間を形作って創造したとあります。

アダムは土地のちりで造られたのです。そしてその鼻にいのちの息吹を神さまが吹きこまれたとき、初めて人は生き物となって立ち上がりました。土地のちりとは言い換えれば土です。土で人間はつくられたのです。科学者によると人間とは約八五%が無機質の水分でできており、それは酸素と水素です。それ以外の人間の原料とはカルシウム



とナトリウムと鉄と窒素とリンと硫素と微量元素によってできているそうです。もし人間のこれら全部の元素を単なる資源として計算するならば、だいたい二〜三万円位の価値しかないそうです。いいかえれば本当に土地のちりのようなものです。そして実際的にも人間の成分というものは、元素的にいうならば土地のちりである土と同じ元素によってできているそうです。人間は土地のちりにすぎない存在です。ところが神さまがそこにいのちの息吹を吹きこまれたがために高価で尊い霊的な存在とされたのです。人間は一人の魂に何十億円もの保険がかけられるほど本当に価値あるものとされているのです。

魂すなわち心ある人間は、動物以上の高価で尊い特別な存在とされました。創世記によると、最初に神さまが人間を造られた後、動物たちを一匹一匹アダムの所へ連れて来られました。

それは動物たちに対して、アダムがどのような名前をつけるのか見てみようと、神さまが名づけ親の使命を与えられたからです。神さまが物凄い多くの種類のいろいろなユニークな動物たちを一匹一匹アダムの所へ連れてこられました。アダムは責任ある名づけ親として、すべて異なるふさわしい名前をつけていったのです。一匹一匹にふさわしく

名前をつけたことがわかるのは、後に女エバに対して名前をつけた時でもでたらめな起源のない名ではなく、神さまが男(イシュ)を用いて女を造ったその起源にふさわしく、男から「イシュから」という意味をもつ(イシャ)女と名づけているからです。

今日の生物学者の話によると、創世当初の地球には、少なくとも七〇万～一〇〇万種類は動物たちがいたと推測されています。それに加えて未確認の絶滅動物たちや恐竜たちも加えると、天文学的な数の生き物がそこに満ち溢れていました。それら一匹一匹にすべて異なるユニークでふさわしい

名前をアダムはつけていったのです。そう考えるとアダムは非常に忍耐力のある英知に満ちた想像力豊かな心をもつ人物でした。アダムには連日出会う新しいユニークな無数の動物たちを観察しながらふさわしい名前をつけていく趣味のような楽しみがありました。もうひとつ、もっと大きな使命がありました。

それは神さまを礼拝するという使命です。人間は神さまを礼拝するために造られた存在です。それゆえアダムの魂には、いつも渇きがあったのです。彼は魂の与えられた霊的な存在として神さまを礼拝したくてしか

たがないのです。霊的な分野の心が渴いてこれを要求するのです。ちょうど、人間がかわいた砂漠において、水が飲みたくてしかたがなくなるように、アダムも礼拝したくてしかたがなくなりました。神さまの御前である時は一人で、またある時は合同で、礼拝を捧げたいと思うようになりました。

そこでこれは想像上の世界の話ですが、ある時、アダムは出て行ってエデンの中でも最も賢いと思われたチンパンジーやサルやゴリラの所へ訪問しました。そして彼らに呼びかけました。

「やあ。チンパンジー君。私は今からこれら

エデンの園と私とすべてのものを造ってくださった良き神さまに心から感謝して礼拝を捧げたいと思うんですよ。チンパンジー君。よかったら私と一緒に合同礼拝をいたしましょう。じゃあ、今から私が導くから一緒に讃美を捧げましょう。

「♪ 海と空 つくられた主は あなたの主  
私の神…♪」

アダムが一生懸命讃美しながらちよつと横を見るとチンパンジーは

「キー キー ウッキー」といって全然一緒に讃美できません。ことばが通じません。合同礼拝が成り立ちません。サルやゴリラやチンパンジーは人間の三歳位の知能レベルを

持っていたとしても、彼らには言語能力がありません。理性もなくただ本能によって生きる存在として一緒に礼拝ができないのです。

そこでアダムは言いました。「サル君。元気で。さようなら」

今度は代わりにエデンを歩いて行くとそこにヘビを発見しました。

「あっ、ヘビ君。君ならできるだろう」

聖書は証言します。神さまが造られた野の獣のうちでヘビが一番狡猾なものとして造られたのです。ヘビは当時、非常に人間に限りなく一番近い動物として存在していました。創世記三章一節によるとヘビは確かに人間

と同じ言語能力を持ってエバと対話しています。へビは始め話すことが出来たのです。エレミヤ書によると、神の審判の結果としてへビは言葉を失ったと書かれています。

「彼女の声は蛇のように消え去る」

(エレミヤ 46:22)

それはゲラサ地方の豚の群れやエペソの獣の中にも入ることのできる悪魔がエデンのへビの中に入って、アダムとエバを墮落させたため悪魔の共犯者として神さまから審判を受けて呪われ言葉を失われたのです。へビは足も失われました。

これも想像上の世界の話ですが、聖書で



は一番校滑な野の獣はへびだと書いてあります。だいたい動物の中でレベルの高い高等動物になればなるほど足の数が少なくなるものです。先ほどのサルなどは人間のよう  
に瞬間二本足で歩くこともできるでしょう。でもだんだん下等な動物になると四足になり、もっと下等になるとムカデのように足が何十本も生えています。高いレベルの生き物こそ足が少ないのです。そして一番レベルの高い狡猾な生き物がへびです。であれば、それよりも少しレベルの低いサルさえ、二本足で歩けるならばなおさらのこと、へびは二本足で歩けたはずです。そしてへびは審判を受けた結果として足をすべて失い、地の

おもてをはいずりまわらなければならない惨めな敗北した存在となったのです。ですからこうして考えると、最初に人間の前にいたヘビとは人間そっくりに言葉を巧みに語る言語能力を持ち、人間のように二本足で歩くことができ、エバと対話できるほどの狡猾な知恵があったのです。これが最初のヘビです。ですからアダムは出て行ってヘビに言いました。

「ヘビ君。あなたは一番狡猾で私と一緒にコミュニケーションできますねえ。人間と同じように座ることができますねえ。まあまあ、こちらの岩場に腰掛けてください」

そしてアダムはいいました。「それじゃあへ

ビ君。今から一緒に祈りましょう。神さますばらしいですね。祈ったら願いがかなえられますよ。一緒に声を出して祈りましょう。ハレルヤ。主よ!」

アダムが祈り始めました。一生懸命祈りました。そうするうちにアダムはちょっと薄目を開けてへビを見ました。するとへビはポカーンとして目を開けたまま退屈そうにあくびをしています。ぜんぜん祈りません。

「あれ、ぜんぜん無関心だな」

そこでアダムはすっかり心が冷めて目を全開にして言いました。

「へビ君。へビ君。一体どうして君は祈らないの？ どうして一緒に礼拝することができな

いの？」

するとヘビは答えて言いました。

「ん？ 礼拝？ 礼拝なんてつまらないよ。神さま？ 神さまならよーく知っているよ。園を歩き回られるあのご主人様ですね。世界と私と全部を造ったお方ですね。よーく知っているよ。だいじょうぶですよ」

そう蛇は答えましたが、やはりヘビは人間ではなく野の獣です。人間と異なり神さまを霊的・体験的に知る魂がありません。神さまがおられるということを単に知識として神学的に知っていたけれど霊的・体験的に神さまを知らないのです。これが魂を受けた人間と魂のない獣との根本的な違いなのです。

こうしてアダムは落胆しました。

「だめだ。へびと一緒に礼拝を捧げることはできない」

それもそのはずです。獣には人間と異なり、神さまを知る霊的な分野が始めからないのです。それでアダムはたった一人ぽつんと取り残されてしまいました。

「ああ。残念だ。合同礼拝は不可能だ。これらエデンには幾千幾万と数多くの動物たちが満ち溢れているけれど私と一緒に礼拝のできる魂を持った存在は誰もいないのだ。彼らはみんな獣なんだ」

エデンにいる数多い動物たちは確かにあ

る程度はアダムの助け手として、牛は牛乳を供給し、馬やロバ・らくだ等は荷物とアダムを運ぶ自動車にもなり、犬は番犬や盲導犬の使命、鶏は目覚し時計、小鳥たちは美しく心を和ませる快適な暮らしのBGMなど役に立ちましたが、アダムにとって最も大切な霊的な分野を助けられるふさわしい助け手はどこにもいません。霊的に孤独で落ち込みそうなアダム。しかしその時です。

すべて気落ちした者を慰め励ましてくださる神である主が、深い眠りをアダムに下されました。アダムは神さまからの眠りの霊にとらえられて、グーグーと眠り始めたのです。

そしてアダムが熟睡している時に、神さまは大胆な外科手術を行ないました。アダムのわき腹を切り裂いて血を流し、そこから一本のあばら骨を取り出し、再びそこをふさいで治療しました。この取り出された骨を原料に一人の女を造り出したのです。アダムにふさわしい助け手エバです。ここで現代の西洋医学の飛躍的な発展をもたらした麻酔薬の起源とは、聖書のこの記述をヒントに発明されたそうです。眠っている間に、骨を取り出すような大手術をしても意識がないから痛みなく治療ができます。聖書は現代医学に大きく貢献しています。ちなみに現代の癌治療に欠かせないラジウムを発見し、そ

の製造法に特許を取って巨万の富を得ることなく、神さまがすべての人類のいやしのために世に与えたものとして、無償で広く普及させたキューリィ夫妻もクリスチャンでした。エバはアダムのおぼろ骨をもとにして造られました。ユダヤ人はこの御言葉から女がアダムのお頭の骨でもなく、足の裏の骨でもなく、アダムのお心臓に近いおぼろから取られたことについて、女は男の上に立つものでもなく、男の下に踏みにじられるものでもなく、平等な存在として、お心臓のように大切にすることを認識するそうです。アダムはそのような感覚のもとで女を見て大喜びして讃美しました。



「これこそ、今や、私の骨の骨、私の肉の肉。  
これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから」

こうしてアダムはエバを喜んでめとり夫婦は  
一体となったのです。その後、アダムは新  
婚生活の感動覚めやらぬうちにかねてから  
の願望、今まで達成できなかった合同礼拝  
を成就しようと挑戦してエバにすぐ呼びかけ  
ました。

「私の妻よ。一緒に礼拝をしましょう」

すると今までとは全く異なる反応が返ってき  
ました。

「はい。あなた」

そして一緒に讃美が始まりました。

「♪ 海と空 造られた主は…♪」とアダムが  
讚美を導くとエバも一緒になって

「♪ あなたの主 私の神…♪」と一緒に讚  
美ができるのです。

「ハレルヤ！」アダムは嬉しくてたまりません。  
そして今度はアダムが「主よ！」と祈り始め  
るとエバも一緒になって「主よ！」と言って  
一緒に祈り、一緒に感謝を捧げ、一緒に礼  
拝ができるのです。

「これぞまさに私にとって最もふさわしい助  
け手だ」

アダムはこうしてハレルヤ感謝で妻を愛し幸  
せに末長く(九三〇歳)暮らしていったので  
す。

ローマ人への手紙五章一四節ではこのアダムに対して「きたるべき方のひな型です」と書かれています。きたるべき方とはイエス・キリストです。またコリント第一の手紙ではイエスさまについて彼は「最後のアダム」とであると証言されています。それはどういう意味でしょうか。

最初の人間アダムと、後に来られた神のひとり子イエスとは、いろいろな意味で共通点があるのです。それゆえイエスさまは、最後のアダムと呼ばれているのです。最初の生まれ方について考えてみましょう。アダムはどのようにして造られたのでしょうか。

神さまが土地のちりで形造って、その鼻に直接いのちの息を吹き入れて、人は生き物となって立ち上がったのです。アダムは人間の肉の父親を持たないで、超自然的に神さまより直接生まれたのです。それは不思議な出生であり、神さまの神秘です。

そしてイエスさまも同様の神秘的なお生まれをしました。イエスさまの出生にも肉の父親がいなかったのです。聖霊さまによって超自然的に直接神さまより生まれたのです。この点においてアダムとイエスには共通点があるのです。またアダムは三位一体の神に似るように創造されたため、人類の中で

一番よく神さまに似たかたちを持つ原型のような存在であったと仮定すると、最後のアダムなるイエスは「見えない神のかたち(神のイメージ)であり、造られたすべてのものより先に生まれた方」(コロサイ 1:15)であり、イエスさまは見えない神のイメージの完全に見える現われですから、半分ジョークですが、昨日も今日もとこしえに変わらない神さま中心に似せて造られたアダムとイエスさまは、互いによく似た姿かたちであったかもしれません。

その後、アダムの生活にも共通点がみられます。アダムが動物たちに名前をつけ始

めました。そこには数多くの動物たちが、次々と神さまから呼ばれて集まってきました。それらユニークな一匹一匹にその起源や特徴にふさわしい名前をつけていったのです。

例えばこんな感じに「君は首が長くておもしろいね。キリンと名づけよう。君は耳も体も大きくて鼻が長いからゾウと呼ぼう……」これがアダムの使命でした。ちょうど最後のアダムなるイエスさまも同じような使命があったのです。イエスさまは三〇歳から公生涯が始まりました。イエスさまは熱心に断食祈祷され、徹夜で祈りあかされた翌日、父なる神の御旨に従い十二人の弟子たちを選ば

れたのです。その時イエスさまはユニークな動物たちのような個性の強いそれぞれ異なる性格を持つ十二人が集まって来たのをみて、本当にほほえまれて名付け親として一人ひとりにあだ名を付けられたのです。

ペテロがやって来ました。彼の本名はシモンとあって、その性格は揺れる葦のような気質でした。ある時には「イエスさまを絶対裏切らない」と愛の告白をしたかと思えば、ある時は「イエスさまを知らない」と三度裏切る告白をしてしまう、右に左に揺れ動く軽い植物の葦のように心定まらないペテロの優柔不断な本質を見ぬいてイエスさまは「あなた

はペテロ(岩)だ」と新しい名前を与えて励ましました。その願いは将来岩のように堅く不動な強い心の人になって、初代教会の柱になることでした。

またヨハネをみると気性が荒く短気で、ちょうど雷がピカッと光ると、すぐにドカンと落ちてくるような気質にふさわしいボアネルゲ。訳すと雷の子とあだ名されたのです。その願いはヨハネが日々そう呼ばれることにより、よく自らの短気を自覚して、愛の使徒に造りかえるためでした。

アダムが一匹一匹その特徴にふさわしい



名前を付けていったように、最後のアダマイエスさまも一人ひとりの弟子たちにふさわしいあだ名をつけていったのです。確かに共通点があります。ところがここに問題点がありました。当時イエスさまが徹夜祈禱までして十二弟子を選ばれました。

彼らは確かに集まったことは集まったけれど、弟子たちにはまだ聖霊さまが注がれていなかったため、彼らには神さまを知る分野の霊が眠っています。魂が自らの罪のために死んでいるのです。

ですから彼らはイエスさまを単なる知識として良く知っているけれど、いぜん偉大な教

師あるいは宗教家ていどの認識しかなく、  
本当の意味でイエスさまの助け手としてふ  
さわしく合同礼拝することができないのです。

ある日のことです。イエスさまは霊的にま  
だ眠った状態の十二弟子をおともさせて、  
あちらこちらに旅をされ、福音をすばらしく  
解りやすいたとえ話を持って宣べ伝えられ  
ました。しかしその後のことです。弟子たち  
がやって来て口々にいいました。

「イエスさまの言われたメッセージの意味は  
いったいなんだろう。私たちには全然わか  
らない」

弟子たちは繰り返し世界最高級のリバイ  
バリスト・イエスさまによるミニストリーを直接

見聞きしていてもいつも誤解ばかりです。

イエスさまもまた度々言われました。

「まだわからないのですか、悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか……」

霊が違うからです。

またある時には、イエスさまは弟子たちをおともさせてゲッセマネの園に行かれ徹夜で熱く祈られたのです。その時イエスさまは弟子たちに「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、

肉体は弱いのです」そう言われてから真剣に大きな叫び声と涙をもって、ご自分を死から救うことのできる父なる神さまに「アバ父よ！」と熱く三時間祈られたのです。非常に敬虔な聞き入れられる信仰の祈りでした。しかし弟子たちは同じころ同じ園で「グーグー」と熱く三時間眠り込んでいるのです。

全然音が違うのです。言葉が通じない、霊が一致しないのです。あんまりペテロが大声でいびきをかきながら、それはもう野の獣の鳴き声のようです。意志が通じません。どんなにイエスさまが弟子たちと一緒に合同礼拝をしたいと思ってもとうてい不可能です。

ちょうど人間が野の獣と対話できないことと同じような状態です。使徒の働き一章六節ではイエスさまが福音を語られ、死人を生かし、悪霊を追い出し、病をいやしたり、すべての奇蹟を行なうのを、三年半もの間、目撃した弟子たちがイエスさまの十字架の死からの復活以降にさえ間違っただけの外れの質問をしています。

「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか？」

イエスさまの栄光をすべて見ていながらも弟子たちはまだ霊的に鈍かったから、イエスさまをローマ帝国から救ってくださるこの世の政治的なメシヤとして期待していたほ

どです。いつもイエスさまと悟りなき弟子たちは、人と動物たちの出会いのように会話が合いません。そこで父なる神さまはこれを見て決心されました。

「アダムが一人でいるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう」と決心された時のようにイエスさまに対しても御心を定められました。

「イエスさまが一人でいるのは良くない。彼にふさわしい助け主を送ろう」

こうしてイエスさまに助け主を送る準備をされました。ここに奥義があります。初めの人間アダムが造られた時、アダムは深い眠りに落ち込まれました。彼が寝ている間にお

き腹が裂かれて血が流れ、そこから取り出したあばら骨をもとに助け手エバが造られたのです。妻エバはいつもアダムと共に合同礼拝を捧げ、アダムを助けられるふさわしい助け手として活躍しました。同じように、父なる神は最後のアダムなるイエスに対して同じ外科手術をされたのです。そのためにはイエスさまをまず眠らせなければなりませんでした。

イエスさまは何も罪がないのに、当時の人々から妬まれ憎まれ十字架の木につるされたのです。ずたずたにムチ打たれた御体の傷口からは血潮が流れ、六時間悩みを

受けた後に死なれたのです。イエスさまは十字架で死という名の眠りにつかれたのです。十字架上、死という眠りについたその時です。ローマ兵の一人がやって来て、本当に十字架で死んだのか、それとも単なる気絶や仮死状態に過ぎないのか確かめようと鋭いやりで残酷にもイエスさまのおき腹を突き刺したのです。するとその瞬間、目撃者ヨハネによるとイエスさまのおき腹から水と血が流れ出てきたのです。

ちょうどアダムのおき腹も血を流して、そこから助け手エバを取り出したようにです。お分かりでしょうか。最後のアダムなるイエスの十字架上、流れ出たおき腹の血潮、これこ



そ約束の聖霊さまがふさわしい助け主として世界に注がれるための代価だったのです。イエスさまは三日目によみがえって、昇天後、ペンテコステの日を機会に、聖霊を助け主として注がれ始めたのです。ハレルヤ。アダムが目覚めて助け手エバを喜んだときのように、イエス様も十字架の死の眠りから復活された今、助け主聖霊さまによる教会を喜びます。聖霊さまはイエスさまの全くふさわしい助け主です。

しかしここに再び問題が生じたのです。父なる神は確かにオリーブ山から昇天して、天国に勝利の凱旋をされた王の王イエスか

ら十字架の血潮を直接受けて、約束の聖霊をこの世界に注がれましたが、聖霊さまは神さまです。神さまであるがゆえに人間のような肉体を持たないのです。地上にいられたのに霊的な存在で人間の目には見えません。全く聖なるお方で人間には見る事ができません。そこでイエスさまの働きを継続的に成し遂げるあたかもキリストの妻のような助け主になるには、どこか聖霊さまの住みつく神殿が必要だったのです。聖霊さまは御心によって選ばれました。かつてイエスさまと親しく共に歩んだ弟子たちを好んでそこに住みつかれました。聖霊さまはその日、初代教会に集う百二十人の弟子たち

の上に下られ、彼らは変身したのです。

彼らは以前は弱く恐れおののく者でした。ところが内側に神さまの聖霊さまが入ってくるや否や全く別人に変身してしまったのです。今まで死んでいた霊魂が、突然、聖霊さまを受けるや否やよみがえったのです。彼らは新しく生かされたものとされました。弱いものが強くされ、恐れに満ちたものがキリストの証人として、強く雄々しく大胆に福音を語るものに変えられたのです。罪あるものたちが聖霊さまを受けるや否や、罪に打ち勝ち赦された義人として、新しくなって聖い生き方をするように変えられたのです。弟

子たちはあたかも自分自身の実力で力ある  
聖い者に成長したかのような錯覚を覚えま  
したが、これが内に住まわれた激的変化の  
源、聖霊さまです。

特にイエス様を三度も裏切った経験もつペ  
テロなどは、聖霊様を受けるや否や全く新  
しい人となって、今度は絶対イエスさまを拒  
まない伝道者となって立ち上がりました。

ペテロはまさにイエスさまのふさわしい助け  
主聖霊さまを受けてキリストのふさわしい妻  
のように活躍して働き始めました。イエスさ  
まと一緒に一致した霊と真心をもって、父な  
る神に合同礼拝を捧げられるペテロに変え

られたため、初代教会は神の国が力強く臨在し、悪魔の働きが滅ぼされていきました。かつてイエスさまはこのようなペテロを慈しんで預言されました。

「あなたはペテロ。岩です。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません」

初代教会の柱として用いられた使徒ペテロは確かに力ある堅い岩のような信仰の指導者として動じることなくリバイバルを次々起こして使命を果たし、最後にはローマ軍の迫害が攻め寄せ中、一度は難を逃れて教会から逃避しましたが、聖霊さまに立てられた代表者として悔い改め、再び迫害の只中

に堂々と戻っていく、実に殉教の死に至るまで、主イエスさまに従う従順な助け手とされたのです。その時、ユニークな発想を持つ使徒ペテロは、主と同じ十字架刑を恐れ多く考え、自らの申し出によって逆さ十字架という形で、頭を下に足を天に向けながら召天しました。

後に使徒ペテロの殉教したまさにその場所には、聖徒たちが集ってペテロの墓を建て、さらに今日ではその上に教会が建てられました。これが有名な美の伝道と言われた町バチカンです。バチカンにある大きく美しい数々の教会が建築された当時には、まだ文

字が一般的には普及していませんでした。そこで教会堂の内壁や天上に壁画として聖書の内容を見事に描いて布教したものが今日でも多くの観光客を引き寄せ、視覚を通して福音にふれるチャンス場となっています。イエスさまの預言どおりに、使徒ペテロの上に教会が建てられたのも、ペテロが聖霊さまを受けて死に至るまでも従う者に変えられたから成就したのであって、聖霊さまを受けることはこれほど重要です。

さらにAD三百十二年には、ローマ皇帝コンスタンティヌス一世の救いを機会に、あれほど迫害していたローマ全体がキリストの御

前に屈服して、キリスト教を国教に定めてしまったのです。聖霊さまは力強く偉大です。聖霊さまを受ければ誰であれ変えられ、かつては野の獣のように言葉の通じなかった弟子たちや、強暴な種類の牙ある獣だった迫害者たちもイエスさまの働きに役立つ助け手になれたのですから。イエスさまから雷の子と名づけられたヨハネ、彼も聖霊さまを受け新しい人に変えられて、愛の使徒と呼ばれるようになりました。ヨハネは愛の使徒にふさわしく、ヨハネの第一、第二、第三の手紙の中で繰り返し愛の重要性を説いたのです。伝説によるとパトモス島に島流しにされた使徒ヨハネは、殉教をのがれ、九〇歳



以上生きてキリストの証人として重んじられ、老人になってからも教会での説教はいつも愛し合うようにとの激励だったそうです。もともと激しやすかったヨハネが、忍耐強く愛を説く使徒へと変身できたのも、聖霊さまの働きだったのです。聖霊さまを受けることだけが、私たちがイエスさまのふさわしい助け手とならせ、イエスさまと同労できる絶対条件なのです。

私も個人的に考えてみると、私がイエスさまを信じて聖霊さまを受ける前は、イエスさまと同労ができない野の獣のような存在で神さまと言葉が通じない者でした。私が一

七歳から教会に行き始めて一九歳で聖霊さまを受けるまでの間、暴れに暴れました。私が一番暴れた理由とは、人生の生きる目的を喪失していたことです。なんのために人は生きて生かされているのか全く意味がわかりません。おもしろおかしく生きたほうがいいのではないだろうか？そう思いながら、めっちゃめっちゃに騒いで遊んでいました。ある時は、友達と酒をがぶ飲みして酔っ払い、その勢いで道端に行き大騒ぎして「ガオー」と叫んだりしました。またある時は、ささいなことで激怒して犬が「ワンワン」と吠えるようにどなったり言葉の通じない者でした。教会で人が私を救おうとどんなに説得しても動

物と人間が言葉が通じないように、霊が死んでいた私と教会の人は話しが通じません。そのため始めの教会生活二年間は私の場合、求道者というよりは実質迫害者のように、教会の人が答えられないような難解な質問ばかりして困らせていました。本当に自分が救われようとしたものでもなく礼拝に関心がありません。「みんなで祈りましょう」と言って会衆が祈る時も、私は祈らないでちゃんと目を開けていました。本当に野の獣のような私でしたからどうしようもありません。

ところが変身する時がきました。悪いことをしすぎて、ちりも積もれば山となるように、私

の中に山のような罪責感の重荷がやってきました。なんかあんまりむなしくて死にたくなつたのです。神さまは相変わらず解らないし、自分は野の獣のようで人生はめっちゃめっちゃだと思いました。それである時、あまりに苦しいので「一度まじめに祈ってみよう、もしかしたら本当に神さまがいるかもしれない」と思って真剣に祈りました。祈ったその時、その場で聖霊さまが私に注がれたのです。私は圧倒されてその場で泣き崩れて倒され、聖霊さまがさらに物凄く熱く注がれたため、私は新しい人に変えられたのをはっきり感じました。今まで神さまがそんなにわからなかったのが、霊的な世界が開かれてはつき

りとわかるように変えられました。私の死んでいた霊魂が生き返ったのです。野の獣のように理性なく暴れまわっていた私が、新しい人に生まれ変わりました。イエスさまの聖霊を受けた者として、あたかもキリストの妻のように、キリストといつも共に生活して、キリストに仕える者へと変えられたのです。そして今は礼拝者、主に奉仕する者、キリストの働きを成す者として、新しく生まれ変わることができたのです。今は心の中から憎しみや怒りや妬みや罪責感など消え去り、代わりに信仰と希望と愛と喜びが本当に満ち溢れ、以前と比べると、なにか動物の世界から人間の世界に目覚めて移り変わったよ

うな感覚です。それが聖霊のバプテスマの体験でした。誰であれ聖霊さまを受ければ古き人はキリストと共に死んで、新しくキリストと共によみがえる変身の希望があります。

最後のアダムなるイエスと最初の人アダムとの大切な共通点がもう一つあります。始めのアダムはエデンの園で裸で生活していました。エデンの園とは、そこに四つの川が流れていて、大変湿潤で寒さも熱さもなく、今日の空調設備や暖房や冷房も必要なく、人にやさしい快適な園でした。ですからアダムは裸でも楽に生活していたのです。ところがアダムが罪を犯した後、彼は裸であることを

恐れて、恥じる者へと変えられたのです。そこでアダムは自分で見つけたいちじくの大きな葉を腰のおおいとしましたが、やがてつぎあてを繰り返しても、役に立たない枯れる一時的で不完全なガサガサ音をたてて朽ちていく衣となりました。

アダムがみじめにも穴だらけでぼろぼろになったいちじくの枯葉の繊維を押さえながら裸の恥に悩まされていたその時、慈悲深い神さまは一匹の動物を殺して血を流しその皮をはがして、人類最初の服としてアダムに与えられました。この朽ちない皮の衣だけが、アダムを裸の恥から堂々と恥じること

ないよう完全にガードできました。これは人間の罪の恥は、人間自らの力による努力や良い行ない、優れた学問や宗教、倫理、道徳などでは絶対一時的にしか覆い隠せず、永久的に罪の恥を覆い隠せる完全な義の衣とは、ただ神さまから与えられる一方的恵みしかないことを教えています。人のために血を流して殺された罪なき動物とは、人の罪を完全におおう実力ある正義の衣、十字架で肉を裂かれた罪なきイエスさまを象徴しています。

こういう訳で聖書では「主イエス・キリストを着なさい」(ローマ 13:14)と勧めています、



最後のアダムであるイエスさまご自身も裸の恥に悩まされるアダムと同じような体験がありました。最初の人間アダムが裸であったように、イエスさまも最後のアダムの使命があったため裸とされる時が来しました。

それはカルバリ山の十字架の上です。イエスさまは最後の一枚の服である下着さえもくじ引きにされて取り去られ、完全に裸となって十字架に釘づけられたのです。イエスさまは完全な神さまであられると同時に、完全な人間としても来られたため、その人として性質上、群衆の見つめるなか裸にされた体験は、恥ずかしくて恥ずかしくて耐えら

れないものでした。十字架の周りにたくさん  
の群衆が男も女も取り巻いているのです。  
ユダヤ人だけでなくローマ人や世界中の  
人々が集まって来るのです。だからイエスさ  
まは通常なら十字架の上で、恥ずかしくて  
顔も上げられない位です。

ところが、これほどまで凄惨な哀れみなき十  
字架刑の只中にさえ、慈悲深い神さまの英  
知に満ちた配慮がそこに準備されていまし  
た。これはこの奥義を悟る人にだけ示される  
かくされた神さまの愛の配慮です。始めの  
アダムに皮の衣を与えられた神さまが最後  
のアダムなるイエスさまにも一つの裸の恥を

覆う正義の衣をそっと着せられていたのです。その神秘的な正義の衣とは一体なんでしょうか？それが、イエスさまご自身、十字架上流された血潮の衣なのです。なんと主イエス・キリスト本人がご自身の血潮というかたちで主イエス・キリストを着たのです。

イエスさまは執拗にムチ打たれ、頭にはするどいいばらの冠を受け、手足には釘が打たれたから、そこから血潮が全身に止まることなく溢れ流れました。イエスさまの全身は真っ赤に染められてまだらな血潮の衣に包まれたのです。

先日、義理の母が誤って包丁で指をちょ

っと切ってしまいました。その時その出血した赤い傷口を私は心配して手をとって見ました。すると切れた傷口の赤い血を見た私はもう怖くなって震えてしまい、助けるどころか本当に力が全身から抜けてしまいました。もちろん瞬間的に傷口から目もそらしました。人間というのは動物的本能で赤い血を見たら、恐れて動きが止まってしまう性質があるものです。その理由で信号のとまれが赤なのかも知れませんが、人間は正常なら血を見たら瞬間的に力が抜けるものです。イエスさまは血潮を流されました。そのためカルバリに集まった群衆はイエスの血潮にまみられた姿を、心理的におぞましく思っ醜く

忌み嫌う虫けらのように目をそむけたのです。見たくないのです。それが実は、父なる神さまからイエスさまに唯一与えられたどんなに見られても裸の恥とはならないおおわれた正義の衣・愛の配慮だったのです。

さらにイエスさまの私たちに対する熱く燃える全き愛もすべての恐れを閉め出し、裸の恥辱心を消滅させる完全な皮以上の衣の役を果たしていたのです。イエスさまは命を捨てるほどあなたを愛しています。その確かな証拠として流された十字架の血潮こそあなたに聖霊さまを注ぎ、キリストのふさわしい助け手とする恵みです。アダムの合同礼

拝実現への熱い願望と感動は、今でもイエス様があなたに願っています。

## 真の大祭司

最後のアダムなるイエスさまは、十字架に掛かり死の眠りにつきました。しかし、このような正しいお方がいつまでも死につながれているはずは絶対ありません。アダムが神さまからの手術後、深い眠りから再び目覚めたように、イエスさまは死の床から再び立ち上がられました。キリストは聖書の預言に従い、三日後の日曜の朝よみがえられました。復活の朝の出来事です。悲しみに沈むマリ

ヤにイエスさまはご自身を現わしてくださいました。

「マリヤ」

そう呼びかける復活のイエスさまの御声を聞き、霊の目が開いたマグダラのマリヤは、イエスさまを見出し「ラボニ(先生)」と叫び、感極まる喜びに満ちました。ところがそんなにまで復活のイエスさまを喜び、今や抱きつかんばかりのマリヤを制してイエスさまは言われました。

「私にすがりついてはいけません。私はまだ父のもとに上っていないからです……」

ここでなぜイエスさまはマリヤを拒んで、すがりつくことを禁じられたのでしょうか。それ

は成就すべき大祭司イエスさまの仕事がまだ残っていたからです。では、これについてさらに深い奥義を学んでみましょう。

大祭司は年に一度、あがないの礼拝をする時、必ず祭壇でほふられた動物の血をたずさえて至聖所へ入り、これを二つの翼を広げた御使いの模型ケルビムの覆う契約の箱の上と、周りに振りかける定めがありました(レビ 6:14、15、ヘブル 9:7)。しかしこの血を注ぎ終わって、至聖所から出ないうちは、誰も大祭司にさわってはいけなかったのです(民数記 18:4、レビ 16:17)。

幕屋の構造は、手前に民の待つ大庭、そして聖所、さらにその奥にある至聖所と三



段階になっており、一番奥の至聖所は真に聖なる神との会見の場であり、大祭司以外は絶対誰も入れず、もし、大祭司でさえ、いけにえの血を携えずに罪人のまま入り、奉仕するならば、そこで彼は打たれて即死したのです。

そのため大祭司にはいつも長いひもを結びつけ、音の響く金の鈴をたくさん身にまとわせてから至聖所の中へ入りました(ヘブル 9:7、出エジプト 28:34~37)。至聖所の外で待っているイスラエルの民は、大祭司に結ばれた長いひもの先端をしっかりと握り締めながら、大祭司が歩くごとに確かに聞こえてくる「チャリン、チャリン」という鈴の音で

生存確認していたのです。しかし、ある瞬間この音が長期的に絶えると民は騒然と緊張状態です。

レビ人たちがひもをゆっくり手繰り寄せ、張られたひもの反応で至聖所内にいる大祭司の生存を確認します。それでもなお反応がない時は、大祭司が聖所内で何者かにさわられたか、動物の血が入った器をうっかり忘れ物にして至聖所に入ってしまったため、罪のあがないを失敗して即死してしまったことを意味し、レビ人たちは慌ててひもを引いたのです。

「チャリン、チャリン、チャリン、チャリン」する

と神さまに打たれて即死した大祭司が大きな魚のように釣れたのです。旧約時代の律法では御前に仕えることが、これほど、荘厳、厳粛かつ神聖なことだったのです。ですから御言葉に忠実な真の大祭司イエスさまは、まだ真の至聖所のある天国であがないのための血潮を注いでいなかったため、マリヤにさわられることを拒み、さらには真の至聖所のある天国へ昇天する必要があったのです。十字架の祭壇で流されたイエスさまご自身の貴いあがないの血潮を、父なる神のおられる天の真の至聖所へ届け、振りかけるためです。そのため栄光の主イエスさまは四〇日の間、五〇〇人以上に現われ、

復活を確かに証明された後、弟子たちの見る中オリーブ山から雲に包まれて天に帰られました。私たちの救いが完了したからです。私たちの家を準備して下さるためです。そして私たちの真の大祭司としてあがないの血潮を父なる神の御前に注いで、とりなし下さるためです。栄光と勝利の主イエスさまはこうして復活後、真の至聖所なる天国へ堂々としてご自身の流された十字架の血潮をたずさえて戻られたのです。天国には神の神殿の御座の前に開かれた聖所(至聖所)があります(黙示録 7:15)。イエスさまはご自身の十字架で流されたあがないの血潮をそこで注がれたのです。その瞬間、想像です

が、待ちに待った父なる神から御子イエスの勝利の凱旋を喜ぶ激励の大きな御声が、天国全域に鳴り響いたことでしょう。

「これぞ、まさに我が子のあがないの血潮！我が子の命！、人間の罪に汚されなかった勝利の血潮である。我が純血を守り通した聖なる血統の血潮である。我が命！、私はこれを喜んで受け入れよう」

続いて御使いたちの大歓声と鳴り響くラッパ、演奏に合わせた天国聖歌隊の大コーラスの讃美が続いたかもしれません。勝利の大祝賀会、天国の栄冠式です。こうして王位を受けた栄光輝くイエスさまは王の王・主の主にあふさわしく父なる神さまの右の御座

に着席されたのです。

## 一本の灌木

イエスの血潮を受けて注がれた聖霊さまは、水のようにも臨在される神さまです。

イエスさまは約束されました。

「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書がいつているとおりに、その人の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

(ヨハネ 7:37、38)

創世記二一章一五節では、主人アブラハムの所から追い出された奴隷女ハガルとそ

の息子イシュマエルが、革袋の水も尽き果て、あてなき荒野で死の試練にあった時のことが記録されています。絶望的になった母ハガルは息子を一本の灌木の下に投げ出し、自分は矢の届くほど離れた向こうに行って座り込んで大声を上げて泣きました。それは、「子どもの死ぬのを見たくない」と思ったからです。荒野で水がないことは、即、死を意味します。ところが憐れみ深い主は、ハガルの目を開き、今まで近くにあっても全く気付かなかった井戸を発見させたのです。彼らはこの水により、生き延びて救いを得たのです。主がこのように救いの井戸を啓示されたのは、ハガルの泣く声ではなく、灌木

の下にいた少年イシュマエルの声に答えられたためです(創世記 21:17)。このことは私たちにとっても大切な教訓です。

今日、さまよう荒野のような厳しい人生で思いがけない死の試練に苦しむ時が誰でもあります。荒野で水がなくなるように、生命維持の糧となる職場と収入が断たれてしまう時、誰かが救われないまま世を去り、渴ける永遠の死に落ちそうな時、変わらない真の愛に渴きを覚える時、すべてこのままでは、早かれ遅かれ確実に死が忍び寄る試練体験の時、ハガルのように右に左にそれた矢のような罪の世に座り込んで泣いてい



でも、何ら創造的な奇蹟も救いもありません。誰でも死の試練から本当に救われたいならば、今すぐ行ってただ一本の灌木の木の下でひれ伏してイシュマエルのように真剣に祈ることです。その時、奇蹟が起き、救いの源泉、枯れない井戸水が大発見できるのです。

私たちの行くべき祈り場なる灌木の木の下とは、血潮に染むイエスさまの十字架の木の下です。ここでひれ伏して本気で祈る時、血潮が注がれ根本的な問題解決、永遠に枯れない救いといのちの源泉、聖霊の水を大発見し死の試練から救われるのです。

だれでも渴いているなら、聖霊さまの井戸水を飲んで活力を得、人生に復興をもたらしましょう。試練の涙に目が曇り、かくも身近にありながら発見できなかった救いの井戸のように、聖霊さまとの出会いは、人に捨てられ環境に飲み水さえないような絶望の時こそ、十字架の下で、イエスの血潮を仰いで発見できる実はかくも身近な所にすでに準備されている恵みです。荒野のただ中にごそいのちの泉、聖霊さまが共におられます。井戸は教会の象徴でもあります。足を踏ん張り繰り返し重い水を汲み上げるように、その足で努力して教会に集い、繰り返し祈りをもって聖霊の満たしを求めましょう。祈り

は確かに重労働です。しかし、死の試練の只中で祈りこんで聖霊の井戸水が大発見できれば、そこから繰り返し命の水を豊かに汲み上げて飲み、新しい人生の基盤がそこから復興されるのです。

## えにしだの木

イシュマエルは肉体的に飲み水がない死の試練を受けましたが、精神的に否定的考えで死の試練を受けた人に預言者エリヤがいます。エリヤは国権発動による国家的迫害を恐れて精神的に弱くなった時、ベエル・シェバの荒野に一日の道のりを逃げ、

そこにあっただえにしだの木陰に座り込んで  
自分から否定的な祈りをしました。

「主よ。もう十分です。私のいのちを取って  
ください。私は先祖たちにまさっていません  
から。」(第一列王記 19:4)。

この祈りに対して、小さな人間の迫害に大  
きく動揺するエリヤを力づけようと、大いなる  
天地を造られ、自然と万物の法則すべてを  
支配しておられる偉大な全知全能の力ある  
主ご自身を悟らせようと、主は仰せられまし  
た。「外に出て、山の上で主の前に立て。」  
(第一列王記 19:11)。

従順なエリヤは登山して主を待ち望みまし

た。そこで、主は不思議な神秘的臨在感をもって超自然的に栄光を現わされました。

「そのとき、主が通り過ぎられ、主の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも主はおられなかった。地震のあとに火があったが、火の中にも主はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。」

(第一列王記 19:11、12)

エリヤはこのかすかな細い声を聞いたあと、成すべき使命を受け、弟子訓練という新しい領域の働きが道開きました。

今日も私たちが行き詰まり、死を願うほどの試練を受けてしまう時、私たちのえにしだの木なる十字架の木の下で、イエスの血潮を仰いで祈れば、主は再び立て直される成すべき人生計画を聖霊さまの臨在の内に啓示して下さいます。エリヤが山の上で見た栄光体験は、まず主が通り過ぎられる光景でした。これは神さまが人となって世に来られ、十字架で勝利されて、昇天されるまでの人類史に直接介入された通り過ぎられたイエスさまの栄光を現わします。

次に主の前で山々、岩々を砕くほどの激しい風とは、昇天されたイエスさまに代わって

注がれた家全体を揺すぶるほどの激しい風と地震で臨在された聖霊さまを現わします。聖霊さまはペンテコステの日、突然、天から、「激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。」(使徒 2:3、4)

生ける神であり、風のあとは家全体に響く地震、地震のあとは炎で臨在されたお方です。しかし、エリヤの目撃同様、火の中にも主はおられず、これらはすべては力に満ち溢れる聖霊さまの臨在の現われでした。

今日も聖霊さまは肉眼で認識できる形や現

象自体の中に動く単なる力やエネルギーではなく、その現われとしての聖なる臨在感の中からかすかな細い声をもって、御心のままに語られる知・情・意を持たれる人格ある神です。マルコの二階部屋にいた弟子たちは炎の聖霊さまを受けてから変えられ、かすかな細い声である御使いの異言を語り、解き明かしの賜物で、人の異言なる外国語で預言的福音を大胆に語る者にリバイバルされたのです。

それは弟子たちにとって今だ考えも及ばなかった高められた希望の新しい次元の体験でした。聖霊さまのかすかな細い声なる啓



示とは、いつも私たちの信仰が落ち込んだままの霊的に低い状態ではなく、熱く信仰に満ちて霊的に高く上げられた超自然的で圧倒的に人知を超越した臨在感の中でご自身の御心は預言的に啓示されます。

「地を造られた主、それを形造って確立させた主、その名は主である方がこう仰せられる。わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」

(エレミヤ 33:2、3)

アメリカのクリスチャンで民間の探検家で

あり考古学者でもあるロン・ワイアット。彼はトルコ政府公認のアララテ山上ノアの箱舟残骸発見者として、一九八七年にノアの箱舟国定公園設置の際、特別ゲストとして招かれた人であり、モーセの出エジプトの現場を塩の海の海底に古代戦車の残骸と共に発見した考古学者であり、ワイアット考古学研究所(WAR)を組織しました。彼は一九八二年一月に、さらに大きな世紀の大発見をしました。契約の箱、失われたアーク発見です。

その次第はこのようです。一九七八年、彼が子供たちとヘブル人の出エジプトの際、

奇蹟的に水が裂けて壁となったあと、再び元に戻って塩の海に生きてまま飲み込まれたパロ王ひきいるエジプト全軍の戦車の残骸を海底に探す潜水調査をしていました。実際エジプト・カイロの博物館には王朝時代のパロ王たちのミイラ二五体が収蔵されておりますが、メルネプタハ王のミイラだけは他のものと死囚が異なり、通常は皮膚が赤褐色のはずがこのミイラだけは白っぽい色で全身に塩分が付着しており、顔の形もくずれ、眉毛も直接書いた跡があり、耳には魚に食われた跡もあり、三年間の調査の結果、このパロ王は塩の海で水死したと結論づけられております。聖書にはパロ王自身

もヘブル人のあとを直接追跡して海に入ったとあり、海辺にはエジプト人の死体があがったことも書かれてあります  
(出エジプト 14:23、30)。

しかしながら、この時の潜水調査はロン氏の足がはれて痛んだため潜水中断となり、残念ながらアメリカに帰国することとなりました。帰国を待つある日、ロン氏はホテル近くにあった、ゴードン大佐によって特定されたイエスの十字架張り付けの地として有名な観光地である岩の斜面にどくろの面があるカルバリ断層を地元の権威者と、ローマ古器物について話し合いながら歩いていまし

た。すると、ある場所に来たその時、彼らは歩くことをやめ、突然ロン氏の手が自分の意志にはよらないで、聖霊さまの圧倒的な力で動き出し、無意識のうちに地面の一角を指し示して止まったのです。しかも、ロン氏のくちびるからは明確な預言が超自然的にその場で語られたのです。

「それは、エレミヤの咽もとである。そして契約の箱の埋められた地である」

ロン自身それまで「契約の箱」の発掘については考えたこともなかったのですが、この時一緒にいた地元の権威者も不思議なことにこれを受けて言いました。

「それはすばらしい！。私たちはあなたに発

掘を願って許可を与えましょう。あなたの泊まる所と毎日の食事も提供しましょう」

ロン氏はそれ以降、不思議な聖霊さまによって語られた預言に導かれ、この地の採掘権を正式に得て、未だ誰も発掘したことのないまさにどくろの面を崖の斜面にもつ岩棚の真下を垂直に掘り始めて行っただけです。地元の土方アルバイトを雇いながら、息子たちと共に、大量に蓄積された重い岩と土砂を次々と取り除く気の遠くなるような入念な発掘が成され、やがて彼らのチームが発見したものは、失われたアークである契約の箱だったというのです……。

民間の考古学者として、年間の半年をアメリカの医療施設で働き、他の半年を発掘調査に自費で費やすという大変困難な作業に生涯献身できたロン氏にとって、時には発掘を断念しようかと思うほどの困難もあり、そのような彼を変える神さまの激励体験もそこにありました。それは契約の箱を守り続けるケルビムのような実際の天使に出会ったことです。

ある日、彼は預言者と共に契約の箱があるほら穴入り口の地面に座り、他の労働者たちはほら穴の中にいました。彼は自分が隠れるほど掘り下げた地面に座ってレーダ

ースキャナー（電波断層探知機）の紙を取り替えるなどの作業中で預言者は大きなやぶの陰で食事を食べていたその時です。

ロン氏ひとりが背後の上にある地面から語り掛ける声を聞きました。

「あなたがここでしていることを、神さまは祝福します」

見上げるとそこには背の高い黒っぽい髪のスラリとした男が、聖書の時代に着ていたような頭をおおうすべてが純白な長いローブの上着を着て立っていました。驚いたロン氏はここでの発掘作業を誰にも教えていなかったため、この人が誰であるかを不思議がりながら、丁寧な会話調で、彼がもし



や近所から来た人であるかとたずねました。彼は単に「いいえ」とだけ答えて沈黙しました。そこでロン氏は彼が旅人であるかとたずねました。すると彼は再び「いいえ」とだけ答えてさらなる沈黙が続きました。それから白い服を着た人物は言いました。

「私は南アフリカから新しいエルサレムに行く途中です」

ロン氏は驚きのあまり何も言えずに、彼をじっと見つめるだけでした。その人は再び言いました。

「あなたがここでしていることを神さまは祝福します」

それから彼は背を向けて立ち去りました。そ

の直後、やぶの陰に隠れていたため彼を見られなかった預言者は言いました。

「ロン。私たちはずっと天使に話しかけていたと思いませんか？」

契約の箱の発見者ロン自身は、この洞窟に四度入ったことから、さらに細かな証拠資料を保存していると思われませんが、一般公開されないまま残念なことにロン氏は一九九九年八月に、すでに召天しており、その後のイスラエル政府による発掘現場埋め戻し命令によって、今は誰も手がつけられない状態でそのままそこに眠っています。この本で取り上げた一部の公開された情報と写真

はWARの後継者団体から著作権の許諾を受けたため転載しております。さらにもう少し詳しい情報はこの本の最後の方に書いてあります。聖霊さまの超自然的啓示によって動かされた献身者の証しでした。

図1はノアの箱舟残骸の写真です。

図2、3は塩の海海底で発見されたパロ王ひきいるエジプト軍が実際、軍馬に引かせた立ち乗り二輪戦車の残骸のうち車輪部分の写真です。図4、契約の箱の写真は模型のものです。

ここでロン氏による、これら預言に導かれ

た実際の発見よりもはるか以前に、本当のゴルゴダの場所とその真下には、契約の箱があることをも事前に指摘していた著名なカトリック修道女である預言者カタリナ・エンメリック(一七七四―一八二四)の記録をご紹介します。

「私は、ゴルゴダの丘深く、イエスさまが磔(はり)つけにされた地点の真下、水の層にほど近いほら穴に眠るアダムの骨を見ました。私は、中を覗きアダムの骨が、右の腕と足、右のあばらの一部以外は、完全に保たれているのを見ました。右のあばらから覗いたとき、左のあばら骨がはっきり見えました。右脇には、主が取り出されたときと正確に同

じ位置に、エバのどくろが横たわっていました。アダムとエバの眠る場所については色々と議論されていますが、私は、二人が私を見たその場所に常にいたことを示されました。大洪水以前、この地点に丘はありませんでした。その出来事とともに、初めてこの地点に一つの丘が現われました。墓は水から守られたのです。ノアは、箱船の中に彼らの遺骨の一部を持ち込み、最初の礼拝を行なったとき、祭壇の上に並べました。アブラハムも後の時代に同じことを行ないました。彼は、アダムの骨をセムから受け継いだのです。アダムの骨の真上、ゴルゴダの丘で行なわれたイエスさまの血の犠牲は、

遺骨を下に納めた契約の箱の上で行なわれる礼拝を予告したものでした。父祖たちの行なったいけにえは、そのための準備にすぎませんでした。彼らもまた、聖遺物を所有し、それによって神さまの約束を思い起こしたのです」

なんと、十字架真下のほら穴にある契約の箱のさらに真下にはアダムとエバの骨があることまで細かに預言されていたのです。まさに、ここゴルゴダの場所(訳すと、「どくろ」の場所)とは、伝説どおり文字通り本当にどくろの場所だったようです……。

## 引き裂かれた一頭の若い獅子

サムソンは主に聖別された生まれつきのナジル人として聖霊さまによる特別な能力が与えられていました。怪力です。しかし、彼が主に従って、その賜物を神さまのために用いない限りは、遊女におぼれて人々を困らせるばかりのつまらない生涯でした。ある時、サムソンはペリシテ人の娘を心に留め、その女との結婚生活を夢見ながらサムソンの父母の所へ結婚許可を求めに帰りました。敬虔な信仰者であるサムソンの父母は律法に背く異邦人との結婚の願いのゆえに、心をととても痛めました。このように日々、肉の

思いのまま気の向くまま暮らすサムソンが、ある時、葡萄畑にやって来ると、そこに神さまよりの裁きの象徴であり、審判の道具でもある一頭の若い獅子が送られ、吠えたけりながら牙をむいて真っ直ぐサムソンに立ち向かってきたのです。

「このとき、主の霊が激しく彼の上に下って、彼は、まるで子やぎを引き裂くように、それを引き裂いた。」(士師記 14:6)。

サムソンは怪力です。その後しばらく日数が経ったある日のこと、不意にサムソンはあの獅子の死体をもう一度見たいと思いつき、以前獅子を引き裂いた現場の脇道に一人



入っていきました。すると、何とそこに発見した獅子の引き裂かれた死体の体内に蜜蜂の群が巣を作って住みつき、そこにあまいハチミツを蓄えていたのです。サムソンは喜んで獅子の体じゅうからハチミツを手でかき集めて歩きながら食べ、家に持って帰って自分の父母にもおみやげとしてプレゼントしました。

この不思議な出来事を霊的に解釈すると、象徴的な意味があります。旧約時代、主は律法を目安として、罪人にはいつも吠えたける獅子のごとく厳しく裁かれるお方でした。しかし、公義の神さまの罪人に対する聖な

る御怒りと憤りは新約時代に、人類の代表として罪なきイエスさまに下られ、建物を守る避雷針に雷が集中して落ちるようにただお一人厳しい審判を受けました。キリストはとこしえの御霊によってもっとも凄惨な処刑道具、十字架につけられ(ヘブル 9:14)、肉体が引き裂かれ、血潮を流して死なれたのです。

その様はサムソンに宿る聖霊さまが獅子をまるで子やぎを引き裂くように、引き裂いて殺したようでもありました。その後三日目によみがえられたイエスさまは四〇日間、弟子たちに現われ、ご自身の復活を証明され

てから天に昇られ、それからしばらくした十日間が過ぎた、復活より合計五〇日間の日数が経ってから天よりの約束の聖霊さまを私たちに注がれたのです。

その注がれた聖霊様の恵みは、引き裂かれた獅子の体内からしばらくした後、集められた甘いハチミツのようであり、厳しい旧約の律法的裁きの御言葉が聖霊様の力でイエス様の十字架上、引き裂かれた御体を通して、その内よりあふれ出た甘い赦しといやしに富む新約の恵みの御言葉に変えられたのです。まさにサムソンのなぞかけ「食らうものから食べ物が出、強いものから甘い物

が出た。」(士師記 14:14)とは引き裂かれたイエスさまからあふれ出た甘い聖霊さまの蜜のような恵みだったのです。その祝福の蜜はサムソンが父母に分け与えたように、私たちの全家にも及ぶ両手いっぱいの祝福なのです。

かつてヨナタンが、森で見つけたハチミツを杖の先でとって食べると、疲れた体が回復して目がきらきら輝いたように(第一サムエル 14:27)、聖霊さまの蜜を食するなら私たちもいやされて回復し、目を輝かせる霊的命の糧となるのです。

ある町に裁判官を務める父親と自動車事故

を引き起こした息子がいました。簡易裁判の日にこの息子は法廷に立たされました。その日、何と裁判官は自分の父親その人でした。裁判官は実の息子に対して、獅子のように厳しい顔で接し、法廷を開催しました。裁判官は質問します。

「被告人、まずあなたの名前と住所を述べなさい」息子は全く驚いた様子で答えました。「お父さん。私はあなたの子どもですよ。あなたが一番よく知っているでしょう」

しかし、裁判官は律法的に毅然とした態度で厳しく被告人の息子を制して、再び同じ質問を繰り返しました。このようにして裁判がとりおこなわれ、詰問の結果、最終的な

判決は被告人に対する罰金刑ということで  
法廷は閉じられました。その日、家に帰った  
息子は父親に質問しました。

「お父さん、お父さん。どうして今日、お父さん  
はあんなに厳しく私を取り扱われたので  
すか。私を愛していないのですか」

父親は息子を優しく抱擁して微笑みながら  
答えました。

「愛する我が子よ。私は法廷についている  
時、私は公義の裁判官なのだよ。誰であつ  
ても被告人には厳しく正しい判決を下す立  
場にあります。しかし、今は違います。こうし  
て家に帰ると私はあなたの父親です。息子  
よ、あなたの今日受けた罰金は、私が全額

代わりに支払ってあげましょう」

イエス・キリストの十字架で、引き裂かれた  
肉体とそこから流れ出た血潮を通し、父なる  
神さまに出会う時、公義の審判官は優しい  
父となり、すべての律法的罪の負債は免除  
され、誰でも神さまの子供として、アバ、父と  
呼びながら親しく甘く恵みに富む聖霊さま  
の蜜を体験できるのです。ハレルヤ！

## 第3章

### 呪いからの解放

第三にイエス・キリストの血潮は、私たちを

呪いから解放して祝福します。

## 祝福と呪い

私たちが聖霊さまに満たされると呪いからも解放されます。

「キリストは私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、『木にかけられる者はすべてののろわれたものである。』と書いてあるからです。」(ガラテヤ 3:13)

イエスさまに使われたローマ軍の死刑道具、十字架はラテン・クロスという種類の、十字の形をもち縦の木が横の木よりも長く、樹



皮をはぎ、葉をむしり取っただけの荒削りの木でした。木の高さは明確ではありませんが、ハマンの立てさせた後に自分がつけられた柱の場合、王妃の宴会の席から見えるように高さ二二メートルもある特別高いものでした。ここでハマンに使われた柱のヘブル語はスタウロスすなわちこの柱は十字架です。しかし、イエスさまに使われた十字架の柱は、頭上の岩棚に見せしめのため大きく掲げた罪状書きが道行く通行人にもはっきり読めるような高さにあり、ローマ兵のわき腹への槍や、酔い葡萄酒を葦の棒につけたものを伸ばすと、届くぐらいの一般的な高さでありました。

ユリウス・カイザルのガリア戦記によると蛮族のゲルマン人は高身長、金髪、碧眼で、古代ローマ人は、背が低く、黒っぽい髪で、肌は小麦色です。出土している道具やサンダルなどからおおよそ古代ゲルマン人の平均身長は一m七二cm、古代ローマ人の平均身長は一m五五cmと考えられます。しかし、背が高いゲルマン人を恐れたローマ兵は名将カイザルの戦略と最新武器を駆使して圧勝。その武器が主武装のピルムと呼ばれた投げ槍です。全長は一・五mから二・〇m、重量二kgから四kg、最大射程距離は約三〇m。そう考えると身長一m五

五cmのローマ兵が最も長いタイプの二mの投げ槍を手にとって十字架めがけて少し斜め頭上に伸ばしても最大到達高は四m以内です。イエス様の十字架上的わき腹が最大でも地上高四m以内に位置していたこととなります。そうなればわき腹で四m、十字架の頭上の縦長部分の木を加えても恐らく、十字架の地上高が一番高いところで五m位と推測されます。大工の世界で換算すると約一八尺の角材。強くしなりのある檜の木五mなら総重量一〇〇kg以上はあったと思われれます。イエス様が背負わされた十字架の横木に至ってはその半分以下くらいの重量でしょうか。

ちなみに槍で十字架上のイエス様が気絶や仮死状態でないか等、生死確認をした馬鹿なローマ兵はわき腹を槍で割いたとき、斜め真下で一〜二リットルもの出血を直接浴びたと思います。しかし、信仰なくイエスの血潮を浴びても救いはないです。

私たちがこの十字架を見る時、それは救いのシンボルであり、象徴的な意味合いもよく、縦の木が横の木よりも長いことは天と地を結ぶ神さまとの縦の関係を横の人間関係よりも、もっと長くしっかりと第一に結ぶことを教えており、十字架はすべての否定的、破壊的なマイナス要素さえも肯定的、建設的、創造的なプラス思考へと変えてしまう、不可

能を可能にした神さまの力を現わす美しい  
ものです。

ところが同じ十字架を律法を知るすべてのユダヤ人が見る時、それは呪いの象徴であり、木に架けられたイエスさまこそ呪われた者であると考えられ、軽蔑の対象として見下げる者となったのです(申命記 21:33)。

呪いとは、創世記三章一七～一八節で始めの人間アダムが罪を犯してから全世界に入って来た罪の報いです。アダムゆえ土地は呪いを受け、どんなに額に汗して種まき、労働して期待しても、そこからはただ土地をふさぎ、人を害する無益ないばらやあざみ

が生じてきたのです。

今日も知らずに呪いに満ちた環境に入っていく、そこで種を蒔いて失望を刈り取っている人が多くいます。聖書には「いばらの中に種を蒔くな」(エレミヤ 4:3)とありますが、功的な良き実を結ぶ人生のためにはまず、いばらを焼き払ってから、種を蒔かなければすべてが無駄になってしまいます。いばらは食べられる実を結ばない植物であり、建設資材の角材にもならない無益に土地をふさぎ、人々が忌み嫌う全くの呪いの象徴です。環境から、まずいばらのような呪いを取り除くことが先決課題です。呪いは信じた

いと言う人もおりますが、聖書では、明らかに世界には命と死、祝福と呪いが実在し、私たちもその子孫も命を得るように祝福を選ぶよう勧めています(中命記 30:19)。

世には祝福のゲリジム山に立つような人生もあり、呪いのエバル山に立つような人生もあります(申命記 11:29)。それは一種の法則のようなものであり、信者であってもなくても、地上にいる限り、すべての人がいずれかの影響力を背後に受けながら生活しているのです。申命記には、主がモーセに命じて結ばれた祝福と呪いの法則について、その契約にはその当時まだ生まれていなかった

た今日の私たちをも含まれていると言われました。

「しかし、私は、ただあなたがたとだけ、この契約とのろいの誓いとを結ぶのではない。きょう、ここで、私たちの神、主の前に、私たちとともに立っている者、ならびに、きょう、ここに、私たちとともにいない者に対しても結ぶのである。」(中命記 29:14、15)

祝福と呪いの法則の対象は私たちも例外ではありません。この世でも国際的には条約、国家には法律があり、社会には道徳があり、会社には社内規則、学校には学則、道路にも交通法規があります。そして、これ



らの法則を一方的に無視して、反した社会行動をとるならば、それ相応の制裁を身に招くことになります。条約を破れば経済制裁や戦争、もし国の法律に反すると逮捕処罰されます。道徳を無視すると世間に白い目で見られ阻害されます。社内規則を破ると減給や出世の遅れ、左遷、解雇もあります。学則を破ると停学や退学もあり、交通法規を破ると事故に遭います。

ちょうどこれらと同じように、霊の世界にも法則があったのです。霊の世界のゲリジム山とエバル山とは、イエスさまを信じた私たちに与えられた命の御霊の原理と、世にあ

る罪と死の原理です。命の御霊の原理とは簡単に言うと、私たちが真剣に祈れば祈るほど、命の源イエスさまに近づき、それに比例して祝福されるものであり、罪と死の原理とは、聖書に反する行ないにより、我が身に招く呪いです。それゆえ、誰でもこの呪いの原理に誤って、巻き込まれないように細心の注意を払い、聖書に従って生きることが幸福の秘訣です。

イエスさまは私たちを呪いという暗闇のベールから救い出すため十字架の木につけられたのです。その時、イエスさまの御頭にはあのエデン以来の呪いの産物、いばらで編

んだ冠が置かれていたのです。郊外のゴルゴダ丘周辺に生じていたイエスさまの王冠に使われたいばらとは、植物分布によるとイスラエルの一七種類あるいばらの中でも最もトゲが鋭く、厳しい、「とげわれもこう」品種であり、束にしてかまどや火鉢の火付け用として使うかエルサレム周辺では侵人者防止用の生け垣に使うほどの堅い物だったのです。このいばらは一本のトゲが五から六センチはある、鋭い針の集合体であり、ローマ兵はこれで蛇がどくろを巻くようにぐるぐる巻きにして王を皮肉る王冠を作り、イエスさまの御頭に押しつけたのです。王冠とは普通その性質上、王の富貴と栄華を現わすもの

として、高価な金や銀で作られ、そこには数々の美しい宝石が散りばめられている結果として重量があります。ダビデ王の頭に置かれた王冠の場合、宝石がはめ込まれており、金一タラントに匹敵する三四キロもの重量がありました(第一歴代 20:2)。

そのため王冠とは、軽い帽子とは異なり、王が頭に乘せた後はギュツと押さえつけて頭からずり落ちないように固定する必要があります。イエスさまの御頭にはいばらで作った王冠です。それゆえローマ兵によりイエスさまの御頭に無理やり乗せられた冠は、次に固定のためギュツと押さえつけられたので

す。このためイエスさまの御頭は、人間の中で最も大切な脳のある頭から突き刺され、引き裂かれる激痛と共に、額の上で貴い血潮が流れ出たのです。イエスさまは私たちの呪いを除くために身代わりとして、頭から足先まで呪いをかぶられ、呪われた者だけが架けられるはずの十字架の木につかれました。神さまの偉大な犠牲のゆえにどんなに大きな感謝を捧げたらよいのでしょうか。イエスさまこそ永遠にたたえられる栄光の王の王です。私たちの呪われた生活を祝福へと変化するために主は来られたのです。イエスの血潮は今も呪いに対抗しているのです。呪いとは、いかなるものか聖書から実

例を簡単に挙げたいと思います。

ハム

創世記九章二〇節以降では、ノアは洪水の審判後、神の再び洪水を起こさないという契約のしるしの虹を見て信じ、洪水を警戒することなく信仰で農夫となり葡萄畑を作りました。ところが彼が大洪水の緊張から解かれ油断したある日、自然発酵した葡萄酒を飲んで酔ってしまい、天幕の中で裸になっていたところを、父ノアの失態の第一発見者ハムがこれを面白がり、他の二人の兄弟に告げたのです。しかし、セムとヤペテは着

物を取り、ノアの裸を見ることなくこれを覆い隠しました。酔いが醒め、一部始終を知ったノアは、末の息子ハムの罪悪を知り、ハムを呪い、他の兄弟たちには祝福を宣言しました。ノアが五百歳になったときに生まれた彼ら三人は(創世記 5:32)

まずここで祝福されたセムへの御言葉とは「ほめたたえよ。セムの神、主を。カナンは彼らのしもべとなれ」ですが、セムには特に礼拝用語の「ほめたたえよ」や「セムの神、士を」などすべて霊的、宗教的な使命が預言されました。今日セムは黄色人種の祖先と言われますが、確かに東洋には数多くの大きな宗教があり、中でも中東はキリストが

来られた発祥の地として世界的な注目を浴びています。東洋人は霊的に祭司長のような使命が与えられたのです。

また、祝福を受けたヤペテへの御言葉とは「神がヤペテを広げ、セムの天幕に住まわせるように」ですが、ヤペテには特に「広さ」や「天幕」に象徴する物質的な祝福の使命が預言されました。今日ヤペテは白色人種の祖先と言われますが、確かに西洋は一般的に東洋より広く立派な家を持つ先進諸国が多く、物質的に祝されたその財力を背景に宣教師が世界に多く送り出されたのです。そして文字通り神さまに広げられたヤペテ



は広い国土の他、人間自体も背が高く広げられており、セムの天幕に往むという祝福通り、歴史的に多くの資源を東洋諸国から安く輸入して栄えてきました。

一方、呪いを受けてしまったハムへの御言葉とは「呪われよ、カナン。兄弟たちのしもべらのしもべとなれ」ですが、ここでノアが罪を犯したハム本人ではなく、その子のカナンを呪ったのには象徴的な意味があります。呪いとは父から子へと代々降りて行くものだからです。事実その後のハムの歴史を見るとやがて時代が流れ、力ある獵師として名をあげた最初の権力者ニムロデが、この呪

われたハムの子孫から立ち上がりシヌアルの平地に、バベルの王国を築きました。

しかし、この王国は洪水を警戒する高い塔が築かれ、契約の虹を無視したものとして、主の御言葉に真っ向から挑戦し、加えて全地の表に産み、増え、広がるものではない、反対に一つ所に集まる背信の王国でした。

それゆえ、不信仰と傲慢の象徴とも言うべきバベルの塔は、主に打たれ呪われたものとして言葉は分裂し、彼らの反逆は失敗して地の全面に強制的に散らされたのです。その後も呪われたハムの子孫、カナン人は集まり王国を築きました(創世記 10:19)。

それはソドムとゴモラの町、男色と罪悪に満

ちた町として主に忌み嫌われ、滅ぼされて  
しまいました。その滅亡は、雷を伴った地震  
により、吹き出した天然ガスに火がつき、硫  
黄、瀝青、噴出した石油にまで引火し、巨  
大な火の海となったすさまじい審判の様子  
が、今日の考古学者による遺跡発掘調査  
で判明しています。

聖書ではこの災害を「硫黄の火を天の主の  
ところから降らせた」(創世記 19:24)と言  
います。今日ノアの三人の息子たちは白人・  
黄色人種・黒人であり、末の子ハムは黒人  
の祖先だったと言います。黒人の歴史は確  
かに奴隷として強いられ、兄弟白人や、黄  
色人種のしもべらのしもべとなったことが多

くありました。これは絶対、神が呪われた奴隷制度を協賛したもののでも認められたものでもなく、人間の罪悪の結果として引き起こされた呪いが、代々伝わった悲劇だったのです。しかしこれを悟り戦う時、イエスの血潮がすべての呪いを断ち切り、今日の黒人教会やアフリカのような偉大なリバイバルの祝福を実現できるのです。

リベカ

また呪いは民族だけでなく、個人にも降りかかることがあります。母リベカは愛する我が子ヤコブのために、兄エサウの長子の権利

をだまし取るよう計画した時、迷うヤコブを  
勇気づけて告白しました。

「我が子よ。あなたの呪いは私が受けます」  
そう告白したリベカは、後に本当に呪いを受  
けました。

創世記二七章四六節では、その後の同じリ  
ベカの口が、夫イサクに告白しています。

「私はヘテ人の娘たちのことで、生きている  
のがいやになりました。」

リベカは人間関係により苦しめられ、死に  
たいほどの呪いを体験したのです。さらに  
愛する我が子ヤコブとは二〇年間も離れば  
なれの生活となり、生涯息子に再会すること  
なく、その間にリベカは死にました。

箴言一八章二一節にある通り、「死と生は舌に支配される」のであり、うっかり誤った口の告白や行ないにより、呪いを受けないように注意が必要です。他にエレミヤ書一七章五節では「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者は呪われよ」と記されており、ゼカリヤ書五章三節には全地の面に出ていく呪いの巻物があり、盗人と主の御名により、偽る者の家に入り、その家の真ん中から梁と石と共に滅ぼすとあります。律法の呪いが現実にあるのです。新約のテモテ人への第一の手紙一章九節では、さらにこれについてこうあります。

「律法は、正しい人のためにあるのではなく、

律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らわしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、嘘をつく者、偽証する者などのため、またそのほか健全な教えに背く事のためにあるのです。」

使徒パウロはこう宣言しました。

「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。」

(第一コリント 16:22)

このように考えると、やはり呪いは全人類に降りかかっていたものといえます。しかし、今やイエスの血潮によりこれがすでに祝福へ移されていることも事実です。ヨシユア將軍により環境を通して誓われた呪いもありま

す。罪悪に満ちたエリコの町が聖絶された時、彼は言いました。

「この町エリコの再建を企てる者は、主の前に呪われよ。その礎を据える者は長子を失い、その門を建てる者は末の子を失う。」

(ヨシュア 6:26)

それから約五百年後、神さまの御言葉を信じないベテル人ヒエルがエリコを再建した時、この御言葉通りの呪いを受け、彼はその礎を据える時、長子アビラムを失い、門を建てる時、末の子セグブを失ったのです  
(第一列王 16:34)。

家系に働く呪い



モーセの十戒にも偶像崇拝者には呪いが下り、三代・四代に及ぶとあります  
(出エジプト 20:5)。

呪いは三代・四代・十代・それ以上現実  
に働き、これを悟りイエスの血潮で取り除か  
ない限り続くものです。

「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝  
わったむなしい生き方から贖い出されたの  
は、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷  
もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊  
い血によったのです。」

(第一ペテロ 1:18、19)

「先祖から伝わったむなしい生き方」という  
名の家系に働く呪いがあります。こんな話を

聞いたことはありませんか。あの家系は代々不慮の事故だ、代々親と同じ病だ、代々親と同じ失敗をしている、などです。

私の知り合いの女性はこう言いました。

「私の主人はむかし自殺しましたが、実はその主人の父親もむかし自殺した人なんです。今、死んだ主人の息子が大学生になりましたけど、とても心配です。先生、この子のために祈ってください」

聖書では、アブラムが妻サライのことを妹と偽り、後に見つかって大問題になったことが記されていますが(創世記 12:18)、その息子のイサクも父親と全く同じ失敗をしてい

ます(創世記 26:9)。

ダビデ王は外交的には成功した王ですが、家庭内の子供の養育には失敗した王です。原因はウリヤの妻バテ・シェバを呼び寄せてこれに対して姦淫の罪を犯してしまい、その夫ウリヤを激戦地で計画的に殺害したためそのひどい罪悪が家系全体に呪いを招き、子供たちにもひどい姦淫の霊と剣の害が及ぶこととなりました。預言者ナタンがダビデ王に預言したとおり「今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない」(第一サムエル 12:10)。この種の呪いをダビデ王は体験したのです。

バテ・シェバがダビデ王に産んだ最初の子は病気で死に、その後ダビデ王の王子アムハンは処女の美しい妹タマルを恋い慕って強引にこれと寝る近親相姦の罪を犯し、王子アブシャロムも父ダビデ王のそばめたちと天幕で寝る姦淫の罪を犯しました。これらの王子たちは後に剣にかかって死にました。中でも凄いのにはバテ・シェバから産まれたダビデ王の後継者ソロモン王にいたっては、七百人の王妃としての妻たちと、三百人のそばめたちがいたほどであり、その妻たちが晩年ソロモンの心を他の神々へと向けてしまい大変な滅びの罫となりました。父ダビデが蒔いた姦淫と殺害の悪い種が、家系

全体に働く呪いとなって子孫に降りかかり、  
子供たちが災いを刈り取ったのです。

エレミヤ記三一章二九節ではイエスさまの  
十字架以降の日について「その日には彼ら  
はもう『父がすいぶどうを食べたので、子ど  
もの歯がうく』とはいわない」と宣言されてお  
り、お父さんが誤ってすっぱいぶどうを食  
べて失敗したのに、父の行ないに関係ないそ  
の子どもの歯がういて青白くすっぱい顔で  
口をとんがらせているという不合理で奇怪な  
呪い現象はなくなると約束されています。

一般的に罪を悔い改める告白の祈りはよく

知られていますが、呪いを断ち切る宣言の祈りや積極的に命じる戦いの祈りについては、神学的な解釈上の違いを理由に意外とされていないクリスチャンが多くいます。現実には私たちの家系に代々働きかけ滅ぼそうとする暗黒のベールのような呪いを悟り、イエスの血潮ではっきり呪いのきずなを断ち切る宣言の祈りを大胆にしましょう。

「私はイエスの血潮の力で、先祖代々伝わって来た父方の呪い、母方の呪いをすべて断ち切る。私は自由です。イエスの血潮で祝福をつなぎます。

祝福された我が家と我はイエスさまを愛し神さまに仕えます。アーメン」

出エジプト記二〇章六節には、私たちに約束します。「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」私たちがもっとイエスさまを深く愛し、その命令を守って生き千代の祝福に恵まれますよう十字架の血潮の注ぎかけが絶対必要です。

## 呪いをもたらす苦い水

民数記五章では律法で不貞を疑われた妻に対する定めがありました。祭司は容疑がかけられた女を近寄らせ、主の前に立たせて聖い水を土の器に取り、幕屋の床にあ

る塵をその水に入れます。

そしてこれを「呪いをもたらす苦い水」と呼び、誓って女に飲ませました。その時もし、女が夫の元にありながら隠れて姦淫の罪を犯していたのであれば、女はこれを飲んだ後、害を受け、水は女の中で苦く腹をふくれさせ、ももをやせ衰えさせ、みにくい体型となり、その女は民の間で呪いとなったのです。しかし、もし女が身を汚しておらず清ければ、水を飲んでも害を受けずに、むしろ女は子供を宿すようになったのです。イスラエルでは子を宿すとは祝福の象徴です。実にイエスさまはこの呪いをもたらす苦い水を飲まれたお方なのです。ゲッセマネの園で



イエスさまは十字架に向けて必死に祈られました。

「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」(マルコ 14:36)

イエスさまは祈りこんで勝利され、この杯を私たちの身代わりに飲むことを決心されたのです。それは全人類の過去・現在・未来のすべての罪と病と死の毒が満ちていた「十字架の死」という呪いをもたらす苦い水の杯だったのです。イエスさまは父なる神さ

まの御心に服従して、これを耐えて飲み干されました。罪なきイエスさまが罪ある人類を代表して、身代わりに飲み干されたのです。そのため、その水はイエスさまの中で苦くなり、苦しみとなり、毒となって彼は十字架の上、ユダヤ人の間で公然と死にゆく呪われた者になったのです。その死のさまはちょうど罪を犯して呪われた女のように、みにくく裁かれた姿としてはっきり現われたのです。十字架に手足をつるされた重みにより骨の外れるような痛みとともに全体重が腹やももにかかり、これを圧迫し、最後はうなだれて死に絶えて後、御体のわき腹に鋭い槍が一突きです。そのため御体は腫れ上がり、腹

はふくれ、ももはやせ衰えるみにくいものとなったのです。このようにして、イエスさまは十字架の木で血潮を流して、私たちの呪いを身代わりに受け、民の間で呪いそのものとなって裁かれたのです。その時、イエスの御前には二つの杯の選択余地がありました。一つは呪いをもたらす苦い水の杯であり、もう一つの杯はこれです。

「彼らはイエスに、苦みを混ぜた葡萄酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。」

(マタイ 27:34)

もしも、イエスさまが苦みを混ぜた葡萄酒

というもう一つの杯を飲まれたならば、これは麻酔薬であり、十字架の苦痛を和らげることもできたのですが、イエスの固い決心はこれを拒み、一時的な現実逃避もせずに、むしろ私たちの呪いを選んで、その苦しみすべてを飲み干されたのです。そのため私たちは今、完全に呪いから解放され、祝福されているのです。

呪いとは中命記二八章のリストでは霊的なもの、環境による精神的なもの、肉体的なもの、の三つに分けられますが、これはあくまで一つの法則のようなものであり、呪い自体を恐れる必要はありません。イエスさまが体を

張って呪いと戦い、復活により勝利された  
のですから、イエスさまという道を犠牲に踏  
み台として上よりの祝福に入れるのです。た  
だ事ごとに感謝して祝福の豊かさの中に入  
りましょう。

今もし、ゴム風船を膨らませて口を閉じ、  
手を離すと万有引力に引かれ、下へ落ちま  
す。自然の法則です。しかしこれに、ヘリウ  
ムガスや水素等を入れると反対に空中に浮  
きます。一つの法則には必ずそれに対抗  
する反作用があります。ちょうど罪と死の原  
理に対抗して戦う反作用がいのちの御霊の  
原理であり、このようなものです。呪われた

いばらの生け垣のような人生の後、死んで黄泉に落ちるべく肉の人が、聖霊さまを受け新しい霊となり、豊かな実りある幸福な人生を過ごし、最後は祝福された御国、天国へ昇るのです。その原動力がイエスの血潮なのです。

くびき

マタイによる福音書十一章二八～三〇節でもイエスさまは私たちを大切なパートナーとしてその必要性を教訓されました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなた

がたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

むかし畑を耕すために農夫は親牛と子牛を平行して横に並ばせ、その首を一緒に長い木製の棒で結んでくびきをかけました(図5参照)。

それは二頭が同じ歩調で並んで歩きながら器具を引かせて畑を耕させるためであり、

二頭の首が入ったくびきの横棒の中間地点にはさらに長い縦の木をクロスして結びつけ、その先端には土を掘り起こすための農具がついて土の中に埋もれていました。ですからこれら二頭に結ばれたくびきを上空から見下ろすと確かにこれも十字架の木の形のゆっくりとした行進だったのです。そのためイエスさまは同じ福音をこのようにも語られました。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」(マタイ 16:24)

イエスさまのくびきは負いやすいものです。



端から見ると、親牛と子牛は肩の並んだ同  
労働者として、協力し合いながら、共に力を合  
わせて農具を引いて耕しているように見受  
けられますが、本当はほとんどの耕すため  
の重荷は、親牛の肩だけに負担がかかって  
おり、子牛は実のところただ並んで歩いて  
いるだけで、訓練のためにその耕すという  
雰囲気と慣れないくびき体験を味わってい  
るだけに過ぎないものなのです。

イエスさまが親牛で私たちが子牛です。  
イエスさまと共に歩むことはいかに楽しく心  
強い体験でしょうか。振り返るとき今まで耕  
してきたすべての輝かしい功績があたかも

自分自身の力で引っ張って成し遂げられたかのような錯覚を覚えるほどです。しかし、二頭に結ばれたくびきのバランスを取りながら同じ歩調でゆっくり歩む親牛にとって子牛の存在もまた大切です。それは子牛にとって親牛の歩みより大幅に遅れて歩んで十字架の形を斜めにゆがめないよう、親牛の妨げにならない速度でバランスをとって肩を並べて歩むという大変崇高で重要な使命があるからです。ですからイエスさまは、世界という神の畑を耕す福音事業をなすうえで、私たちの存在がとてとても大切であり立派な同労者として認めてくださるのです。イエスさまはあなたの助けが必要です。ただ一

緒に歩むだけでいいのです。しかしながら、もしあなたの同労がなかったならば十字架の福音は次第にその美しい形がゆがんでしまうのです。

## 十二部族の宿営

旧約時代、イスラエル十二部族の荒野における宿営の仕方は、私たちに大きな教訓を与えています。民教記二章では平野の広がる荒野を旅する途中イスラエル十二部族は、各々その父祖の家ごとにかたまって会見の天幕の周りに距離を置いて主の御前、整列してきちっと宿営する定めがありました。

中心に位置する会見の天幕とは一キュピト  
＝五〇センチで計算すると、縦五〇メート  
ル、横二五メートルの長方形の形でした。こ  
の幕屋の門がある前側の東方向には、い  
つもユダ族とイッサカル族とゼブルン族が  
宿営する場所であり、登録した男だけで一  
八万六四〇〇人もいて、この東側に延びた  
集団が最も数多く、彼らは部族ごとにきちっ  
と並んで宿営するため上空から見るとちょう  
ど長い長方形の形をしていました。一方、  
幕屋の後ろ側の西方向には、エフライム族  
とマナセ族とベニヤミン族が宿営し、この西  
側に延びた集団は、最も数少ない一〇万  
八一〇〇人。そして幕屋の両横側にはまず

南方向に延びる、ルベン族とシメオン族とガド族が宿営し一五万一四五〇人。幕屋の反対側の横である、北方向には、ダン族、アセル族、ナフタリ族が宿営し合計一五万七六〇〇人。これは反対方向の南に延びる集団とほぼ同じ数のため幕屋を中心に同じ位の距離まで南北におのおの延びていました。

ですから、彼ら十二部族の宿営の状態はレビ族の奉仕する長方形の幕屋を中心に東西南北へ秩序正しく延びており、その父祖の家ごとに距離を置いて整列されていたのです。その総数は六〇万三五五〇人で

すが、これに登録されていない老人や子供たち、女性を加えると多産なヘブル人社会（出エジプト 1:7、民数記 22:3）、二百～三百万人はいたのです。すなわち、これら全イスラエルの宿営地を上空から見下ろすと、彼らは巨人な十字架の形をした大行進だったのです（図6参照）。ハレルヤ。

荒野の教会です。今日も、教会は十字架の大行進としてすべての人数を加える時、初めて本当の十字架の形になるのです。もの数に入っていない登録外の無名な、取るに足りない存在と思っていた、そんな私たち一人ひとりが重要な、なくてはならない十

十字架の欠けた形を満たす大切な一人ひとり  
だったのです。だから今、パウロと共に大胆  
に告白しましょう。

「ですから私は、あなたがたのために受ける  
苦しみを喜びとしています。そして、キリスト  
のからだ(教会)のために、私の身をもって  
キリストの苦しみ(十字架)のかけたところを  
満たしているのです。」(コロサイ 1:24)

バラクとバラム

あなたは神さまの目に高価で貴い存在、  
愛されている十字架の軍隊の一人です。民  
数記二二章では、このような十字架の形で

一致団結して宿営、行進を繰り返すイスラエル人に対して、モアブの王バラクが大いなる恐れを抱き、よこしまで心定まらない預言者バラムを手厚いもてなしで雇い、イスラエルを呪ってくれるよう要請しました。今日も、私たちすべての教会が一致団結して十字架を現わすと、サタンは恐れおののくのです。バラク王に誘惑された預言者バラムが祈るとはっきり主は言われました。

「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。またその民を呪ってもいけない。その民は祝福されているからだ。」(民数記 22:12)

しかし、預言者バラムは命をかけても、こ



の御言葉に従い、主と同じ心になってイスラエルを祝福し、呪わないことを決心すべきだったのに、あいまいにバラク王の使者を招き入れて泊まらせ、自分に都合の良い、他の御旨を求めはじめたのです。

そのため、一度主にあって語られた御言葉を信じず、バラク王からもらえる不義の報酬を愛した、かたくなな預言者バラムに対して今度は主が「行け」と命じられたのです。それは主の道とは反対の道です。ちょうど主がエレミヤを通して敬虔なレカブ人の家で、葡萄酒を満たした壺と杯とを差し出して、彼らに「飲みなさい。」と言うと、彼らの固い

決意と信仰が現われ、「私たちは全家をあ  
げて、一生葡萄酒を飲まず、葡萄畑も、種  
さえも持たない」と立派に告白したように(エ  
レミヤ三五・6)、預言者バラムもそうあるべ  
きだったのです。

ところが預言者バラムの場合、翌日起き  
ると、自分のロバに鞍をつけて準備し、バラク  
王の使者たちと一緒にになって出発進行して  
しまったのです。これを聖書は預言者バラ  
ムの気違いざたと呼んでいます(第二ペテ  
ロ 2:16)。本当は預言者バラムはへりくだっ  
て、こう告白すべきだったのです。

「主よ、私は行くことができません。 magari

なりに、主の預言者が彼らと共に行くならば、あなたの敵にあなどりの心を与える機会となり、神のイスラエルをうかがうことは、主を試みることにもなります。悔い改めます。私は絶対行けません」

しかし御旨と反対の道を進み行くかたくなな預言者バラムであったため当然、試練が降りかかりました。抜き身の剣を手を持つ主の使いが道に立ちふさがり、預言者バラムを殺そうとしたのです。惨めな預言者バラムは、この時ロバに救われました。ものを言うことのないロバが突然人間の声でものを言い始め、生涯主人に従順だったロバの生涯から、いまだ不従順な預言者バラムは生き

た教訓を受け、その気違いざたを悔い改めさせられたのです。

その後、主の使いに出会い、悔い改めたバラムは真の神さまよりの預言だけを語る決心をしました。こうして翌日のこと、一度目バラク王は預言者バラムを連れ出し、イスラエルの民を呪ってもらおうと期待しながら見晴らしの良い高い場所バモテ・バアルに上がらせました。預言者バラムはそこからイスラエルの宿営の一部だけを見ることができたのです。もともとそこから宿営しているイスラエルの民を呪ってもらうために雇われた預言者バラムでしたが、悔い改めた預言者バラムは、反対にそこで主からの祝福のメッセ

ージだけを啓示されたため忠実にこれを宣言しました。

「神が呪わない者を、私がどうして呪えようか。主が滅びを宣言されない者に、私がどうして滅びを宣言できようか」(民数記 23:8)

こうしてイスラエルの民を呪うことに失敗したバラク王は、これを聞いてもあきらめることなく代わりに、二度目、他の場所へ預言者バラムを連れ出しました。他の場所からなら今度こそイスラエルの民を呪うことに成功できるとバラク王は考えたからです。そこも見晴らしの良い高い場所、ピスガの頂です。彼らが頂きに登って見下ろすと、そこからイ

スラエルの宿営全体は見えず、ただ一部分だけが見えていました。

しかし、ここでも預言者バラムが再び主に祈ると主から啓示された神さまからの忠実な御言葉は「見よ。祝福せよ、との命を私は受けた。神は祝福される。私はそれをくつがえすことは出来ない」(民数記 23:20)と、呪いではなく再び祝福そのもののメッセージでした。こうして二度目も作戦失敗したバラク王でしたが、執拗にあきらめず何とかイスラエルを呪ってもらえないものかと思いながら今度は、ついに三度目もう一つ別の高い場所、ペオルの頂上に預言者バラムを連れ出しました。

そこからなら、イスラエルを呪えるかもしれないと思ったからです。そこからは荒野に宿営するイスラエル人の全体が見下ろせる絶好の場所です。しかし三度目、預言者バラムが目を上げてイスラエルの十字架の宿营地すべてを眺めたその時、神さまの霊が彼の上に臨んで主からの祝福のメッセージを預言し始めたのです。真に十字架の全体像を見つめるその時、聖霊さまは注がれ預言するものです。バラムは目が開かれて預言しました。

「なんと美しいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は。イスラエルよ、あなたの住まいは。」

(民数記 24:5)

「あなたを祝福する者は祝福され、あなたを呪う者は呪われる！」(民数記 24:9)

これが十字架による呪いを祝福に変える力です。十字架は本当に目が開かれてみると、驚嘆するほど美しいものです。サタンがバモテ・バアルの上から呪い、ピスガの頂から呪い、ペオルの頂上から呪おうと攻撃してきても、十字架の下に身を寄せる私たち神のイスラエルには、一切呪いはかからずに、ただそこには呪いの反作用、祝福だけがあるのです。ハレルヤ。

今日も空中の権威を持つサタンが私たちの高き所なる頭の考えを通して一度目、肉の



欲で挑戦してきたならば、イエスさまの十字架の血潮に身を寄せ勝利しましょう。二度目、別な角度、目の欲で挑戦してきたとしてもイエスさまの十字架の血潮で変わらず打ち勝てます。三度目に暮らし向きの自慢で誘惑してきたとしても、イエスさまの十字架の血潮により完全勝利できるのです。すでにイエス・キリストは勝利されたのです(マタイ四章)。今は祝福あるのみです。

「彼らは呪いましょう。しかし、あなたは祝福して下さい。」(詩篇 109:28)

民教記二八章の祝福のリストには真の祝福とは、物質的豊かさも含まれています。使徒パウロはこう言いました。

「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたがキリストの貧しさによって富む者となるためです。」(第一コリント 8:9)

貧困は神の御旨ではありません。イエスさまは元々人工だったにもかかわらず、枕する家もなく、女たちの献金で生活(ルカ 8:3、詩篇 68:11)する物質的な貧しさを通られたのは、私たちが物質的豊かさを受けるための身代わりです。神との忠実な契約、エデンの善悪の木の実のような什一献金を神のものとして手をつけず、自分の教会に捧げ、祝福された富む者となりましょう

(マラキ 3:10)。受けるよりも、与える幸いな人になりましょう。そのためにもイエスさまはいばらの冠を受けて、十字架の木で血潮を流されたのです。

## イゼベルの呪い

預言者バラムがイスラエル国民全体を呪おうと試みたように、呪いは個人から国民あるいは個人レベルまであります。王妃イゼベルはエフーの証言通り姦淫と呪術を盛んに行なう魔術師でした。この邪悪な霊を持ったイゼベルに関わった隣人すべてが精神的に不安定になり不機嫌です。私たちも宗

教家や占い師、霊媒師のような邪悪な悪霊を持った人にはよほど聖霊さまの導きない限り、関わらないほうが無難です。イゼベルの息子ヨラムとエフーのやり取りが以下の御言葉です。

「ヨラムはエフーを見ると、「エフー。元気か」と尋ねた。エフーは答えた。「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行われているかぎり。」(Ⅱ列王記 9:22)

エフーはイゼベルの名を聞き、彼女を考えるだけで元気ではない怒りと不機嫌状態になっています。

イゼベルに最も近く悪影響を受けていたの

は夫のアハブ王です。アハブは隣人ナボテの良く手入れし、管理されたぶどう畑を欲しがって譲渡交渉しました。代価に他の畑や銀まで支払うと約束しましたが、正しい人ナボテはこれを断り交渉決別。その時、アハブは大の大人なのに願いが叶わないだけで落ち込んで食事もせずの不機嫌にふて腐れて寝込みます。

「アハブは不きげんになり、激しく怒りながら、自分の家に入った。イズレエル人ナボテが彼に、「私の先祖のゆずりの地をあなたに譲れません」と言ったからである。彼は寝台に横になり、顔をそむけて食事もしようとはしなかった。」彼の妻イゼベルは彼のもとに

入って来て言った。「あなたはどうしてそんなに不きげんで、食事もなさないのですか。」( I 列王記 21:4、5)

その後、ナボテはイゼベルの陰謀で暗殺され、彼の畑はアハブ王に没収されましたが、イゼベルの近くいた人物は非常に精神的に弱く不安定で不機嫌が多いです。

なかでもイゼベルから直接呪いをかけられて失望落胆した人物が預言者エリヤです。

「アハブは、エリヤがしたすべての事と、預言者たちを剣で皆殺しにしたこととを残らずイゼベルに告げた。すると、イゼベルは使者をエリヤのところに遣わして言った。「もし

も私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」彼は恐れて立ち、自分のいのちを救うため立ち去った。ユダのベエル・シェバに来たとき、若い者をそこに残し、自分は荒野へ一日の道のりを入れて行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分の死を願って言った。「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」

( I 列王記 19:1-4)

エリヤは憂鬱症にかかって自殺したいほど

苦しみました。その背後にはイゼベルの呪い、悪魔への誓願祈祷がありました。エリヤを明日まで殺さなければ「神々がこの私を幾重にも罰せられるように！」

この言葉が呪いの呪文です。イゼベル的な人からの呪いは現代でも存在し、知らないうちに呪いを受けて弱くなり、憂鬱と不幸に落ち込んでいる人はいないでしょうか。

私が高校生だった頃、当時、中学生だった妹と些細なことで大喧嘩しました。力の差で一方的な私の勝利でしたが、その晩、私は深夜の金縛りに遭い幽霊まで見ました。幽霊は妹で、その幻では家の長い直線階



段の一番上に死者を埋葬する際の白い長い衣を着た髪が長い妹が立って私を睨みつけている恐怖体験です。本当に恐ろしい幻と呼吸もできない金縛りです。翌朝、まさか昨日の喧嘩の敗北を苦に妹は自殺したのではと心配になって、すぐに妹の部屋に行き、ノックしました。妹は生きていました。そこで「お前、夕べ俺に何かしなかったか？」と聞くと「ううん。何も」ととぼけていました。しかし、それは嘘でその数年後、事実を知らされましたが、妹は復讐にその晩私を呪ったそうです。

話しはその数年後に飛びます。私が一九

歳の時、不思議な夢を見ました。夢の中で私は教会の一階ロビーにいて、そこで不審な男に会います。彼は教会内で何かを販売しています。当時、私はまだクリスチャンではありませんでしたが、それでも思いました。「神聖な教会内で売買はよくない」そんな夢を見た後、久しぶりに教会に行ってみようかという思いが与えられ行くことにしました。行ってみると一階ロビーに夢と同じ初対面の男がいました。彼はホームレスのような男で教会近所の公園にあるいちよう並木から拾い集めた銀杏の実を教会員に販売するため持ち込んでいました。教会員からは「臭いから持ち込まないで」と嫌がられてい

ましたが、彼は確かに夢の男で、夢と同じように私のところにも来て言いました。

「安くするから、買わない？」

その瞬間、男のことはどうでもよくなり、何より予知夢を通じて私の常識を超えた世界があることを示された神さまを知り、ショックを受けました。「本当に神はいるんだ。」

その日、教会員の熱心な年配の姉妹にその旨を話すと、「そのために祈りましょう」と言われ、共に祈りました。その時です。私は突然、聖霊さまに撃たれ、何故か分からないけど神聖な力に圧倒されて大泣きしました。何年ぶりの涙。泣いて、泣いて十分

間くらいあまりに泣きすぎて疲れたので、椅子の上に横になったら、そこに教会の聖書が置いてあったので、それを枕にすると、次の瞬間、聖霊さまが喜びの霊となって激しく私に注がれました。今度は起き上がって喜び、笑って、笑って十五分間くらい笑い続けました。今まで体験したことのない平安と喜び、とても清らかな思い。

私にとって聖霊のバプテスマと呼ばれる生まれ変わりの体験でした。嬉しくて笑いながら喜び祈ると、私の唇が震えて変な声が出てきました。「バラバラバラ…」それは異言の賜物でした。異言の祈りをそのまま続けると、

すぐに悟りが来て私は預言しました。「私は福音を宣べ伝えるために、生まれたんだ」これは私が長年知りたかった、なぜ私は存在するのか、何の目的をもって人は生きるのかという疑問へのストレートな回答でした。神に愛されている実感が湧いてきました。すると共に祈っていた姉妹が私に向かって祈りながらこう預言しました。「そうです。私はあなたを用います。大胆に福音を宣べ伝えなさい。貧しい人々に宣べ伝えなさい。私はあなたを必ず用います。」

帰りの地下鉄内では嬉しくて嬉しくて当時ホームにあったゴミ箱にナイフと煙草を捨てて帰りました。

帰宅するとなぜか、上の階から母が「どこ行って来たの？」の聞かれたので、「教会に行行って来た！」廊下で大きく答えました。最初の伝道です。こうして私が一階の茶の間のソファーに一人ちゃんと座ってニコニコして座っていると、妹が降りてきました。「お兄ちゃん、どうしてそんなに機嫌よく喜んでいるの？」

そこで私は言いました。

「教会に行行って来た。今日、イエス・キリストを信じてクリスチャンになった。」

「今までお前をいじめたりして悪かったな。…」次々と和解の言葉と福音が出ました。そこでさらに妹にイエスさまについて当時あま

りよくは知らなかったけれど、伝えようとして口を開いて話し出すと、間違っって今日受けたばかりの異言が「バラバラバラ…」と妹の前で出てしまいました。まるで興奮した気違いのようです。すると妹は驚いて言いました。「お兄ちゃんは、そんな意味分からないことばかり言っているから、お父さんにもお母さんにも変に見られているんだよ。」

私は一見納得いきそうな言葉でしたが、霊を見分けて「いや、違うこれは悪魔だ」と、思い妹に宣言しました。

「黙れ！サタン！」

そして牧師でもないのに妹の頭に手を置いて異言でめちやくちや祈りました。

すると妹は次の瞬間、「わあー！」と大声で泣き出しました。そして妹も異言の賜物を受けてその場で「バラバラ…」と祈り始めました！こうして救われたばかりの私たちは両親の救いのために共に祈りました。そしてその日はもう夜遅かったので、翌日、妹は部屋からタロットカードを持ってきたので、私と家の前で灯油をかけて燃やしました。

その時に妹は数年前のことを語りました。「実はあの晩、私はお兄ちゃんに勝てなかったから復讐に白魔術の本を見ながら、そこに書かれた通りにお兄ちゃんを呪ったの。そしたらお兄ちゃんに本当にその晩、何か



が起きていたようで私もびっくりした。ごめんね！」

呪いは現代でも実在します。呪いが碎かれたその後、妹はしばらくはクリスチャンでした。しかし、今考えると当時、何も知らずして私のミスも多かったのですが、その一つが救われた直後の妹を教会に連れて行かなかったミス、そして私自身、毎日、朝から晩まで自宅でリバイバル講師になってイエス・キリストばかり伝道するので、かえってうんざりされてしまいました。

加えて悪魔の反撃が妹の創価学会の友人から始まり、徹底的にキリスト教を辞めるよう布教されました。強烈だったのは、私の兄

から妹への説得です。私の不足な部分を列挙しながら、言葉巧みに妹を背教へと追いやりました。

こうして短かった妹の信仰生活は短期消滅しました。それ以降は必死に祈って二年以上が経ちました。妹からは何故か「キリスト教で家族がバラバラになるのは嫌。もうそのことは言わないで。公園で小枝がクロスしてのを見るだけで十字架を思い出す。もううんざりだからキリスト教のことは言わないで！」と言われました。やがて、私は聖書を読んで悟りました。

「偶像崇拜は呪いを招く！ そうだ！ 偶像を

捨てよう!そうすれば救われる！」

実家には仏壇と神棚がありました。過去二年以上、私はクリスチャンだから拝まないし無関係と置いていましたが、そうではない。これを聖絶するほうがいと悟り実践しました。

ある晩、深夜に家族が眠った頃を見計らって泥棒に変身した私は乗用車を自宅前に横付けして、座敷にあった仏壇をこっそり動かし、びっくり仰天しました。仏壇を動かすや否や、「ドッカーン」ごう音とともに大きな家全体が触れ動きました。それは実家は札幌ですが、時は冬、屋根の上に積もって

雪が溶け、氷の厚みあるかたまりとなり、その大きな物が上の階の屋根から下の階の屋根へと滑り落ちたのです。それが仏壇に手をかけ動かしたちょうどその瞬間のタイミングでした。幸いに誰も起きてはきませんでした。が、内心、空中の権威を持つ悪魔が稲妻のように地に落ちたなと思いました。

急ぎで仏壇を解体して乗用車に詰め込み、遠くに行って全部燃やしてしまいました。

運転中、やたらハンドルが滑るので車内灯を付けてみると、仏壇解体中にどこかのへりで手を切ったようで私の両手ともひどい出血状態でした。強い種類の長年居座っていた仏壇の悪魔が私の血を流して出て行きました。

した！

ただ、今考えると捨てる必要がなかったかもしれない物まで勢い余って仏壇と一緒に処分しました。それは座敷にあったこけしや人形の数々だけでなく、父のゴルフで優勝したトロフィーの数々、高価そうな時計を持った女性のブロンズ像の置物など手当たり次第、みんな集めて燃やしてしまいました。翌朝、あきれた家族ゆえ大変な試練に遭いました。しかし、奇蹟が起きました。当時、信仰から墮落していた妹が、その日はイギリスに留学に行っていたのですが、母に国際電話をかけてきました。

「聖書が読みたい。英語と日本語が一緒になっている聖書を送って！」

私の偶像処分の働きを何も知らない地球の反対側にいる妹が、あれほど嫌っていた聖書を見たいとリアルタイムに反応して来たのです！その後、妹は立ち返って主日礼拝を守る熱心なクリスチャンに戻りました。

やはり、偶像は悪影響を家庭に引き込む呪い입니다。その後、両親とも信仰告白できました！

偶像は拝まなくてもあるだけで救いを妨げ、家庭内に不和分裂を引き起こす悪魔の住む接点です。

## マムレの櫛の木

「このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。」

(ガラテヤ 3:14)

アブラハムは信仰の父として霊的に富んでいただけでなく、精神的にも謙虚で豊かな心と健康と物質にも恵まれた大金持ちでした。私たちの実生活が貧困の呪いから解放され、アブラハムと同じ、豊かな生活になるようイエスの血潮によって物質的祝福も祈り求めましょう。

アブラハムの父テラは昔カルデヤのウルで偶像に仕えたため(ヨシュア 24:2)、三代、四代の呪いを子孫に招いた人でした。しかしその子孫、アブラハム・イサク・ヤコブは降りかかった数々の呪いを断ち切りながら自らの道を切り開いて「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主」(出エジプト 4:5)と言われるようになり、イエスさまが「神の国にアブラハムやイサクやヤコブが入っている。」と言われるほど祝福を受けました。

イザヤ書四一章八節では「神の友」と呼ばれ、ローマ四章一六節では「信仰の父」と呼ばれたアブラハムの祝福の秘訣は正しい礼



拝にあり、アブラハムは祭壇を築いて主を礼拝する習慣のある祈りの人でもありました。主はこのようなアブラハムにマムレの櫪の木の下で現われて下さいました。アブラハムはこの時、神さまの使いの三人を素通りにさせることはできず、むしろ積極的に願って留まらせ、マムレの櫪の木の下で休息してもらうように願いご馳走でもてなしました。アブラハムはそこで凝乳と牛乳と料理した小牛を持って来て、彼らの前に供え、給仕したのです。

こうして神さまの使いが食べ終わると、その内の一人が約束の預言を与えました。年老

いたアブラハムとサラに来年の今ごろ男の子が与えられるという祝福の約束です。神さまにとって不可能は一つもなく、一年後これが成就してイサクが与えられたのです。主の祝福はいつもアブラハムのようにマムレの檜の木の下で神さまの使いをもてなす人に与えられます。私たちの場合、それは十字架の木の下で神さまに給仕してもてなす、すなわち礼拝を通して実現します。積極的にイエスの十字架の下で神に仕え、礼拝を捧げるその時、全能の神の奇蹟が起きて祝福されます。私たちが祝福を受ける秘訣とは、第一に神に仕えることであり、次に神から遣わされた教会の指導者である牧師に仕

え、聖徒に仕えることも祝福の秘訣です(マタイ10:42、マルコ9:41、第一列王記17:3)。そして特別な神の使いとしての使命あるユダヤ人に仕えて祝福することも祝福の秘訣です(創世記12:3、詩篇122:6~9)。

一本の柳の木(アブラハムの神)

ユダヤ民族の起源は族長アブラハムがカルデヤのウルを出て後、パレスチナに来た時から始まります。創世記二一章三三節によると、信仰の父アブラハムはベエル・シェバに着くと先ず第一にそこに一本の柳の木を植え、その所で永遠の神さま、主の御名

によって祈りを捧げたとあります。この記念植樹には深い意味があります。それは将来アブラハムとその子孫たちに見渡す限りのパレスチナの全地を与える約束してくださった神を信じきったアブラハムの生きた信仰の行ないであり、アブラハム自身「神さまが与えると約束して下さった土地に確かに根を降ろしましたよ」という神への信仰告白となる生きた証しでもあったのです。そしてこの柳の木がすべての異邦人の手前、はっきりとした土地所有の確かな証拠でもあったのです。

私が以前、借家住まいだったころ、私は

敷地内の小さな庭に各種の野菜や一年で終わる樹化植物などを熱心に植えました。決して成長して深く根を張る大木は将来の引越しを考えて植えませんでした。引越しの際、後で根を張り巡らした大木を移すことは大変な作業であり、将来マンションに引越すなら、なおさら置く場所ありません。

しかし、アブラハムは信仰の人です。水を多く吸い上げ深く広く根を張り巡らす柳の木を、わざわざ当時ペリシテ人の多く住む土地の真中に堂々と植え込んだのは、将来を見据えて行なわれた勝利宣言であり、将来見渡す限りのパレスチナ全域を、アブラハムとその子孫たちであるユダヤ人が繁栄して、広

大な土地を獲得して、永住型の全面支配をするようになりますよという大胆な信仰告白の現われだったのです。

信仰の父アブラハムは父なる神のひな型でもあります。今もすでに私たちのためにも私たちの生まれる前から一つの生きた証としての一本の木が父なる神さまによって大胆にすべての異邦人が見る前で世界の真中に記念植樹されています。それはアダム以降失われ、サタンの手中にあった全世界とご自身の民をもう一度全部取り戻すという、父なる神の信仰の勝利宣言であるカルバリ山に植えられたイエスさまの十字架の木で

す。イエスさまの十字架が私たち神の種族なるクリスチャン発祥の記念であり、起源です。

クリスチャンの歴史はいつも十字架の木との出会いから始まります。今日多くの敬虔なユダヤ人がベエル・シェバを巡礼する際、柳の木を心に留め、神さまとの約束パレスチナ全域支配を思いめぐらすように、敬虔に私たちがイエスさまの十字架の木を見つめる時、そこにある血潮が失われた全世界と、神さまの選びの民を全部この世から取り返す力と希望を与える父なる神の生きた証しとなるのです。十字架の木こそすべての

世人の前で、やがて全世界を取り返す、私たちの確かな働かぬ証拠です。

今はまだクリスチャンの数も所有地も社会的、政治的影響力も小さくて、異邦人たちが多く満ちていようとも、たとえ軒に軒を連ねる狭い都会の借家暮らしでも、将来は必ず十字架の木を生きた証拠に見渡す限りの全世界を全面獲得できるクリスチャン永住型全面支配の日、全地に根を張り巡らす繁栄の日が来るのです。それがイエスさまの地土再臨以降、呪いが全地の表から取り除かれた狼と子羊は共に草をはみ、獅子は牛のように、わらを食べ、蛇は、ちりをその



食べ物とする(イザヤ 65:25) 千年王国です。

ハレルヤ！

犠牲のためのたきぎ(イサクの神)

イサクは大変従順な人で、その従順さは  
実に全焼のいけにえの死に至るまで父親  
に従うほどでした。イサクはモリヤの山に、  
自分で自らの処刑道具となる全焼のいけに  
えのための重いたきぎを背負って、一歩ま  
た一歩と進み行きました。ちょうど、イエスさ  
まがカルバリの山までご自身が自らの処刑  
道具となる重い十字架の木を背負って一歩  
また一歩と進み行かれたようにです。イサク

は祭壇上のたきぎの上に縛られて置かれた時、自らの死を覚悟しました。父アブラハムも大変従順な人として主の命令に従い、手を伸ばし、刀を取って愛するイサクをほふろうとしました。その時、主はアブラハムを呼ばれ、イサクに手を下すことを禁じ、そのひとり子さえ惜しまずに神さまに捧げたアブラハムの従順な信仰を認めて祝福を宣言されました。

「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のよ

うに数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

(創世記 22:16～18)

祭壇上のたきぎには、イサクの代わりに主が準備されたいけにえである角をやぶに引っかけていた一頭の雄羊が捧げられました。ここで信仰の父アブラハムは愛するひとり子を惜しまないで捧げたことから、ひとり子イエスを惜しまないで捧げられた父なる神さまを象徴します。そしてイサクは一度死を

覚悟し、従順に祭壇にあげられた人です。彼は、ここで一度捨てたはずの命を再び自分のものとして勝ち取ったのです。

まさにイエスさまの死の体験からの復活のようです。さらにここでイサクをほふって焼くために父アブラハムが準備していた火と刀(創世記 22:6)にも象徴的な意味がありました。火はイエスさまが十字架の祭壇上「私は渇く」と叫ばれた全焼のいけにえ体験に必要な聖霊さまの火であり、イサクを殺す道具である鉄製の刀は、イエスさまを殺す道具である鉄製のさびた釘を象徴します。またもう一ついけにえを捧げるときの必需品

に、イサクが祭壇上のたきぎからずり落ちたりしないよう縛って固定するロープがありました。

「ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた。」

(創世記 22:9)

ここに奥義があります。イエスさまにも同様の縛って固定するロープが十字架という木の上で巻かれていました。詩篇三四篇二〇節では約束の救い主の十字架について「主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさ

え、砕かれることはない」と預言されており、その成就としてユダヤ人たちが過ぎ越し祭の安息日に、死体を十字架の上に残しておきたくなかったため早死にさせようと、十字架の両サイドにいた強盗人たちのすねの骨を折る処置をとりましたが、真中のイエスさまはすでに死んでおられたためすねの骨を折らずに下ろされました(ヨハネ 19:36)。

通常、十字架刑になるほどの重罪人は狂暴な性質を持ち、十字架の上でも暴れるため自らの力と体重で釘打たれた手のひらが裂けて外れてしまうのを防ぐため、手のひらではなく手首に釘が骨もろとも打ち込まれ

ていました。ところがイエスさまの場合は十字架を直前にしながらも、暴れて抵抗する他の死刑囚たちとは全く異なり、ほふられる小羊のようにやさしく従順なご性質だったのでローマ兵はみこしてそうしたのか、手首ではなく直接手のひらに釘が打たれたのです。その証拠に復活されたイエスさまの福音を疑うトマスは十字架の目撃者として「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と告白し、八日後に現われてくださったイエスさまご自身も「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたし

のわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ 20:25、27)。と言われ、すでに釘打たれた傷跡を持つ場所が「手首」ではなく「手」を見なさいと言われたのです。ですから手のひらに釘を直接打たれたイエスさまの場合、指へ広がる五本に分かれた細い骨をもつ手のひらだったため釘が貫通した際にも骨と骨の間を釘打たれ、「その骨がひとつも砕かれない」という十字架の預言がここでもみごとにクリアできたのです。

そして手のひらに釘打たれたがために、イエスさまの体重の重みで手の肉が裂けて



ずり落ちないように補強する処置として、イエスさまの両うでと平行する十字架の横木の間には、ローマ兵によって、ロープがしっかりと縛り付けられていたのです。このような理由からイサクをほふる時、祭壇上のたきぎの上に縛って固定していたロープとはイエスさまにおいても同じ固定目的で使われて「イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた」という象徴的に意味のある預言が十字架上のイエスさまにおいても成就したのです。

ここで推測ですが、イエスさまの釘打たれた正確な位置とは何処でしょうか。手足の書

かれた絵をご覧下さい(図7参照)。

黒い点の辺りに釘が打たれたと推測されます。足においては間違いないでしょうが、手に関する限り候補としてA点、B点、C点が考えられます。しかし、A点では確かに骨も砕かれず十字架にしっかり固定できますが、イエスさまが語られた御言葉「わたしの手を見なさい」に矛盾する「手首」であり削除。

B点では骨や動脈も傷つけられずに釘打ちができ、周りの骨に支えられてずり落ちず可能性が高いですが、ここならイエスさまの象徴イサクを通じて預言されていた固定用のロープが不要になってしまう問題点と、ロー

マ兵にとっても両手とも同じ骨のないこのわずかな位置を選んで正確に釘打ったと考えることが不自然なためあえて削除。

そこで残された可能性として私たちのイメージ通りの手のひらの中央C点こそイエスさまの語られた「わたしの手を見なさい」に一致する最もふさわしい位置だったのではないのでしょうか？

この日、祭壇上死を決意し、ただ一度で砕かれて従順が完成されたイサクは、その後の生涯を死者の復活のように取り返し、イエスさま同様、復活の栄光がイサクをおお

い、妻リベカに恵まれ、種をまくとその年に  
百倍もの収穫を見るという祝福を受け、ます  
ます栄えて非常に裕福になりました。

さらにまた、モリヤの山で角をやぶという  
雑木に引っかけたためわずかしか動けずに、  
捕らえられてイサクの身代わりとなって、祭  
壇上ほふられた罪なき雄羊もイエスさまを  
象徴しています。罪なきイエスさまは私たち  
人間の身代わりに捕らえられて、十字架と  
いう荒削りの雑木に釘づけられ、わずかし  
か動けないまま神の小羊として血潮を流し  
てほふられたからです。その時、聖なるイエ  
スの御頭には雄羊の頭を悩ませた取り巻き

ついて、どうしても離れないやぶのような価値のないわずらわしい植物、いばらの冠が押さえつけられていました。しかし、雄羊の手足が真っ直ぐ地面に下りていて、ひざをかがめる位はできても、どうやっても自分の頭までは手が届かず、かゆい頭を前足でかけないように十字架のイエスさまの場合もひざをかがめる位はできても、御手が十字架の木に釘打たれていたためご自身の御頭に取り巻くやぶのようなわずらわしい植物いばらを取り除くことはできなかつたのです。

白く皮をはいだ枝(ヤコブの神)

ヤコブは行ないにおいて是人間的な悪恵による行動の多い人で、多くの苦しみを体験しましたが、その心底には父と兄をだましてまでも、それ以上に長子の権利を尊び、固執したような将来イエス・キリストの系図につながる霊的祝福を第一と重んじる信仰がありました。そのやり方は良くありませんでしたが、長子の権を軽んじた兄エサウとは反対に霊的なものを重んじる熱意は認めることができます。その熱心はヤボクの渡しでも神の御使いに対して泣いて祝福を願ったほどでした(ホセア 12:4)。

このように切に求めて祝福を受けたヤコブ

から悪は学ばないで繁栄の法則を学びます。創世記三〇章三一から四三節ではヤコブがラバンからの報酬として一般的に羊は白、やぎは黒いのが生まれるこの地方で、ごくまれに生まれる例外的な黒い羊と白いやぎや混色のものはみな、ヤコブのものとして受けられるというヤコブにとって一見不利な約束を立てました。

しかしヤコブは自分の群れだけを効果的に増やす繁栄の法則をよく知っていたのです。それは黒いやぎが交尾中にはポプラやアーモンドやすすかけの木の若枝の白い筋の皮をはいだ白いものを目の前に置き、黒

いやぎに白を教え込むと、その後に黒いやぎは見せられた通りの白混じりの子やぎを出産したのです。これはヤコブの取り分です。さらに白い羊のためには黒いやぎの群れを正面に置いて黒を教え込み、白い羊が黒交じりの子羊を産みました。これもヤコブの取り分です。また、弱い群れの時には杖を置かず、白の羊か黒のやぎのまま弱いものを出産させました。それはラバンの取り分です。こうして弱いものはすべてラバンのもの、強いものはすべてヤコブのものとして出産し、ヤコブは大金持ちになったのです。なんと動物が目の前に見た通りの色を受けて同じものを出産していったというのです。



何を今、見て身ごもるかが重要なのです。

人間も同じく日々、私たちの正面に見つめているもの、それが種としての影響力を与え、やがてその通りのものを産み出すこととなるのです。私たちの身ごもりは信仰を働かせて祈ることです。目の前に置かれた白い枝や黒いやぎのように、祈りは明確に見定めた具体的目標を見据えて求めることが大切です。

私たちが信仰の目で見つめるべき白く皮をはいだ若枝とは、イエスさまの荒削りの十字架の木です。そこにあるイエスの血潮を見る時、主とともに古い自分は死に、祝福された

新しい自画像どおりの自分の姿を身ごもることが出来ます。誰でも十字架を通して意識が変化し、新しい人に生まれ変われます。イエスさまの十字架を見つめて罪赦され神の子となった自分、聖霊さまに満たされ清くなった自分、呪いから開放され祝福された自分、病がいやされて健康になった自分を思い描きましょう。その通りになります。今、貧しい人は豊かになった幻を描き、他の人のためにとりなし祈る時も、彼らが救われ、問題解決して喜んでいる姿を信仰の目で思い描いて祈りましょう。

心に描かれた幻が現実世界に生み出さ

れます。白い羊の前に黒いやぎ、黒いやぎの前に白い枝を置いたように今、私たちの否定的、絶望的な現状を見ないで全く正反対の色を持つ、肯定的な栄えに満ちた幻を信仰の目で見つめて身ごもりましょう。何であれ祈りのうちに心に描かれた幻が環境に生み出されます。

私は以前、北海道の道南地方でトラクトを民家のポストに入れ歩いていました。家がわずかしかない山奥です。そこで一つの看板を発見しました。

「くま出没注意！」

北海道のいなかの山中にありがちな標識で

すが、私の心を強くとらえました。でも看板が立てられるほど人の手が入っている場所にはもう熊はいないだろうと思いながら、いつのまにかトラクト配りから熊さがしに行動と祈りが変わり、川が流れる沢の方に下って見ました。やっぱりいないなと思いながら伝道最中だったため祈りつつ、ヒグマのことばかり心の幻に満たして、深く黙想して考えていると、ふと私の真横二メートル位の所にあった水たまりに人間なら中学生位の真っ黒なヒグマが水を飲んでいるではありませんか。

「あっ！くまだ」

心臓がドキンと高鳴りながらお互いびっくりして目と目が合うとヒグマは私に勝てないと

悟り、古い冗談で「あっ、くま(悪魔)のように」一目散に茂みの中へ走って逃げて行きました。私の震える手には勝利の剣、御言葉のトラクトがしっかり握られていました。

その後、今度は断食祈祷の時、考えが誘惑されて鹿肉が食べたいという心の幻いっばいになったことがありました。素手だけでは捕獲不可能な、あの大きな体をもつ野生の鹿をもし、捕らえることができれば、一年間は肉に不自由せず新鮮でおいしゅう。大切な時間にあまり価値の無いものを身ごもりました。すると、断食終了後、たまたま北海道の道東地方へ礼拝のため車で集会に

行くことになりましたが、帰り道に何と生きたままの鹿肉が倒れていました。前に行ったトラックに跳ねられて足を怪我してしまいました。降りて近づき私の野生の鹿狩りはライフルや罠によらず、心に夢と幻を身ごもる力で捕獲成功しましたが、実際に捕らえてみると、その美しい目に心打たれ、かわいそうになって逃がしてあげました。不思議なこと鹿はかわいそうと思うとおとなしくなり、おいしそうと思うと暴れました。私の目に心の思いが現われていたようです。その後、ある聖徒の家に行くと、向こうからこう話されました「隣の医者がライフルで撃った鹿肉をたくさん持って来てくれたのですが、うちはあまり食べな

いので……」

重要なことは、何であれ今、信仰の目で見つめて心に描いた物をやがて生み出すという、この法則です。生物を捕えるにもいろいろな方法があります。魚でも大海で釣り竿を使い、一匹ずつ釣る方法もあれば魚群探知機のレーダーと網を使って大量に捕らえる方法もあります。うずらの場合でも、荒野に出て行って狩りをする方法もあり、大風が吹いてきて寄せ集められる方法もあります。最もすぐれた信仰の目で見つめて心に身ごもる方法、これを私たちの信仰生活と人々を捕らえる教会成長に適用し、事業の繁栄と成功に適用し、優れた家庭と人間関

係にも適用して、すべての成功と繁栄ある人生を心の幻に思い描きましょう。

この三次元の世界には三つの力があります。一つは筋肉の力で稼ぐブルーカラーとよばれる肉体労働者であり、二つ目は知力の力で稼ぐホワイトカラーの医師や弁護士や教師のような人です。一般的に前者よりも後者の方が収人が多く社会的にも優遇されます。しかし三つ目の力も実在します。それが信仰の力です。この最も優れた信仰の力を解き放てば人知を超えた神さまの仕事ができます。漠然とした祈りをせず、具体的な目標を持って祈りのうちに身ごもった幻こそ良か



れ、悪かれ、時が来るとあなたの環境に出産され、現われて来る祝福となります。心にはいつも良いものを身ごもるべきで、身ごもることが信仰です。妊娠一カ月の小さい腹の人もあり、妊娠十カ月の大きい腹の人もあるように、信仰も小さい人と大きい人があります。しかし、たとえ小さなからし種ほどの信仰で身ごもっても、そこに命があれば、必ず後には大きく成長します。

私は金曜徹夜祈祷会を導いている時、これを学びました。講壇からメッセージを語っている最中に、席に着いている聖徒たち一人ひとりの頭の上に、突然、煙の柱のような幻

が見えました。始めは夜遅い時間にこうして集まっているため、寝不足で私の目が悪くなってこれが見えるのだと思いましたが、よく見ると、この煙は信仰の煙であることが分かりました。この煙は聖徒たちから出ているもので、三角形のように上に行くほど細い煙の柱であり、信仰熱心な聖徒の上にはこれが大きく高く立ち上っており、あまり熱心でない聖徒の上では小さく低い煙の柱です。ですから、この煙を見るだけで一目瞭然と信仰の大きさが分かるのです。私は主が人を御覧になられる時、この信仰の煙を通して、信仰を測って祝福され、敵なる悪魔もこの煙を目安に働くものだと思います。

私とその神秘的な霊の世界を見ていると、一人の一番熱心ですが、同時に一番問題の多い試練の只中にいる聖徒のその一番高く立ち上る太い煙の柱の所に、白くて長い衣を着たイエスさまが立っておられるのが見えました。平安で恐れはありませんでしたが、悟りが来ました。本当に聖書の御言葉どおり、イエスさまの御名で私たちが集う時、そこには霊を通して、イエスさまご自身が共におられるということです。さらにまた、イエスさまのおられた場所は聖徒たちの中でも最も問題多く、試練に苦しむ人の所であり、イエスさまはその人の上に立たれ、守っておられました。私はそれを講壇から見つめ

ながら、本当に主は真実で聖なる正しいお方だと学ばされ、感動しました。

アブラハムは実の一人息子イサクを捧げた信仰の父として、ご自身の御子を私たちに贈られた父なる神を象徴し、イサクは死を決意して従順に祭壇にあげられた神のひとり子イエスさまを象徴し、ヤコブは聖霊さまを象徴しています。ヤコブが聖霊さまの象徴である理由は、創世記二八章一八節によると、天に届く一つのはしごに神さまの御使いたちが上り下りし、そこで主が彼のかたわらに立っておられる夢を見せられた場所を「神の家」の意味を持つ「ベテル」と目覚め

たヤコブは名付けて、今まで眠るために横にして枕に使っていた石の柱を立てて油を注ぎ、そこで什一献金を捧げる約束ともなった誓願祈禱をしました。

そのため今日では神の御使いたちが自由に上り下りする「神の家」であり、主のおられる天の門であるベテルは「教会」の象徴であり、今まで眠っていた教会という岩を倒すのではなく目覚めて立て上げ、強く不動なものとして油を注ぎ、教会に什一献金制度を定めたのは聖霊さまの働きです。さらにヤコブは夢を見ましたが今日、聖霊さまの語られる原語の多くは夢と幻です。ヤコブは自

ら知らずして聖霊さまの象徴となる預言的行動をしばし行なっていたのです。

そして、ヤコブの夢見た一つのはしごもまたイエスさまの十字架を象徴しています。創世記二八章一三では「そして、見よ。主が彼のかたわらに立っておられた」とありますが、別訳では「主がその上に立っておられた」ともなります。当時のはしごは現代のようにスチール製ではなく木製であり、十字架の木の上にイエスさまは付けられて立たれたのです。そして御使いたちは唯一ヤコブの夢見たはしごを通じて天国から地上へと自由に上り下りしていたのであって、この特

別なはしごという木がなければ御使いたちとの交流が絶たれてしまうように十字架の木なくば、私たちは生まれつき御怒りを受けるべき子らとして父なる神さまとの交流も絶たれ、御使いも自由にも上り下りして私たちの救いの業に仕えることができなかつたのです。

多分、御使いがぶつからないよう、はしごの片側は上り専用、反対側は下り専用です。このようにアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神とは父なる神・子なるイエス・助け主なる聖霊の象徴であり、この神さまが今、あなたの神さま、私の神さまとなって絶えず十

字架の木をライフラインに祝福して下さるの  
です。

いやしと健康

第四にイエス・キリストの血潮は、私たちを  
いやして健康を与えます。

むち打ち

私たちの呪いが除かれるといやしも体験  
できます。

「主がこれ(アッシリヤ)に下す懲らしめの  
むちのしなうごとに、タンバリンと立琴が鳴ら



される。主は武器を振り動かして、これと戦う。」(イザヤ 30:32)

この意味は、主は罪を犯すアッシリヤへの懲らしめのむちとして、イスラエル軍を用いて聖戦を預言されました。イスラエル軍はここで主の御手にある、懲らしめのしなうむちとして働き、アッシリヤ軍を倒した後、勇ましく帰還し、その時にイスラエルの女たちがタンバリンと立琴で讚美のうちに男たちを迎えます。ですからアッシリヤへのむちの音とは、鳴り響くタンバリンと立琴です。そして、このことがイエスさまのむち打たれるその時について象徴的、預言的に現わしていました。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、

彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」(イザヤ 53:5)

「わたしは主、あなたをいやす者。」(出エジプト 15:26)であるイエスさまは、ピラトの庭で激しくむち打たれ肉体が砕かれました。キリストが肉体的に苦難を受けたのは、私たちの平安といやしを受けるための身代わりです。

「ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。」(マタイ 27:26)

ローマ兵たちはその時「ユダヤ人の王」を皮肉り、ユダヤの律法の慣習に従い、罪人

を罰する中でも一番厳しい最高三九回までのむちを与えたのです(申命記 25:3、第二コリント 1:24)。

あたかも愚か者を罰するごとくにです(箴言 19:29)。

三九回のむちとは、刑務官から打たれる自由人にとって最も不名誉な精神的屈辱であり、肉体的にも死の直前までの最大級の痛みです。四〇回までむち打つと罪人が死亡する可能性さえあり、これを越えないように三七回、三八回、三九回とむちのしなうごとに数え上げる、タンバリンや立琴によらない人間の罵声がピラトの庭に響きわたり、その日、旧約聖書の預言がそのまま成就しまし

た。

「彼らはあなたが打った者を迫害し、あなたに傷つけられた者の痛みを数え上げるからです。」(詩篇 69:26)

イエスさまの両手は、鉄製の鎖の付いた手錠がかけられて逃げられないようにきつに縛り付けて固定した上で、むき出しにされ背中にむちが直接打たれました。当時のローマ軍のむち打ちは両側に立つふたりから交互に連続して打たれる拷問であり、フラグルムと呼ばれるむちは一本の先が五～六本にも分かれており、その一本一本には、わざと傷口をひどくするための骨や鉛の突起物が

いくつも結びつけていました。ですから、先が五本のむちで三九回むち打った後は、 $5 \times 39 = 195$ の傷口が、先が六本のむちなら $6 \times 39 = 234$ の傷口ができました。どんなにひどい懲らしめでしょうか。イエスさまは二百前後の傷口を後遺症として背中と長く巻きつくむちの先端で前面にまで受けられた後、ここでも預言が成就しました。

「彼らは私の若い頃からひどく私を苦しめた。彼らは私に勝てなかった。耕す者は私の背にすきをあて、長いあぜを作った。」

(詩篇 129:3)

耕す者であるふたりのローマ兵によりむちという名のすきを受け、イエスさまの背中  
は耕されたため、むちの突起物の引っ掛かり  
で引き裂かれた背中の深い傷口が一筋、  
一筋と真っ直ぐ長いあぜのように掘られてし  
まったのです。加えてそこにパウロの目を痛  
めたような中東の宙を舞う砂ほこりが、外で  
露出の肌の傷口にくっつき、そこに合併症  
のような炎症を引き起こして腫れ上がりました。  
そのため背中はずうど溝が掘れて土  
が両側に盛り上がった長いあぜ道のように  
なり預言が成就しました。長いあぜ道のよう  
な真っ直ぐ続く打ち傷の一筋一筋からイエ  
スの血潮が赤く大量に流れ出て来ました。

しかし、このようなキリストの苦難だけでなく詩篇記者が預言的に、「彼らは私に勝てなかった」(詩篇 129:3)とも大胆に主の勝利宣言をしていることには、意味がありました。「キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたはいやされたのです。」(第一ペテロ 2:24)

イエスさまの逆転大勝利を告白ができたのは、この血潮のゆえにこそいやしの奇蹟が起きるからです。イエスさまが肉体的に砕かれたのは、私たちが肉体的に平安を受け、全くいやされるためだったのです。

宙を舞った三九回のむち、ここにも意味がありました。現代医学ではすべての病気の

種類をジャンル分けすると、ほぼ三九種類になるそうです。すなわちイエスの血潮はすべての種類の病をいやす能力があるのです。さらにイザヤ書五三章四節では「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった」とあり、彼は病と痛みの両方を担われたとは、病気の根本原因なる病原菌や病原体だけでなく、これら病の結果もたらされた痛みであるストレスや苦痛からも解放してくださるという意味であり、まさに現代医学の追究している完全治療をイエスさまは与えてくださいます。虫歯に例えるなら、ばい菌を殺し歯を治療するだけでなく、虫歯による痛み、精神的ストレス等の苦痛も除



く全面治療の力なのです。

また、使徒の働き三章七節では、生まれつき足なえの男に対してイエスさまの御名の権威は驚異的いやしを与えています。

「金銀は私にはない。しかし私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」

使徒ペテロが命令して右手を取って足なえを立たせると、たちまち彼の足とくるぶしが強くなり踊り上がり、真っ直ぐに立ち、歩き出し、歩いたりはねたりしながら、神さまを讚美して宮に入っていました。彼は肉体的にも霊的にも足なえがいやされ救われまし

た。いやしの喜びで心もいやされたことでしょう。使徒の働きを書いたルカ自身その職業は医者だったため、ここでルカは医学的専門用語を多く用いながら、そのいやしのさまをまるでカルテを書くかのように詳細に報告しています。注目すべきは、四〇年以上も歩かなかった男性です。通常なら四〇年間も使っていない足は細く筋肉もほとんどついてなかったはずです。たとえ瞬間的にいやされて歩き出したとしても、ジャンプするとすぐにまた倒れて弱った骨が折れるくらいです。しかし、ペテロを通し現われたイエスさまのいやしは、立つや否や歩き回り、はねることもできたほどの完全ないやしだった

たのです。通常、いやしの後、何カ月もかかる歩行訓練であるリハビリテーション付きの完全ないやしだったのです。イエスの血潮の力を讃美します。

このようにイエスの血潮によるいやしは、三九、すべてのジャンルの病を霊的、精神的、肉体的に根本から瞬時にいやすりハビリテーション付きの完全治療です。いやしの三つの要素について、もっと深く学びたいと思います。

国連WHOでは健康の定義を「体の健康、心の健康、社会的に健康であること」としましたが、聖書的にはこの社会的が霊的に健

康と変われば正解です。三位一体の神に似せて創造された人間(創世記 1:26)は、霊、魂、体の三要素で構成されています。人間の敵なる霊的な病の根源サタンと、精神的な心の病と、肉体的な病と戦う必要があります。人間の持つ三つの心の動き、知情意をしっかりと管理してサタンと罪悪と肉欲に勝ちましょう。人間は動物よりもっと強く長生きすることは霊魂を持つゆえんであり、三つよりの糸は簡単には切れない(伝道 4:12)ように、霊魂肉をバランスよく管理すれば、人間はさらに長生きできます。

使徒パウロは「あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように」(第 I テ

サロニケ 5:23)と祈り求め、使徒ヨハネも祈りました。

「愛する者よ、あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」

(第三ヨハネ 2 節)

初代教会では、霊・魂・肉、三領域における人間のいやしと祝福を指導していました。私たちは皆、神さまの家族として同じイエスさまの聖なる血潮を受けた血族です。イエスの血潮の流れるキリストの御体なる教会員の痛みとは、そのまま全体の痛みであり頭なるキリストの痛みです。それゆえイエス

さまのためにも霊・魂・肉いやされる必要があります。

中国、北京駅前で「人間サンドバッグ一発十元(約二〇〇円)」と書かれたシャツを着て殴られ屋をする男性が中国で話題となりました。この男性は、息子が白血病に罹り、骨髄移植の手術代七〇万元(約千三百六十万円)を払うことが到底できず、家を売却するもなお、多くの借金。そこで思いついたのが「人間サンドバッグ」。当初、息子の病気のことは信じてもらえず、単にお金を稼ぐためと思われ、掲げている通りに一発十元で殴られ続けていたといいますが、このこと

が現地メディアで取り上げられると、父親のもとに殴ることなく寄付をしたいという多くの善意が集まり、結果八〇万元(約千五百五十万円)を調達することができたそうです。中国にはまだまだ善意の人たちが大勢います。

我が子の癒しのために必死になって恥も、殴られることさえも恐れず、やり方は無謀でしたが、立ち続けた父親の勇気と愛の中にイエス様の十字架を思います。イエス様の打たれたむちを耐え忍ばれた傷口の血潮は、無言に私たちの癒しを信じて願う、神の愛を語りかけます。

## 霊のいやし

聖書は霊的病である霊のバイ菌サタンとの戦いについて教えています。体がバイ菌と戦うのが当然であるように、御体なる教会の戦うべき天敵がサタンです。動物界に天敵があるように、雲の世界に住む人間の天敵は人間ではなく背後のサタンです。

「兄弟たちは小羊(イエス)の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼(サタン)に打ち勝った。彼らは死に至るまでも命を惜しまなかった。」(黙示録 12:11)

天敵サタンに対する勝利の武器は、イエ



スの血潮と個人的に救いの証しが立つような、御言葉による新生の聖霊体験、そして忠実な信仰です。信仰の確信なく戦うならば、使徒の働き一九章一六節にある、実験的に悪霊を追放しようとしたスケワの七人息子たちのように、かえって打ち負かされてしまいます。悪霊も必死です。実験レベルで出ていくものではありません。自分たちの王国の権威と往む家が、かかっているからです。人間の場合でも、たとえ不法占拠した家であってもすぐには立ち退かないように、本気で戦う必要があります。常に御言葉と聖霊さまに満ちた清い状態で、信仰を持って戦うのが霊の戦いです。

そしてイエスの血潮をたたえることがあなた  
たの力です。サタンはもともと天国の天使た  
ちのうち三分の一の軍勢を従える天使長ル  
シファーであり、主のみもとにいつもいなが  
ら、神さまに讃美を捧げる聖歌隊長の使命  
が与えられていました。天国では他に天使  
長ミカエルもいて、広い天国内の治安維持  
の目的で巡回する警備員のような使命が与  
えられ、その下にも天使たちの三分の一の  
軍勢が置かれていました。後にルシファー  
が墮落してサタンになった時から「神の賜  
物と召命とは変わることがない。」

(ローマ 11:29)

主の御前、ミカエルは警備から実際に戦う天使長となって応戦し、空中で今もサタンに対抗する霊的戦いをくりひろげています。また、天使長ガブリエルもいます。彼はもともと広い天国内で天使たちの間を行き巡って神さまからのメッセージを忠実に伝言する使命があり、ガブリエルの下にも天使たちのうち三分の一の軍勢が置かれていました。後に地球と人間が造られた時からガブリエルは地球にやって来ては、神のメッセージを人々に伝える使命を果たし、今もサタンの妨げに応戦しながら伝言しています。ダニエル書十章二一節にはこれらミカエルとガブリエル以外他には誰もいないと書かれ

ています。

これは想像ですが、ルシファーの墮落ぶりはこのような次第だったのでしょうか。ルシファーがいつものように讃美しながら外を見てみると、ミカエルは天国内警備のために神の御元から離れて巡回に出発して飛び立ち、ガブリエルもメッセージ伝言のために神の御元を離れて出発して飛び立ってしまったため、ただ一人残された天使長ルシファーは心の中で高ぶり始め、大きな勘違いをしました。

「私は天使たちの中でも一番えらいのだ。ミカエルは警備員で外勤の外回り。ガブリエ

ルも郵便配達員で外勤の外回り。しかし、この私はいつも一番神の近くで内勤務、あまり動かさず美しく輝きながら讚美だけしている。私は暁の子、輝く明けの明星だ。私の天国の地位はすでに確立されており、私は天使長の中の天使長。万軍天使たちのトップだ。今からは天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、山にすわろう。頂きの上ろう。いと高き方のようになろう！ 私は天国のVIPだ」

こうして、使命と賜物の違いも全くわからずに大きく勘違いしたルシファーは高慢の罪から破滅に陥り、汚れたサタンとなって清

い天国から追放され、地上に投げ落とされたのです。このときサタンは竜のしっぽで巻いて道連れに自分の配下にいた天国の天使たちの三分の一を引き連れて地上に落ちてきました(黙示録 12:4)。

その後、サタンはエデンの園でアダムを手に入れ、合法的に人間と地球を我が物として今や地球の中心の地下の国よみに本営を設けて、そこから手下の墮落天使たちを悪霊たちにして地上に送りこみ、人々に悪を助長して、神さまに逆らわせているのです。しかし、天使たちの数の上でも三分の二対、三分の一すなわち二対一、神さまの軍隊の

圧倒的勝利の軍配はすでに上がっています。私たちが今、地上で信仰をもって祈る時、この戦いに参戦でき、天上の神の軍隊はさらに敵軍を退けて前進できます。

悪霊が人に入る接点は罪、恐れ、心の傷、憎しみ、家系に働く呪いなどです。これらのいやしの祈りも同時に必要です。それはハエの好んで止まる汚い所をなくすことです。クリスチャンの霊は神殿として聖霊さまが住んでおられますが、心と肉体の領域は未だ戦場です。押さえつけられて支配されないように戦わなければなりません。神さまの御使いが正義の軍隊であることに対抗して、

サタンの使い悪霊たちも悪を助長する軍隊のような組織を持っています。人が救われるとちょうど、かしらの一番強い千人隊長がその人から追放され組織崩壊状態となり、もはやサタンに完全支配されなくなりますが、代わりに聖霊さまに満たされていないと雑兵のような古きの七つの悪霊が再び帰ってきて住みつこうと罪に誘惑します。

私は多くの人々が悪霊から解放されるのを見ましたが、長年入っていた悪霊は根が深く、出るのにも時間がかかりました。教会につながらない限りすべて追放出来なかった例もありましたが、本人が強い意志で解



放を願って離れない人は、悪霊が出ていきました。その時しゃべった悪霊の言葉で印象的なものをあげます。

ある街での集会中、讚美による主の臨在の中で、占いの霊に憑かれた女性が床に倒されて、苦しみのたうちながら言いました。「おれを追い出すことの出来た牧師はこの街には誰もいなかった。おれはこの女に十二年往んでいるのだ」

「おれがこの女から出たらこいつはイエス・キリストのために働くから出ない」

「絶対、舌だけは、はなさないぞ」

「おれはレギオンだ」

「あと二分の一残ってる。あと三分の一、あと四分の一、弱くなってきた、追い出されるぞ、助けてくれ、仲間を呼んでくれー」

また、ある家系に働く偶像の霊に苦しむ男性は言いました。

「異言、異なる言葉、意味が分からない。やめろ、やめてくれ、聞きたくない」

また、ある宗教と淫乱の霊に憑かれた男性はこう言いました。

「泉——。このやろう」

「今日は礼拝のない日だから、おれたちには好都合だ」

「おれの名前を知りたいのか、教えないよ」

「おれはこいつとあの女を姦淫に落とす計

画を持っていたのになぜじゃまをしたか」

「おれの名前は家系の霊だ」

「いやだ、おれは出ていかない。こいつがおれを願っているから出ないんだ。こいつが悔い改めないからおれが出るはず無いじゃないか、そうだろう？」

「悪魔も疲れる」

悪霊はこんなものですが一番の解放は徹底した罪の悔い改めです。すべての罪を□で告白してからイエスの血潮で悪魔を縛り付けて命じましょう(マタイ 12:29)

「イエス・キリストの御名によって命じる、出ていけ。」(使徒 16:18)

ただし、偽りの父、悪魔にはしゃべらせない方がもっとういいます(マルコ 1:34)。

本来、悪魔がしゃべることが許されるのは、名前を告白する時だけです。イエスさまも悪霊どもの名前を呼んで追放しているからです。

「おまえの名は何か」(マルコ 5:9)。

具体的に人にとりつき苦しめている悪霊の正体を明らかにしたうえで、名前を呼んで命じることが効果的な悪霊追放になります(マルコ 5:8、8:33、9:25、マタイ 4:10)。

詩篇九七篇一〇節には、「主を愛する者たちよ。悪を憎め」とあります。悪を単に嫌うというレベルではなく、むしろもっと強く積極

的に敵として、心から敵意をもって対抗せよ  
ということです。小さな罪もやがては人を不  
幸にし、滅ぼし尽くす敵なる黄泉の勢力と  
知り、妥協せず、義をもって立ち向かうこと  
です。

献金を盗む罪を犯し続け、後にはイエスさ  
まを裏切る最大の罪にまで落ち込んだイス  
カリオテ・ユダの場合、サタンは。ユダに入  
る時、突然ではなく二段階スライド方式で  
徐々に入りました。一度目はその心にイエ  
スさまを銀貨三十枚で裏切って、祭司長た  
ちに売ろうとする「思い」を入れていたとあり  
ます(ヨハネ 13:2)。

ユダにとってはこの裏切りの「思い」がなぜ

か面白く思えて甘く捨てられません。それでこのサタンの「思い」を日々愛して反すうするユダに対する全知全能の神イエスの与えられた悔い改めの機会は最後の晩餐の時です。「パン切れを浸して与えるもの」が私を裏切ると、警告の伴った預言をされ、パン切れをユダに与えたその時、ユダが自分の自由意志でパン切れを受け取ると二度目、完全にサタンが彼に入りました(ヨハネ 13:27)。

ユダはサタンに支配され、自らをコントロールできずに裏切り計画実行のため、すぐに外に出ていきました。ユダにとってその時

は靈的にも實際的にもすでに夜でした。人の罪は内にすくう癌細胞のように成長するものですが、始めの悪い「思い」の段階ですぐに悔い改めて告白し断ち切るならば、後はサタンに完全に支配されてしまうことは絶対ありません。

人類最初の殺人者カインの場合、始めは主に受け入れられた弟アベルをねたむ心から罪の苦い根は張りめぐらされました。その時も、このようなカインでさえ愛の主は悔い改めの機会を与えられ御言葉を与えられました。

「そこで、主は、カインに仰せられた。『なぜ、

あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行なっていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。』

(創世記 4:6、7)

しかしカインはかたくなに心の戸口で待ちぶせて恋い慕う罪と、その背後のサタンを内側深く受け入れて、結婚し一つとなって罪を身ごもったあげく、弟アベルへの殺人という悲劇を出産したのです。

ヨハネの第一の手紙三章十二節ではこのようなカインは悪いものから出たサタンの子で



あるといえます。

「エルサレムよ。救われるために、心を洗って悪を除け。いつまで、あなたの中には邪念が宿っているのか。」(エレミヤ 4:14)

いつも、イエスの血潮で心洗われ、サタンの働きかける接点なる邪念を汚れた敵として、初期段階から聖絶してすべての思いから締め出す習慣をつければ、私たちはたやすくサタンに打ち勝つことができます。

サマリヤの町で執事ピリポの宣教により汚れた霊は人々から大声で叫んで出て行き、いやしのリバイバルが起きました(使徒 8:7)。

悪霊が入る時は静かにこっそりと、泥棒のように蛇のように入り、信仰も希望も愛も喜びも祈りも盗んで、最後は正体がばれる時、大騒ぎして七つの道に逃げ去るものです(申命記 28:7)。その現われは、蛇や犬のようにひんぱんに舌をスティックのように出したり(イザヤ 57:4、エレミヤ 9:8、詩篇 57:4)、汚れた空気のような状態で叫んだり、吐いたりあくびしたりして汚れいっぱい損させたり、恥かかせたりしながら出ていきます。アダムが食べて罪を犯したように、その子孫も食べてはいけない汚れを食べると霊の胃腸を壊して吐き出すのです。さらに強いものは物を壊したり(ルカ 8:9)、小さな生き物

を殺したり(ルカ 8:30)、主の僕の血を流したりして(ヘブル 12:4、使徒 16:33)、出ていくこともあります。

黙示録一七節八節では大水の上に座っている大淫婦という女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを使徒ヨハネは目撃し、この女がやがて滅ぼし尽くされると預言されていますが、キリスト教の歴史は今も殉教者たちの流された血の土台の上にリバイバルしながら世界に広がりを見せています。その始まりは、サタンの頭を打ち砕いた勝利の主イエスさまの十字架の血潮にあります。

使徒パウロが占いの悪霊を女から追放した後、この悪霊は住む家を失い、全地の面と地下のよみを拠点に聖霊さまの水のない所をさまよったあげく、どこにもないので渴き果てて、このまま敗北してよみに帰ればサタンに怒られるので、仕返しに関女から占いで利益を受けていた悪霊の影響根強く利用しやすい主人たちに強く働きかけ、パウロを迫害し、役人に訴え出て、獄中にまで役じました。その時、パウロとシラスはむち打たれ血を流したのです。特に強い種類の悪霊は血を流すほど本格的な命がけの信仰で取り組んで戦う時出ていく、実にしつこい性質のものもあります。

私は今まで救われた信者の家の仏壇や神棚などの偶像を焼き捨てる作業中、手を軽く切って血を流したことが何度かあります。また、悪霊の対抗というものもありますが、これも立ち向かう時必ず勝利できます。イエスさまが舟に乗られ湖の向こう岸ゲラサ人の地に行きレギオンにつかれた男を救おうと出発されると湖上の大暴風に見舞われ事前の妨げを受けました。イエスさまはその時、権威をもって風と湖の背後に働くレギオンを見分けてしかりつけて言われました。

「だまれ、静まれ。」(マルコ 4:39)

悪霊を追放すると風は止み、湖は即座におおなぎになりました。イエスさまは御名の権

威をもって勝利されました。

パウロもまたこの種の攻撃的妨げを受け、コリントからテサロニケの教会に行くことを二度もサタンに妨げられたと告白し(第 I テサロニケ 2:18)、ローマの教会に行くことも何度も妨げられ、今なお妨げられているため行く代わりにローマ人への手紙を書き送ったのです(ローマ 1:13)。

マルコの福音書五章六節では、嵐を静めたイエスさまが船でゲラサ人の地に到着した時、船沈没作戦に大失敗し、もはや勝ち目のないことを知ったレギオンがここですぐ

に駆け寄ってきて、イエスさまを拝し、嘆願する戦術に作戦変更しています。勝ち目がないと解ったため変更してこびへつらう戦術です。このようにサタンはいつも狡猾で、巧みにかけられた罠のような策略を使う性質があります(第二コリント2:11、エペソ4:11、6:11)。しかし、神さまの子供である私たちは悪魔の仕業をことごとく打ち壊すことができます(第一ヨハネ3:8)。

悪霊は人間の中から追放されると、さらに次元の低い存在である動物の中に入って暴れることもあります。一人に六千匹もの悪霊が住んでいた大型リゾート・レギオンマン

シヨンのような男から悪霊どもがイエスさまによって追い出されたとき、律法的に汚れたものとして入りやすかったのか動物の豚を選んでレギオンは引越しました(マタイ 8:32)。いっせいに六千匹の悪霊軍隊が二千匹の豚の群れに入り込んだため一匹の豚につき平均三匹ずつ入りました。すると一匹の豚の頭の中で一匹の悪霊は山へ行こうと言い、もう一匹の悪霊は海へ行こうと言い、もう一匹の悪霊は空を飛ぼう、と言うから豚は頭が狂ってしまい、いっそのことすべての願望を満たすミックスした行動をとろうと思ひ、山のように高い崖の上から海のように広い湖の中へ空飛ぶ鳥のように豚の群れ



はダイビングしてしまいました。

ピリピの教会には犬と悪い働き人と肉体だけの割礼のものに気をつけるよう教えていますが(ピリピ 3:2)、信仰のない異邦人や悪者や律法主義者だけでなく文字通りの犬にも悪霊が入って狂犬病のようになることもあります。

以前、茨城県のある聖徒の家で三十人ほどの子供のクリスマス礼拝を捧げ、信仰告白を導いた時のことです。子供たちから悪霊の出て行ったちょうど同じ時刻に、礼拝に來れなかった隣の家では、にわとり小屋

に狂った犬が網を破って入り込み十数羽を  
引き裂いたことがありました。しかし時に犠  
牲があっても、主は私たちのたましいの救  
いを最上のこととして考えておられます。豚  
の群れという大きな財産以上、たった一人  
のレギオンにつかれた人の解放を主は優  
先されます。主は私たちのことを天よりも、  
地の富よりも尊ばれ、特別な存在として第  
一に愛していらっしゃるのです。

しかしながら主は動物も愛しておられます。  
私の妻が以前、祈禱院で毎月の三日間の  
断食が終わって聖霊さまに満ちて帰宅した  
時、家で飼っていたペットのセントバーナー

ド犬が風邪を惹いて死にそうになっていました。獣医の話ではもうだめだということでしたが、妻は信仰が生じて家族のように愛する犬の頭に按手して熱く祈りました。祈ると申命記二八章四節の御言葉が心に強く迫ってきたのでさらにいやしを堅く信じました。「あなたの身から生まれる者も、地の産物も、家畜の産むものも、群れのうちの子牛も、群れのうちの雌羊も祝福される。」

信じて祈り終わると犬はいやされて元気に立ち上がりました。

私たちがイエスさまの御名の権威と血潮の力でサタンに命ずる時、主の権威に従わずあくまでも対抗して出て行こうとしない不従

順な悪霊どもは神さまの霊の世界の法律を犯すため、まだその時ではないのに暗闇の穴の中に投げ込まれる刑罰が用意されています(第二ペテロ 2:4、ユダ 6)。

悪霊どもはこの唯一の主権ある神さまの法律をよく知り恐れおののいています(マタイ 8:29、ヤコブ 2:19)。ですから、この知識を持ってねばり強くあきらめない信仰で祈る時、最後は必ず一匹残らず悪霊追放することができます。悪霊追放後は絶対、心も環境も再び受け付けないように決心して、力の限り見張ってイエスの血潮で心を守ればよいのです。そして必ず「二度と帰ってくる

な！」(マルコ 9:25、ルカ 11:24)と宣言して心の扉を閉じて感謝礼拝しましょう。クリスチャンなら誰でもイエスさまを信じた時から、すでに勝利者であり、心の王座はただイエスさま、ただ聖霊さま歓迎の神殿です。霊的病サタンを追放できる権威ある存在です。

## エドムからの水

イスラエルとモアブが戦争状態の時、イスラエルの預言者エリシャは先ず、立琴をひく者を呼び寄せて讃美させました。すると主の御手がエリシャの上に下り、彼は主の啓示を受けてイスラエルの圧勝とそのために

成すべきことを具体的に預言しました。成すべきことは、谷に溝を掘ること。それは、この谷に今から水が溢れ満ち、この水により奇蹟を主が成されるからです。讚美の力はまことに偉大です。主の御前、人生のさまざまなかんがえの中で人間的な解決手段をとろうと走り周って試行錯誤する以上に先ず座って、主に向かって讚美を捧げるなら、主から最も良い考えもしなかったすばらしい啓示と成すべき明確なビジョンが預言されます。サウルの場合もロバ捜しに走り周って疲れ果て途方にくれているとき、神のギブアにて盛大に讚美を捧げる預言者の一団に出会い、その讚美の臨在の中で主の霊が激しく

サウルに注がれて新しい人に変えられ、王位につくという明確なビジョンが与えられました。

私たちは何をするにも人間的考えをわきにおいて先ず、神の国と義を第一に選択し、主を讃美してあがめることから始めましょう。エリシャ率いるイスラエル軍は、讃美のうちに示された主の啓示に従い谷に溝を掘りました。翌日、朝になってみると、なんと集中豪雨のため川からあふれ出た大量の水がエドムのほうから流れて来て、この地は水で一杯に満たされていました。敵軍のモアブは武装して国境の守備につきましたが、ちょうどこの時間、昇る太陽が水のおもてを特

に赤く照らして反射していたため、それは水ではなく赤い流血だとモアブは誤解して戦略を誤って言いました。

「これは血だ。きっと王たちが切り合って同士打ちしたに違いない。さあ今モアブよ、分捕りに行こう。」(第二列王記 3:23)

こうしてモアブの軍隊は惑わされて早合点し、心の武装を解除した安心状態でイスラエルの陣営に分捕り目的で喜んでのんびり攻め入ると、なんとイスラエル軍は相変わらず同士打ちもなく、元気一杯にしっかり武装したまま立ち上がって力強く応戦してきたため、血のような水に惑わされて誤判断を



下し、心底油断しきっていたモアブの軍隊は包囲されてことごとく打ちのめされ、勝利の軍旗はイスラエルにひるがえったのです。

ここに霊の戦いをする神のイスラエルなる私たちも、容易に敵軍なるサタンの軍隊を惑わし、混乱させ、徹底的に成敗して、打ちのめすことのできる戦略があります。それは主を讃美して臨在のうちに現われる奇蹟、イエスの十字架の血潮の溢れ流れる川から、その流れを敵軍に見せつけることです。サタンはイエスの血潮の流れを見ると、頭がボーッととして、くるくる回って狂ってしまい判断を完全に誤り、戦略も間違ったまま盲目的

に突入してしまい、後は容易に滅ぼされて  
しまう愚かな存在です。イエスの血潮が流  
れる所はいつでもどこでも奇蹟が伴ない、  
私たちに勝利の旗がひるがえるのです。

## 過越の小羊

出エジプト記では、イスラエル人に過越の  
祭りを定められました。その起源は小羊を  
十日から十四日までの間、家の中でよく見  
守り、愛情に満ちた頃、これを殺し、その血  
をその家の左右の門柱と上の鴨居に塗りつ  
けると、この血がしるしとなって滅ぼすもの  
が自分の家にやって来てもそのまま過越し

てしまい、エジプト同様の災いは下らずに守られてエジプトから無事脱出できるという神の契約です。

そしてこれは主の祭りとして祝われる当時の人々だけでなく代々守るべき永遠の掟とされました(出エジプト 12:14)。

この過越の小羊はイエス・キリストを象徴しています(第一コリント 5:7)。

その定められた傷なき一歳の雄の成羊とは、三〇歳にして公に祭司職の権限に立てる年齢となった成人男性、罪の傷なきイエスさまの象徴です。イスラエル人がまず小羊を家の中でしっかり見守り、愛情の満ちた頃

ほふるという定め通り、イエスさまも同様でした。三年半の公生涯、弟子たちのしっかり見つめる中、イエスさまは弟子たちと共に親しく行動され、その御姿は弟子たちにとっていつも新鮮な不思議であり、イエスさまの行動一つ一つが注目を集め、イエスさまは群衆を魅了する神秘なお方として、まさしくイエスさまとは弟子たちにとって注目すべき家にやって来た珍しい小羊のような存在で「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手でさわったもの」(第一ヨハネ 1:1) であられました。そして、偽りない愛と真実な心のイエスさまを弟子たちが次第に理解し始め、愛情が深まっ

た頃、神の小羊イエスさまは十字架でほふられたのです。

今日、考古学者が出エジプト直前の過越しの祭りの日までエジプトのゴシェンの地に往みついていていたすべてのイスラエル人の家々を発掘調査して共通する不思議な発見をしました。エジプト人の家々にはなかったものですが、すべてのイスラエル人の家々の玄関の敷居の下には熱心に掘られた穴があったのです。この穴の位置は通常ならば絶対に掘らないはずの玄関の敷居の下です。

もし、イスラエル人の子供が「お父さん。お

母さん。ありがとう。元気でね。行って来ま  
ーす」と言って家を出るならば次の瞬間「わ  
あーっ！」と叫んで、そのままストーンと穴に落  
ちてしまう危険でおろかな場所に位置する  
つまずきの穴です。

調査の結果判明したことは、この穴が掘ら  
れた目的はイスラエル人にとって立ち去っ  
てもはや再び住む必要のなくなる家々のも  
のであり、もうエジプトの家々には帰らない  
よ。という信仰の証しでもあり、最大の掘ら  
れた目的は過越しの夜ほふるための小羊  
が逃げられないよう、この穴に入れ、地の中  
でほふるために掘られたものでした。ほふら  
れた小羊はイエスさまを現わします。神の

小羊イエス・キリストも、堅い岩地の岩盤を掘り下げて立てられた十字架、ここで血潮を流してほふられたのです。過越の祭りとはイスラエル人にとっての代々守るべき永遠の掟です。それゆえ神のイスラエルなる私たちクリスチャンも今日これを祝うべきです。

今、聖霊さまが往まう神殿であるあなたの心の入り口にイエスの十字架を大きく掲げて祝いましょう。左右の門柱に塗られた血のごとくキリストの左右の御手には、釘打たれた血潮があります。上にあるかもいに塗られたの血のごとくキリストの御頭にはいばらの冠の血潮があります。足下の小羊をほふっ

た穴に満ちた血のごとくキリストの御足には釘打たれた血潮があります。

そして心の入り口の扉いっぱいにはイエスの背中のむち打たれた血潮があります。これをしっかり塗りつけることにより、滅びの御使いは(第一歴代誌 21:25、詩篇 78:49)絶対心に入ることはできず、滅びの災いは過越すのです。このように災いと滅びの御使いを過越させるすばらしく力ある小羊イエスの血潮をあなたの家にも適応して、家族の守りのために祈りましょう。職場も学業もすべてイエスの血潮により守られて、霊的病の根源サタンに打ち勝って、霊的に健全な



クリスチャンとして永遠の祝い、礼拝を捧げ  
ましょう。

長年、伝道師をしている私の妻が宣教師  
として日本に召され来日準備をしている頃、  
主から多くの導きと啓示がありました。その  
一つに夢の中で日本の各宗教の指導者た  
ちが一人ずつ集まった群衆が見えたそう  
です。彼らは口々に相談して言いました。

「今から日本に来るこいつはどれくらい力  
あるだろうかひとつ見てみよう」

夢の中で妻は部屋の中にいましたが、や  
がてその集団はぞろぞろと家の中にまで入  
てきました。彼らは渡り廊下を歩きながら妻

のいる部屋の前を通り過ぎる時、次々とのぞき込んで妻を観察しながら隣の部屋に入っていました。そして隣の部屋に集団がすべて集まると互いにそこで作戦会議を開きました。その時、主が妻の霊の耳を開き、悪霊どもの相談する会話をすべて聞こえるようにされました。そこで聞いていると中でも一番強い力を持つ代表は仲間の弱い一人に向かって命令しました。

「おれたちはイエスの血潮と十字架さえなければ勝つことができるのだ。おまえはあの女の方へ行ってこれだけは絶対語らないように口をつぐむよう頼んでこい」

すると命令された一人が、隣の部屋から

妻のいる部屋に入ってきました。ところが聖霊さまに満たされていた妻は、使徒パウロが魔術師エルマをにらみつけたように、これをにらみつけたため、彼は何も言えなくなっ  
てしまいそのまま隣に帰って「だめだ。それは無理なことだ」と報告しながら仲間の集団と共に逃げ去っていきました。

イエスの十字架の血潮は悪霊どもから私  
たちを守る勝利の力であり、悪霊どもの最も  
恐れるものです。高らかに讃美しましょう。  
夢を見た直後のことです。実際に妻の運転  
する自動車は道路で一時停止をしている所  
へ巨人なクレーン付きの大型車が突っ込ん

できました。幸い怪我はなく、つぶされた車は保険対応で向こうがすべて保証して修理しましたが、サタンは日本宣教を妨げようと事前に命までねらって攻撃してきたのです。

ペルシャの君、ギリシャの君(ダニエル 10:20)があるように日本地域担当の君なる悪魔がいます。サタンは人を盗み、殺し、滅ぼす性質を持っています。サタンは元々、神の子供であった人間をエデン以降、罪の支配により合法的に神の御手から盗み、次には罪を熟させることや、病、不慮の事故等により殺し、最後は黄泉で死者の魂を日々苦しめて滅ぼす働きをしています。しかしイ

エスさまが来られた目的はサタンの働きを打ち壊し、私たちが命を豊かに得て、すべてのことに幸いを得て、健康に過ごすことにあります。霊的病サタンに対する勝利の秘訣イエスの血潮を堅く握りましょう。

## サムソンの死

「サムソンは、宮をささえている二本の中柱を、一本は右の手に、一本は左の手にかけ、それに寄りかかった。そしてサムソンは、「ペリシテ人といっしょに死のう」と言って、力をこめて、それを引いた。すると、宮は、その中にいた領主たちと民全体との上に落

ちた。こうしてサムソンが死ぬときに殺した者は、彼が活着ている間に殺した者よりも多かつた。」(士師記 16:29、30)

ペリシテ人の領主たちがダゴン神殿で祭りをしていた時、捕えた敵サムソンを余興の見世物にしようと牢から会衆前に呼出しました。宮は、男や女でいっぱい、ペリシテ人の領主たちもみなそこにいて、屋上にも約三千人の男女が集まっていました。かなり大きな吹き抜けのあるスタジアム建造物です。その時、サムソンは主に向かって最後の勇気を振り絞って祈りました。そして宮をささええている二本の中柱を、一本は右の手に、一

本は左の手にかかえ、それに寄りかかって  
言いました。「ペリシテ人といっしょに死の  
う。」(士師記 16:30)

この言葉を最後にサムソンは力をこめて、そ  
れを引くと瞬く間に宮は大崩壊し、その中  
にいた領主たちと民全体は下敷となってし  
まいました。恐るべきサムソンの怪力と欠陥  
住宅の末路です。ダゴン神殿は一見壮大  
に見えてもその実、中身はひどい欠陥住宅  
の典型で現代の建築工学では決してありえ  
ない建築法に引っ掛かる極めて幼稚なレベ  
ルの建築様式です。たった二本の中柱が  
屋上席のすべてを支えていましたが、通常  
なら仮に数本の柱が壊れても他の柱が屋

上席を支えて建物全体が傾かないよう、柱ごとに力を分散した加重で造るのが常識ですが、ダゴン神殿は大変お粗末なシロモノです。

建築法では地震を想定し、柱の太さや数、位置、窓ガラスにおいても光を取り入れやすい一方方向に片寄らず、建物の四方にバランスよく設ける規定があり、地震の際に建物全体がよじれて倒壊しない知恵です。しかし偶像崇拝にふける彼らペリシテ人は頭がぼんやりしてしまい、優れた英知から程遠い危険な死の地と死の影に集まっていたようで、偶像崇拝はいつの時代も人を愚



かでむなしいものにします。

サムソンの聖書箇所は物語として読んで  
も面白いですが、霊的に解釈するとまた面  
白いです。イエス様はサムソンのように罪は  
犯されませんでした。サムソンの死に様  
からイエス様の死をも預言的に見いだせま  
す。サムソンは情欲の目で女を見、遊女と  
交わった結果、最後はその目がえぐりとられ、  
愛して離れなかった女で罫にはまって滅亡  
しました。

イエス様の場合は一生涯ひとつも罪がなく  
美しい心の目をもたれましたが、最後は十

十字架の前にその美しい御目は目隠しされて、暗黒の恐怖の中こぶしで強打されました。本来ならば罪ある私たちの目こそ裁かれるはずだったのに。十字架ではいばらの冠を受け額からの出血のためここでも大きく目を開けられなかったことでしょう。御手は釘付けられ、目からたれてくる血潮の一滴一滴さえ拭うこともできなかったのですから。

次にサムソンの場合、足を悩ませたのは青銅の足かせです。このかせのため逃げられず、大きく足を開くことさえできずに行動が制約されました。

一方、イエス様は十字架の上、御足は犬釘と呼ばれる抜けないようにわざと錆びさせた細長い釘で打たれ、行動が制約されました。二人とも周囲を取り巻く大群衆のあざける悪者たちの見世物です。

一人は悪の枢軸ダゴン神殿のステージ上、一人はどくろの地ゴルゴダのステージ上。

さらなる共通点は最後に死の間際、両手を広げて力をこめて引き寄せ、力の限り大声で叫んだことです。

「ペリシテ人といっしょに死のう！」

(士師記 16:30)

「父よ。わが霊を御手にゆだねます！」

(ルカ 23:46)

その異なる言葉の二人は時代を超えて共通の姿勢で祈りながら命を引き取りました。両手を左右に大きく広げて上げ、開けられない目と力の限り大声で叫びながら。このように神の栄光を現した彼らのもう一つの共通点。それはサムソンが怪力で偶像の宮を崩壊させた時、屋上席にいた敵のペリシテ人、約三千人もの男女がボタボタなだれ落ちてきました。これこそイエス様の十字架で勝利をとられた際に起きた霊的次元での出来事と共通しています。イエス様は空中の権威を持つサタンの頭を打ち砕き、敵の要塞を全面崩壊させるためにも来られました。イエス様の十字架の死の瞬間、サタンの空

中の権威は完全崩壊し、天から雷のように地上にボタボタ投げ落とされました！

敵は一見壮大なダゴン神殿のように大きく  
きらびやかに見えても、その実、中身は、ち  
密な構造計算も堅固な支柱もないお粗末  
な欠陥住宅そのものです。聖書は、平和の  
神はすみやかにあなたがたの足元にサタン  
をふみくだいてくださると硬く約束していま  
す。あなたの足のサイズは何インチです  
か？二〇～三〇センチでしょうか。サタンは  
せいぜい三〇センチ以下の私たちの足に  
直接踏みつけられるくらい非常に小さいミニ  
サイズの存在です！

力のないすでに敗北した存在です！サタンを決して巨大な強敵だとは思わないでください。

サタンは地獄では大きいですが、この世では偽りの父で自分を大きく思わせてもその実、本当はとても小さい無力な小人です。

一方、神様は天の天もお入れすることができない偉大なお方です。その神様があなたの見方で、日々あなたを強め、あなたを助け、あなたを守ります。あなたが意識してもしなくても絶えずあなたとともにいる力強い助けてくださるお方です。強く雄々しく勇気を持ちましょう。聖霊様はあなたの助け主です。

ある家庭で母親が熱心なクリスチャンのため、二人の小さな息子たちを毎週教会に連れて行き、礼拝を捧げて信仰生活を忠実に守っていました。ところがあるとき、子供たちが母親に質問しました。

「お母さん。どうしてお父さんは僕たちと一緒に日曜日に教会に行かないの？」

母親はまだ救われていないお父さんの霊的事情を子供たちにうまく説明しようと軽率に答えました。

「それはね。お父さんに悪魔が入っているからなのよ。」

純粹で幼い子供たちはそのときからしっかりと言われたことをストレートに信じて互いに会

話すようになりました。

「そうなのだ。お父さんは悪魔なのだ。」

その後、お父さんに対する子供たちの態度が変わり始めました。お父さんが仕事を終えて家に帰ってくると二人はすぐに集まってはひそひそと話しました。

「来たぞ。悪魔が帰って来たぞ！」

お父さんが夕食をとっているときにも

「あれ、悪魔がご飯を食べているぞ！」

その後は入浴中にも二人は集まってこそこそと「おい、悪魔がお風呂に入っているぞ！」

そして夜には

「悪魔が寝たぞ！」



また、あくる日にはお父さんが会社に出勤するのを確認しながらひそひそと

「よし、悪魔が出て行った！」

そんな生活が続く中、お父さんは子供たちの会話と異変に気づいて教会の牧師のところへどなり込みに来ました。

「先生！あなたは教会でいったい何を教えているのですか！私を家庭内ですっかり悪魔につくってしまって！」

牧師はひたすら平謝りでしたが、本当にクリスチャンは知恵を持って賢く振舞わなければなりません。

「私たちの格闘は血肉に対するものではな

く、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(エペソ 6:12)

私がまだ小学生で小さかった頃、なぜか「日曜日に教会に行こう！」という思いが与えられ、小さなコンパスの足で一人テクテク歩いて一時間弱、ようやく教会にたどり着きました。広い国道に面する好立地にかなり広大な敷地を持つ教会でしたが、門をくぐり、建物に入るとちょうど礼拝が終わり、解散中でした。教会員たちを送り出し、残されたスタッフのような人たちから

「僕！ 本当に一人で来たの？」

と大変珍しがられました。そこで案内された教会学校の部屋を見渡すと沢山のおもちゃがあり、黒板には英語を教えた後が書かれていました。私は内心「やった！面白い遊び場を見つけた！」

と喜んでいると牧師のような人が来て大変申し訳なさそうに困った顔でこう言いました。

「僕、今日は本当によく来てくれたねえ。だけど本当に悪いけれど、この教会は今日で終わりだよ。

来週からずっと遠くに引っ越してなくなってしまふのだよ。」

こうして福音については何も聞かされず、祈りも受けることなく帰されました。

しかし、私はその牧師のような人の話を信じないで一週間後の日曜日に再び一人テクテク一時間弱、ニコニコしながらちゃんと教会にやって来ました。ところが入り口は閉ざされた門に鎖が無造作に巻かれ、教会堂の扉にも木の板が釘打たれ、完全閉鎖状態で閑散としていました。程なく物件は取り壊され福音とは無縁の建造物の数々が更地に建築されていきました。

こうして私の信仰歴は、たった一週間で終焉し、その後再び十六歳で別の教会に行き、十九歳で聖霊様のバプテスマを受けるまでずっと墮落していました。日本人の多くがそうであるように私も福音を聞いたことは延べ

で十六年間一度もなく、実質都会の札幌で生まれ育ち、異端以外一度も伝道されませんでした。日本に聖霊様に満ちた愛の伝道者が多く立ち上がりますよう祈ります。

その数年後、小学生の私が教会にとって代わる新たな遊び場のひとつに近所の神社を発見しました。森の中を入っていくと小さな池があり、その横には狐を祭る偶像の祭壇と火の神と呼ばれる岩場をくり抜いた小さな洞窟のような祭壇がありました。そこから当時、私は遊ぶ金欲しさに、友達とさい銭泥棒していました。誰もいない環境に加え子供の手でも柵の下におもいっきり伸ばせば

楽に小銭が盗れました。

しかしひとつの摩訶不思議がありました。火の神という偶像からさい銭を盗むと、いつも何処からともなく火の気もないのに焦げ臭いにおいがしてきました。何回実験してもそうです。

そこである日、なぜか私が代表になって友人五人くらいを連れて現場に行き、その旨を説明した上で、下から手を伸ばしてさい銭を実際に実験の為に盗って見せました。すると確かにその瞬間何処からともなくあの焦げ臭いにおいが火の気もないのに、すっとしてきました。半信半疑だった友人たちも

びっくりしながら

「本当だ！焦げ臭い！泉の言った通りだ！」と叫びつつ恐ろしくなってその場からいっせいに逃げ去りました。

私は内心、私の言った通りになった満足感から誇らしげな思いで恐れつつも喜んで逃げ去りました。今考えても確かにあそこは悪魔が強く働く場所でした。しばらくした後、私は新たな思いで別の五人くらいのお友達を連れて現場に帰って来ました。今回の目的は実験ではなく、ゲームセンターに行く資金調達のためでした。なぜかここでも私がリーダーになって盗み方を説明して実践していましたが、狐の偶像を祭る祭壇の前

では簡単な火の神とは構造が違い、上から  
さい銭を入れて中に落ち込んでいく構造の  
為、どんなに手を入れても下まで届かず、う  
まくお金が盗れません。そこで悩みぬいた  
末に私は発見しました。

「あっ！左下にお金がたまる鉄の扉があ  
る！これをこじ開ければ、ぜんぶ回収できる  
ぞ！」

そこで鉄製の扉を開けようと爆竹花火を数  
本取り出し扉の隙間にはさんで点火しまし  
た。

「バン！バン！バン！」

わずかな火薬同様やはり小学生のわずか  
な英知では、こじ開けるには及びません。そ



ここで今度は数本ではなく一束全部をはさんで再度、点火しました。

「バババババーー…」

しかし爆音とけむりが消え去ったとき目にしたのは、依然閉ざされたままの白く焦げた鉄の扉でした。

「はたしてどうしたらよいものか」その時、小さな石を発見しました！

「これだ！」今度は石をもってガンガンたたきました。しかし鉄は石よりもっと硬いものです。するとお友達の一人でお父さんがヤクザをやっているK君が「これならいけるぞ！」とか言いながら大きな石を拾ってきました。そして力の限り彼が数回打つとなん

と！

「ドカーン！ボロボロボロ・・・」

少しのけむりの後、鉄の扉は依然鍵がついたまま閉じていましたが、その場に鉄の枠ごと倒れていました。それはそのさらに周りの加工されたコンクリートの壁の全体部分が大きく崩壊して大きな穴が開いたからです。

「やったあ！」

熱心にさい銭すべてをかき集め一目散に逃げ去りましたが、その後、数えてみると小銭ばかりで千数百円でした。これなら破壊された偶像の祭壇の修理費のほうがずっと高くつくなあと思いました。それから後のことです。なんと、この事件はそこで終わらない悪

魔からの緻密に計算された復讐劇が始まりました！

私がある日、公園で遊んでいるとその近くの空き地に変なバスを発見しました。

「おいみんな！変なバスがあるぞ！行って見よう。」

それは真っ黒塗りの前面も側面も金網が張りめぐらされ、白い漢字で何か大きく書いている本当に変な一番大きなサイズのバスでした。それは少し怖いおじさんたちが使う大音響でスピーカーを鳴らしながら動くあの右翼の宣伝カーでした！しかし、当時、私は小学生。常識も良識も怖いものもなしです。

「よし！のぼってみようぜ！」

メンバーは六人いたと思いますが、なぜか私が先頭きってみんなでバスの屋根の上によじ登りました。

登頂すると清々しくたいした見晴らしがよかったのを覚えています。そして屋根の上をまじめに散歩していると足元に変なものを見つけました。

「おい！変だぞ！このバス、煙突がついている。」

それはおそらく脱税目的でキャンピングカーか宣伝カーか事務室使用で登録されたバスの為、大きなバスの室内に事務所があり、そこにストーブが設置された内部構造で

したが、その室内からまっすぐ煙突が屋根の後方、中央付近に天上を通過して屋外に突き出ていたのです。煙突と言ったら、けむり、けむりと言ったら火、火と言ったら花火です。なぜかリンクするそんな幼稚な発想のなか、私たちは爆竹花火をカバンから取り出してさっそくその煙突に一束火をつけて入れてみました。

「バババババーー」

しばしのけむりの後です。死んでいた煙突に息を吹き込んだかのような不思議なしんきろうのようなものを私が見つけました。「今、煙突から湯気が出ている・・・」

「本当だ・・・」

実は季節は夏、そのバスの車内に使われていたストーブは外されており、よくあることですが、代わりに煙突の車内最先端部には虫やホコリが入らないよう古新聞が詰め込まれていたのです。その乾燥しきった古新聞が先ほどの「ババババ・・・」の飛び火を受けて燃え出してしまったのです。燃えながら古新聞はスッと車内に落下し、真下のじゅうたんがあつという間に燃えました。

「しまった！大変だ！消防士を呼べ！」

笑い合いながら数本の細いホースで自然の消火活動をしました。小学生数本のホースと水量ではこれが足りず消えません。

「大変だぞ！もっと出ないか！まじめにや

れ！」

「だめだ！俺も空だ！」

「俺も・・・」

急いでバスを飛び降り、外から眺めていると、赤いじゅうたんが床一面に引きつめていましたが、バスは車内から赤々と燃え広がりました。さすがにまいった私たちは近所のマンションに飛び込んで言いました。

「火事です！消防車を呼んでください！私たちでは消せません！」

「分かりました。救急車も呼びますか？」

思わず私は「はい！そうしてください。」

それからしばしの後、けたたましい消防車のサイレンと不要だった救急車のサイレン

のミックスする中、群集が現場に集まり始め騒々しくなりました。

ところが駆けつけた消防署員が本物のホース片手に消火活動をしようとしても、これが出来ません。なぜなら右翼のバスは戦闘用に？か、防御用に？か、知りませんが、悲しいことに窓枠全体に金網が前にも後ろにも横にも張り巡らされているではありませんか！これには通常、窓を突き破って勇敢に突入する消防署員もお手上げです。加えて相手は右翼団体の大型装甲バスです。勝手に破壊突破したら後の責任が怖いのです。一方、車内は真夏に床一面のじゅうたん



いう格好の燃焼物を捕えた為、火の気は治まりません。

「もうだめだ！」誰もがそう思ったその時に、サイレンの音で駆けつけた野次馬になった右翼のおじさんが自分のバス炎上を目の当たりにしてびっくりしながら急いで何処からか鍵を持ってきて鉄の扉入り口を開けました。その後は太い本物のホースを持った消防署員の勇敢な突入！難なく火は消されました。その後、私たちは消防署員から始まり関係ない救急車、小学校の先生や親たち・・・とにかく四方八方から怒られました。しかし誰もが口にしない、口に出来ない共通の認識が内心ありました。

「あれは、火の神のたたりだな。・・・」

右翼は金持ちでした。主犯格が小学生ということもあって一切燃えた数々の賠償請求もなく、右翼のおじさんに罪許されて釈放で一件落着。それ以降しばらくは火を見るだけでも怖いという状態が続きましたが、周囲からは右翼のバスを放火した勇敢な小学生ということで少し有名人でした。

私たちは悪魔と戦うべきであって、偶像自体や怖い圧力団体のおじさんたちや世の中の政治的・社会的矛盾と真っ向から戦ってはなりません。さい銭泥棒になってもいけ

ません。戦うべき相手は悪魔であって戦場は私たちの心です。悪魔に機会を決して与えないよう心を引き締めてイエス様の血潮で武装しましょう。

## 心のいやし アガペの愛

イエスの血潮は、私たちの霊のみならず精神もいやしてくださいませ。ストレスの多い現代社会、肉体の病の六〇から八〇%はストレスが原因です。心のいやしが必要です。

人間は誰でも外面に見える風貌「外なる人」を持つように「内なる人」をも持っています。

す。外なる人が、がっちりとは強そうに見えても、内なる人が案外弱い人もあり、外なる人が弱々しく見えても内なる人が心底強い人もあります。

人は人生の試練にぶつかり問題が起きるとその人の本当の姿、内なる人が見えてきます。そんな意味でもこの内なる人こそ本当の自分自身ということが出来ます。聖書はこれについて「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により力を持って、あなた方の内なる人を強くして下さいように」(エペソ 3:16)とあります。

人は誰でも無意識のうちに心の奥底にあ  
って働く自我意識の活動、すなわち潜在意  
識があり、今日の実生活に良かれ悪しかれ  
影響を与えて生きています。もしも、この内  
なる人が傷つき病んで血を流して倒れてい  
たらどうなることでしょうか。たとえどんなに優  
れた豊かさの中にあっても、その人は不幸  
です。

「人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれ  
た心に誰が耐えるだろうか」(箴言 18:14)と  
聖書がいうように、内なる人の病は肉体の  
病以上に深刻です。

ルカによる福音書一〇章三三節では強盗

どもに襲われて倒れている旅人に対して、よきサマリヤ人が応急処置の薬として、旅人の傷口にオリーブ油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行きました。イエスさまは悪霊どもに襲われて、人生の旅路に倒れていた私たちを哀れんでよき隣人となって、心の傷口に、聖霊さまの油注ぎと喜びある血潮の福音、そして結びの帯として完全な愛で包み、宿屋なる教会へと導いてくださいました。その真実な犠牲の伴った愛こそが私たちの心をいやすアガペの愛です。

新約聖書を調べると、聖霊さまを受ける前

のペテロは内なる人に大きな傷を受けた人  
でした。それは、愛するイエスさまを三回も  
裏切ったことによる深い心の痛みによるもの  
です。

「あなたは今日、今夜鶏が二度なく前に私  
を知らないと言います。」

(マルコ 14:30)

事前にそうならないようにと警告の伴った  
イエスさまの預言がみごとに成就しました。  
その夜ペテロは大祭司の庭の中、役人たち  
と一緒に座って焚き火に当たりつつ、イエス  
を知らないと言一度目裏切りを告白し、出口  
の所でもイエスを知らないと言二度目の裏切り  
を告白し、三度目はエスカレートして漁師た

ちの使う呪いの誓いをしながらイエスを知らないで完全な裏切りを不信仰告白すると、その時すぐに通常、昼間鳴くはずの鶏の声が珍しく夜中に二回続いて鳴り響きました。「コッケコッコー、コッケコッコー」その瞬間ペテロはイエスさまの預言の御言葉を思い出して、我に返り、本当に悲しくなって激しく泣きだしました。この日からペテロは鶏ノイローゼになったことでしょう。

鶏はペテロにとって裏切りの象徴となりました。朝ごとに明るくなるとちっぽけな鶏の目覚ましの声「コッケコッコー」にドキッと大きく驚かされ、心臓の高鳴りを覚えつつ、お目覚め悪く一日うつろ、漁に出て行き祝福さ



れず不漁に疲れ果てて帰宅した夕方には  
食卓にのぼった奥さん特製のチキンを前に  
ため息ついて考え込み落ち込むペテロ。

「ああ、私はこの鶏の二度鳴くまでに三度も  
イエスさまを裏切り、十字架に追いやってし  
まったのだ……」

そんな惨めな思いに日々悩まされる憂う  
つなペテロに対して愛と赦しの神イエスさま  
は彼をいやそうと、復活後のある朝、テベリ  
ヤ湖畔にたたれました。ペテロは復活の主  
を発見し、喜びのあまり頭が回ってしまい、  
なぜか上着をまとってわざわざ重く泳ぎにく  
い状態になってから湖に飛び込んで百メー

トル自由型全力遊泳して、陸地にはい上がると、そこに炭火とその上に乗せた魚とパンを発見しました。

他の弟子たちは冷静にとれた魚をしっかりと船に乗せたまま楽に漕いで湖畔まで到着しました。そこでイエスさまの準備された魚とパンは夜通し働いた空腹な弟子たちをいやす大きな慰めでした。

今日もイエスさまが臨まれる時、過ちを犯す私たちにムチで打って、厳しい刑罰で懲らしめてから心を変えさせるよりむしろ、まず恵みを与えて豊かに食べさせ飲ませて喜びと祝福で心いっぱい満たしてくださって

から、自らの過ちを自然のうちに悟らせて心を変えさせることが多くあります。

これは心理学的にも人を更正させるのに、最も良い治療法です。私たちもイエスさまに習って子供たちや愛する人を更正させるのにムチ打つよりも、愛して受け入れ、祝福で満たしてあげてから、心を開かせて悟らせるのが最も効果的です。

朝食をすっかり済ませて、満腹で心地よくなったご機嫌のペテロに、イエスさまは暖かく質問されました。

「ヨハネの子シモン、あなたはこの人たち以上に、私を神のアガペの愛で愛しますか」

ペテロは難なく一度目答えました。

「はい。主よ、私があなただをフレオの愛でお友達として愛することはあなたがご存じです」

イエスさまは言われました。

「私の小羊を飼いなさい」

その後、ほどなく再びイエスさまは同じ質問をされました。

「ヨハネの子シモン、あなたは私を神のアガペの愛で愛しますか」

「ペテロは自分の耳を疑いました。あれ？さっきもイエスさまは同じ質問をされたのでは…」

そう心に思いながらも素直なペテロは答え

ました。

「はい主よ、私があなただをフレオの愛でお友達として愛することはあなたがご存じです」

イエスさまは言われました。

「私の羊を牧しなさい。」

その後、イエスさまから再び第三回目の同じ質問が悟りなきペテロにあわせて臨みました。

「ヨハネの子シモン、あなたは私をフレオの愛でお友達として愛しますか」

ペテロはここで三度の同じ質問にさすがに気がついて「私はイエスさまからそんなに信用されていないのか、あるいはこれはいじめ

なのか……」などと心につぶやきながら小さい心を痛めつつ告白しました。

「主よ、あなたは一切のことをご存じです。あなたは私があなただをフレオの愛でお友達として愛することを知っておいでになります」

ここでなぜイエスさまは三度も同じ質問を繰り返しペテロに対してなされたのでしょうか。一度だけでは足りないのでしょうか。なぜ三度も愛の告白を要求されたのでしょうか。それは、かつて大祭司の庭で役人たちと焚き火を囲みつつ三度、イエスを裏切る告白をした病めるペテロの心の傷を完全に

いやすためだったのです。

三度もイエスさまを知らない、知らない、知らない、と告白してすっかり右に曲がってしまったペテロの偽りの口を、今度はイエスさまを愛する、愛する、愛する、と三度正反対に告白させることにより、左にすっかり曲げて正常な位置に戻していやすためだったのです。イエスさまはわざわざペテロのために、裏切りの当時と同じような環境を再現して臨まれたのです。

当時、ペテロが悪者の役人たちと焚き火を囲んで恐れながら冷たい雰囲気で座って

いたその日の正反対、今度はイエスさまの愛する弟子たちと共に、焚き火を囲んで暖かい雰囲気でニコニコしながら手にはちやんとペテロの魚とパンを持たせて座らせ、環境的にも靈的にも夜だったその日の正反対、今度は復活後の朝にいやし主イエスさまは臨まれたのです。

心のいやしは今日の教会にも重要な課題です。もしイエスさまがペテロの引き裂かれた心を放置したままこのようにいやされなかったならばその後、初代教会の重要な柱である使徒ペテロは決して誕生しなかったでしょう。しかしペテロは完全にいやされたか



らこそどんな鶏をも恐れずに強く雄雄しく大胆に説教して、リバイバルを導けるように変えられたのです。ペテロは三度目、心に痛みを感じつつもイエスさまへの愛の告白を要求されました。

今日も私たちが内なる人のいやしの祈りをするとき始めはむしろ心の痛みが伴うことがあります。内なる傷ついた本当の自分自身を取り扱うことは痛みです。最も触れたくない所へメスを入れるのです。しかし、どうしてもこの作業が必要です。私たちの心の傷を根本的にいやす力はただ、神さまのアガペの無条件の犠牲愛、その生きた証し、十

十字架で注がれたイエスの血潮を心の傷口に注ぐしかありません。

## 切った枝

旧約聖書(第二列王記 6:6)エリシャの時代のこと。一人の人が材木を倒している時、誤って斧の頭をヨルダン川の水の中に落としてしまった事故があります。その時、預言者エリシャは、その落ちた場所へ一本の切った枝を投げ込むと、神さまの奇蹟でなんと斧の頭が水の上に浮かびました。そこでそれを直接拾い上げて無事回収することができました。

私たちの心は絶えず流れるヨルダン川の流れのようです。そこには日々、喜怒哀楽があり、絶えず変化して川の流れのように動きます。しかし、決してそこに本来あってはならない斧の鋭い頭を沈めておいてはいけません。ペテロの場合、イエスさまを裏切ったという失敗が心のヨルダン川の中、斧の鋭い頭となって沈んでいたのです。彼が忘れようとして漁に出て行き、そこで活発に活動すればするほど、むしろ一緒になって激しく動く斧の頭が、もっと鋭い凶器となって内側から傷つけられ、ペテロの心の内側の傷口を増大する悪循環となっていたのです。本来あってはならない斧の頭、これを取り除

く奇蹟を起こすにはただ一本の切った枝、すなわちイエスさまの十字架の木をその問題の起きた只中、ちょうどその場所めがけて投げ込まなければなりません。

心の傷を受けたその場所に、イエスの十字架の血潮を受けて祈る事です。その時、隠れ沈んでいた本来あってはならない斧の頭が心のヨルダン川に浮かぶ奇蹟が起きて発見し、これを速やかに取り除くことができるのです。イエスの血潮の力を信じて胸に手を置いて一人祈ってみてください。心のもつと病んでいる問題について祈ってみてください。きっと自分も忘れていたような末清算

の罪や呪い、赦していない人などが心のヨルダン川にふっと浮かんできては再発見できるかもしれません。

聖霊さまの力で奇蹟的に示されて浮かぶ斧の頭はただ告白して取り除くだけで後は楽になれます。私たちの現在の人格形成とは一日によらず、年齢相応の年月の中で体験した数々の出来事が大木の年輪のように心に刻まれて、私たちも気付かない潜在意識の深いところから今日に大きな影響を与えているものです。八〇歳なら八〇年の大きく深い年輪、一〇歳なら一〇年の小さくかわいい年輪があり、そこに人や社会から

受けた成功や失敗などがすべて良かれ悪しかれ記録の様に刻まれております。

私の知り合いのある兄弟は心の年輪に憎しみという深い傷が刻まれていました。子供の頃からいつも父親に認められずに育てられ、「おまえはだめな奴だ。どうせ何をしても出来ない」という否定的な言葉を一方的に受け続けたため、次第に父親に対する反発と憎悪が心の中を支配していました。ある日、兄弟が奥さんと家で祈り会をもっている時。人の罪と義と裁きを明確にする聖霊さまの臨在の中で心の奥底に隠されていた憎しみがはっきりと現われ出る体験がありました。

た。普段は本当に穏やかで紳士的な兄弟が突然、苦しみのあまり、ゆかに転がって暴れだしました。奥さんの必死な執り成し祈りのなか、意識を失うほどの苦しみを受けながらも、兄弟は一つの幻を見ていました。

なんと赦すことの出来ないほど、心底憎いあの父親が、はっきりと目の前に現われ、次の瞬間、幻に鋭い出刃包丁が現われました。兄弟は子どもの頃から果たせないでいた復讐心に燃え、自らを制御できずにこの包丁を手に取り、無我夢中で幻の父親に襲いかかりズタズタにしてしまったのです。その後、幻からさめ、我に帰った兄弟が確認したも

のは、熱く執り成し祈り続ける奥さんの愛の姿と、自分が引き裂いた記憶もないズタズタの新聞紙と、手当たり次第に打ち壊された物でした。心の年輪に深く刻まれていた父親への憎悪。これを啓示された兄弟は信仰ですべてを赦し、自らの心の傷のいやしを祈りました。今、兄弟は過去をすべて証しできるほど完全にいやされて献身し、奥さんと共に讃美に恵まれた立派な教会を開拓しています。

人間は一～三歳までに精神発達が完成され、四歳では知能が九〇%形成され、六歳には一生涯暮らすための人格が形成さ



れると言われ、七歳位までの重要な時期に、イエスの血潮による守りの祈りなく無防備であったならば、他の環境的要因から一生涯悪影響を及ぼすような心の傷を受けてしまうことがあります。例えば、共産主義圏では生後から七歳位までの間、特に力を入れて一貫した無神論と理想国家理念の洗脳教育を徹底的に与え続けるため、彼らは成人後も、なかなかその誤った思想から離れなくなります。同様に私たちの場合もどのような悪影響を無抵抗の内に外部から受けているかわかりません。

私の場合、子供の時、身近な人から「イエ

ス・キリストが十字架で死ぬとき、血潮が一滴もでなかったんですよ」と教え込まれた記憶が今でもあります。悪魔は将来、私が救われてこのようにイエスの血潮の本を書くことを事前に知っていたのでしょうか。いずれにせよ、私たちにはどんなに誤った教育や深い心の傷があっても、いやし主イエスが共におられます。イエス・キリストは昨日も今日も永久に変わらないお方であるため、昨日の二千年前、巡り歩いていやしをなされたイエスさまと同じく今日も継続していやしをなされます。日々の生活で心につく今の傷をいやされるイエスさまは過去についての古い心の傷もいやしてください。

またある兄弟は小学生時代、五年生の頃、愛するお父さんの突然の病死により生涯の大きな心の傷を受けてしまい、そのまま完全にいやされない状態で成人しました。通常は元気で明るく立派な青年なのですが、ある瞬間わけもないのに過去の記憶をたどると無性に寂しさと悲しさが心によぎり、落ち込んでしまうことが度々ありました。そんなある日のこと、イエスさまに出会い救われて神のアガペの愛を知るようになったため、彼は自分自身の心のいやしのために一生懸命祈ることを覚えました。

兄弟は過去についた心の傷が原因で現在

心がむなしくなることを知り、このようにインターヒーリングの祈りをしました。

「主よ、私が産まれてから一歳になるまでの間、一体何があったかは知りませんが、あなたはすべてご存知です。あなたを受け入れます。その頃、もし私が誰かから受けた心の傷がありましたら、今、いやしてください」

このようにイエスの血潮の力によりすがって産まれてから一歳までの期間のいやしの祈りを数分間祈り、次に一歳から二歳までのいやしを同様に数分間と同じ祈りを次々と過去からさかのぼって現在に至るまで祈り始めました。その時、十歳から十一歳までの期間のいやしを祈り求める兄弟に突然大

きな変化が見られました。心の奥底からものすごい深い痛みと悲しみの内に涙が次々と込み上げてきて、大声で激しく泣き始めたのです。泣いて泣いて、その頃の自分にさかのぼって深い情景のなかを旅する旅人の様に、過去について祈り込むと、その後はしだいに平安な心に変えられていきました。後でこれら一切のインナーヒーリングの祈りが終わり、確認してみると最も涙のあふれた十歳、実にその時期こそ愛するお父さんとの死別により心に大きな傷を受けたその年だったのです。そしてこの祈りの後は、もう落ち込むこともほとんどなくなり、心の深い傷もいやされ、過去のことを思い出しても心

が痛まなくなっただというのです。心の傷がいやされた兄弟は今、同じような心の痛み持つ人々を上手に解放していやす力ある教会の牧師になりました。

私自身もこのようなインナーヒーリングの祈りをしたことがあります。私の場合はそのような心のいやしの祈りの必要性を示されるような過去の再現体験があったからです。というのは私がまだ小学校五年生だったころ、私の家に泥棒が入り私が第一発見者となりました。

夕暮れの頃、カーテンを閉めないで電気をつけたまま茶の間にいると誰もいないはず

の隣の座敷の部屋の障子ごしに突然懐中電灯の光が走り、私は一体誰がそこにいるのだらうかと不信に思いながら近づいて戸をバツと開けてみるとびっくり。座敷なのに長靴を履いたうちの家族ではない変なおじさんが懐中電灯片手に物色中でした。

変なおじさんも私にびっくりして、そのまま何も盗まないで窓から飛び降りて逃げて行きました。私は変なおじさんだなあと思いながらも、それが泥棒であることを悟り、子供心に恐れがきました。それから時間が過ぎ、すっかりすべてを忘れたはずの中学校二年生のときです。

夕暮れの頃、私が以前のようにカーテン

を閉めないで電気をつけたまま茶の間にいると誰もいないはずの隣の部屋に一筋のせん光が走りました。その瞬間、私の脳裏には完全に忘れていたはずの、あのいまわしい過去の記憶、変なおじさんがよぎり、恐ろしくなってそろりと家を抜け出し警察を呼びました。すみやかに警察官がパトカーでっこよく到着し、座敷の戸をバツと開きました。しかし開けてびっくり。そこには泥棒が入った形跡も変なおじさんも全くなく、ただ私が変なおじさんとなってしまう赤面する私の目から火柱がボーッと出ました。結局、駐車する車のヘッドライトが乱反射したものを、私が早とちりしたものでしたが、過去に



忘れたはずの事件がいやされない私の心の潜在意識の中で悪く働いた結果でした。

このような体験を考えると、やはり過去の内なる人のいやしは絶対必要であると悟られ、信仰を持ってから実践しました。私のインナーヒーリングの祈りは、まずは産まれてから一歳になるまでの期間について、数分間、胸に手を置いて祈りました。

「主よ。この時期にもし私の受けた傷や罪があったら赦し聖め、イエスさまを私がまだ知らなかったこの頃の私を抱きしめ包んでください」

こうして祈り始め、一歳から二歳、二歳から三歳と各数分間ずつ祈り、やがて私が五～六歳であった頃のいやしの祈りをしていると、本当に私自身が一番驚きました。それまで何も考えなかったのに、突然イエスの血潮の力が私に臨み、私の口から六歳の子供のような声が出て、泣き叫びはじめたのです。

「うわーん。お兄ちゃんにいじめられた！」

私は自分自身、非常に慌てふためいて驚きつつも、この時期の心のいやしを熱心に祈りました。それは傷ついていた私の内なる人の叫びが、知識の言葉の賜物により、言

葉となって現われたものであって、悪霊の叫びではありませんでした。聖書には確かに本当の自分自身である内なる人があると言っています。あなたの隠された内なる人は健全で大丈夫でしょうか。

ここで私が個人的に深い感動を覚えた個人的な証しを、もう一つさせていただきます。私の妻は母が牧師で、兄弟たちも牧師や長老であり、親戚も皆クリスチャンで、子供のころから早く救われ、とりなし祈る習慣をもって育った人でした。そんな妻がまだ小さかった頃、韓国でいつものように祈っていると、突然、六歳くらい見たことのない子供

が現われて泣きながら「助けに来てくれ！」  
と呼びかけている幻がはっきり見えました。  
しかし当時もその後の人生の中でも、その  
子供と出会うことはないまま成人しました。  
ちょうど使徒パウロが幻でひとりのマケドニ  
ヤ人が「マケドニヤに渡って来て、私たちを  
助けてください」と懇願するのを見たような  
種類の啓示でした。

今、宣教師として来日した妻は確信してこ  
う言います。「あの六歳の傷ついて泣いて  
いた子供は、あなただったのね」

神さまは時を越え、空間を超え、国境も飛  
び越えて事前に二人が出会って国際結婚

する前からとりなし祈らせてすべてを準備されていたのです。感謝します。

人間の心は例えると机の引き出しのようでもあります。そこに数々の人切なものをしまい込み、あるいは取り出して用いるように、人の心も過去に学んだ経験を通して蓄えた必要なものを現在生きるのに役立てて取り出します。しかしクリスチャンはこの机の引き出しの中に、もう一度手をつけて整理整頓する必要があります。古い思い出の引き出しを開けて、良いものは残し、悪いものを捨てることです。数々の引き出しの中でもまだ主に対して開かれていない鍵付きの閉ざされたままの闇の分野がないでしょうか。最も

解放されていない分野、そこに過去の悲しみをそっと詰め込んだまま閉ざしていませんか。主はこれを開いていやしの光を当てたいのです。御言葉は約束します。

「主は心の打ち砕かれた者をいやし、彼らの傷を包む。」(詩篇 147:3)

この内なる人をもいやし、精神的に解放と自由を与える力あるイエスの血潮を讃美します。

聖書ではエレミヤに対して「わたしは、あなたを体内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者として定めていた」(エレミヤ 1:5)と言われ、人間は母の体

内にいる時から、すでに主の御計画と、聖別を受けられる人格者としての人間であることを認めています。

ルカによる福音書一章四一節では、エリサベツがイエスさまを身ごもった母マリヤの挨拶を聞いた時、ヨハネはまだ生まれていなかったけれども、その声を聞いて母エリサベツの体内で喜び踊ったことが証言されています。ヨハネは生まれる前から型霊さまに満たされていたのです。ですから、実は私たちの内なる人のいやしは出産前の体内の赤ちゃんに至るまで、独立した人格者である人間として必要です。赤ちゃんも傷を

受けることがあるからです。

たとえば学者によると、妊娠した母親が何かの大きな恐れに捕らわれて、不安と緊張にさいなまれると、ストレスを受けた母親の脳にアドレナリンが分泌され、思考力を低下させ、体さえも老化させ、これを我慢し続けると最後にはガンを誘発します。そしてこれら一連の過程の中で母親のお腹の皮がはってしまい、体内にすむ赤ちゃんも狭くなった窮屈さの中で、微妙に母親と同じ圧迫と恐れを感じ取るそうです。

さらに胎内の赤ちゃんは八カ月を過ぎると、外部の音を認識して聞き分ける聴覚システ



ムのニューロンをすでに大人と同じ数まで保有し、記憶をつかさどる脳内システムの海馬も正常に働き日々、記憶、学習しています。そのため、最近では出産前に胎児の性別を判別出来ますが、これが両親の期待はずれであった場合、胎児の心に傷となることもあるそうです。両親が女の子を望んで期待していたのに、胎児が男の子と分かる両親は落胆します。両親は語ります。

「ああ、残念だ。せっかく女の子の服をたくさん準備して、かわいい環境を整えていたのに……」

しかし、その時、注意しないとはいけません。胎内の子供は微妙に女の子に生まれなか

ったことに対する自分への拒絶感と劣等感、親に愛されていない、喜ばれていないという失望の思いを本能的に敏感に感じ取り、心の傷を持って生まれてくることがあるそうです。このような拒絶を受けた赤ちゃんの傷がいやされていないと将来、成人後にこれが現われて反社会的な拒絶反応を持った、周りとうまく打ち解けられない孤立した性格を持った人になることがあるそうです。

ある聖会で悪霊に憑かれた二十代の女性が連れてこられました。女性は祈りを受けるなり、すぐに暴れてから床に倒れ込み、まるで胎内にいる胎児のように頭を垂れて体

を丸め、手足を前に出して丸めたのです。  
説教者は命じました。

「イエスの御名によって命ずる。拒絶の霊よ、  
出て行け！」

その瞬間、女性から幼児期に受けた心の傷  
についていた悪霊は出て行き、自由になっ  
て立ち上がったのです。私たちは生涯のど  
こで傷を受けているか分かりませんが、誰で  
も例外なく全知全能の神の御前、時には徹  
底的に心のボーリングをして、心のいやしを  
祈り求める必要があります。

肉体のいやし 一本の木

霊魂のいやし主イエスはさらに肉体の病をもいやしてくださいませ。今の時代は過去のどんな時代よりも食物が危険な時です。アダムのため呪いを受けた土地であるため、野菜も果物も穀物もすべて地上から生じる産物は、全くの無農薬では生産出来ないようになっていきます。すでに汚染された土壌に、より多くの収穫のための農薬や化学肥料に殺虫剤、収穫後は防腐剤に光沢のワックス塗り。

あたかも野菜畑というより、野菜工場と言った方がふさわしいような現代農業です。また、輸入品の放射能汚染や、遺伝子組み

替え食品の発ガン物質の心配。家畜においては太らせるための諸々の抗生物質や成長ホルモンに化学飼料。さらにはダイオキシンや酸性雨。大気汚染や有害物質など、私たちを取り巻く食物と環境は、いつ健康を害しても不思議でないほど悪化しています。事実、病気の多くは食べることから原因している物が多くあります。

アメリカで警視庁が発表したデータによると凶悪犯罪で検挙された第一級受刑囚のうち約七～八割は、食生活が乱れており、粗悪なスナック菓子やレトルト食品のような栄養の乏しくかたよった食生活を繰り返してい

たことが知られています。すなわち栄養のバランスが乱れている所から精神面にも不安定をまねき、最近の言葉でいう切れやすい性格を作っていたというのです。栄養のバランスがとれた家庭料理を家族と共にとるといふ、本来人間当たり前の基本を正すことから相当分やまいを未然に防げるようです。

また、日本のような火葬制度ではない葬儀スタイルをもつアメリカでは、最近、死後に土葬された遺体が通常なら数カ月で自然と朽ち果ててくるはずのものが、数年たっても腐らずにむしろ風化したままミイラにな

ってしまうものがあると報告されています。その意味は食物に含有している防腐剤が、食物摂取とともに一生涯体内に蓄積され続けて、やがてはその人自身も腐らずにミイラ化されてしまう現象であり、現代の食物から来る目に見えない害は、確実に人類をむしばみ続けているという一つの証しです。

出エジプト記一五章二五節では、イスラエルの民が荒野の旅路で飲んだマラの水に腹痛を覚え苦しみました。苦くて飲むことが出来ない、毒のような飲み水です。しかし、この汚染された苦い水を、飲むことの出来る甘い水へ変える奇蹟がそこにありました。

これはむしばまれる現代人にも必要な特効薬です。主から示されたモーセが水に投げ込んだ一本の木です。

これが奇蹟を起こし、飲めるように水質改善したのです。今日、この飲み水をいやした一本の木はイエスの十字架を象徴します。私たちが食前毎の感謝の祈りを捧げる特、イエスの十字架の血潮が食物中の有害物質を解毒し、安全な食べられる清い物に変化させるのです。

「食物は信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝



して受ける時、捨てるべき物は何一つありません。神のことばと祈りによって、清められるからです。」(第一テモテ 4:3~5)

ですから、私たちは市場に売っているものは偶像に捧げられた食物以外は何でも安心して感謝のうちに食べられるのです。万一、悪いものを食べて腹痛を起こしたなら、胃袋というにがいマラの水に十字架の木を役げ込んで手を置き、イエスの血潮の能力で祈ってください。御言葉は信者に約束します。

「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつか

み、たとひ毒を飲んでも決して害を受けず  
また病人に手を置けば病人はいやされま  
す。」(マルコ 16:17、18)

信じる人々なるクリスチャンは病をいやし、  
目には見えなくとも病人の背後に実在して  
働く霊的存在、病の悪霊を追放することが  
できます。すべての病が悪霊によるもので  
はありませんが、ヨブを苦しめた病のように  
悪霊に原因するものもあります。

信仰を持ってから、私は不思議に知識の  
言葉の賜物を受けました、これは預言に似  
ているけど、また異なる賜物で、通常分から  
ない霊の世界のいろいろなことが、ある瞬

間、聖霊さまによって開かれ見えることがあります。初め、救われた頃、主日礼拝中に一番前に座り、聖徒の一人として御言葉を聞いている時、幻におちました。夢は寝ている時見ますが、幻は起きていながら見える神の啓示です。脳の幻でした。

不思議と気持ち悪くはありませんでしたが、私は初めこれを何かの私の罪のゆえだと思い、怖くなって心を探り悔い改めをしました。しかし、この鮮やかな脳の幻は一向に消えません。そこで今度はこの幻は悪魔によるものだと結論付けて心の内に命令しました。

「脳みその悪魔よ！出ていけ」

しかし、私は礼拝を妨げる全く無秩序な悪

魔の仕業だと思い、命令したけれども一向に幻は消えません。そこでよく見ると悟りが来ました。脳の右上の所に黒い石のようなできものが見えるのです。これが悪いものだ。「イエスさまの御名で命じる。この石ころ消えろ」

そう心の中で祈り命じると、今度はこの石だけが消えて全くいやされた鮮やかな脳になって幻の全体も消えました。不思議な幻でした。意味も分からず当惑しているとメッセージ終了後、講壇から牧師先生が報告しました。

「今日、私たちの教会員のある姉妹が脳にできた腫瘍を取り除く難しい手術をしていま

すから、そのために祈りください」

悟りが来ました。イエスさまはいやし主なのだ。その後も病んでいる体の一部分の幻が  
肢体として見えることの意味が分かりました。

ある日、私は激しい偏頭痛で苦しみ、強い頭痛薬を飲んだけれども全く効果がありませんでした。そこで、「これは霊的な病だ、信仰で戦おう」と決心してしばらく祈るとうっとり夢心地になりました。この眠り自体、現実の頭痛の激痛よりの救いではありましたが、それ以上に啓示の夢を見ました。見ると私の頭から背中にかけて、何か透明な半液体状のボンドのようなべっとりとした厚みある

ものが衣服の上着か長服のように巻きついてくっついていました。

「ああ、これが頭痛を起こす病の悪霊だ」

私はこの透明なべったりくっつく物体を捕まえて、力強く持ち上げ命じました。

「イエス・キリストの御名によって出ていけ！」

そう命じて投げつけるとこれが体からガバツとはがれて、遠く投げ飛ばすことができました。そしてすぐに目覚めると先程まで床を転げまわるほど苦しかった偏頭痛が、完全にいやされて聖霊さまの喜びだけがありました。悟りが来ました。

「私は今まで色々な悪霊どもと夢や幻、実

際にも戦って追い出しているけど、病の霊だけは他の悪霊と違って、いつも透明で目に見えない性質の悪霊だ。だから時々その存在がこのような人の体の一部分の肢体についているシミや腫瘍の幻として示されるのだ」

病の霊は夢や幻で人間のような形で姿が見える他の悪霊どもと全く違って、霊の世界でもその姿が見えない特別な性質を持つ悪霊ですが、他の悪霊と同様、実在します。ヨブは悪性のライ病に侵された時、その状況をこのように告白しています。

「夜は私の骨を私からえぐりとり、私をむしば

むものは、休まない。それは大きな力で、私の着物に姿を変え、まるで長服のように私に巻きついている。」(ヨブ記 30:17、18)

ヨブの体験は本当に文字通り着物に姿を変え、長服のような形で張りつく見えない大きな力を持つ病の霊による苦しみであったと私は確信します。これを祈りの力で追放しなくてははいけません。

霊の戦いには経験深かな指導者が必要です。私の場合、私がこの世に捨てられ、霊的指導者もなく、夜ごとに数々の悪霊が現われては、首しめと暴力によりひどい苦しみを受け、絶望のどん底にあった時、私を



見出して拾いあげてくださった私の妻の母であり、生涯の恩師である純福音教会の今も現役の宣教師、朴栄玉牧師先生です。私はこの真実な牧師先生の大きな愛と犠牲の中で育てられました。朴牧師先生を通して現われたいやしの奇蹟を一つ証しさせていただきます。

以前、私たちの教会に心臓病をひどく患う聖徒がいました。三カ所の病院に行きましたが、同じく治療不可という本当に死を待つばかりの重病患者でした。そんなある日、水曜礼拝に来てメッセージを聞いていた時のことです。姉妹は突然幻を見ました。講壇

の朴牧師先生の上に白く長い衣を着たイエスさまが立たれ、その足元から真っ赤な血潮が流れ出ているのです。そしてその血潮の川が次第に自分の座っている席の方へゆっくり流れてくるのを見、姉妹があっと思う間にその血潮の川は自分をとらえ、心に熱いものを感じました。「私は今いやされた。」聖霊に満たされた喜びのうちに礼拝後、病院に行き、検査してみると完全にいやされていました。イエスの血潮は肉体の病もいやす神の力です。

また、ある姉妹は大変なひざの痛みがあり、階段を降りるにも一段一段がゆっくり静かな

真剣勝負でした。そんなある日のこと。金曜徹夜祈祷会で姉妹が祈っていると、突然目の前に開かれたクリアーな幻が現われました。そこに見たものはひどくむち打たれ、引き裂かれたイエスさまの背中そのものでした。イエスさまの背中には無数のむち打たれた傷跡が生々しく残り、深く肉がえぐられており、そこから真っ赤な血潮が大量に流れ出ていました。幻を見つめるうちにイエスさまのみ声が聞こえてきました。

「あなたが信じようと信じまいと、私は現実にあなたのいやしのためにむち打たれたのです。なぜこのことを信じないのですか？」

姉妹は驚きのあまり震える声で繰り返し告

白しました。

「信じます。信じます。信じます！ あなたは私のためにむち打たれて血潮を流し、苦しまれたことを。私は信じます。イエスさまの打ち傷によって私はいやされました！」

その日の帰り道、姉妹は階段の所ですでに完全にいやされて自由に昇り降りできる自分を再発見しました。

トルコの聖リピヤ寺院に「イエスの審問及び処刑に関してカイザルに送ったピラトの報告書」という五十冊に至る当時のローマ皇帝への報告書が所蔵されています。これは聖書の証言の上に出るものではありません。

んが、確かな昔の公文書です。それによるとイエスさまが人として歩まれた当時、荒っぽく傲慢な律法学者やパリサイ人たちからイエスさまの言動に対する抗議が毎日のように総督府に寄せられ、イエスさまに対する陳情書がカイザルに提出されたこともあって、さらなる迫害と暴動を懸念した総督ピラトは手紙を送って、イエスさまと総督府で一度出会ったといわれています。それは公生涯のうち、三年が過ぎたくらいの時期、十字架を直前にしてのことです。

その時、イエスさまは総督府のピラトに対して静かに語られました。

「地の君主よ。…まことにあなたに告げますが、シヤロンの薔薇が咲く前に正義の血が流されるでしょう」

そこで、総督ピラトはナザレの青年イエスの謹厳で、崇高な態度と語られた御言葉に深い感動に打たれて、意味もわからずに答えました。

「あなたの血は流されないであろう」

しかし、その後、過越の祭りがおとずれ、イエスさまの定めの時が来ました。ピラトの庭でむち打たれ流れ出たイエスの血潮はゴルゴタの丘へ連れ出される途中、総督府の玄関の階段に点々と、こぼれ落ち、そこにそのまま染みついていたと記録されています。

これほどまでにイエスさまは大量に出血され、肉の衣を裂き十字架につけられていたのです。さらに十字架の上でも生き続け、動くため手足の釘打たれた傷はかさぶたでふさがらず流血は続いたのです。私たちのために身代わりとなって、これほどまでに苦しんで血潮を流されたイエスの恵みに感謝していやしを受け取りましょう。

聖書は断食についても勧めておりますが、断食治療には神さまよりの直接のいやしに加えて医学的にも血液中の老廃物を取り除き、健康を回復する作用があり、長寿の秘訣でもあることが知られております。また、人

の命は血にあることも聖書は教えており、輸血も薬も認めております。ヒゼキヤの腫れ物にはひとかたまりの干しいちじくが薬として神さまから与えられており、恐れが多くストレスから胃腸が弱かった若いテモテには少量の葡萄酒を薬としてパウロは勧めております。

薬について黙示録三章一八節では空中携挙直前の今の時代は医学も発展し、物質的に豊かな時代ですが、霊的に盲目にならないように、主から目に塗る目薬を買うよう勧めております。聖書はまた、西洋医学ばかりでなく、東洋医学も認めております。イ



エスさまが奇蹟的に盲人をいやされた時、イエスさまのつばきを中東の泥に混ぜたものを盲人の目に塗ってシロアムの池で洗うように言われました。イエスさまのつばきプラス中東の土、これは立派な漢方薬でしょう。ですから、私たちは病気になって病院へ行ったり、薬を飲むことは不信仰ではありません。病院も薬も神さまがいやしの手段の一部として、この世におかれたものです。ただ、現代医学でも治療ができなかったり、特別に信仰が生じて導かれた時は薬を投げ捨てて、断食して祈りを求めて冒険してください。いやしの奇蹟を現実に信じる時、イエスの血潮が流れてきて奇蹟を起こします。

## 信仰と献身する力

第五にイエス・キリストの血潮は、私たちが御言葉に従順できる信仰と献身力を与えます。

私は恵まれた日本基督教団の教会で救われ、現在、純福音教会の牧師ですが、聖霊さまを受けるまでは、悪霊追放や祈りとか血潮のような、霊的なことがらのメッセージが嫌いでした。しかし、今は全く反対で、牧会のかたわら好きで研究没頭していた霊的に重要な題材、イエスの血潮について一冊の本をまとめて出版しなければならないという一種の使命感に似た燃えるビジョンに心が

捕われました。朝に夕に、この思いが熱く心から離れないため、おもいきって断食して、主の御心がしるしによって示されるように求めました。もしも出版が神さまの御心ならば従います。ただし、一、聖徒の中から出版を強く勧める声が聞こえてくるように。二、必要経費がすべて与えられるように。三、出版すべき内容について示されるように。と祈り求めました。するとその翌日、主目礼拝終了後、一人の神学生が、突然、私に強く出版するように勧めてきました。私はそのようなしるしを求めていることを誰にも話していなかったため、これは確かに主が兄弟の口びるを通じて語られているのだと感心しながら

ら聞いていました。そして、もうひとつのしるしも与えられました。私の妻が朝、目覚めかけたころ耳元で確かにはっきりと語られる聖霊さまのみ声を聞きました。

「誰かが特別献金を捧げましたよ。急いでポストの所へ行って見なさい」

その御声を聞いた直後、ある聖徒から電話がかかって来て、出版のための経費をすべて捧げますとの知らせを受けました。さらにその後、私の妻は韓国人ですが、義理の姉から国際電話がかかって来て、一つの夢の証しを聞きました。姉妹が夢を見るとききれいな川が流れており、そのほとりに私が聖霊さまに満たされた清い状態で立っていたそう

です。そして次の瞬間、上空に「7」という輝く数字が現われたそうです。その証しの結論は、7は神さまの完全数だからきつといいことが起こるのでしょう。というありがたい励まし言葉でありましたが、私にとってはその夢の内容を聞くとすぐに解き明かしができました。「7」の意味は、今私が手がけているイエスさまの七つの血潮の意味についての内容で、本を完成して出版しなさいという求めたしるしの答えでした。

さらに個人的にも聖書から文書伝道をうながす内容の御言葉をいくつかレイマとして受けました。面白かったのは、これらすべての求めたしるしの答えがちょうど七日以内で

すべてそろって与えられたことでした。

今、私が確信していることは、最も大切でありながら意外と語られない御子イエスの十字架の血潮の真理を、すべてのクリスチャンがより深く正しく理解することを、父なる神はじつに強く願っておられるということであり、この御心のために私は最も小さなしもべですが、聖霊さまによって動かされました。皆さんも人生で何かの決定を下さなければならぬ必要に迫られた時、ぜひ自分の思いを打ち消して御心のしるしを求めて祈ってみてください。きっと御心にかなった良いことがしるしと不思議を伴なって起き、御旨に

従う献身力が与えられるでしょう。

## 血の汗

私たちがいやされると同時に主の愛に目覚めた献身力が強まります。

「イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」(ルカ 22:44)

イエスさまは十字架の道を行くあがないの犠牲としてこの世に来られた救い主、完全な神であると同時に完全な人間でもありました。そのため旧約聖書の定めと、父なる神の意志に従い、十字架の道に行くには、人

間としての死を避ける性質を祈りのうちに打ち砕き、たとえ死であっても、父なる神の御旨に従える強固な意志を得なければなりませんでした。人の心を神の御言葉に従順させて強くする力は、讃美と祈りを通して流れてきます。

「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙を持って祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」(ヘブル 5:7)

十字架を直前にして、イエスさまは弟子たちと讃美の歌を歌ってから、平安の内にオリ



ーブ山の祈禱院へ向かいました。ゲッセマ  
ネの園にて徹夜祈禱会です。三人の弟子  
たちの眠る中イエスさまたったお一人が、人  
間からの一切のとりなし祈りなく、熱く三時  
間祈られました。主のしもべが聖徒たちのと  
りなしの祈りなく、奉仕することは辛く危険な  
ことです。しかしイエスさまはお一人で繰り返  
返し人間としての弱い心を打ち砕き祈られ  
ました。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから  
取りのけて下さい。しかし、わたしの願いで  
はなく、みこころのとおりにしてください。」

(ルカ 22:42)

真の祈りとは、神さまを私たちのそばに引き寄せるものではなく、私たちが神さまの側に行き神の御心を従順に受け入れるものです。イエスさまはこれから十字架にかからなければならぬという計り知れない精神的重圧を一心に引き受け、地面にひれ伏しながら、祈られるとその時、御使いが天から現われて力づけました。すると、イエスさまは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られ、その結果あまりの緊張と集中力により、疲労が極限に達した時に見られる額の毛細血管が破れ、血の汗がしずくのように地に落ちる医学的に血汗症と言われる症状が現われたのです。こうして讃美と信仰の祈りで、祈り

ぬいたイエスさまは勝利されました。強く雄々しく御旨に従う献身力を心に受け、大胆にカルバリ山の十字架の道へ自発的にあがないの犠牲となるため進みゆかれました。

全き愛が恐れを閉め出し、勇気に満ちてイエスさまは立ち上がられました。彼の固い決意の御前では、武器を手に捕らえに来た役人どもも、御名の権威に圧倒され、退いて後ろに倒されたほどでした。信仰は決意です。信仰生活では肉を打って霊に従うことが必要です。肉に死に聖霊さまで復活です。イエスさまは命を懸けて戦われました。

霊の世界は私たちの考え以上にもっと厳しいものです。

現実に関今、地獄の炎は燃え上がっています。その火が私たちの愛する人や環境に燃え移ろうとしている今、どうして黙っていられますでしょうか。「主よ！」と今こそ、断食と涙で心を裂いて叫び祈る時です。真実の愛は厳しさも含んでいます。時には人間の肉から生じる人情さえも信仰に立つ妨げとなっています。真実に愛するなら、本気でとりなし祈り、愛する人に大声で罪をとがめるべきです。命がけで戦い、教会へ導くべきです。私たちの信仰は現実のことです。神さまがあな

たの味方です。燃える火の中に手を入れて  
火傷の痛みを受ける覚悟をもって、本気で  
疑う人々を掴みだして救うべきです

(ユダ 23)

福音の犠牲と痛みは主が必ず後にいやさ  
れます。私たちの受ける天国の報いは、は  
なはだ偉大ですから、過ぎ去る霧のごとく、  
まばたきのようなこの世にまどわされないで、  
永遠に続く神さまの国のためとりなし祈りま  
しょう。イエスさまはすでに血の汗を流しつ  
つ祈られ、人間の弱く不従順な肉に打ち勝  
ったのです。そして、そこで流されたゲッセ  
マネの血の汗こそ私たちの弱い意志のあが  
ないを叫び、御旨に従わせる勝利の血潮で

す。この血潮を仰ぎ、この血潮を基として祈りましょう。イエスの血潮は私たちの肉の情に流されやすい弱い心をあがなって、御言葉に従わせる献身力を今、与えています。イエスの血潮を讃美します。

## 血の花婿

旧約時代イスラエルの指導者として神さまに選ばれ立てられたモーセ、彼がイスラエル人をエジプトにおける四三〇年間の奴隷生活から導き出す者として使命を受けた時、献身の招きにすぐ立てずにいると、主はしるしとして、献身力の弱いモーセの手にある

杖を蛇に変えたり、戻したりする、悪魔をも制するような賜物と、片手に杖を持つモーセの手をらいに冒したり、再び元の肉に戻したりするいやしの賜物、さらにはナイルの水を血に変える奇蹟の賜物を与えられました。今もありふれたモーセの手にある杖のような十字架の木、これを通して奇蹟が起きます。十字架の言葉を手にしたら、誰でも大胆になって献身的な行動がとれます。しかし、これらのしるしにもかかわらず「私は言葉の人ではない」と依然、神の賜物と召しを拒むモーセに対し、主は代弁者アロンを助手として与えられました。

ところがこんなにまですべてを準備された

良き主ですが、ある日、モーセがエジプト・パロ王に出会いに行くべき途上、一夜を明かす場所でのこと、主はモーセに会われ、彼を殺そうとされました(出エジプト 4:24)。

なぜでしょうか。私はこう考えます。モーセがまだ生きていたからです。死ぬべき自我があったからです。彼の内には今だ心定まらず、召しを拒む人本主義的な不信仰があったのです。それは主の御心と反対に行ってしまう不従順の心と足です。御心の宣教地はエジプトです。しかし、かつて殺人により命からがら逃げ出したあのエジプト、そこでの栄光の四〇年と今の低くされた四〇年、荒野にて羊飼いの貧しい我が身、さらには



パロ王に対して主からの強行的な奴隷解放宣言。モーセは一切を思いめぐらし足が重くなったことでしょう。行動の基本、その足が御心の方角エジプトから次第に四五度から九〇度そして一八〇度と回れ右をして向きを変えたかもしれません。まさに主の御旨からの夜逃げ状態です。

その時、生涯の召しを捨てた不従顔なモーセに対して、主は厳しく会われ、彼を殺そうとされたのです。現在も、召された者が使命の道に立たなければ、この世にいる必要はありません。世の道も閉ざされ、後はただ死を待つばかりです。献身を放棄して、死

にそうになったモーセに対し、妻チツポラはその時、火打石をとって自分の息子の包皮を切り、それをモーセの両足につけて告白しました。

「真にあなたは私にとって血の花婿です」とすると、そこで主はモーセを放たれたのです。彼女はその時、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのです。モーセの不信仰とは全く関係ない、まだ童貞の聖い子供の生殖器の包皮の先端の皮がモーセのために切られ血を流し、それを両足につけて神さまへの従順、割礼契約となったのです。

モーセの不従順だった両足には息子の

包皮の血がついたのです。実はこの血こそ私たちの弱く不従順な意志をあがない、その足を御心の道へ向かわせる献身の力の源、イエスの血潮のひな型、模型だったのです。お分かりになるでしょうか。ゲッセマネで流され足下に落ちたイエスの血潮の汗、この血潮が私たちの足につくとき、イエスさまの道へと導くのです。

このことは、主に献身して仕える祭司がまず、右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指にほふられた雄羊の血を塗りつけて、すべての行動力の源を聖別してから、任務についたこととも同じです(レビ 8:23)。今の

恵みの時代はイエスの血潮の割礼を私たちの体ではなく、行動力の源である心に受けると聖別され、献身的任務に向かうことができます。そしてチツポラの預言どおり、イエスさまこそ本物の「血の花婿」です。ゲッセマネの園で血の汗を流して祈り、人間の弱い心をあがない、強い献身力を受けて、御言葉に従い十字架の道へ行かれたお方です。その血潮により私たち教会を愛する花嫁として買いとられました。血の花婿イエスさまをたたえ、その血潮により心を強くされましょう。

イスラエル社会では男性は皆、律法に従

って、生後八日目に割礼を受けるため、清潔となり、この肉の割礼のゆえにイスラエルの結婚した男女は、最も性病の少ない民族となっています。今日、神さまのイスラエルなるクリスチャンもイエスさまの花嫁なる教会を霊的病から守るために早く成長して心の割礼を受け、心を包む皮なる肉を切り捨てる必要があります(申命記 10:16、30:6)。「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像崇拜、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酪酊、遊興、そういった類のものです。……こんなことをしている者たちが、神の国を相続することはありません

ん。」(ガラテヤ 5:19～21)

聖餐式とは、本来イエスさまの罪なき十字架で裂かれた肉体を意味する、パン種の入らないパンを裂いて食べ、流された血潮を意味する葡萄酒を飲むことにより、主の十字架を永遠の記念として心に留め、その意味をかみしめる体験です。飲み込んで内に受け入れることにより、キリストと私たちが一つになります。しかしながら、初代コリント教会ではいつまでも偶像問題や不品行に關わって、肉いっぱいのおさわしくないままの状態です。聖餐式に預かり、主の体なる教会と主の血潮に対して罪を犯して裁かれ、弱い

者や病人が多くなり、死んだ者が大勢いました。御体をわきまえ知るには悔い改めの祈りが大切です。この祈りの中で霊的に不潔で不用な肉に対して、きっぱりと決別して、新たな心にキリストの血潮の割礼を受け、清い大人クリスチャンとなって信仰の成熟目指して前進できます。心の割礼を受けた大人クリスチャンには献身力が与えられます。

イエスの血潮を基に祈り求める時、行くべき十字架の道へと踏み出す勇気と決断力が与えられます。最も行きたくないあのエジプト、会いたくないあのパロ王であるあの宣教

地、あの人の所へも大胆になって出て行き、福音宣教できます。イエスさまは言われました。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい。」(ルカ 9:23)

あなたの日々負うべき十字架とは、この日行くべき職場でしょうか。家庭でしょうか。学業、人間関係、教会の奉仕等、与えられた十字架が重すぎると嘆く時にもイエスの血潮による祈りは耐えて背負う力を与えます。十字架を背負えば、後には復活の栄光もついてきます。あなたが十字架を背負い歩



き出したなら、さらに御言葉に従順して日々を生きる力もイエスの血潮による祈りで与えられます。

「御言葉は私たちにとって難しすぎるものでも遠くかけ離れたものでもありません。みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあって、あなたはこれを行うことができる」(申命記 30:14)のです。

御言葉に従い、あなたを迫害した敵を許さねばならない時、イエスの血潮を基に祈りましょう。肉の思い、敵意は切り捨てられ、全き赦しと敵さえ愛せる広く大きな心が与えられます。御言葉に仕える伝道の勇気や献身の勇気が乏しい時にも、御言葉に命を懸

けて従われた、イエスの血潮を基に祈りましょう。あなたがイエスの血潮を土台に立ち上がれば偉大な主の仕事を立派に成し遂げられます。

私は早朝祈禱会で講壇にひざまずいて祈る時、時々両手をあげて祈ることがあります。その理由は、「聖所に向かってあなたがたの手を上げ、主をほめたたえよ」(詩篇134:2)と書いてあり、ここで「ほめたたえよ」という原語には「トーダ」、感謝を持って両手を差し出し伸ばすという意味があり、詩篇一〇七篇三三節では「主を讚美せよ」と書いてあり、ここでの「讚美」は「ヤダ」という原語

で、手を挙げて礼拝する、手を投げ出して神さまを楽しむ、という意味があるからです。他にも聖書中、手を上げて礼拝するように教えている御言葉があります(哀歌 3:41、詩篇 28:2、63:4、第一テモテ 2:8)。

しかし、実際に御言葉通り実践してみると、三〇分くらいで両手は重くなり、肩がこり、体も圧迫されて手が下りてしまいます。ひざまずく両足も(ローマ 14:11、エペソ 3:14、ピリピ 2:10)しびれて痛く棒になります。このような体を張った祈りで、いつも思うことはイエスさまの十字架です。主は両手を釘打たれて高く上げられたままつるされたのです。

その体重から推測すると、イエスさまの御体が十字架に上り垂れ下がったときの両腕の角度は六五度であったと考えられます。その御体はどんなに激痛が走ったことでしょうか。御体には全体重がのしかかって、垂れたけれどもその両足にも釘が打たれていたため足を伸ばせる足場もなく十字架に上り、両足の膝をかかめているような体の形になっていたのです。それゆえ私たちがひざまずき両手を高くあげて主に祈る時、イエスさまの十字架と同じような形になって、実際体験的にイエスさまの十字架の御苦しみの万分の一でも理解する助けになります。

人間は動物的本能で敵と戦う時、体の中でも比較的柔くて弱い臓器のある腹部を身構えて、拳を前にガードしてボクサーの姿勢をとって隠す性質があります。しかし、すべての敵を倒して、もはや敵がいないことを確信すると勝利に満ちて、西洋ではガッツポーズ、日本では万歳をして両手を高くあげ勝利宣言します。私たちの両手を高くあげた祈りも、また敵なるサタンの前ではすでに信仰による神さまの軍の勝利宣言であり、主の御前ではすべてを降参して委ね、明け渡す信頼のしるしとなります。肉の拳を捨て、信仰で手をも心をも天におられる主に明け渡し委ねる事です。これは血肉の戦いでは

なく霊の戦いだからです。

## アロンとフル

イスラエル軍がアマレク軍と戦争をした時、勝利の鍵は献身的なモーセの両手を上げたとりなしの祈りにありました。モーセが両手を上げて祈る時イスラエルは優勢になり、やがて手が重くなり、下りる時にはアマレクが優勢になりました(出エジプト 17:11)。そこでとりなし祈りの威力を知ったアロンとフルはモーセを石に座らせ左右から両手を支え、モーセは夕暮れまで両手を上げ続けることができ、そのとりなしの祈りの力で御使いの

軍隊も加勢し、イスラエルはアマレクを制覇して勝利することができました。その時、モーセは感謝の祭壇を築いて言いました。

アドナイ・ニシ「主の御座の上の手」

「主は代々にわたってアマレクと戦われる」

(出エジプト 17:16)。

今日も聖徒が教会の組織の一員として主のしもべの両手を支え、御言葉と祈りに専念できるよう仕える時、それは主の戦いをしています。どうかあなたの教会の牧師の両手を支える大切な人となって豊かな天の報いを受けてください。モーセ同様、主のしもべだけでは長く両手を上げ続けられないも

のです。どうしても聖徒の皆様の尊い犠牲的支えの手が必要であり、主のしもべと聖徒が一つになって戦う時、初めて勝利できます。私たちの真の大祭司イエスが身代わりになって十字架につけられた時、そこから赦しととりなしの祈りがなされました。

「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのか自分で分からないのです。」

その時、献身されたイエスさまの両手は高く上げられました。左右に立つアロンとフルがとりなすモーセの両手を下りないように支え続けていたように、イエスさまの両手も下りないように支え続けているものがありました。



それは左右の御手にはずれないように強く打たれたさびた釘です。

モーセが立ち上がった祈りからアロンとフルによって石に座る祈りに導かれた際、座ってひざをかがめたようにイエスさまの御足も十字架上、釘打たれたため体重がかかるのに、伸ばすこともできずに、結果としてモーセのようにひざをかがめていました。

聖書では自ら直接的には知らずしてイエスさまの釘打たれることを頂言した人がたくさんいます。イザヤはこのようなイエスさまの十字架上の釘打たれた死と復活をさして預言しました。

「わたしは彼を一つの釘として、確かな場所へ打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。」(イザヤ 22:23) [十字架]

「その日、万軍の主の御告げ。確かな場所に打ち込まれた一つの釘は抜き取られ、折られて落ち、その上にかかっていた荷も取りこわされる。」(イザヤ 22:25) [復活]

エズラもまた直接的には知らずして預言しました。

「私たちのためにご自分の聖なる所の中に一つの釘を与えてくださいました。これは、私たちの神が私たちの目を明るくし、奴隷の身の私たちをしばらく生き返らせてくださ

るためでした。」(エズラ 9:8)

第二列王記一八章二一節は、ラブ・シャケが直接的には知らずに言った言葉に「今、おまえは、あのいたんだ葦の杖、エジプトに拠り頼んでいるが、これは、それに寄りかかる者の手を刺し通すだけだ。エジプトの王、パロは、すべて彼に拠り頼む者にそうするのだ」とありますが、イエスの御手にはこの世というエジプトと世の王なるサタンに拠り頼むすべての不信仰な人々の罪の身代わりに、エジプトの悪の勢力の代表であるいたんだ葦の杖が刺し通されました。そのいたんだ葦の杖こそ細長い葦のような傷んでさ

びた古釘です。

第二コリント十二章七節では、使徒パウロが病という一つのとげが肉体に与えられ、これが取り去られるように三度も主に願ったが、拒まれ、いただいた御言葉は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」でありました。

イエスの時代一般的に使われたローマ式十字架刑とは、まず両手を一本ずつの釘で十字架の横棒の木に打ち込み、それから横の木の中央のほぞをすでに立てられている柱である縦の木のほぞ穴に上からはめ

こんで十字を完成した後、最後に残された両足を一つに束ねてその上に小さなあて木をのせて、そこに一本の釘を打ち込むというものでした。イエスさまは、使徒パウロを肉体的に悩ませたとげのような三本の釘というとげによって吊るされ肉体的に悩まされたのです。

使徒パウロの体験は、取り去られないまま残された病のとげがむしろ、益となって神さまの力が弱さのうちに完全に現われる祝福とされたように、イエスさまも同様でした。恵みのとげなる三本の釘が打たれ続けたまま六時間、これが取り去られないがために傷k

口はふさがらず、むしろ御心どおりに、イエスの血潮が流れ続けることができ、その血潮のゆえにこそ、今日、完全な神さまの力が現われます。

イエスさまは目的を持って釘打たれました。イザヤの預言通り、父なる神の家なる教会の栄光の座となり、エズラの預言通り、私たちの目を明るくして肉の奴隷から自由にするためです。そして不信仰なエジプトのような肉納この世の人々の死のとげなる罪の身代わりとなって、そこから救うためでした。真の大祭司イエスは聖戦の最後、実に死に至るまでも両手を上げ続け、血潮を流し続

けながら十字架に祈られました。それゆえキリストの捧げられたとりなしの祈りこそ、今日、アマレクと戦う神のイスラエルなる私たちに圧倒的勝利をもたらす神の戦力です。

アマレクとは容赦せず聖絶すべき生涯の敵であり(第二サムエル 15:3)、その意味は肉の象徴です。私たちの生涯の敵として、御霊に逆らう性質を持つ肉の欲望、肉の思い、肉の行ないとの戦い、これに勝利を与えようとしてイエスさまは十字架で血潮にまみれた両手を上げて、ひざをかがめて、とりなし祈られたのです。この十字架の祭壇こそ、本当の「神の家の栄光の座」(イザヤ

22:23)であり、アドナイ・ニシ「主の御座の上の手」(出エジプト 17:16)そのものであり、私たちの生涯の敵、肉欲をおさめる神の力です。主は代々におたって、今も私たちのアマレクなる、御霊に逆らう肉と戦われ、勝利を与えて下さいます。これは主の戦いです。

「彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。」(イザヤ 63:10)

肉に対する勝利の鍵こそイエスの血潮を拠り所に祈りこむこと。その時どんな迫害の中でも実に肉の最たる戦い、殉教の死にさえ



も耐え抜く圧倒的に強い信仰の献身力が注がれます。力あるイエスの血潮を誉めたたえつつ、肉と戦いゲッセマネ祈禱しましょう。その時、御使いの軍隊も私たちを加勢して祈りを助けてくれます。切に祈りこむ時、肉が聖絶されて死に、聖霊さまで復活して勝利の旗がひるがえることになります。

ハレルヤ。

タイのテレビCMにタイトル『体重 45kg になりたい。』という少年と家族のストーリーがあります。帰宅した少年は体重計へ直行、この子はどうしても体重 45 キロになりたいようです。そのために毎日トレーニングしてはた

くさん食べて寝る。手にしたメモ用紙にはこう書いています。1. 健康でなければならぬ。2. 最低でも 45kg 体重がなければならぬ。3. 一日 6 時間は眠ること。

やがて父からの電話を受けた少年は聞きます。

「パパ、ママはボクが 45kg になるまで、待っていてられるかな？」

実は彼ら両親は病院にいて、お母さんはベッドで輸血中。少年の体重目標45キロとは献血できる最低限の体重でした。タイで献血できる基準は 16 歳以上、男性 45kg、女性 40kg 以上。少年はお母さんを救いたい一心で連日努力していたのです。最後にC

Mではタイ A.P.Honda 献血キャンペーンのテロップ文字が表示されます。『献血を一度すると、ひとつより多くの命を救うことができます。患者さんはあなたの助けを待っています。』命を分け与える献血、素晴らしい助け合い制度です。少年の母を想う愛は、体重増加による太めの見栄え悪い容姿も気にしない強さと感動があります。イエスさまの十字架も私たちの霊的命を救うために、永遠命の血を与えるために、自ら犠牲的に体が厳しく打たれ、理解されず見下されてもかまわない、美しい戦いと勝利の御姿です。

また、ある少年はさらに上を行く献身的な

愛を実践しました。とある途上国のキリスト教ミッションスクールにて宣教師の呼びかけに生徒らは恐れて誰も応じようとはしません。「誰か、お願いします。クラスの女の子の手術に至急、献血が必要です。誰か、協力して欲しい。」

やがて一人の少年が親友であるその子の癒しを願い、勇気をもって献血を志願して立ち上がりました。

医務室では、注射針が少年の細い腕に刺され、採血が始まりましたが、少年は次第に涙ぐみ、耐えきれなくなったようにポツリ言いました。

「先生。あとどのくらいで僕は死ぬの？」

少年は献血を知らなかった。少年は献血を申し出たとき、すでに自分の死を決意していたのです。小さいながら親友を想う大きな犠牲愛、神様の御前では、すでにすべての血なる命を与えたも同様の行動でした。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」(ヨハネ 15:13 )

イエスさまは私たちに命の血潮を与えて救ってくださった真に勇気ある親友です。

亜麻布に染みた血痕

「そこで、ヨセフは亜麻布を買い、イエスを

取り降ろしてその亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納めた。」(マルコ 15:46)

トリノの聖ヨハネ大聖堂に厳重保存されている聖骸布と呼ばれるイエスさまの埋葬に使われたと伝承される亜麻布(リンネル)をご存知でしょうか。ユダヤ人の習慣では埋葬の際この一枚の縦長の大きなシーツのような亜麻布を(長さ四・三六メートル、幅一・一メートル)半分に折って死者の頭上を折り目に、前後にかぶせる形で包んでから、頭部を別の布切れで巻いて墓に納めたため、埋葬布にははっきりと死者の全身の正面と背後の血痕が染みついて残されていたと言われています。特にカトリック教会では長年、

聖骸布はイエスさまの埋葬布と信じられ、崇敬の対象でした。聖骸布を肉眼で観察すると(図8参照)となりますが、これをネガ画像にすると(図9参照)となり、浮き出た人物の姿がもっと明確になります。

一九八八年、大英博物館はこの布の年代鑑定をした結果、実はこれが中世のものであり、すなわち偽物と断定、その調査結果を広く発表・報道しました。しかし、近年医学博士のレオンシオ・ガルツバルデスによる最新技術の放射線炭素測定法により再測定した結果、古代遺品の表面には細菌類が透明な天然プラスチックを合成してしまう

ため、これが年代測定に誤診を招いていることを指摘、この不純物を完全洗浄した上で始めて正確な年代が算出されることを立証、以前中世と鑑定した研究所を含めた三つの研究所で再鑑定を行ない、その年代が三カ所とも中世ではなく紀元前のものであったことを特定、今は亜麻布が伝承どおり本物のイエスさま埋葬布であった可能性を高めています……。

この最新技術の放射線炭素測定法で地球の年齢を測定すると、地球は誕生以降、約六十億年ではなく約六千年という鑑定結果が出ている極めて聖書的に信頼性の高い



測定法です。

博士によると聖骸布に今も微量に残る血痕をDNA鑑定した結果、亜麻布に包まれた人物は男性決定因子であるXY染色体を含む男性であり、ユダヤ人に最も多い血液型のAB型と断定。聖骸布の背中部分には当時十字架の木に最も多く使われていた樅の木くずが微量に付いていたと言います。さらに複数の博士による科学的かつ医学的な鑑定結果をまとめると、この男性の顔には多くの打撲傷が認められ、短いひげにも血のかたまりが多くこびり付いており、むち打たれた痕跡と認められる幅三センチの皮膚の傷跡が、全身約百二十カ所にもおよび、

ひどく血に覆われていたことが判明、額とこめかみの高さの所に、頭部をぐるりと囲む冠かフード状のギザギザした鋭いものによる傷跡を四五カ所以上持ち、両ひざ付近にはすり傷が認められました。このすり傷は亜麻布の男性がまちまちの大きさを持つ岩に覆われたでこぼこ道を歩かされ、両手を使わずに三度転倒し、ひざと顔に大径我を負ったことの現われであり、両足に見られる皮膚のはく離と付着した泥は男性が刑場まで裸足で歩かされたことを示しています。

興味深いことに解剖学の権威者でありLA病院の副検死官である法医学者のロバー

ト・バックリン博士による聖骸布鑑定公式報告書はこう分析します。

「この男性は身長が一八〇・三四センチ、体重は約八〇キロのコーカソイドの男性。……この受刑者は二人の刑務官によって、左右両側からむち打たれている。革紐の角度が示しているように、一人は他よりも背が高い。両肩は腫れて皮膚がはくりしているが、これは死ぬ数時間前に、この人が荒く重たいものを肩に引きずったことを示している。右わき腹では、何か形の長く細い刃物が上向きに突き込まれて横隔膜を刺し、肺から胸腔、心臓へとつらぬかれている。これは死後の出来事である。なぜならば分離し

た赤血玉と無色透明な血しょうが損傷部から流出している。のちに遺体が横たえられ布の上に置かれてから、血はわき腹の傷口からしたたり落ち、背の腰ぞいにたまった(図 10 参照・黒く濃い部分がヤリで右わき腹から流出した血痕)。

両足の骨には骨折した証拠は見られない。一方のひざには転倒でできたと思われるはくりが認められる。最後に、一本のくいが両足を貫通し、二つの傷口から布へと血がしたたり落ちていた(図 11 参照・黒く濃い部分が足の傷口からの血痕)。むち打たれた男が十字架にかけられ、はりつけ刑で典型的

な心機能不全で死んだことは明らかである」

聖骸布がこの受刑者を葬ったあと、数日以内に何らかの理由で再び遺体からはがされた結果として、死者の腐敗と共に始まる鑑定不可能なほどまでのひどい損傷をまぬがれ、これらの血痕を見事に今日まで残すこととなりましたが、これが間違いなくイエスさまのものならば、聖骸布使用後の数日以内の不要性もまたその復活を暗示していると言えます。さらにこの聖骸布は刺しゅうもない安物の布ではなく立派な模様の刺しゅうが刻まれているこのことから受刑者は通常の十字架で処刑されたつまらない犯罪人で

はなく、死後にもあわれみを受けられるほどの愛された人であり、ある程度の金持ちから手厚く埋葬されたことがうかがえます。確かにイエスさまは罪人の一人に数えられたけれど、死後には金持ちの議員ヨセフによって、最上の墓地に埋葬されたと聖書は証言します……。

はたして聖骸布が本物か否かは意見の分かれるところですが、イエスさまがすでに成就された十字架の死に至るまでの命がけの勇気ある献身は誰も疑う余地のない現実です。

## 金のしゃく

エステル記に登場するアハシュエロス王はここで父なる神を象徴します。後に王の右に座る位を受けたユダヤ人を救う解放者となったモルデカイは、イエスさまを象徴します。モルデカイは自分の民の幸福を求め、自分の全民族に平和を語りました。そして、同胞のユダヤ人のために命をかけて戦った勇気ある王妃エステルは、私たちクリスチャンのあるべき姿を象徴し、ユダヤ人へのひどく悪質な迫害者だったハマンはサタンを象徴しています。

ハマンは自分に頭をさげず、真理と信仰に堅く立つユダヤ人モルデカイを非常にねたんで憎しみ、モルデカイだけでなくユダヤ人全体をも迫害して殺害しようと策略を練った悪者です。しかし、最後は自らが設けたわなに捕らえられサタンの運命同様、滅ぼされています。

一方、モルデカイは迫害されれば、されるほどいよいよ高められ、究極的には二度も王の前から町に出てきて、王服をまといながらユダヤ人の群衆の前で国王とユダヤ人の栄誉を受け、大いなるかっさいを受けました。一度目は王の馬に乗って、その足を地



面に着けることなくユダヤ人の前に登場し  
(エステル 6:11)、二度目は地面に足を着  
けて歩きながら金の冠をかぶっての登場で  
す。会衆前でのモルデカイの栄光満ちた登  
場とは、すなわちユダヤ人の命を迫害者の  
策略から救った解放宣言のためでした  
(エステル 8:15)。

「ユダヤ人にとって、それ(モルデカイの登  
場)は光と、喜びと、楽しみと、栄誉であっ  
た。」このことはちょうどサタンの迫害を受け  
ながらも、十字架の血潮で勝利され昇天さ  
れたイエスさまが、王なる御父のおられる天  
国から出て来られる一度目の足を地面に着

けない空中再臨と、二度目の足をオリーブ山の地面に着ける地上再臨のとき、私たちから必ず大かっさいをあびる解放者イエスさまを現わしています。イエスさまはその日、私たちの光と、喜びと、楽しみと、栄誉になります。

「その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の・・・感嘆の的となります。」

(第二テサロニケ 1:10)

モルデカイの大勝利とユダヤ人の自由解放の背後には命をかけた王妃エステルの献身的信仰があります。エステルはユダヤ

人の一人として同胞の同国人を本当に愛し、ユダヤ人であることを恥とはせず、王の前でも隠すことなく堂々と身元を告白し、その救いのために立ち上がった勇士です。もしエステルが立ち上がらなかったならば、モルデカイが語ったとおり、他から救いが現われたことでしょう。だが、エステルはユダヤ人の救いこそ自らの使命と確信し、命をかけて断食祈祷と信仰を持ってアハシユエロス王の所へ行き、ユダヤ人の救いを嘆願しました。王にはユダヤ人を生かすも殺すも、すべての権威が与えられています。エステルにとって王妃としてできるすべてのことは、ハマンの巧妙に立てられたユダヤ

人殺害計画を打ち壊すように王に助けを求めることです。しかし、通常いかなる人であっても王の前に出て行くことは王から直接召されない限り禁じられており、この法令に背く者は誰でも死刑に処せられたのです。その厳戒態勢は歴史家ヨセフスの文献によると、召し出されていないのに玉座に近づく者を罰するために、おのを持った男たちが玉座の周囲に立てられていたほどです。しかし、ここにたった一つの王の前に出て行ける例外的な救いの手段がありました。王の好意を受けて、王の手に持つ金のしゃくが差し伸べられたその時、そのしゃくに触れば王室にて王との親しい面談が許可され

たのです。まさにエステルにとってこれは命がけの大冒険でしたが、エステルは信仰と勇気を持って行動に移し、王の好意をみごとに得て、金のしゃくが差し伸べられ、あとはすべての嘆願の内に、その願いは聞き届けられユダヤ人を救いました。

エステルは、今日の私たちクリスチャンのあるべき姿の象徴です。今、父なる神は勇気あるエステルのように命をかけて断食と祈りを持って同胞の同国人への救霊愛に燃えている人を捜しておられます。父なる神は金のしゃくをそんな勇士に差し伸べたいのです。確かに私たち、罪ある人間は元々ど

うしても王なる神の御元に自ら進み行くことはできません。罪人が御父の御前に立ち、御顔を拝するならば、ちりに等しい私たちはたちまちに死んでしまいます。しかし、ここにたった一つの救いの手段がすでに準備されていたのです。

そうです。御父の元から今差し伸べられている金のしゃくに触ればよいのです。金のしゃくとはギリシャ語でスケープトロイであり、金の棒という意味もありますが、私たちにとって純金の棒以上に尊い棒とはイエスさまの十字架の木です。王なる神の御手の中にいつもある十字架という栄光輝く金のしゃ

くをとおして御前に進み行けば、例えどんなに罪深い者であったとしても、無条件に王なる神さまの好意を得て、親しい面談が許可され、愛されて受け入れられるのです。この金のしゃくはエステルのように信仰を持って御前に進み行く人にのみ差し出されています。イエスさまが私のために十字架で血潮を流して死なれ、葬られ、三日目によりみがえられた、この真理を本当に信じる人だけつかむことのできる金のしゃくです。ですから、エステルのように勇士となって切に断食祈禱を捧げて命がけの救霊愛を持ってこの地の救いのために立ち上がりましょう。十字架の血潮にすがりついて王なる神さま

に祈って嘆願しましょう。その本気の信仰を見て王であり父である神さまは必ず答えて下さいます。

「王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何がほしいのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」(エステル 5:3)

これを読むあなたが破れを繕うもの、サタンの霊的迫害と策略を打ち破るリバイバルスト・エステルになってください。王なる神さまがあなたの勇気ある信仰と救霊への情熱を感動されて、語られたならばその御言葉は誰も取り消すことも閉じることもできないリバイバルの扉を開きます。



「…この日に王の命令とその法令が実施された。この日に、ユダヤ人(クリスチャン)の敵(サタン)がユダヤ人を征服しようと望んでいたのに、それが一変して、ユダヤ人が自分たちを憎む者たちを征服することとなった。」(エステル 9:1)

「諸州の首長、太守、総督、王の役人もみな、ユダヤ人を助けた。彼らはモルデカイ(イエス)を恐れたからである。というのは、モルデカイは王宮で勢力があり、その名声はすべての州に広がっており、モルデカイはますます勢力を伸ばす人物だったからである。」(エステル 9:3、4)

エステルが立ち上がるとユダヤ人全体も背後でエステルを動かし、動機付けていた本当の重要人物、ユダヤ人の救いモルデカイを知るようになりました。私たちのモルデカイなる救い主イエス・キリストを世界が知るようになるのも、今の私たちの信仰の決断と献身的勇気ある信仰の行動にかかっています。なぜ、私たちは多くの人々の中から選ばれて救われたのでしょうか。なぜ、私たちの国籍は何もしていないのにすでに王宮のような天国に置かれているのでしょうか。理由があります。振り返ってモルデカイのエステルへの助言の言葉に耳を傾けてみましょう。

「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」(エステル 4:13、14)

さあ、イエスさまの招きに答えて勇士エステルのように献身的に立ち上がりましょう。あなたの力が今、この国を救うのです。

「王の諸州にいるほかのユダヤ人も団結して、自分たちのいのちを守り、彼らの敵を除

いて休みを得た。…その十四日には彼らは休んで、その日を祝宴と喜びの日とした。」

(エステル 9:16、17)

あなたは主にとって決して小さくありません。あなたが主の勇士であることを自覚して目覚め立ち上がる時、リバイバルは全地に広がり、教会は団結して自らの霊的いのちを守り、敵なるサタンを除き去り全面勝利できます。まもなく、すべての敵が消え去る全き安息の日、小羊イエスの大いなる祝宴と喜びの日である再臨が訪れます。その前に終末最後のリバイバルも訪れます。すべての民が目覚める偉大なリバイバルの発火点

であり鍵である金のしゃく、イエスさまの十字架の血潮にまみれた木を勇気と献身的いのちをかけた本物の信仰でつかんで、すべての支配権ある王なる御父に熱く嘆願して祈りましょう。

私が一七歳から通い始めた教会生活で、二年間、求道者として歩んでいたころ、一九歳で聖霊のバプテスマを受ける直前、フィリピン国内各地を旅行をしました。当時、大学生でしたが、夏休みに三週間かけて滞在しましたが、そんなある日のこと、地元のワルと意気投合した私は彼からマイファナを買い付け、これを吸って酔っぱらいました。

目が赤く充血して、へらへら笑いながら陽気になってマニラのスラム街を散歩していました。すると地べたに座る地元の数人が私が麻薬中毒状態であることを知って、からかいました。

叫ぶタガログ語は不明ですが、ポリースという単語は明瞭に聞こえ「警察に突き出すぞ！」というたぐいのことを言われたようです。怖くなった私は見つかると逮捕、強制送還、大学退学…さまざまな恐れにとらわれて逃げ出しました。走って、走ってスラム街の道を潜り抜けてただひたすら彼らから逃げました。実際には彼らは私をからかっただけで追いかけてはいませんでした。怖くて逃

げ続けました。

マリファナの特徴は酒で言うところの悪酔い以上にひどいバットリップと言われる現象があります。上機嫌か悪酔いかのどちらかになります。初めて体験したバットリップのせいでひどく恐れに満たされて逃げました。後で聖書を読むと「悪人は追う者もないのに逃げる。」(箴言 28:1)と書いていました。逃げてようやくたどり着いた現場は狭くて汚い三方塀に囲まれた袋小路。なんだかその環境自体が追い詰められた当時の私を象徴しているように思えました。しかも、真夏のフィリピン、かなりの高温に壁にはヤモリや大型のネズミがそこら辺をガサガサ音を立

てて走り回って驚かせます。神さまのすごい演出効果だったと思います。私はその呪われた環境でどうしていいか分からなくなって最後に座り込んでバットトリップの苦しみの中で祈ることにしました。主の祈りはこの程度の罪人でも教会で聞いて全文暗記していました。主の祈りが終わると、後は祈りの言葉がありません。そこで人生初めての自分の言葉、自己流の祈りをしてみました。

「神さま！本当にあなたがいるのであれば、私をこの苦しみから救って癒して下さい。もし本当に私を救って癒し、無事、日本に返して下さい、帰国後はクリスチャンになり



ますから、助けて下さい。イエス・キリストの名前で祈ります。アーメン」

祈り終わると、上のほうにあった窓が開き、そこから工場の労働者のようなフィリピン人が私を見下ろして何か言っています。再び驚いて立ち上がり、スラム街をひたすら走りました。どこを走ったかも分からない雑踏の中、時折、銀行門前に立つプライベートポリスの手にしたライフル銃ばかり目に留まり、怖かった。しかし、不思議でした。気が付くと自分の滞在していたドミトリー、格安宿泊所に到着しているではありませんか。驚きながら部屋に戻り、シャワーをして眠り、やが

て酔いから覚めました。

帰国後、私は先述の銀杏販売の男の夢を見ました。「教会内で誰かが物を販売している…。」という訳で私は救われクリスチャンになりました。「クリスチャン」その意味は重いです。「クリスチャン」それはキリストの弟子です。今、私がキリストの弟子として牧師をしていることも、あの日のフィリピンでの誓願の祈り、炎天下で麻薬中毒、死の苦しみの中から祈った、祈りにあると思っています。神さまはある人々には誓願の祈りを人生のどこか最悪の試練の只中で祈らせ、献身の道に導かれる人もいます。

## 栄光の体

第六にイエス・キリストの血潮は私たちを輝かせて栄光の体を与えます。

## ひげ

人間は誰でも献身力が与えられ、生きがい  
がはっきりすると生き生き栄光に輝き始めま  
す。

「打つ者に私の背中を任せ、ひげを抜く者  
に私の頬を任せ侮辱されても、つばきをか  
けられても私の顔を隠さなかった。」

(イザヤ 50:6)

十字架を前にしてイエスさまは背中のみ打ちただけでなく、ひげさえも抜かれました。ユダヤ社会では通常ひげとは男性美の象徴であり、男性の威厳と尊厳の現われです(詩篇 133:2)。エジプト人には、ヨセフがパロ王に会うためにひげを剃って整えたように嫌われるものですが、ユダヤ人では反対に男性の誇りです。イスラエルの栄光のあらわれである祭司はひげの両端をそり落としてはいけないと律法で定められています(レビ 19:27)かつて、アモン人の王ハヌンがダビデ王の家来たちを捕らえ、彼らのひげを半分そり落としてそしりを与えた時、ダビデ王は「彼らのひげが伸びるまでエリコに留まり

それから帰りなさい」と命令を送り、イスラエル社会でひげのない恥をこうむらないよう彼らを保護しました(第二サムエル 10:4)。

これほど社会的にも大切なひげです。それゆえイエスさまの御顔からひげが抜かれたということは、イエスさまのユダヤ人としての尊厳も栄光も踏みにじられたということの意味する大変な出来事です。ひげが抜かれる激痛と共に、そこから外出血の血潮がにじみ出たことでしょう。さらにまた、恥辱ばかりでなく、そこには暴力もありました。

「そうして、ある人々は、イエスにつばきをかけ、御顔をおおい、こぶしでなぐりつけ、『言

い当ててみる』などと言ったりし始めた。また、役人たちは、イエスを受け取って、平手で打った。」(マルコ 14:65)

私は救われる以前、大変な暴れ者でいろんな所へ出ていっては喧嘩をしていました。確かに「剣を取る者は剣により滅びる」ことを身をもって学ばされました。そんな惨めに砕かれた体験から、今分かることは、人は力強く殴りつけられると、その時つぶった目の中でピカッと火花が本当に飛び散るということです。また、頬を強く打たれると口の中が歯の形にそって切れ、血が出るということです。私は喧嘩して疲れ果て、ぼろぼろにな

って帰宅後、鏡の中で頬の内側が切れて内出血しているのをしばし確認したことがあります。こんな惨めな体験さえ、今、愛する主の御手の中で、主の御苦しみを万分の一でも理解するための悟りとなり、すべてが益になることを感謝します。

「私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。」(イザヤ 50:7)

イザヤ書五〇章七節に出てくる火打石とは、両手に持つ火打石同士を互いによっつけ合い、火花を散らし火種に火をつける石です。確かに、その時、石はピカッと光ります。しかし強く互い石をによっつけ合わねば

火花は飛び散りません。ガツン、ガツンと打つのです。イエスさまの御顔が打たれた時、サタンはこの時とばかりに、人間を通して憎しみと怒りのこもる強い拳でガツンと股りつけたのです。そのためイエスさまが目隠しされた暗黒の恐怖の内に見たものとは、実にただただ火打石のごとく火花が飛び散る、すさまじい光景そのものだったのです。強い拳により打ち砕かれたイエスさまの御目の内側は当然、頬が切れて内出血という血潮が流されたことでしょう。

その後、打撲傷によりイエスさまの御顔は時間と共に醜く腫れ上がり、多くの者が見て驚



いたように、その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていました。群衆の見る中、ゴルゴダへの道、ほふり場に引かれていく屠殺される運命の小羊のように引き出されたイエスさまに、ローマ兵は死刑囚の定めにより十字架の非常に大きく重い横棒の木(パティブルムと呼ばれた)を縛り付けて背負わせ歩かせたのです(ヨハネ 19:17)。

カルバリの発掘現場から発見された十字架の縦の長い木(スティペスと呼ばれた)を差し込む穴の縦横のサイズが三一・五センチ×三五センチだったことから考えると、固

定のために隙間に打ち込む小さな岩のくいの部分を除いたとしても十字架の縦の木の太さは少なくとも三〇センチ×三〇センチ四方はあったかなり大きな丸太位であろうと推測でき、この縦の木に合わせてクロスする十字架の横棒の木も同じ位の太さはあった木として非常に大きく重い大木の角材であったことが推測されます。

当時の歴史宗ヨセフスによると一世紀頃には、エルサレムで最盛期で毎日五〇〇人以上のユダヤ人を十字架にかけるようテイトス皇帝が命じたとあり、その結果、ローマ兵たちは多過ぎる十字架刑に使用する木

を樹木の少ないイスラエルで調達するため手近で一番広く分布する樹木である欐の木から十字架を作り作業を簡略化したと言います。欐の木は固くて重い木です。

そのため、十字架の横棒の木は少なくとも約五〇～六〇キロはあったと計算でき、想像以上に大きく重かった十字架の横棒の木を無理に背負わされ、しかも徹夜と強制断食、五回の不法裁判と尋問責め、そして激しいむち打ちと暴力のため、心底力尽きていたイエスさまは重い十字架の木に押しつぶされ、両腕を固定されたまま上っていくつらい坂道ドロローサで、何度も倒されてはひざと御顔を地面に強打したことでしょう。

カルバリへ続く旧道ドロローサはまちまちの  
大きさの岩で作られた転びやすいでこぼこ  
道です。イエスさまの御顔はここでも大怪我  
して損なわれたはずです。

「おきてにしたがって悪をたくらむ破滅の  
法廷が、あなたを仲間に加えるでしょうか。  
彼らは、正しい者の命を求めて共に集まり、  
罪に定めて、罪を犯さない人の血を流しま  
す。」(詩篇 94:20、21)

こうしてカルバリの丘、十字架は高く上げ  
られました。御言葉はすべて成就します。

「人が顔を背けるほどさげすまれ、私たちも  
彼を尊ばなかった。」(イザヤ 53:3)

イエスさまの損なわれた御顔を道すがら集

まったく見ず知らずの大群衆さえ、忌み嫌い、顔を背き、頭をふりながらあざけりました。まるで見つけられた強盗人を非難するようにです(エレミヤ 48:27)

それはイエスの御顔がひげの抜かれた外出血と殴りつけられた内出血、さらにはゴルゴダ途上ドロローサの道でひどく損なわれていたからです。しかし、この時の、この血潮こそ、今を生きる私たちのために注がれた貴い身代わりの犠牲の血潮でした。無駄な流血ではなかったのです。すなわち、今日、誰でもイエスさまを仰ぎ見つめれば、復活の栄光に輝く顔を持てます。陰りのない

明るい顔を持って生きます。悩みと憂いの  
暗い顔が信仰と希望と愛に満ちた明るい顔  
に変わります。感謝と讃美に満ちた喜び輝  
いた目を待ちます。このイエスさまの犠牲の  
血潮のゆえに、今日のクリスチャンは輝いて  
います。イザヤ書五五章五節には十字架  
以降の教会時代について、「あなたを輝か  
せたイスラエルの聖なる方」とあり、私たちを  
輝かせるイスラエルの聖なる方とはまさにイ  
エスさまです。

詩篇三四章五節では「彼らが主を仰ぎ見  
ると彼らは輝いた。彼らの顔をはずかしめな  
いで下さい」とあります。十字架のイエスさま

を仰ぎ見て世界の光として大いに輝きましょう。かの日には復活の栄光の中で太陽のように輝く時も来ます。今、人間的な体型や国籍、肌の色、器量の善し悪し等一切の関係なく、内なる聖霊さまの光で新しい人となって美しくなれます。イエスの血潮を受けて輝く魅力ある証人となりましょう。聖霊美人に人はついていくものです。

私も始めて教会に行った時、熱心な教会員たちの輝く目を発見して心ひかれた一人です。黙示録一章一六節では今、イエスさまの御顔は復活・昇天により天国でいやされて強く照り輝く、太陽のような栄光に満ちて

います。復活の日、私たちもまた、そうなります。

イエスさまは十字架に関しては悲しみの人として苦難を受け、一時的に悲しみの御顔を持たれたことでしょうか、通常の宣教をなさった公生涯と三十歳になられるまでの生い立ちにおいては、聖霊さまの喜びと平安がいつも表情ににじみ出る気品の高い御顔をしておられたことでしょうか。時に笑われ、時にやさしく微笑まれ、多くの人々にも無言のうちにも平安を分け与え、周囲の人々を楽にさせるふるまいと表情に群衆は魅了されました。そのためイエスさまが弟子



たちに向かって「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います」(ヨハネ 14:27)と語られた時、弟子たちはこの世にない平安をいつも持たれているイエスさまのさわやかな表情を見て、それと同じ平安を受けたいと一切迷いなく一層期待する心でついて来たのです。イエスさまの平安がほしかったのです。

ところがもし、イエスさまが不安一杯の暗く落ち込んだ憂うつそうな重たい顔で弟子たちに向かって「わたしは、あなたがたにわた

しの平安をあたえます」と、ぼそぼそつぶやいたならば、きっとペテロはそっせんして「主よ！大丈夫です。絶対結構です。わたしはもう、こんなにいっぱい満たされています。嬉しくてたまりません！」と言って得体の知れないこの世にない憂うつそうな顔の平安を断固拒んだことでしょう。しかし、イエスさまの内には確かな清い天国の平安があり、その御顔の上品な喜びの表情ひとつひとつが弟子たちの心をいつも引きつけて安心させていたのです。

ですから、このようなイエスさまがただの一度十字架上で悲しみの人となって御顔が血

潮と悲しみに覆われて損なわれた身代わり  
のために、私たちは絶えず涙の谷を過ぎる  
試練の只中でも平安を保ち、明るい希望に  
満ちた清い顔を天に向かって上げることが  
できるのです。ハレルヤ！悪魔にだまされ  
て堅く暗く憂うつに落ち込んだ顔はもう過去  
の人、イエスの血潮によって私たちとは一  
切関係ありません。

## ヨブの腫物

ヨブの試練を信仰の目で見ると、そこにも  
イエス・キリストの模型を見ることができます。  
ヨブは東洋一のVIPでしたが、すべての財

産を失う試練に会いました。同じように、イエスさまはもともと天国の王の王であられ、一番のVIPでした。しかし、この世に来られ、貧しさの呪いを体験され、十字架に至っては、すべての財産を失われました。実に最後の一枚の下着さえもです。

次に、ヨブの試練は腫物によるもので、足の裏から頭の頂まで悪性の腫物で打れたのです。現代の医師が聖書の記述から診断し、処方箋を書くならば、ヨブの病は悪性のらい病であったといえます。それは律法によると呪われた人の受ける、汚れた病と考えられていましたが、イエスさまもこれを体

験されました。すなわち、イエスさまの御頭の頂には、呪いの象徴いばらの冠が押さえつけられ、その針によって頭の頂まで打たれ、イエスさまの御足に至っては、足の裏まで貫通した釘がありました。

こうしてむち打ちの全身の傷も加わり、イエスさまは足の裏から頭の頂まで病に犯されたヨブに劣らないほど、足の裏から頭の頂まで全身、肉体的な激痛に打たれていたのです。

最後にヨブの試練をさらに激しいものとした出来事は、妻や友人たちの責め立てる言葉であり、ヨブにとってそれは精神的な苦痛

を増大するものでした。信頼していた妻の裏切りの言葉がヨブを痛めます。

「それでもなお、あなたは自分の誠実さを堅く保つのですか。神を呪って死になさい。」

(ヨブ 2:9)

さらに、追い打ちをかけるように、その後、ヨブの友人たちが悔やみを言って慰めるために互いに打ち合わせてやって来ました。しかし、結果としてナアマ人ツォファルは律法主義的にヨブを責め、エリファズも自分の経験をもとに語り、ビルダデは先祖たちの言い伝えをもとに語り、いずれもヨブにとっては信仰的ではない、的外れのアドバイザー

一として、わずらわしい、慰め手や偽りをで  
っちあげる者、能なしの医者(ヨブ 13:4)の  
ようであり、いたずらにヨブの魂を悩ませ、  
内容的にはヨブへの迫害者のような存在と  
なってしまったのです(ヨブ 19:1~13)。

ただ、四人目の友人エリフだけが的を得  
た信仰的なアドバイスを与えていました。そ  
して、これら一連の火の試練を通過した後、  
最後に主が耐え抜いたヨブをよしとされ、御  
言葉を与えて語られました。その時、同時  
に主について正しく語らなかつた三人の友  
人たちに対して主の公義の御怒りは燃え上  
がりました(ヨブ 42:7)。

そこでヨブは主の愛を受けて、実質、迫害者の存在だった三人の友人たちのためにとりなしの祈りをささげました。その時、神の奇蹟の御手がヨブに現われ、とりなし祈るヨブ自身がいやしと繁栄を受けたのです。

「ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元どおりにし、さらに、主はヨブの所有物をすべて二倍に増やされた。」

(ヨブ 42:10)

その後、神さまにいやされたヨブの後の半生に生まれた三人の娘、エミマとケツィアとケレン・ハプクについて聖書は「その国のどこにもいないほどの美しい女性だった。」(ヨ



ブ 42:15)とあります。

ヨブ自身、知らずして体験したこれら一連の火の試練と、その後の繁栄の生涯とは実に神さまの奥義の中でイエスさまの受けられる苦難とその後の復活の栄光を現わしています。ここにイエスさまの同じような体験があります。ヨブが身近な妻や友人たちから内容的に迫害を受けた以上に、イエスさまは身近な愛する弟子たちに裏切られ、十字架を取り巻く迫害者たちにも悪口雑言のうちに御心を痛めつけられました。

しかし、炎のような試練の最後にイエスさ

まは十字架の上、三人の友人たちのために祈ったヨブのように、自らを釘打つ迫害者なる全人類のために、赦して、とりなし祈られました(ルカ 23:34、イザヤ 53:12)。

この信仰の試練に耐え抜いて勝利されたイエスさまを御父はよしとされ、神さまを愛する者に準備されたいのちの冠を与えて、死人のうちより復活させ、今は完全なるいやしのうちにヨブの試練通過後の祝福のように、復活のイエスさまの栄光は、はなはだ天上でも地上でも大きくなったのです。

私たちの信仰の創始者であり、完成者で

もあられる義なるイエスさまについて聖書は語ります。

「しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。」

(イザヤ 53:10)

ここでイザヤが預言したイエスさまの十字架以降現われる「末長い子孫」とは、末長く永遠にまで生きられる私たちクリスチャンのことです。キリストが足の裏まで通過した釘と頭の頂まである、いばらのとげにより全身サタンに打たれ、血潮を流して炎の試練を

通り抜け、三日後の復活と昇天によりいやされた今、そこから生まれ出た私たちクリスチャンこそイエスさまの復活の命で新生した末長い子孫として、ヨブの試練通過後に生まれた東洋一美しかった三人の娘たちのように、この世界のどこにもいないほど最も美しく輝く特別な存在です。ヨブの試練も、その後生まれた美しい三人の娘の輝きもすべては、私たちの教訓のため、悟りのためです。

イエスさまの御顔が損なわれた血潮によりて、私たちクリスチャンこそ末長いイエスさまの子孫として本当に美しい聖なる民族とさ

れています。罪のしみも呪いのかげもなく、  
聖なる輝く特権ある、由緒正しいイエスの血  
潮を受けた神さまの血統的家族です。自信  
を持って立ち上がってください。クリスチャン  
は最も美しい民です。世の人々も本当は内  
心それを気づき、知っています。クリスチャ  
ンの内なる光はキリストの光、すべての命の  
源です。勇気をもって微笑んで、憂いの顔  
を捨てて明るく顔を上げていきましょう。神さ  
まが味方、イエスさまの犠牲があります。感  
謝して讃美して今も、最も輝く神さまの子孫  
となり、後にはさらに輝く栄光の体を受けま  
しょう。内なる人が輝けば外なる人にも影響、  
感化します。内なる光は最高に価値あるも

のです。神さまがご覧になられる時、私たち  
クリスチャンは皆、この世界で最も美しいご  
自分の選ばれた民族です。

「彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあ  
とを見て、満足する。」(イザヤ 53:11)

イエスさまのいのちの激しい苦しみのあとと  
は、十字架の後のことであり、そこにあるの  
は残された痕跡、イエスの血潮あるのみで、  
他は救われた末長い子孫、私たちクリスチ  
アンだけです。そのため、イエスさまの満足  
は、私たちが美しい栄光の体を受けて輝く  
顔を持ち、喜んで讚美と感謝で信仰に生き  
る姿を見ることです。あなたが生きて輝けば

イエスさまは満足します。ヨブは美しい娘たちに相続地をただで与えたように、イエスさまもやがて美しい私たちに天国をただで与えてくださいます(ヨブ 42:15)。

## いのちの木

主なる神さまはエデンの園の中央にいのちの木を植えられました。これは善悪の木とは違い、取って食べても良い実でしたが、アダムはこれを心に止めず、決して手をつけようとはしませんでした。

今でもいのちの木のようにとって食べても良いのに、多くの人々が目も向けずに心を

止めて、手をつけようともしない本当は一番、園の中で尊い積極的に食べるべきすばらしい木があります。

それは園の目立つ中央に生えていながらも無視されたいのちの木のように、世界のすべての人々の中央に目立って堂々と準備されている、目を開けば探すのにも難しくもない、いのちの木であるイエス・キリストの十字架です。いのちの木にいのちの実が結んだように、十字架の木にはいのちの実であるイエスさまが結ばれたのです。誰であれ、この御方をいのちの木の实として信じて取って食べ、内に受け入れるならば、永遠のい



のちを待つ復活の体を持つことになります。  
「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲むものは、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。』」

(ヨハネ 6:53、54)

食べてはいけない性質の善悪の木の実は正反対に、これこそ積極的にとって食べなければならない、なくてはならない食物です。

結ばれた実と木自体はごく小さな隠れたような短い接点の蒂(へた)によって結ばれており、それは人の手でもぎ取れるほどの小さなものですが、しっかりと木に実をつなぎ止める役割を果たし、少々の風が吹いても絶対落ちないようみごとに結ばれています。

同様に、十字架の木に結ばれた永遠のいのちの実であるイエスさまと、十字架の木の間にもごく小さな蔡(へた)によく似た形を持つその役割を果たす接点がありました。それは、風が吹いてもしっかりと十字架の木につなぎ止める役割を果たした手足に打ち込まれた釘です。

これがイエスさまの御体をはずれ落ちないように、十字架という木に結びつけていた接点だったのです。しかし、帯(へた)はいつしか必ず除かれるように今イエスさまの復活によりて取り除かれております。

こういうわけですから、いのちの木、十字架の御元へ大胆に行って、いのちの実なるイエスさまの御言葉という果肉を積極的に食べて受け入れ、その果汁のようなイエスの血潮でいのちに富む、復活の体をいただきましょう。

世界に対して十字架

「モーセは、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富とと思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」(ヘブル 11:26)

「女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。」

(ヘブル 11:35)

今、私たちの心構えはどうでしょうか。確かに誰であってもキリストにあって敬虔に生きようと願うならば迫害は避けられません。しかし福音のゆえにむち打たれ、ありもしない

悪口雑言をかぶせられて傷つくならば、その天上の報いは喜び踊るほどはなほだ偉大です(マタイ 5:11、12、第一ペテロ 4:14)。これをよく知る初代教会の使徒たちは福音のゆえに迫害され、むち打たれた時「御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った(使徒 5:41)といます。

パウロとシラスが光のないカビ臭く湿った獄中で鎖につながれ、打ち傷に病む境遇で讚美ができたことも同じ希望と喜びがあったためです(使徒 16:25、ピリピ 2:17)。

パウロは私たちの受ける復活の体について

こう述べました。

「天上のからだもあり、地上のからだもあり、  
天上のからだの栄光と地上のからだの栄光  
とは異なっており、太陽の栄光もあり、月の  
栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星  
によって栄光が違います。死者の復活もこ  
れと同じです。」(第一コリント 15:40～42)

太陽、月、星、すべて大空にありますが、  
すべての等級の輝きが異なるように私たち  
一人ひとりが受ける天上の体も復活の栄光  
の違いがあります。その日、私たちは皆御  
使いのようであり、復活の子として神さまの  
子供であり、大空にいますが(ルカ 20:36)、

栄光の度合いが違います。ダニエルはこれについて預言しました。

「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」(ダニエル 12:2、3)

イエスさまはミナのたとえ話で天上の報いの違いを語られ(ルカ 19:17、19、24)、天の御国には最も小さい者も偉大な者もいることを教えて下さいました(マタイ 5:19)。

イエスさまはご自身が私たちにとって、その足跡に従うべき模範として来られ、元々世界の存在する前に御父と共にいて天国の栄光輝く王なる神さまであられたのに(ヨハネ 17:5)、自発的にすべてを捨てていやしくも家畜小屋でお生まれになられて、最後は十字架で血潮にまみれてもつとも醜く死なれたお方です(ピリピ 2:6~8)。

「しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。」(詩篇 22:6、7)

それゆえ、イエスさまの復活の栄光は最も大きく、地上でも天上でもすべてにまさる名



を受けた「王の王、主の主」(黙示録 19:16)であられ、天の御国で最も偉大な真にあがめられるべき栄光のお方です。

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

(黙示録 22:12～13)

後の天国では千年王国以上の報いもありますから、本当に賢いものとして世俗に染まらず、次に来る天国と神さまご自身に目を留めて下さい。小さなこの世の有様は直ぐに過ぎ去るからです。

私たちがこの世を真剣に見つめる時、現在世界には八億人の深刻な飢餓、二五〇〇万人の難民、子どもたちが学校にも通えず、ゴミの山で家族のために働く姿や一日三食を食べられない人たちを目にします。本当にかわいそう、できれば助けてあげたいと誰もが思い、時に涙も出ます。私たちがもっと愛に目覚めるために、目を背けることなく現実の世界の悲しみを心に留めて直視することは大切な事です。できるだけ機会を生かして助けてあげるべきです。そしてもっともっと心を留めて直視してほしい現実の世界がよみです。人が愛されて産まれてきても、イエスさまに出会うことなく死んでよみ

に落ちたなら本当にかわいそうです。この世のすべての貧困や痛み以上に心引き裂かれる絶望の地よみに落ちないうちに今、イエスさまのことを伝えてあげましょう。それが私たちの今できる最善のことです。たとえどんなに小さ過ぎると思える働きでも主の御前にはすべてが記録され覚えられている尊い価値ある働きです。愛が冷えるこの世と調子を合わせることなく勇気を失わないで伝え続けましょう。十字架のイエスを伝える働きが一番大切な愛の実践ですから。どんなに物質が豊かな環境に住んでいても霊的貧困があるならば、それは最も恐ろしいこの世のすべての貧困以上の永遠の痛みで

す。命をかけてでもまずイエスさまに出会うことが一番大事です。

今、キリストのために犠牲を払い、何かをなくすならば後の世ではそれ以上の報いです。この世の矛盾も天国での微調整が必ずあります。あまりこの世に心を深く埋めないで共に告白しましょう。

「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」

(ガラテヤ 6:14)

ある金持ちで大変けちなクリスチャンがいました。この男の人は一生涯あまり献金も捧げずに、ひたすら自分のために蓄えて多くの純金の延べ板を財産に持っていました。やがて男は自らの昇天の時期が近くなってきたことを自覚して、主に熱く祈り求めました。

「主よ。お願いいたします。私のたった一つの願い事を聞いていただきたいのです。それは、私が一生涯熱心に働いて儉約しながら蓄えてきたこれらの尊い純金の延べ板を私が天国に入る時一緒に持って入ることをどうか特別に許可してください」

するとこれは作り話ですから、主は男に特

別許可を与え、天国の記録の書にこのことを記録しました。後に男は齢満ちて召天しました。男は死後に約束通りしっかりと純金の延べ板のぎっしり入った大きな重い袋をかついだまま天国に入りました。天国内で少し歩くとやがて中央に都が見え、その門前まで来て男が中に入ろうとすると門番の大きな天使が質問しました。

「あれ。あなたは天国の都に地上の大きな袋を持って入場するのですか？」

すると男は誇らしげに胸を張って答えました。

「はい。そうです。私は生前に神さまに熱く祈り求めてこのことを特別に許可してもらったのです。もし嘘だと思えば、ぜひいま調

べて見てください」

門番の天使は記録の書を調べてから答えました。

「本当ですね。あなたには特別許可がおりています。その大きな袋を持って都に入りなさい」

こうして男は晴れて天国の広い都の大通りを大きく重い貴重な袋をかついだまま歩き始めると、ペテロが好奇心旺盛に親しく近づいて来て男に質問しました。

「ハレルヤ。あなたは大きな袋をかついでいますね。一体中には何が入っているのですか？ひとつ私にも見せてください」

男は誇らしげにどさっと袋を下ろして、てい

ねいに袋の口を開き始めました。その瞬間、中身を確認したペテロは腹を抱えて大笑いしながら叫びました。

「あなたはどうして、天国にコンクリートを持って来たのですか！」

天国の都では道路さえすべて純金で造られた道でした。私たちは、ただ十字架を誇りに天国の報いを求めている地上で捧げて、地上で献身的に奉仕する賢い聖徒になりましょう。

## 第7章 天の御国

第七、最後にイエス・キリストの血潮は、私



たちを審判から救い天国へ入れます。

私たちが復活の栄光の体を持つとき天の御国にも入ることができます。

イエスさまは、天の御国を王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえて話されました(マタイ 22:12)。王は父なる神、王子はイエスさまです。神の御旨は、初めに福音がユダヤ人に受け入れられ、それから全世界の異邦人へ語られるものでした(マタイ 15:27、使徒 28:28)。

ところが、すべてが完全に準備された宴会のような天国の招きに対して、ユダヤ人たちはこれを拒み、気にもかけずにある者は畑

へ、別の者は商売に出て行き、さらにひどい者たちは王のしもべたちである人々を天国へ招くよう遣わされた預言者たちを殺しました。中でも最大の殉教者はイエスさまです。そのため王である父なる神は怒って兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、反逆の町イスラエルを焼き払いました。キリストの十字架以降AD七〇年に起きたローマ軍による滅亡の惨事です。

生き残ったユダヤ人は世界へ散らされました。それゆえ王は僕に命じて全世界という大通りに出て行って、出会った異邦人を皆、代わりの客として天国という宴会場へ招くよう呼びかけました。こうして約二千年かかっ

て宴会場は善い人も悪い人も関係なくいっぱいになりました。そこで王が客を見ようとして入ってくると、そこに王家の結婚披露宴なのに礼服を着ていない無礼な者が一人まじっていました。彼はいつもの普段着を着ていたのでしょうか。あるいは、自分の考えで一番良いと思う礼服以外の立派な服を着ていたのでしょうか。全くのボロをまとっていたのでしょうか。いずれにせよ礼服ではなかったのです。そこで王は彼に向かって質問しました。

「あなたはどうして礼服を着ないでここに入ってきたのですか」

しかし彼は黙っています。そこで王はしもべ

たちに命じて、いきどおりの宣告を下します。  
「あれの手足を縛って外の暗闇に放り出せ。  
そこで泣いて歯ぎしりするのだ」

イエスさまはこのたとえ話により教訓されました。王の宴会のような讚美と喜びと栄えに満ちた天国に入るには、礼服が絶対必要だということです。天国入場資格は異邦人であっても大丈夫です。頭の善し悪しも関係ありません。人間的な良い行いにもよりません。ただ、老若男女、貴賤貧富、一切関係なく、誰でも礼服さえ着ればそれでいいのです。紳士なる神の御前、結婚披露宴には必ず礼服着用義務があります。普段着で

は追い出されます。天国は、何もせず死んだら誰でもそのまま無条件に入れる所ではありません。自分の考えで上等だと思いう服でも、礼服でなければそれは披露宴には不適です。天国は自分の考えによる善行や、倫理、道徳、宗教、哲学などによっても入れません。礼服以外はみな異端です。ましてや、罪の汚れと呪われた貧困意識いっぱいのボロをまとして入れるところでもありません。ただ信じて着るだけでその人の意識を変えて立派に見せる礼服があります。それがイエスさまの十字架の血潮の衣です。イエスの血潮信仰が天国への入場資格です。

将来私たちが天国の都に着くと、天国の都には巨大な真珠の門があって門衛に力ある大きな天使が立っているのを見ます。そこで必ず小羊イエスさまのいのちの書に名前があるか否かを確認されます。イエスの血潮で洗われて救われた私たちは、礼服を着て披露宴に入る者のように誰でも都に入れますが、イエスの血潮信仰を受けていない人は、いのちの書に名前がないため、礼服を着ない者のように外の暗闇に追放されてしまい、そこで泣いて歯ぎしりすることになります。黙示録七章一四節にはこれから将来起こることとして終末の七年間の大きな患難を逃れて天国へ移されたクリスチャンにつ

いて、彼らは「その衣を小羊の血で洗って白くしたのです。だから彼らは神の御座の前にいる」と預言されています。

## 契約の血

私たちが下にある黄泉の地獄から逃れさせて、上にある天国に招き入れる力が、イエスの血潮にはあります。聖書は約束以上の約束、契約します。

「あなたについても、あなたとの契約の血によって、わたしはあなたの捕われ人を、水のない穴から解き放つ。」(ゼカリヤ 9:11)

聖書中、主のしもべたちは時に、地獄のひな形のような環境を体験しています。その実例として第一にエレミヤです。彼は預言した真理の御言葉のゆえに迫害され、水のない泥の穴の中に投げ込まれて沈みましたが、エレミヤはその後、再び網で穴の中から引き上げられ、命を取り戻しました（エレミヤ 38:13）。

第二にシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人です。彼らは偶像礼拝を拒み、御言葉に命を懸けたため迫害され、普通より七倍も熱い火の燃える炉の中へ投げ込まれましたが、主を愛する彼らに火は全く効き目な



く、再び彼らは王の命令により火の中から出されました(ダニエル 3:26)。

第三にダニエルです。彼もまた信仰のゆえに迫害を受けて、獅子のいる穴に投げ込まれましたが、神さまに信頼するダニエルに獅子は何の害も加えず、再びダニエルは穴から出されました(ダニエル 6:23)。

ここで福音のゆえに迫害され、通常死すべく滅びの穴の中に落とされながらも奇蹟的に命を得て、再びそこから出てきた、死に至るまでも忠実だった彼ら信仰の勇士たちは皆、義なるイエス・キリストの十字架の死と下られた黄泉からの三日目の奇蹟的復活

の栄光を証ししています。

そして、このことは私たちも同様です。それは、第一の、暗く水のないうじ虫の這う泥の穴の孤独。第二の七倍に熱く燃えさかる炎。第三の吠えたける獅子の攻撃のような悪霊からの拷問。これら三つの穴のすべてがミックスしたような滅びの黄泉の穴から、私たちは今すでにイエスさまの十字架の血潮信仰で救われて、義人とされているからです。主が与えてくださった信仰と救いとは、旧約時代の偉大な信仰の勇士たちの奇蹟的生還体験に等しく、それほど大いなる驚くべき永遠の救いです。

天国も地獄も現実の世界です。私は初め救われた後、すぐに伝道を連日繰り返すようになって一つの疑問がわきました。私は自分で宣べ伝えているようにそんなに恐ろしい地獄が本当にあるのだろうか。教会の教師の一人に質問しました。すると兄弟いわく「聖書には地獄という言葉はないし、人間に対する裁きも今とは異なる体で一瞬のこと、すべては消えてしまうものだ」と言いました。

私は黙示録に発見した永遠の火の池をあらかじめ知っていたため、「これは違う。兄弟が恐れる私を安心させようと人間的な考

えで誤った福音を語るものだ」と思いました。その後、私自身、聖霊さまによる万軍の主の熱心と肉の力による人間熱心の見分けもなく、神さまを喜ばせようと、あまりに連日激しく、路傍伝道を繰り返して叫び続けたため、四方八方から迫害を受けて、様々の戦いの中で、後は次第に疲れ果てて救霊前とのギャップの大きさにもカルチャーショックを受けつつ次第につぶやきが出てきました。私がつぶやき出すと同時に心はさらにむなしく否定的になり、やがて人生への絶望的な思いと死にたくなるような思いが心を支配してきました。聖霊さまが自分から遠く感じました。そこで私はつぶやきながら祈りました。

「信仰生活は人間の考え通りに行くものではない。今は、霊的戦いが激しく、リバイバルもまだまだ来ない。今まで熱心に伝道してきたけれど期待はずれも多かった。主よ、もう充分です。疲れました。私は死にたいです。私の命を取り去ってください」

私がそう祈り終わるとすぐに幻におちて、悪魔が目の前にやってきました。恐ろしい雰  
囲気に満ちた悪魔はすぐに青白い右手を  
伸ばし、私の胸に手を入れ、まっすぐ私の  
心臓を掴みました。それは鋭い爪のある非  
常に気味の悪い手でした。そして悪魔は強  
く私の心臓を引っ張り始めました。

私は今、本当にこの瞬間、命が取り去られ

るのだ、という悟りが来ると怖くなり、しかも死ぬのではなく悪魔に殺されると思うと悔しく、とても嫌になって、そこで即座に悔い改めました。すると悪魔は手を離して私から去っていきました。本当に恐ろしい体験でした。しかし翌日になると、私は再びあの救われる以前あったような、むなしい思いと死にたくなるような絶望感に襲われました。そこで私は再び祈りました。

「主よ、やっぱり死にたいです。今、私の命を取り去ってください。信仰生活は難しいです。私は本当に疲れたのです」

こうして祈り終え、床に転がると再び幻に落ち込みました。私は落とされて黄泉の火

の中に投げ込まれました。現実の世界です。  
本当の地獄です。

私の身長のお三倍位の火柱が四方八方に燃え広がり、私を取り巻いています。これは熱いなんてものではありません！しかもそんなに恐ろしく赤々と炎が燃え上がっているところなのにとても暗い場所です。地面は乾いた土です。私は今でも、時々、各教会のライブルしている幻を見ることがありますが、いつも不思議なことは神さまの啓示される霊の世界では一目見ただけで、だいたいすべての状態が正確に把握できるということです。地獄という霊の世界でもそうでした。この世よりもそこでははるかに五感が優れて

鋭敏にすべてを感じ取れ、自分が今地獄にいることもはっきり分かり、この世の記憶もすべてあります。何よりも熱くて耐えられない場所で、そんな激痛の中にもすぐ悟りがきました。

「ああ、ここは黄泉の中でもまだ比較的軽い方の場所である。しかし、この炎は昼も夜も消えることなく永遠に続くものだ。今はイエスさまの憐れみによってここはまだ地獄の裁きの中でもいい方だ」

本当に地獄でもこのように物事を正確に考え、わきまえ知れるのです。いや、むしろもっと悟りが早く目覚めた場所です。私は燃えさかる物凄い炎の中でもだえ苦しみ、耐



えきれずに叫び声を上げました。

「イエスさま、ごめんなさい。助けて！」

すると、次の瞬間イエスさまは私をそこからすぐ出して下さり、気がつくやうに、あのいつもの自分の部屋、床の上に倒れていました。ところがこんなにも恐ろしい体験をしたにもかかわらず、再びあのむなしい思いが押し寄せてきました。本当にそれは私を盗み殺し滅ぼそうとする強い種類の悪魔でした。そこで再三つぶやいて祈りました。

「やっぱり死にたい。生きるのが辛い。主よ、私の命を取ってください」

すると今度は祈り終わるやいなや、すぐに幻の内に再びあの地獄へまっすぐ落とされ

ました。以前と変わらず、裁きの物凄い炎の光だけが暗闇を照らす、全く希望のない恐ろしく熱く耐えられない場所です。そこで今度はすぐに叫び、黄泉の穴から悔い改めました。

「イエスさま、ごめんなさい。私が悪かった」

イエスさまはこの時まで、私を愛し赦しを持ってそこから救い出して下さいました。幻から覚めて今度は本当に悔い改めました。しかし、その時の体験があまりにもすさまじくて恐ろしく熱かったため、説明するのが困難で、その後二年間位は誰にも言わずに秘密にしていました。私は地獄体験をした後の二日間は夜、目を閉じて眠るのが恐ろ

しくて電気をつけたまま眠りました。もしも目を閉じて、再びあの恐怖の地へ落とされたら大変だと思ったからです。地獄がどんな所か知るのに、少しだけ似た場所がこの世にもあります。それは韓国の高湿サウナです。日本より韓国の高湿サウナはもっと高温、高湿度に造られた所がたくさんあります。私の体験ではちょうど黄泉の熱さは、特別性の高温サウナに似て、後はそこに燃えさかる火がついてもっと熱く、耐えられない位に温度を高めて、出口のドアがなくなったら黄泉の完成です。私はこれを韓国で高温サウナに入っている時に、ハッとして思い出し、心臓が高鳴りながら悟りました。

地獄は現実の世界です。私は一日に二度行きましたが、普通は一度行ったらもう絶対二度は行きたくない恐ろしい裁きの地です。

ところが私はもう一回だけ黄泉に行った恐怖体験があります。黄泉の苦しみは大きく分けて二通りあります。それは、以前の苦しみが炎であったことと違い、今度の苦しみは悪魔による拷問です。私にとっての地獄体験は、本当の事で壮絶な体験でしたが、時に人々があまり証しを聞いても信じてもらえないことがとても悲しく思います。

ある朝です。幻のうちに主の御霊が私を地獄の黄泉に連れて行きました。黄泉に下

る落下中、悪魔の男の声で甲高い傲慢な笑い声がトンネルの壁にこだましながら長いあいだ鳴り響いていました。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ！」

その後、いくつかの部屋を通過して一つの部屋に私は連れ出されました。地獄にはたくさんさんの部屋があり、人々の罪の種類や重さの段階ごとに分けられています。中でも私が入られた部屋は最も恐ろしく厳しい拷問の部屋でした。以前、私が地獄の最も軽い刑罰の炎だけの穴に入ったことと正反対にこの部屋は地獄の中でも極めて恐ろしい場所でした。地獄の中ではそのことが本能

的な感覚ですぐ分かります。そこは男色と淫乱と好色、姦淫の罪で滅びた人々が入られる部屋です。地獄ではこの種の罪で滅びた人々が最も厳しく裁かれています。姦淫の罪は肉体に対する内なる罪であり、その裁きも快樂にふけっただけ厳しく肉体に対する容赦なき激痛です。

そしてそこで滅んだ魂を苦しめるのが悪霊たちの使命です。ちょうどそれは、死んで腐敗が始まった動物に自然とうじや汚い虫が集まって来てこれを解体することに似ています。こんなことは神学校でも教わらなかつたですが、本当に地獄は徹頭徹尾、物凄い

恐怖と激痛と悲しみの地です。私の連れ込まれた部屋は、長方形の形を持つ電気も何もない暗い場所で、そこで悪霊どものゲームとして私自身が苦しみを受けてきました。

ゲームの始まりに、何と売春婦のような冷酷な女が現われて私を見くびり、これが去ったかと思うと、一匹のその部屋を管理する悪霊が現われて、私をつかみ、部屋の壁めがけて投げつけました。すると、物凄い目に見えない力と勢いで飛ばされて、時速で言うなら数百キロ。今や壁に激突して、即死すると思ったその時、目の前で土のような壁がぼんやりと緑色に光ってから人の形位に膨

れあがり、そこからルシファーに似た西洋風の自分の名前を誇らしげに名乗りながら、考えられないほど恐ろしい顔と形の悪霊が出てきて私を跳ね返しました。本当に部屋の壁の中から出て来ました。そのため傷を受け、飛ばされた私は次に反対側の壁に激突しそうになると、そこもうす暗く緑色に光り、壁の中から自分のさらに異なった名前を持ち、それを誇らしげに名乗るもう一匹の悪霊が出て来て、私を再び前の悪霊の時のように跳ね返しました。

そうして悪霊どものゲームとして私を部屋の中で物凄い勢いではじき返しながら苦しめ



ました。その音もスピードもすさまじく恐ろしいものです。悪霊どもが次々と地獄の部屋の壁の中から出て来て、しかも一匹一匹名前も顔、形も異なっていて、それはこの世のホラー映画などに出てくる想像上の最も恐ろしく醜い悪魔や怪物の姿と本当に似ていて、そこで与えられる拷問の苦痛は言葉では表現出来ないほどに酷い痛みと恐怖の連続です。

彼ら悪霊どもとよく似た怪物を地上でも見たことがあります。それは子供のころ見た仮面ライダーに出てくる改造人間という怪人たちです。二足歩行だけど顔が熊やイノシシ

などをもっと恐ろしく崩したような醜い姿。地獄の悪霊どもはそれらの怪人たちを遥かに恐ろしく凶暴にして身長が3メートル位になった感じでした。とにかく人間が見ただけで嫌いと思うひどく醜い姿、形になっています。私は拷問されましたが、悪霊どもは、これを本当に喜び楽しんで増々力が満ちていき、人の苦しみがむしろ彼らの喜びであり、本当に本来の人間とは全然性質の違う全く憐れみのない生き物でした。

私は自分の黄泉での体がばらばらにされていくのを体験しました。息つく暇と休みが一瞬もない激痛の連続です。特に悪霊にアタ

ツクされた時は叫ぶ声が出ないほどの痛みです。ある悪霊は肩から下、全身鋭く長い鉄のとげに満ちた体をしていました。そのとげの肩に体当たりされて刺された時は痛さのあまり心の内に死んで逃れたいと思いましたが、そこは死はなく一切愛も憐れみもない絶望の場所でした。

悪霊どもは力の限りあらゆる仕方で、私に拷問の苦痛を与え続け、それは地獄の炎よりもはるかに恐ろしい死の連続体験でした。通常の上の生活なら一度の激突で即死するほどの衝撃を繰り返し悪霊どもから代わる代わる受けました。あまりの苦しみに私

が一匹の悪霊に必死の助けを求める哀れみの目で訴えましたが、悪霊にとっては人間の苦しみがむしろ喜びと力の源であり、私が憐れみを訴えた悪霊は目が合うと苦しむ姿に喜んで強くなりました。全くこの世の常識の通じない冷酷で異常な世界が黄泉です。

やがて、私の黄泉の体がバラバラにされた頃、このゲームのような拷問は終了しました。そして、その部屋を管理する悪霊が見えない力で私をつなぎ、別な種類の苦しみを与えるために他の部屋に連れ出そうとしたその時、私が振り返って見ると、他の滅びた魂が私の次にこの部屋に役げ込まれているよ

うでした。こうして次の部屋に移されようとしているまさにその瞬間、私は主の御名を呼び求めることを思い出し叫びました。すると私は特別にそこから救われ、この地上に戻されました。しかし、他の滅びた人々の場合はそうではなく泣けど叫べど拷問の繰り返しでした。主は私に言われました。

「あなたが、これらを体験したのは現実に地獄があることを人々に語るためです」

さらに主は教えて下さいました。

「日本は先祖が霊の姦淫である偶像礼拝を盛んに行なったため、三代、四代と呪いを受け、その子孫は今、肉の姦淫が盛んになりこの罪のゆえに多くの魂がこの現実の黄

泉に落ちているのです」

私は涙ながらにお願いしたいことがあります。もしも、この本の読者の中に何らかの罪との関わりがあるクリスチャンがいましたら、どうか、どうか、お願いします。心の底から悔い改めてイエスの血潮で洗われてください。命がけで罪から離れて本当に清められた完全な人になって下さい。罪こそ現実に人を地獄へ落とす黄泉の力です。まもなくイエスさまは世界に帰って来られ、世と世の欲望は消え去ります。死とハデスのかぎを持つ主に向かって力の限り叫び求めてすがってください。イエスさまはあなたに罪に

打ち勝つ能力を与え、勝利者のための永遠の天国を準備しています。このことが主からいただいたメッセージのすべてです。

本当につらい黄泉はこの地球の中心にあります(イザヤ 14:9、エゼキエル 31:14、黙示録 4:3)。

「地そのものは、そこから食物を出す、その下は火のように沸き返っている。」

(ヨブ 28:5)

黄泉は滅んだ魂が第二の死である火の池を待つ待合室、そこはマントルと中核のマグマのように熱い熱い地です。

「神は人のたましいが、よみの穴に、はいら

ないようにし、そのいのちが槍で滅びないようにされる。」(ヨブ 33:18、36:12)

確かにそこは槍を持って滅んだ死者たちを苦しめる悪魔、悪霊の大勢いるサタンの王国です。泣いて歯ぎしりするような地です。そして白くて元気なうじ虫もいっぱい体の中にいます(ヨブ 14:11、イザヤ 66:24)。

本当にこの様な裁きからイエスさまは十字架の身代わりで救ってくださったのです。すばらしいイエスの血潮のゆえに神さまにどんなに感謝を捧げたら良いのでしょうか。たとえ永遠が一つの口になって神さまをほめたたえてもまだ足りません。

イエスさまの愛は天より高く、永遠に続き、



宇宙より広く、黄泉よりも深いです。たとえ白い空を紙として青い海を墨としても救い主の大いなる愛は書ききれず、空に空を重ねてもなお足りません。

地獄は現実の世界、天国も現実の世界です。審判より逃れ、今はただ主をほめたたえます。すべてのことが感謝です。私の場合、黄泉の実体験以降、眠っていた信仰生活がかなり目覚めて本気になりました。

また、イエスの血潮は私たちを地獄の審判だけでなく、この世の審判からも救われます。

赤いひも

遊女ラハブは人間自体の肉の行ないで評価すると遊女ゆえ、天国から遠くむしろ地獄に近い人です。しかし、生きた信仰の行ないによって義人とされ、全家族、親戚を救いへ導き審判を逃れ イエスさまの系図に載るほどまで祝福された幸いな人です。遊女ラハブは自分たちの住む町エリコがイスラエルの正義の力ある神さまの御前、審判を受けるべく罪あるものであることを認め、さらに審判の日には自分を救って下さる救いの神さまとなってくれることを信じてイスラエルの偵察隊二人に命の救いを請い願いました。エリコの審判の際、救って下さる約束を得た遊女ラハブとその全家族にとって目

印は、遊女ラハブの家の窓に結びつけた赤いひもでした。

これを契約のしるしとして結びつけていれば、イスラエルの偵察隊をかくまった遊女ラハブとその全家を審判の日にも特別に守るという約束です。しかしもし、この赤いひもが窓になれば、それは一般のエリコの住民同様聖絶の対象として審判されたのです。

歴史家ヨセフス・フラヴィウスによると「ユダヤ古代誌」の記録の中で、このとき窓に結び付けた赤いひもについて「赤い布切れを高く掲げておきなさい。そうすれば…」と、イスラエルの偵察隊は遊女ラハブに約束したことが記録されています。赤い布切れは、

他に赤い旗とも訳せます。今、高く掲げられたイエスさまの十字架で流された赤い血潮を私たちの全家に赤いひも、もしくは赤い布切れとして結びつけて、高らかに勝利の旗印として掲げましょう。誰もそこから迷い出ないようにしっかりと家族の愛の絆のひもをもって堅くイエスの血潮で一つになれますように。

## 額の印

エゼキエル九章では終末のイスラエルに対する審判を預言します。御使いを象徴する七人がいます。六人の男は各々に打ち壊

す武器を片手に持ち、七人目の一人は亜麻布の衣を着、手には書記の筆入れをつけていました。すると主は七人目の一人に命じました。

「町の中、エルサレムの中を行き巡り、この町で行われているすべての忌み嫌うべきことのために嘆き悲しんでいる人々の額にしるしを付けよ。」(エゼキエル 9:4)

続いて主は武器を持つ六人に町の中を行き巡り、審判するよう命じました。しかし主は加えてもう一つ言われました。

「彼のあとについて町の中を行き巡って、打ち殺せ。惜しんではならない。あわれんではならない。年寄りも、若い男も、若い女

も、子どもも、女たちも殺して滅ぼせ。しかし、あのしるしのついた者にはだれにも近づいてはならない。まずわたしの聖所から始めよ。」(エゼキエル 9:5、6)

今、イスラエルだけでなく終末の裁きは、神さまの家なる教会から全世界にまで始まろうとしています。しかし世の罪悪を悲しむ性質を持つ、聖霊さまを受けたすべてのクリスチャンの顔の額には御使いによってイエスの血潮のしるし(黙示録 7:3)がすでに付けられています。これが私たちと世の人を見分けて、審判から救う確かな契約のしるしです。

また、創世記のノアの時代、全世界に審判の水が覆った時、箱舟を造って乗り込み、水の上に浮いていれば救われたように、今から反キリスト、ロシアによる第三次世界大戦、アジアから二億の軍隊による世界最終戦争等、数々の炎が全世界を取り巻き、地震や飢饉、疫病が地を覆う時、逃れる道はただ一つ、熱く混乱に満ちた地上を離れ、空中に浮くことにあります。聖書は七年続く(ダニエル 9:27、エゼキエル 39:9)

世の裁きの大患難時代にもあなたを守ると約束しています(黙示録 3:10)。イエスさまが空中から下りてこられ、私たちをみもとに

引き寄せて下さるからです(第一テサロニケ 4:16～18、マタイ 24:40、41)。

ちょうどノアとその家族が大洪水を事前  
知って逃れたように、ロトとその家族がソドム  
とゴモラ滅亡を事前知って町から逃れた  
ように、世に対する七年の裁きが来る事前  
にこれを知る私たちクリスチャンは空中のイ  
エスさまのふところへ家族と共に逃れること  
ができます。イエスさまがその日はノアの日  
や、ロトの日のようだと教えられたとおりです  
(ルカ 17:26～28)。

図 12 の箱舟は聖書と発見された残骸から  
想定された復元図であり、三階建て箱舟を



側面から見た見取り図の内、下半分位が実際に確認されています(図 13)。

箱舟の甲板部分に張り巡らされたひもは測定のために張られました(図 14)。

興味深い箱舟発見の経緯はこのようです。一九四八年、聖書の示す箱舟停泊地のアラテ山脈の一部ジュデエイ山の麗の台地に起きた地震の力で突然、船型の岩が姿を現わしました。これを一九五九年、トルコの空軍兵が空撮写真で発見。船の寸法は長さ一五〇メートル、幅四五メートル、高さ一五メートルであり、聖書の記述と幅以外はほ

ぼ一致、幅だけは土砂に埋まって押し広げられたため二〇メートルほど増大していました。その後、一九七〇年ロン・ワイアット氏が、この近く(六〇〇メートルの高地で海から何マイルも離れた所)でたくさんの石の巨大ないかりを発見。これは宗教的な象徴として崇められていたらしく、数百年にわたって記号や十字のしるしが刻まれており、引き石は縦三メートルの大きな岩塊で真中には固定用の穴が空いていました。通常、古代船に使われた同様の石はもっとサイズが小さく、地中海の各所でも発見されています。

一九八五年、深海潜水者のダビデ・ファソ

ルドは超高感度のレーダー装置を使って船首から船尾への内部区分と隔壁の間に差渡したはりを確認。さらに通常あるはずのない地帯で、レーダー装置は箱舟内部の釘などに使われたであろう鉄、その他の金属が集中しているのを探知。一九八七年、トルコ政府はこれを受けてノアの箱舟国定公園設置となり、今日広く知られるようになりました。

さて、ノアの日、彼らの救いとなった箱舟とは主の命令に従って強いゴフェルの木で造られており、箱舟のサイズは一キュビト五〇センチで計算すると大型客船に匹敵する長

さ一五〇メートル、幅二五メートル、高さ一五メートルでありました。内部構造は三階建てに仕切られ、これらすべてを啓示された偉大な英知に富む設計士は主ご自身でした(創世記 6:14~16)。当時造船技術も充分発展していなかったはずの今から約三五〇〇年も古代の大昔に創造された箱舟に現代の造船技術者たちは驚嘆しています。主から啓示された箱舟の長さ、幅、高さの比率は三〇対五対三であり、これはきわめて高い安定度と安全性を持つ設計であったことが分かったからです。

この比率で実際に模型を作ってどれほど

の津波にまで耐えられるか実験したところ、いままでの歴史で観測された最大の津波が高さ三五メートルでしたが、この箱舟サイズの比率で造られた船ならば、実に高さ四五メートルの津波が押し寄せても転覆せず、強度的にも耐えられることが判明したのです。もしも、この長さの比率が少しでも長すぎたならば、大洪水の際、強度が弱くなって真中から壊れる危険性もあり、反対に長さの比率が少しでも短かすぎたならば、大洪水の際、荒波で不安定になって横転する危険性もあったのです。しかもこの箱舟は完璧な比率で創造され、内部構造が三階建てになっていたことも肉食獣と草食獣の

動物たちをみごとに分別されただけでなく船内の間仕切りで船の全体強度をさらに高めていたのです。箱舟の長さ、幅、高さの比率三〇対五対三は今日のタンカーの黄金律と呼ばれて全世界で採用されています。そしてこのような完璧なサイズと高度な安全性能を持つゴフェルの木の箱舟のその内側と外側には「木のやに」、口語訳では「アスファルト」が主の命令に従い塗られています。

この木のやにが箱舟が浸水しないよう防水加工の役割を果たす、重要な覆いとなりました。そして木製の箱舟は今、私たちの救

い主イエスさまの高度で優れた完璧な救いをもたらす十字架の木を象徴し、その木に塗られた、なくてはならない重要な「木のやに」とはイエスの血潮を象徴していたのです。主が「内と外とを木のやにで塗りなさい。」(創世記 6:14)と言われた時、この「塗る」という言葉には「カハール」が使われ、「あがない・買い戻す」という意味も含まれており、これは十字架はイエスの血潮で全く覆われた木であり、私たちを完璧にあがない、買い戻す力があることを教えています。この血潮の力で世の審判の日にもあがなわれ、空中再臨のイエスさまの御元へ水に浮く防水加工の箱舟同様、空に浮いて引き上

げられるのです。

ノアの日、水の上に浮く義人たちと、水中に沈む世の人がはっきり分離しました。またロトの日とは、低地に住むすべての人々が罪悪の町ソドム・ゴモラと共に滅ぼされる日にも、高い山へ逃げればロトとその家族も助かるという主の約束がありました。患難時代の世界はソドム、ゴモラのような町です。そこは墮落した土に属する肉の人の住む滅び去る低地の町々であり、高い山へ逃げる必要があったのです。ここでも、高い山の上の義人たちと滅ぶ低地の世の人々がはっきり分離されました。それらのことが私たちにと



って滅び去る地上を離れ、空高く引き上げられるイエスさまの空中再臨の象徴です。

私は思います。もしも私たち皆が七年間地上に残されて大患難時代を体験しなければならなかったら、イエスさまのたとえ話はその日について、誤解されやすいノアの日やロトの日のようであるとは言われずに、人の子が来るのはちょうどダニエル四章二五節にある「七つの時」(七年間)、大患難を直接身に受けたネブカデネザルの日のようであると言われたことでしょう。

「彼は七つの時を気が狂って過ごし、人間の中から追放され、野の野獣と共に住み、

牛のように草を食べ、体は露に濡れて、髪の毛は鷲の羽、爪は鳥の爪のようでした。だからあなたがたも同様七つの時を注意しなさい……」

と警告されたことでしょう。しかし聖書にはそう書いていません。

もちろん聖霊さまの油なく残されて、七年患難を通して清まり、殉教して昇天する人もいます。しかし、一般的クリスチャンは皆、こんな惨めな七つの時を過ごす必要はありません。ご自身の血潮であがなったイエスさまの愛している花嫁ですから、絶対引き上げられます。

私は始始めこれについて正しく教えて下さる教師がなく、自分で聖書を研究して一つの結論がありました。

「私たちはみんな残されて、七年患難でテストされるのだ」

しかし、一般的には七年の前に空中携挙があると知られているため、メッセージの機会  
で終末論を語る時はいつも口では「皆さんは七年患難の来る前に空中にあげられますよ」と言い、心の中では「本当は残るよ」と言って、二心を持って説教していました。

そんなある日の夜、悪夢の内に悪霊どもに襲われました。薄暗い四角形の部屋の四隅に人間に似た四人の悪霊が立っていました。

各々、気味悪い色のついた滑らかな肌を持ち、身長が三メートル位ある巨人の悪霊どもでした。そして四人は私を空中に放り投げ、バレーボールのトスをするように互いの間で私をボールにキャッチボールしてあざけり楽しんでいました。一方、私は空中に投げつけられているただ中でも心の内では「今ここは患難時代だ。空中に昇ろうか、地上に留まろうか、どうしよう」とそう考えている夢でした。目が覚めて震え上がりました。平安を求めて主に祈ると、悟りがきたのは「私の終末論が心の内に正しくないから悪霊につけ込まれたのだ」と、そう聖霊さまが教えて下さいました。

そこで、朝起きるともう一度始めから聖書を読み直して祈りつつ研究しました。すると、結論は七年患難の来る前にクリスチャンは空中携挙されるという教えに目が開きました。確かに聖書にはイエスさまの空中再臨(第一テサロニケ 4:16~18)と地上再臨(ゼカリヤ 14:3、4、イザヤ 64:1)の二回があるとはっきり書かれており、七年空中携挙体験は私たち教会にとって結婚披露宴(婚宴)であることが分かりました。古代からイスラエルでは結婚前に七日間の盛大な「婚宴」を設けて、飲み食いして祝い(士師記 14:12)、それから後、正式に「婚姻」を結び、二人は夫婦として認められるからです。私たち教

会はイエスさまの花嫁です。花婿イエスさまが私たちを愛するから、空中に迎えに来られるのです。花嫁のいない「婚宴」など絶対あり得ません。

二人が共にいて祝うのです。黙示録一九章七節では「小羊の婚姻の時がきて花嫁はその用意ができた」とあり、その後の黙示録一九章九節では「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ」と書いてあります。確かに「婚姻」と「婚宴」の両方があるのです。

かつてカナン四十日間偵察隊の報告を聞いて否定的にこれをとらえ不信仰をつぶ

やいたイスラエルの民に対して一日を一年と数えて計算し、四十年の荒野をさまよう審判が主から下ったように(民数記 14:34)、今は主に愛された神さまのイスラエル、私たちにとって一日を一年と数えて計算し、通常七日間も開かれる婚宴が七年間にもなつて楽しめられます。ただ、私たち花嫁は用意が必要なだけです。今、清くなるよう努力して純血を保ちましょう。

イザヤ六五章一三から一六節では空中に挙げられた人々と残された人々を対比して書かれています。そこに出てくるクリスチャンの姿は「食べる、飲む、喜ぶ、喜び歌う」

ですが、反対に地上に残された患難の人々には「飢える、渴く、恥を見る、叫び泣く…」と預言されており、これらの言葉もまた、宴会に使う言葉です。確かに空中の七年間の大宴会のような婚宴は、イエスさまと共にやって来るのです。

出エジプトの際、全く災いにあわずに旅立ったヘブル人の家々と、数々の災いに会って国と共に滅んだエジプト人の家々のように、あるいは、ヨセフの時代に起きた七年間の大豊作と、七年間の大飢饉のように、空中に引き挙げられる私たちと、地上にそのまま残される人々は大きく違います。また、



黙示録四章一節以降では使徒ヨハネへの「ここに上れ。」と呼びかける御声に応答して教会も地上の七年患難時代から逃れて、天国の情景へと移されております。

「彼らは、大きな艱難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊(イエス)の血で洗って、白くしたのです。」(黙示録 7:14)

## 鷲の羽

「ネブカデネザル王。あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、こうして七つの時があなた

の上を過ぎ、ついに、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなうものにお与えになることを知るようになる。」(ダニエル 4:31、32)

さらにまた祈りながら聖書を学んでみると、ネブカデネザル王の患難体験に目が開け、この角度からも患難には残らないという確信が増しました。ネブカデネザル王は高慢になって自らの王国を誇ったため神さまの審判を受け、七つの時、患難に見舞われ、王位も理性も失い、人間の中から追放された荒野で獣のような生活をした王です。七つの時という患難の期間、彼は野の獣と共に

住み、牛のように草をモグモグ食べ、体はホームレスの野宿暮らしにより天の露に濡れ、髪の毛は床屋もない荒野で伸び放題、風呂もシャンプーもしないため、汚れてパサパサの枝毛に痛み、ついには野の草ばかり食べ続けたため栄養失調で茶褐色の鷲の羽のようになり、つめもつめ切りなく、伸びに伸びて鋭い鳥のつめのようになってしまったのです。しかし、愛と赦しの神さまはこのような理性を失ったネブカデネザル王をあわれんで、七つの時が過ぎるとかえりみていやされ、理性も威光も輝きも王位も取り戻し、以前にも増した大いなる者として繁栄を回復されました。

今、全世界もまた、神さまを離れ、与えられた物質世界自体を誇る高慢の罪に毒されたためやがて審判され、七年間の患難時代という国難に投げ込まれようとしています。これを逃れる道は私たちの身代わりに患難をすでに体験されたイエスさま以外に天下に救いはないです。救い主イエスさまは理性こそ失いませんでしたが、ネブカデネザル王と同じような患難を十字架上体験された王です。ネブカデネザル王が王位を剥奪され、人間の中から追放されたように、王の王であられるイエスさまは天国の栄光の王位を失ない、神さまに捨てられる激痛を体験されました。

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マタイ 27:46)

永遠に真の王の王なるイエスさまは理性を正確に持った上で、これを体験し、わきまえ知ったため、その心の痛みはネブカデネザル王以上です。その時、十字架を中心にイエスさまはネブカデネザル王が七つの時、多くの野の獣と共に住んだことと同じような体験もされました。詩篇ではイエスさまの十字架を取り巻く大群衆について正確に預言されていました。

「数多い雄牛が、私を取り囲み、バシヤンの強いものが、私を囲みました。彼らは私に向

かって、その口を開きました。引き裂き、ほえたける獅子のように。」(詩篇 22:12、13)

「犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群が、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。」(詩篇 22:16)

ここでいう「数多い雄牛」とは角ある雄牛のように攻撃的で暴力と咎に満ちた、たくさんの勢力ある男たちの意味であり、「バシヤンの強いもの」とは、アモス四章一節で「バシヤンの雌牛ども」とある通り、これは女たちの強いものの意味です。ですから数多い男たちと女の強いものたちが十字架を取り囲み、吠えたける大声の出る獅子のように、イエスさまに向かって彼らは罵倒し、悪口雑言し

たというのです。さらに「犬ども」とは、釘打ち、手足を引き裂くローマ兵に加えて、罪状書き「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」(ヨハネ19:19)が十字架の上にヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語で掲げられたため、これに関心を持って読んで理解してから迫害したユダヤ人だけでなく、通りすがりの外国人たちさえも十字架を取り巻いていたという意味であり、他に悪者どもの群れも、取り巻いてイエスさまの釘打たれた姿を心から、積極的に同意していたのです。

イエスさまは人間の中から荒野のゴルゴダの丘、十字架刑へと追放され、群衆はそこ

で凶暴な獣となって彼を取り巻いたのです。  
イエスさまは、ただ祈られるばかりでした。

「私のたましいを、剣から救い出して下さい。  
私のいのちを、犬の手から。私を救って  
ください。獅子の口から、野牛の角から。」  
(詩篇 22:20、21)

また、ネブカデネザル王が野の草を食べ  
たように、イエスさまは呪われた物質的貧し  
さの体験もされました。エデン追放後のアダ  
ムがエデンの豊かな木の実から野の草を食  
するまで生活水準が落ちたように、イエスさ  
まは豊かなエデン以上の天国から、この世  
に来られ、貧しさの呪いを体験されました。  
イエスさまの地上における全生涯こそ、実



に栄光の天国から比べる時、七つの患難時代そのものであったと言って過言ではありません。

終末の世界を襲う七年患難時代のクライマックスの後半三年半が最もすさまじい、裁きと最後の大戦争を引き起こすように、イエスさまの三年半の公生涯の最後に最大の戦い、十字架が現われました。その時、イエスさまの御体は衣服をはぎ取られ、ネブカデネザル王同様、天の露に濡れ、その御頭には鋭いいばらの冠を押しつけられました。王の王なるイエスさまがいばらの冠により、額に深い傷を受け、目も開けられないほど

血潮を流されたのです。その血潮は長い髪を濡らし、やがて血糊となって固まっては崩れ、ついにイエスさまの髪の毛は赤と混じり合った茶褐色のバサバサなネブカデネザル王同様の鷲の羽のようになったのです。

そして、最後にはネブカデネザル王のつめが鳥のつめのようにだったことと同様の体験もありました。イエスさまの両手のひらに打たれた釘は必ず正中神経を損なうため十字架呼吸をしようともがく動きの一つ一つさえ両腕に激痛を起し、両手はかたくにぎりしめる形になったはずです。そこから血潮が流れ落ち、やがてこの激痛の極みなる死

の際、こぶしは開いて指先には激しい力が入り、鳥のつめのように指を立てて、ちょうど鳥が獲物に襲いかかる時の手のような形になったはずです。人は肉体的激痛により命を落とす場合、特に死の間際、全身を最後の力が覆い、硬直してから息を引き取ることが多くあります。その際、老人よりも若者や筋肉質の体を持つ人ほど筋肉が反発して痛みもいや増し激しいものとなります。

イエスさまは元々、三十歳まで石工のような重労働の大工仕事に専念されたため体質的に筋肉質の体をもたれていたはずです。そのため三三歳の若さで十字架に付けられ

たその肉体的激痛は人として最大級であり、  
痛みのはげぐちを求める体の要求は大きな  
叫びとして現われました。

「イエスは大声で叫んで、言われた。『父よ、  
わが霊を御手にゆだねます。』こう言って、  
息を引き取られた。」(ルカ 23:46)

イエスの御手は最後の死にいたり、激痛  
にもだえ、まさに鳥のつめのように力が入っ  
た後、うなだれ、頭を垂れて息を引き取られ  
たのです。その御手の形を想像できますか  
…。イエスさまはこうしてネブカデネザル王  
のような、いや、それ以上の激しい患難をす  
べて体験されたのです。

それは審判です。裁かれた醜い姿であり、七年患難時代のようなものです。それは身代わりの壮絶な死の体験です。ですから、私たちは絶対地上に残されて同じ苦しみを体験する必要はないです。七年患難時代は、残された罪ある人が苦しんで悟って、イエスさまを信じる悔い改めの最後の機会、神さまの愛のむちであり、決して救われた私たちのものではないのです。ネブカデネザル王は七つの時を過ごした後、理性と威光と輝きと王位を取り戻しました。イエスさまは十字架の死という患難を体験された後三日目に復活され、昇天され、今、天の王国

で以前にもました王位と威光と輝く栄光を  
取り戻して、大勝利されました。私たちは聖  
書に出てくるネブカデネザル王の記録を断  
片的にだけ見る時、七年患難にとどまる思  
想が生まれますが、これを私たちの身代わ  
りに患難を通過されたイエスさまの十字架  
の血潮とかけあわせて見つめる時に、この  
ような正しい悟りが開かれるのです。

「私たちは患難を受ける必要はない。イエ  
ス・キリストの十字架の身代わりの血潮のゆ  
えに」

ですから、すべての真理を啓示し、天国を  
開く力ある偉大なイエスの血潮を永遠にほ  
めたたえます！。

その結論がついた日の夜の事です。

再び夢を見ました。今度は幸いな喜びの夢です。日本がリバイバルしてたくさんのクリスチャンが見えます。しかも、空中にはまぶしく輝くイエスさまが雲に乗って下りて来られ、私たちは空中にまっすぐ引き上げられて空を飛んで集められています。本当にそれは気分が爽快であり、とても早い速度であちらこちらから、恐れもなく大喜びのうちに美しく引き寄せられています。地上はいつも通りの地球でした。しかし、私の上にも下にもたくさんのクリスチャンが空を飛んで空中へとまっすぐ非常に高い所まで上がっていくのです。その内の一人として私もこの上なき喜

びに満ちて心の内に叫びました。

「一秒でも早く愛するイエスさまの所へ引き寄せられたい、うれしい！」

それは、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きの内に雲に乗って来られたイエスさまの空中再臨です。キリストにある死者がまず始めによみがえり、次に私たちが彼らと一緒に空に引き上げられながら、栄光の新しい体へと変えられる大いなる喜びと栄光輝く、その日の預言的啓示でした。

言葉にできない喜びに満ちて聖霊さまによって栄光に満ちて、胴あげされています。



私はうれしくてうれしくて心の内に再び叫びました。「早くイエスさまの所へ！」すると、目覚め、私は聖霊さまに満たされて、主をほめたたえる言葉と異言が私の口から絶えませんでした。平安と物凄い喜びが心の奥底からあふれ出しました。

「イエスさまは来られる。七年空中婚宴の目的をもって」

この悟りの内に、神さまが夢で確認の印を押し下されたのです。その後、祈りの内にある考えが来ました。クリスマスの日とは本来イエスさまの聖誕の聖なる日であり、神さまが人となったイエスさまがたたえられるべ

き誕生日なのに、今の時代は惑わしの霊によって神、イエスさまよりも肉の母マリヤばかりもっと強調して、イエスさまを母親がいな  
いと何もできない力なき幼子に落としてしま  
い、救い主のイメージを狂わせて神さまの  
栄光を覆い隠している。この惑わしの霊は  
イエスさまの時代から今日までずっと世に  
働いているものであり(ルカ 11:27、28、エレ  
ミヤ 7:18)、イエスさまの空中再臨の直前ま  
であるものだ(黙示録 2:22)。

さらに最近ではサンタや、クリスマスバーゲ  
ンセールやパーティーばかり前に出てきて  
この日を惑わし、何の日か分からなくしてし

まい、神さまの栄光の福音に覆いをかけているではないか。今、サタンがそうしているならば、将来私たちクリスチャンが空中携挙されるキリストとの聖なる婚宴の日、どのように残された世人を欺くだろうか。

「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。」(第一テサロニケ 5:2)

「家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。」(マタイ 24:43)

その日がいつであるか、父なる神さま以外

は知らず、人々は誰も知りません。サタンも知りません。そのため、この世という家の主人サタンはおめおめと突然来られるイエスさま再臨の日、押し入られてしまうのです。イエスさまが泥棒のようにサタンの家なる世界へ押し入り、盗み返す者はご自身の宝の民、私たちクリスチャンです。しかし、残された世の民にはこれが分からないのですから、残された世の民はクリスチャンたちの突然の失踪に驚き果て、不従順の子らを通してサタンは言うかもしれません。

「クリスチャンたちの無責任な狂信的集団失踪事件！」あるいは「未確認飛行物体UFOに乗った宇宙人による集団拉致事

件！」

今、サタンはクリスマスの日さえ真理をずらし、サンタやマリヤや世俗によって惑わしているのだから、その日、地上に残された人々が信じて救われないようイエスさまの誕生日ばかりか、ご婚宴の日である空中再臨という大切な福音の一部分をも、再び覆い隠さないとは限りません。

私たちの信仰は狂信的でもなく、UFOの宇宙人も実在しません。ただ第一の天、空を見、第二の天、宇宙を見、第三の天、神さまの国を見るのみです。福音にこれ以上覆いがかげられないように、今こそ大胆に

伝道し、告白、宣言するべきです。

「やがてイエスさまは雲に乗って、空から私と全クリスチャンを迎えに来られます！」と。

こうしておけば万一、私たちの周囲に患難時代、残された人々があったとしても私たちの事実世を去った生きた証しによって、患難のただ中でも逆境の中で耳が開かれて救われる人々が出てくるかも知れません。私たちの遺産である聖書、聖歌、信仰の書籍、DVD、PCデータ、メッセージビデオなど用いられるかも知れません。

大事なことは反キリストが引き留められ、働

きやすい今の時、光のある間に福音を語る  
ことです。誰も働けない霊の夜、反キリスト  
の来る前に今、聖霊さまと聖霊さまに満ちた  
指導者たちが共にこの世にいる恵みの日  
に救いを受け、訓練されて出て行き、福音  
のすべてを伝道することです。

「あなたがたに光(聖霊さま)がある間に、  
光(父なる神さま)の子どもとなるために、光  
(イエスさま)を信じなさい。」(ヨハネ 12:36)

殉教者たちの血の叫び

「もし、その日数が少なくされなかったら、一  
人として救われる者はいないでしょう。しか

し、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。」(マタイ 24:22)

少なくされた日数、七年間のゆえに患難時代にも希望はあります。前三年半リバイバルが起きたイスラエルから、十四万四千人の選ばれた者、本当の十二部族が立ち上がるからです(黙示録 7:4、ローマ 11:25)。これぞイスラエル史上初めから主が一番願ひ(ローマ 11:2)、約束しておられた(創世記 17:7)後の子孫、キリストから生まれでた真のイスラエルの完成です。

彼らこそ、天の御国の本当の弟子(ヨハネ 8:31)として、学者(イザヤ 45:4)であり、聖



書という倉から新しいものである新約の恵みも、古いものである旧約の律法でも自由に取り出す一家の主人のような(マタイ 13:52)力ある証人です。最後のリバイバルの爆薬庫、神さまの国の軍隊です。彼らはバアルにひざまずかない七千人のような堅い信仰で宣教し、リバイバルを起こしますが、やがて殉教します。しかしその時、流された殉教者たちの血は叫び、継続的リバイバルを呼びます(黙示録 6:10、イザヤ 26:21)。

そのためこれに答えて、彼らの代わりに患難時代後半の三年半には終末に働く使命が残されていたため、生きたまま天国へ移

されたエリヤとエノクがもう一度、この世に来て宣教目的と人間である以上一度死ぬ目的を果たすでしょう(黙示録 11:3~13、ゼカリヤ 4:14)。エリヤとエノクは、サタンからの偽りの説教者反キリストと、彼を助け、サタンの力で奇蹟を行う偽預言者(黙示録 13:13)に対抗する、全地の主のそばに立つ聖霊の油注がれた人たちです。エリヤは、おもに御言葉に伴うしるしとしての奇蹟を行ない(黙示録 11:6)、エノクはおもに説教を行ない、空中におられるイエスさまのオリーブ山、地上再臨を直前にこう預言するでしょう。

「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行い、不敬虔

な者たちの、神を恐れずに犯した行ないの  
いっさいと、また神を恐れぬ罪人どもが主  
に言い逆らった無礼のいっさいとについて、  
彼らを罪に定めるためにである。」

(ユダ 14、15)

しかし、三年半の時が満ちると宇宙万物を  
保つ神さまの御言葉(ヘブル 1:3)の変える  
ことのできない定めに従い、エノク(ヘブル  
11:5)とエリヤ(第二列王記 2:11)は人間で  
ある以上どうしても一度死ぬ必要が生じま  
す。

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを  
受けることが定まっている。」(ヘブル 9:27)

このため、人類史上まだ一度も死を見ることなく生きてそのまま天に移された二人の人間エリヤとエノクは反キリストと戦い、殉教します(黙示録 11:7)。

ここでなぜ彼ら二人がエリヤとエノクであるかについて話します。彼ら二人はエリヤとモーセであるという聖書学者もおりますが、聖書には申命記三〇四章五節で、モーセは一二〇歳の時、モアブの地で死んだ。とはっきり記されています。もし、終末に再びモーセが来るならば、黙示録十一章七節に書かれてあるとおり、彼ら二人は終末に殉教するため、モーセは人として二回も死ぬことになってしまいます。しかし、人間の肉の死

は一度限りです。では、一体なぜモーセの死後、その体についての論争が霊の世界にあったのでしょうか。

「御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、『主があなたを戒めてくださるように。』と言いました。」(ユダ 9)

サタンがモーセの体を欲しがって、ミカエルに引き渡そうとせず、妨げたのには理由があります。モーセの死後、後の時代に必ずイエスさまが世に来られ、高い山でペテロとヤコブとヨハネの目の前で御姿が変わり、

御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなって神さまの栄光が主を覆う時、モーセが再び現われるからです。聖書にはその日について律法の代表モーセと預言者の代表エリヤが現われて、イエスさまと十字架のあがないの死について話し合われたとあります(ルカ 9:31)。

このような十字架にかかわる話し合いという重大な神さまの御計画が律法の代表者モーセにはあつたため、事前に妨げようと肉体的で愚かなサタンがモーセの死体を手放さないように、こだわっていたのです。しかし神さまの御計画はすべて成就します。エリ

ヤとモーセはその日無事に世に来て使命を果たし、天に帰りました(マタイ 17:8)。

今から先も必ず、サタンの妨げを打ち破って終末の後半三年半の大患難時代になればエリヤとエノクが再び世に来て使命を果たします(マラキ 4:5、6)。彼らの使命はイエス・キリストを宣べ伝えることと、人間として一度死ぬことです。

イエスさまはかつてペテロにどのようにして殉教して、神さまの栄光を現わすかを預言されましたが(ヨハネ 21:19)、殉教とは神の栄光です。

エリヤとエノクの場合、その栄光のさまは、二人がエルサレムで殺された後、人々が死体を眺め続け三日半の後には、神さまから出た命の息が彼らに入り、復活、昇天すると預言されています。その時、一粒の麦が殉教で死ぬと、その後の復活は大きく大地震を起こし、患難時代に残された人々さえも天の神さまをあがめる栄光が現われます。

「しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。



そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。」

(黙示録 11:11～13)

ここで終末の二人がエリヤとモーセではなく、エリヤとエノクであることを明らかにしたうえで最も話すべきことが話せます。それはエリヤとエノクの殉教の死、それ自体も神さまの栄光、イエスさまの十字架のひな形なのです。今から先、エリヤとエノクが天国から宣教目的と、人として一度死ぬ目的を果

たすために世界に来ますが、普通は死ぬこと自体を目的に世に来る人は誰もいません。むしろ幸福に生きるために人は世に産まれます。しかし、他に人類史上たったお一人だけ死ぬことを目的に使命として世に産まれた人が実存されたのです。イエス・キリストです。キリストは栄光の天国の御座をすべて捨てられて、自ら卑しいしもべの人間の姿をとってこの世に宣教目的と十字架の死、それ自体を目的に来られた特別なお方です。

「人の子(イエス)が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、

自分のいのちを与えるためであるのと同じ  
です。」(マタイ 20:28)

聖書は終末にエリヤとエノクがエルサレムに  
て殉教した後、人々はその死体を眺める事  
を預言します。

「彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエ  
ジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらさ  
れる。彼らの主もその都で十字架につけら  
れたのである。もろもろの民族、部族、国語、  
国民に属する人々が、三日半の間、彼らの  
死体をながめていて、その死体を墓に納め  
ることを許さない。」(黙示録 11:8、9)

イエスさまがエルサレム郊外ゴルゴダの十字架上、はりつけになった現場は、ローマ帝国の権力見せしめ目的に都に近い非常に目立つ道路わきで、多くの人々が行き交いながら血潮にまみられたイエスさまをじっと眺めていました(ヨハネ 19:20、詩篇 22:17)。こうして死にて葬られたイエスさまの三日目の復活とその後の昇天は、弟子たちの集うマルコの家全体を揺り動かす大地震を起こして(使徒 2:2)、聖霊さまを下らせ、今は世界中が神さまをあがめる大きな栄光のリバイバルを現わしています。

## いばらの王冠

天国で私たちは将来、栄光の体に冠を受け、光り輝く清い麻布を着ることが許されます。私たちのいただく冠とは、あらゆる角度から装飾された大変美しいものです。「命の冠」(黙示録 2:10)・「金の冠」(黙示録 4:4)・「栄光の冠」(第一ペテロ 5:3)・「義の冠」(第二テモテ 4:8)・「喜びの冠」(ピリピ 4:1)・「栄光の冠」(箴言 4:9)・「誇りの冠」(第一テサロニケ 2:19)、などと呼ばれており、黙示録四章一〇節によると、天国の二四人の長老たちは自分の冠を御座の前に投げ出して、ただ神さまだけを礼拝していま

す。彼らが自分たちの冠を投げ出したのは、美しく高価な冠以上に、すべてを創造し、与えて下さった主ご自身を礼拝することが最高にすばらしく、主をあがめたい一心から夢中になってすべてを捧げ、冠を投げ出し、自らを低くしてまでも神さまを高めたい真の礼拝者たちの心の現われだと思えます。私達も本当に霊の目が開いて主を知るならば、それぐらい夢中になって主を愛し、礼拝するにふさわしい今、私達の知る以上に限りなくすばらしい神さまです。その理由は、私達のいただく冠も衣も命も、すべてはイエス・キリストが身代わりにいばらの王冠を受けて血潮を流し、衣を失い、裸の恥

を受けつつ、十字架で命を捨てられたから  
です。

山岳救助犬ディペンダブルの実話を御存  
じですか？ある日、雪山で遭難者を助けに  
行き、死にかけていた男を見事に発見、訓  
練通り遭難者の冷えた体を温めようと覆い  
かぶさり顔を舐めました。セントバナード  
犬は一八〇センチ体重八〇キロ。意識を回  
復した遭難者はとっさに狼に襲われている  
と思いパニックになってナイフでこれを刺し  
てしまいました。よろめくディペンダブルは  
抵抗もせず、山小屋へ逃げ帰り、そこで息  
絶えました。皮肉にも遭難者は雪上に滴り

落ちたディペンダブルの真っ赤な血の跡を  
たどって無事下山できたそうです。私たち  
が今、生きるのもイエス・キリストが犠牲に流  
された命の血潮があったからです。

## 血に染む長服

ある時、私は風呂場でこれを実験しました。  
同量のお湯の入ったペットボトルを左右の  
手に一本ずつ持ち上げ、逆さにして手首の  
あたりから前向きに両手を高くあげて静か  
に注いでみました。

すると、お湯は両手首から流れ落ち、腕を  
伝って首より下、胸元で合流して、体の前



面中心に濡らしながら、足下へ落ちていきました。実際に行なってみてそこで悟りが来ました。十字架上、イエスさまの背中から下は、むちで血潮にまみれ、側面のわきから下は長いむちの先端とローマ兵の槍で血潮にまみれ、前面は、おおよそこの両手から伝って流れ落ちた御手の釘打ちによる血潮で覆われたということを、すなわちイエスの御体は前も横も後ろも全身血潮にまみれて特に前面を覆う流れ、ちょうどそれは長そでの付いた赤い長服のように、手元から始まり体の全面を覆い隠しました。続いて悟りが来ました。

「ああ、そういえば創世記三七章三節で、

父ヤコブは一番愛する実の子ヨセフにだけ、  
長そで付きの長服を作って与えていたのだ。  
ヨセフもイエスさまのひな型だ」

イエスの血潮にまみれた全身を覆う長そ  
で付きの赤い長服、これは確かに父ヤコブ  
が最愛の子ヨセフにだけ長そで付きの長服  
を特別に作り与えたように、父なる神が最も  
愛されたお方はイエスさまであるという血潮  
の伴った生きた証しでありました。ヨセフの  
生涯の中にもイエスのひな型がはっきり見  
られます。父ヤコブに一番愛されたヨセフは  
一七歳の時、兄弟たちからねたまれたあげ  
く穴に落とされイシュマエル人へ銀貨二十  
枚で奴隷として売り飛ばされた人です。そ

の時、兄弟たちは、この様な罪悪を隠すためにヨセフの長服を取り、雄山羊をほふって、その血に長服を浸してこれを証拠に父ヤコブの所へ持って行き、野の獣にかみ殺されたかのように工作し、父ヤコブをだまし、彼らの中で生きたヨセフを死人のように葬り去ったのでした。事実その後の一三年間、祖国を離れ、すべてを失ったヨセフにとってエジプトの体験はまさに、死の連続でした。しかし、主が試練の只中、ヨセフと共におられたため、彼は幸運な人として栄え、数々の絶望的な死の体験を通りながらも耐え忍び、後には三〇歳にして当時の世界最大の先進国エジプト全体を治める国務総理大

臣にまで高められ、名声を博したのです。

それから九年後、世界的大飢饉の年月にエジプトの穀物を買付けに来たのが、かつてヨセフを迫害し売り飛ばした兄弟たちでした。彼らに対してヨセフはすでに充分、復讐する権威も能力もありましたが、むしろ赦しを宣言し、国賓として一族を招き入れ、エジプトの最良の地と最良の物を与えて祝福し、一族を救いました。その心は数々の試練を通して磨き上げられた、まさにイエスさまの偉大な愛と赦しの心を体得したものです。

父なる神に愛された御子イエスは同胞の同国人にねたまれ、弟子のユダにも、裏切られ、銀貨三十枚で、奴隷の値を付けて、祭司長に売り飛ばされ、十字架へ釘打たれた救い主です。もし、イエスさまがその時祈り求めれば、天国の力ある十二軍団よりも多くの御使いたちを呼び求めて迫害者を根こそぎ滅ぼす権威も能力も充分ありましたが、イエスさまはあがないの犠牲を覚悟し、自分を殺す者のためにとりなし祈られました。

「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのか自分で分からないのです。」

(ルカ 23:34)

かつてヨセフの場合、兄弟たちは長服に雄山羊の血を浸して、これを証拠に父ヤコブをだまし、息子ヨセフの死を思わせていたが、イエスさまの両手から流れ出る血潮は父なる神の御前、血に染む赤い長服として、ひとり子の本当の死を告げる現実の証拠でありました。さらに「彼らは足かせで、ヨセフの足を悩まし、ヨセフは鉄のかせの中に入った」(詩篇 105:18)。エジプトでヨセフの自由を奪い、獄中にその足をとどめたものとは鉄のかせでした。

イエスさまを十字架にとどめ、自由を奪い、その御足を悩ませたもの、それは足に打ち

込まれた鉄の釘です。そして、一度殺されたはずのヨセフがエジプトにおける繁栄により公に生き返ったように、イエスさまは三日目に本当の死のさまより、よみがえり、復活の主として天国の王位を確立され、十字架を通して今も、私たちの赦しを宣言し、神さまの家族として最良の土地である豊かな天国を相続させようと国賓的待遇で御手を広げて招いておられる愛と赦しに富む現実の救い主です。

ヨセフが数々の試練を耐え抜き、最終的に栄えに満ちる一族の救いとなれた事は、もう一つの秘密があります。一七歳の時、主

から受けた夢です。彼の家族が自分を伏し  
拝み、一番出世するという夢と幻の力が試  
練のヨセフを常時支え続け、やがてはそれ  
を成就したのです。私たちも現在、何を心  
に見据えるかが未来を決定し、心のビジョン  
は大変重要です。今、心に描く夢と幻に聖  
霊さまが臨まれ、未来への影響・感化を与  
えます。人は夢があればいかにつらい試練  
の環境にも耐え抜くことができ、夢が生き抜  
く原動力になります。夢さえあればどんなに  
年をとっていてもその人はまだ若いです。  
夢のない人はたとえ若者であっても、すで  
に年寄りです。聖書を読んで肯定的な夢を  
心に描き、聖霊さまの働きを解き放ちましょ



う。ヨセフはエジプトのつらい日々にも神さまよりの夢、「やがて自分は兄弟たちと和解し、彼らは私を伏し拝む、繁栄と出世のときは来る」このことをかたく信じていました。ヨセフはイエスさまのひな形です。

そのためイエスさまの内にも十字架の苦しみを耐え忍ぶ大きな原動力、夢がありました。イエスさまが迫害された公生涯、特に痛切なる十字架上で信じて見続けていた夢と幻とは、今は背いて釘打ち続けるが、やがては悟って立ち返る。まだ見ぬ神さまの家族・私たちクリスチャンのイエスさまを伏し拝む救いと礼拝の姿です。イエスさまが十字

架上「父よ。彼らをお赦し下さい」ととりなし  
祈られたその時、自らを釘打ち、殺すロー  
マ兵と当時の群衆だけでなく、二千年後に  
生まれてくる私たち一人一人の顔も御心の  
内にはあったのです。その夢と幻は私たち  
の救われた、霊と真による心からの礼拝の  
姿です。ちょうど救いを受けたヨセフの家族  
が最終的に一切を見極め悟った上で、へり  
くだり、悔い改め、感謝の念に満ちて心から  
頭を下げたように、強制的ではない自発的  
な心からわき上がる感謝と救いの喜び、こ  
のゆえに現わされる礼拝。形式や習慣から  
ではない、神さまへの愛の告白である礼拝。  
これを主は願われています。私たちにはイ

エスさまの身代わりにより、いただいた赦しと救いのゆえに感謝があります。流されたイエスの血潮のゆえに父なる神さまへの愛があります。このことが他の偶像宗教とは異なるキリスト教の神髄なのです。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(第一ヨハネ 4:10)

もし、ヨセフの兄弟たちが過去の罪悪を赦してくれたヨセフに対して、いつまでも後ろめたく悔いてばかりいたならば、既にすべてを赦したヨセフにとって喜びとはならなかった

でしょう。私たちの場合でも一度悔い改めた後は、過去を忘れて新しい霊と新しい心で喜びと感謝の内にイエスさまを礼拝することです。

イエスさまは私たちの罪赦された清い姿・自由な神の子供として健康で豊かに聖霊さまに満たされた姿・勝利に満ちて天国へ入場する姿・これを夢見て十字架を耐え忍ばれたからです。

どんなに偉大な愛と忍耐ある救いの創始者であり、完成者でしょうか。イエスの血潮により天国の相続者として国賓的待遇で招かれている幸いに答え、心からの感謝礼拝を捧げましょう。イエス・キリストこそ唯一栄

光と讚美を受けるにふさわしい血潮に染む  
長服にそでを通した勇気ある救い主だから  
です。

## 赤い馬と白い馬

終末七年患難時代の最後にはイスラエルの北部レバノン、シリア、ヨルダン三国の接点に近く、ヨーロッパ、アジア、アフリカ大陸の交通の要衝としても注目されているハルマゲドンにて、世界最終戦争が起きます(黙示録 9:13～19、16:12～16)。

その日、反キリストの世界支配に反発した中国を始め、日本のようなアジア諸国連合

軍が騎兵を組織してイスラエルに軍事侵攻します。

黙示録九章一六節では騎兵の数は二億であり、人類の三分の一を殺すために解き放たれると預言します。現在すでに中国の民兵隊は二億五千万人いて、人類の三分の一を滅ぼす殺傷能力ある核兵器も保有しています。この戦争は人類史上、最も血なまぐさい大惨事となり、その死者はメギドの谷間から流れ出た葡萄酒のようになり、馬のくつわに届くほどの千六百スタディオン(二九六km)にも広がると預言されています(黙示録 14:20)。それゆえ、イエスさまの救いの血潮を拒み、自らの不義の血(エゼキエル

16:22) に溺れることとなる神さまの激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れられたすべての不信者の象徴は、ニメートルくらいはあろう馬のくつわまで届く赤い血の海につかった赤い馬です。反対にイエスの血潮を信じて救われて、七年患難の来る前に空中携挙された私たちすべてのクリスチャンは、この日、空中から白い馬に乗ったイエスさまに付き従って地上のオリーブの山に降りて来る地上再臨を体験します。その象徴は白い馬です。

「また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、『忠実また真

実。』と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。その方は血に染まった衣を着ていて、その名は『神のことば』と呼ばれた。天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従つた。この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。その着物にも、ももにも、『王の王、主の主。』という名が書かれていた。」



## (黙示録 19:11～16)

イエスさまにつき従って、真っ白い清い麻布を着た私たちすべてのクリスチャンも白い馬に乗って地上再臨します。その時、最も注目に値するのは大空を覆う白い雲のように白くはなはだ数の多い大群衆となったすべてのクリスチャンのまとう白い衣と白い馬たちに囲まれて、一際引き立ち目立つ紅一点の赤があります。それが白い馬に乗られたイエスさまの身にまとわれた血潮に染まった御衣の色です。多くの王冠を受け、「神のことば」と呼ばれるイエスさまのまとわれた御衣だけは白い空と白い馬と白い衣の只中、

唯一・血潮に赤く染まっており、そこにはわかりやすく「王の王、主の主」と書かれています。実にすべての者、ことにイエスさまを突き刺した人々がはっきり仰ぎ見るイエスの御衣に染みた、この血潮こそ、ご自身が十字架で流された尊いあがないの正義の血潮です。

## 契約の箱に注がれた血

エルサレムはBC六〇五、五九八、五八六年と、三度本格的にバビロンの攻撃を受け、陥落しましたが、ネブカデネザル王が破壊したソロモン神殿からバビロンに戦利

品として持ち出された財宝と王宮の財宝などについて第二列王記二五章一三から一七節のリストを見ると、契約の箱はそれに含まれていません。やがて七十年が満ちて、エレミヤの預言どおり(エレミヤ 29:10)、捕虜から解放され、再びエレサレム帰還したユダヤ人はネヘミヤとエズラを指導者に立てて以前に劣る粗雑な神殿を再建して、バビロンから財宝が返還されましたが、その中にもエズラ記一章七から十一節によると、契約の箱はありません。それは、この始めの抽囚が始まった時点で預言者エレミヤを始めとする忠実に宮に仕える祭司たちがバビロン軍に奪われないよう、最も重要な契約

の箱をソロモン神殿から持ち出してエルサレムのどこかに隠したからです。当時バビロン軍から全面包囲されていたエルサレム城内で、祭司たちが神殿から大きな契約の箱を持ち出して、城外の遠いどこかの世界へ運び出すことは時間的にも環境的にも到底不可能だったはずです。そのため預言者エリヤと敬虔な祭司たちが迫り来るエルサレム陥落直前に祈って、聖霊さまに預言的に導かれて啓示されたエルサレム城内のどこかの洞窟内に契約の箱を隠したことは充分考えられます。聖書では事実これ以降、契約の箱のありかについての記録がなく、ただ黙示録十一章一九節では世界の終末期

に天にある神の神殿の中に契約の箱が見えたとあり、終末の七年患難時代にもう一度隠されている契約の箱が世界に再登場する可能性があります。

聖書預言によると、やがて終わりの年に世界大戦が必ず起きます。その参戦国リストはこのようです。

「神である主はこう仰せられる。メシエクトトバルの大首長であるゴグよ。今、わたしは、あなたに立ち向かう。わたしはあなたを引き回し、あなたのおごにかぎをかけ、あなたと、あなたの全軍勢を出陣させる。それはみな武装した馬や騎兵、大盾と盾を持ち、みな

剣を取る大集団だ。ペルシャとクシュとプテも彼らとともにおり、みな盾とかぶとを着けている。」(エゼキエル 38:3~5)

これは新改訳聖書でしたが、明治時代の文語訳聖書ではこうなります。

「主の言、我にのぞみて言ふ。人の子よ。ロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王、ゴグになんじのかおをむけ、これにむかいて預言し、言ふべし。主かくいいたまふ。ロシ、メセク、トバルの君ゴクよ。みよ、われなんじをばっせん。」(エゼキエル 38:2、3)

ここで文語訳には新改訳で削除された「ロシ」という国名があります。他の外国語の聖

書で調べてもここに「ロシ」という国名が確かにあります。むかし日本では古代ロシアのことを「ロシ」と呼ぶことがありました。世界大戦はロシアがイスラエルに軍事侵攻することから勃発します(エゼキエル 38:8、16)そして「ロシ」の後に出て来る国名「メセク」とはギリシヤ語でモーシであり、これをロシア語にするとモスクワという言葉の原語になります。このような感じで他の箇所も翻訳すると本文の意味はモスクワとウクライナの大首長なる「ゴグ」とは旧ソ連いまのロシアになり、ロシアと共に出陣する同盟国はむかしの「ペルシヤ」なる今のイラン。「クシュ」なるエチオピアも参戦することになります。しかしこ

の戦争でロシア同盟軍は徹底壊滅して敗戦すると預言されています(エゼキエル 39 章)。そのためイスラエルに敗戦する予定のロシアの同盟国、「ペルシャ」なる今のイランにとってその顔でもある大切なイスラム教の神殿・岩のドームは現在むかしのソロモン神殿があった場所に建てられているため、敗戦国の立場上これが聖絶の対象として完全破壊されるでしょう。

イスラエルでは今でもできればこれを除いてソロモン神殿の復活のような第三神殿を同じむかしの場所に再建したいと願って日々嘆きの壁で祈っています。こうしてユダ



ヤ人の歴史的願い、もとの所にイスラエルのヤウエの神さまの第三神殿が再建されるその日が実現することになります  
(エゼキエル 40～48 章)。

略奪され、かすめ奪われた城内の土地の領域すべてを取り返し、反キリストの経済的支援のもと再建が成就して昔からのイサクの子孫ユダヤ人と、イシュマエルの子孫アラブ人との宿命的対決は幕を下ろします。そして四千年間もの歴史をかけ、隣国すべてを巻き添えにした兄弟大喧嘩に大勝利したユダヤ人にとって、主の神殿の更なる完成のために、礼拝と律法を中心であり、祝

福の源と考えられる契約の箱（第一サムエル 4:5、第二サムエル 6:12）、これがどうしても必要とされるでしょう。再建されたイスラエル第三神殿にはすべての備品があるのに最も重要な契約の箱だけが、そこにはないのでから。

ここで、再びパレスチナ問題を再燃させ、中東和平交渉を複雑困難にしてしまう、イスラエル政府があえて明らかに情報を一般公開しなかった機密扱いの報告があります。

考古学者であり、探検家でもあるロン・ワイアットの報告です。一九八二年一月にイエス傑刑の場で知られる、崖のかたちがどくろ

の顔をしたゴルゴダ丘の地表下にある二千年前のローマ時代の地層から、岩床に三つの並行して並ぶ、十字架の木を立ててから固定の杭が打ち込まれるための四角い掘り下げた十字架穴と、すこし後ろの中央の崖面から二メートル五〇センチ突き出した一〇センチ高くなった岩棚にもう一つの十字架穴を発見し、イエスさまの墓のふたとして使われ、復活の際、消え失せた丸く大きな封印石をも発掘したといえます。左右の十字架に強盗人たちが十字架につけられ、少し後方中央の約一〇センチ高くなった最も目立つ場所にイエスさまがつけられたと考えられます。木と土の文化の日本とは異なり、

石と砂の文化のイスラエルでは深く深く掘り下げて土砂を取り去ることにより、多くの考古学的遺産がそのまま朽ちることなく爪あとを残していることが多くあります。

イスラエルではイエスさまが十字架を背負って直接歩まれた当時のビア・ドロローサの旧道とそれに連なる旧市街地の一部も地下で発見されて発掘が続いたこともあります。さらに驚くべきことは、この十字架を立てた穴のうち、中央のイエスさまがつけられた十字架を立てる掘り下げた柱穴は幅、三二・五センチ×三五センチ、深さは五八センチであり、ちょうどそこから始まって、左真下に大

きな地震の際に生じた深く大きな天然のさく裂があり、その約六メートル下方の地下には小さな洞窟があり、そこに隠されていた契約の箱を発見したというのです。しかも、それがイエスの十字架のまっすぐ真下に位置していたのです。世界が探している契約の箱が、何とエルサレムの郊外ゴルゴダ丘の十字架の真下の洞窟に隠されていたのです。しかし、その後、この歴史的な大発見がその地を支配するイスラム教徒と聖都奪還を強行的にでも願う多くのユダヤ教徒右翼派の間で対立を確実に激化させる大変な戦争の起爆剤になることを知ったネタニヤフ首相が中東和平実現の政治的目的から、

発掘も立ち入りも全面凍結してしまい、現在もそのままそこに埋め戻されてイスラエル政府当局の機密扱いのまま眠っているのです。

(本誌三章冒頭で私が計算した十字架の地上高は最大約五メートルでした。ここにロン・ワイアット発掘の十字架を立てる掘り下げた柱穴の深さ五八センチを足すと、十字架の縦の木は全長五メートル五八センチ位はあったことになります。大工の世界で換算すると約一八尺の角材です。)

実際、政府が一度この契約の箱発見のニュースを実験的に流して第三神殿建設の

可能性を公示して反応を調べた結果、一九九〇年一〇月八日にシオンの丘大虐殺と呼ばれるユダヤ人とアラブ人の間に民族大暴動を引き起こし多数の死傷者を出すという苦い経験もありました。

ここでロン氏が一般公開した証拠写真を説明します。

図 15 はよく知られた観光名所のゴードンのカルバリと呼ばれるイエスさまが十字架に付けられた場所のちょうど真上に位置する岩棚です。当時のローマ軍の支配権誇示と政府反逆者への見せしめ目的の処刑場としてここはまさに演出効果絶大などくろの面

の真下ということで人通りも多い地方を結ぶ道ばたの群衆の最も注目されやすい目立つ場所があえて選ばれていたのです。確かに、丘の上で何も無い空を背景に十字架が立てられている映画や聖画のイメージが強いですが、実際の聖書には十字架の地に関して何も無い丘の上とは一切言及されておらず、ただルカによる福音書二三章三三節では『「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。』と証言されており、岩肌がどくろの面のように削られている岩棚に沿って真下を掘り進んだ結果、実際に十字架穴とさらに真下



の契約の箱が発見されたのです。

そして図 16 はロン自身が立つどくろの面の真下に位置する岩棚で発見された三つの加工された罪状書きを置くための岩棚の写真です。

そしてこの写真を見ると十字架の上に張られた罪状書き「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」に対する通常の私たちのイメージとはかなり異なることと思います。聖書ではルカによる福音書二三章三八節で『「これはユダヤ人の王。」と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。』とあり、他の福音書でも「十字

架の上に掲げた」と証言しますが、ギリシャ語の原語ではこの「頭上」や「上」という言葉に「エピ」が使われており、その意味はこの場合文字どおりの「上」よりは「上方」と訳するほうがもっとふさわしい言葉です。罪状書きはイエスさまお一人の十字架の上方の岩棚でしかもこんなに大きくヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で別々に三枚も石膏で固めた大きな罪状書きを使って黒いパピルス製の文字で書き込まれていたのです。罪状書きとはあくまで通行人に広く掲示するための見せしめ目的で掲げられた看板です。もし一枚の紙に三カ国語の文字が書かれて十字架の木の上に直接張ってあったのであ

れば近くの通行人さえ字が小さくてなかなかよく読めません。大きく書いて人々の前で大胆に掲げる見せしめのため、このような岩棚に大きく加工した罪状書きのスペースが必要だったのです。

そこからさらに深く掘り進めて二千年前のローマ時代の地表である岩地の大地にまで到達した十字架周辺の全容を真横から手書きしたものが図 17 です。発掘作業の際この同じ地層の現場では、紀元一四年から三七年までのテベリウスの治世に使われていたローマ貨幣も一緒に発見されています。

中でも注目が一番奥まった他の受刑者たちよりも約一〇センチ高くなった中央の最も目立つ岩床のステージ上に発見された一つの十字架穴です。この穴こそ左に向かって広がる大きな天然のさく裂が入っており、強盗人たちを前方の左右に位置してイエスさまの十字架が立てられた中央の奥まった最も目立つ場所です。

そしてこれらの現場を真上から見下ろすように手書きしたものが図 18 です。

遅くとも紀元七十年以降にはすでに十字架刑の執行がローマから全面廃止されたため、

使われなくなったこの場所で一世紀頃の初代教会の信者たちが集まって、イエスさまの十字架跡地を記念に壁で囲う形で教会の建物をここに建てて礼拝を捧げていたようです。

図 18 の太枠の囲まれた線がその建物があつたという遺跡の見取り図であり、正面中央の丸いものは「あれほど大きな石」(マルコ 16:4)と書かれた、直径四メートルセンチもある一度はイエスさまの墓で封印目的に使われた、もともと金持ちで有力な議員ヨセフ用に準備された、一等墓地にふさわしい通常サイズの二倍はある大きな封印岩です。

これはイエスさまが復活されたため必要がなくなった空の墓から、入り口のとびらとして置かれていたものを復活の象徴として当時の信者たちがごろごろ転がしてか近くの十字架のどくろの地まで運んできて確かな遺品のように納めていたようです。このようなことは、今でもイスラエルで二千年前にイエスさまが直接通られた跡地にはその聖誕の地から始まってすべての場所に、何らかの記念の意味を持つ教会が当時の岩肌を残した状態で建てられていることを考えると同様であり、充分理解できることです。

詩篇六五篇十一節には「あなたは、その年

に、御恵みの冠をかぶらせ、あなたの通られた跡にはあぶらがしたたっています。」と書かれており、イエスさまの通られた二千年前の跡地には今日でも聖霊さまの油注ぎで教会が多く建設されています。

図 19 は上方に突き出た祭壇石の写真であり、礼拝目的で初代教会の信者たちによって作られたようです。

図 17 の中で左端の岩壁中央から突き出ている岩です。

図 20 は有名なイエスさまが葬られた墓の入り口付近の写真ですが、その長方形の墓の

入り口には二千年前ローマ兵がとびらとして一度は使われたはずの封印石が、今では封印の鎖もろとも跡形なく紛失しており、これについて一体どこに移動されたのかを説明できる考古学者は今まで誰もいませんでした。

しかし、地中から発見された大きく丸い封印石の直径はこの墓の入り口の外壁両側（図 20、A点とB点の辺り）に現在も残る封印石の置かれていたとき付いた傷跡と大きさが完全に一致しました。

さらに図 21 をご覧下さい。これは中央のイエスさまの十字架が立てられた穴の写真で



あり、図 22 はその穴から広がるさく裂部分の拡大写真です。

そしてこの穴が土砂で埋まらないために使われたと考えられる切り出して加工された石がこの穴の栓となって入っていたのです。それが図 22 です。

ゴルゴダの丘は全体が岩山で所々水流で浸蝕されて天然の洞窟や狭いトンネルのような抜け穴が多数存在します。そこでロン氏はこのどくろの岩山の真下にも天然の洞窟があるのではないかと考えて、岩肌をハンマーとチーゼルで砕いて無理矢理掘り進め、

やがて壁が崩れるようにして中に天然の洞窟を発見しました。しかし、それは洞窟と言うより迷路状に屈曲した狭い小穴のトンネルで人がはいずってようやく入れるほどであり、これら小穴のうちのどこか一つに過去に人が来た形跡がないかを調べたのです。

二〇人ほどのアラブ人の土方アルバイトを雇って、ゴルゴダの丘の穴という穴をすべて調べ続けて一九八二年一月六日午後二時、彼はたった四五センチの隙間の小穴のトンネルを懐中電灯片手にはいずりながら進入するとそこにはなぜかコブシ大の石が積まれており、これを片手で取り除けながら

進むと石の向こうにポカッと穴が空き、そこに天上から五〇センチ近くまで埋まっている閉ざされた小洞窟を発見しました。地下約一二メートルの網の目状のトンネルの中です。

そしてその発見された小洞窟の狭い空間に獣の皮で覆われた金の机が置かれているのが暗闇の中、懐中電灯に照らされました。それは聖所で使われていた備えのパンの机と判明。さらにこの閉ざされた空間の中に契約の箱が隠されていたのです。契約の箱は古代に物を保存するためによく使われた長方形の薄い石棺にすべてすっぽり収

められており、その石棺の平らな上ふたは二つに割れており、割れたうちの小さい方が横にずれてそこに開かれた隙間ができており、小洞窟内の天上部のひび割れた裂け目にも真下に位置するその割れた石棺の開かれたふたの上にも中にも黒く固まった血がついていました。実に契約の箱は十字架の立てられたその現場のちょうど真下六メートルに位置していたのです。その見取り図が図 24、図 25。写真が図 26 です。説明によると長いさおを付けたポラロイドカメラと三五ミリカメラとビデオカメラという三種類の写真撮影が行なわれても契約の箱はいつも神秘的ベールに覆われていて、もや

のような金色の霧ばかりが前面に写されてぼやかされてしまい、その時、ロン氏は撮影をしないことが神さまのみ心であると確信したため写真はこれだけとのことでした。

イエスさまの十字架が立てられた深さ五八センチの穴とそこから広がる天然のさく裂についてですが、マタイによる福音書二七章五一節によると、イエスさまが十字架の上で息を引き取られた際、「すると見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。そして地が揺れ、岩が裂けた。」と証言されています。すなわち、この岩が裂けるほどマグニチュードの高い大地震が神さまによって起こさ

れたため、その時、その力で十字架の真下に  
巨大なさく裂が入ったと考えられ、この大き  
なさく裂のゆえにもイエスさまを最後の死刑  
囚にどくろの死刑場の十字架穴はローマ軍  
によって以後どの死刑囚にも絶対使うことな  
く廃止されました。では、他にどんな目的が  
あって大地震が引き起こされたのでしょうか。  
目的があったのです。十字架のちょうど真  
下の小洞窟に隠されていた契約の箱の空  
間にまで真っ直ぐさく裂が走り、ほふられた  
神さまの小羊イエスさまご自身が流された  
十字架の血潮を直接、注ぐためでした。

旧約の律法ではあがないの礼拝の時、ほ

ふられたいけにえの血はいつも祭壇上だけでなく祭壇の下の土台にも注がなければならぬという不思議な定めがありました(レビ4:18、25、34)。ここにその律法が書かれたことの本当の目的があります。十字架という祭壇上流れ出た大量の血潮は流れとなり、その土台である十字架の立てられた足もとにたて穴の下の上台にまで流れ落ち、ゴルゴダの地を赤く染める必要があったのです。実にイエスさまから流れ出たあがないの血潮は十字架という木の祭壇の上に注がれただけでなく律法の定めどおり下の土台にまで流れ伝わって注がれ、足元に集まってこれが大地震の際生じた大地のさく裂に従っ

て下へ下へ真下に眠る契約の箱にまで直接流れ落ちることとなるそのためだったのです。さらには契約の箱を収めた石棺の上ふたさえも大地震の力はみごとに裂いて開かれた状態になり、その隙間からイエスの血潮は見事に契約の箱にまで直接注がれていたのです。父なる神の歴史を超越した綿密で完璧な御計画がここに成就されたのです。

「アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほふり、その血を垂れ幕の内側に持ってはいり、あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを「贖いのふた」の上と「贖いのふた」の前に振りかける。」



(レビ記 16:15)

旧約時代は暗い至聖所内で動物の血が契約の箱のあがないのふたの上と前に振りかけられましたが、新約時代は暗い地下の小洞窟内でイエスの血潮が契約の箱のあがないのふたの上と前に振りかけられたのです。事実この発見された契約の箱の上には、十字架穴から左に広がる岩盤のさく裂ずたいに真っ直ぐ流れ落ちた血の注ぎがそのまま黒く固まって張りついていたのです。しかも、その二千年前の乾いた血をアメリカのクリスチャン医療施設の研究所にサンプルとして持ち帰り、塩化溶液に三日間浸し

て水和しなおしてから電子顕微鏡でDNA鑑定すると、この血は間違いなく人間の男性の血であることが判明されたのです！

人間の血液のDNAは長期間持ちこたえる大変丈夫な物質であり、二千年前の血が今日まで持ちこたえたという事例は他にもあります。二千年前のイエスさまの時代よりも、もっとむかしに造られたエジプトのツタンカーメンやパロのミイラなどでも今日、その体内で固まった古い血液中からDNA遺伝子パターンを読み取って彼らの埋葬時期や血縁関係なども明確に特定されております。また、古代マヤ文明時代の古器物セルトは

ヒスイ石を彫って作った石おのか、やじりのような道具であり、偶像目的でも使われていましたが、発見当時から血が付着した状態だったため、炭素一四測定法でこの血を分析した結果、これが人の血であったことや古器物の使用されていた正確な年代等も特定されました。

今日、世界で最もまれな血液型として知られているのは一九六一年に米国マサチューセッツ州に往むRHプラスとマイナスの兄妹から確認されたボンベイ型のh-h亜型であり、ギネスブックに申請されましたが、一九八二年に衝撃発見された未公開の契約

の箱に注がれていたこの血はDNA鑑定の結果さらにたぐいまれなる世界で唯一の血であることが判明したのです。

私もアメリカでロン・ワイアット博物館の代表にこの契約の箱から採取されたイエスの血潮を見せてほしいとお願いしましたが、大切に保存していると拒まれました。ロン・ワイアット博物館は個人の家を改造したようなレベルで小さいですが、十字架の穴が普段使わない時に土砂進入で詰まらないようローマ兵によって加工して使用していたと思われる十字架穴専用の栓となる長方体の石が展示されていました。

発掘が全面凍結される以前、ロン氏によるこれら一連の発見があまりにも信じがたい話であったため、その主張に反論しようと独自の発掘隊を組んでどくろの地を追跡調査したオーストラリアの探検家、考古学者であるジョナサン・グレイによると、ロン氏の発見は皮肉にも徹底的に発掘現場に足を運んで調査するほどに、現われる証拠に圧倒され、ついには確かに信頼できる事実であるという結論に達し、その詳細な追跡調査によると医療施設に持ち帰った通常ならば父親から二三個、母親から二三個、合計四六個の染色体を持って産まれるはずの人間の血液が、この血に限って二四個しか染色

体を持たない男性の血であり、母親からの染色体しか持たない、科学用語でいう「半数体」の血液であり、それは部分的処女生殖によって生まれた人間の血液であるといえます。部分的処女生殖とは、医学界で理論的には一般に認められている現象であり、母胎となる処女の卵巣付近に存在するY遺伝子が卵子と結合して、処女がXY遺伝子を含む胎児を出産できるという考え方ですが、世界で唯一イエスさまだけが、聖霊さまによりて処女マリヤから生まれた御方として、このような特別なDNAを持つ奇蹟の人だったということです。

一方、ロン・ワイアットの後継者団体WAR

が発表したイエスの血潮の公開写真(図27)とその報告によるとDNAの数については全くふれていませんが、契約の箱の上から採取された証拠の血潮を微生物をもとらせることのできる特別なマイクロスコープを使って見るとそこには確かな「動き」があったことを科学的に証明しています。なんと！イエスさまの二千年前の血潮が今も生きているというのです。

私もイエスの血潮と言われる再水和血液サンプルの生粒子を超マイクロスコープ暗映像で映したものは見ましたが、そこには無数の生きて四方八方に素早く動き回る血の

粒子が映像化されておりました。これらの「生きている血の粒子」とは通常の光マイクロスコープでは小さ過ぎて見えませんが実在し、科学者たちによって発見され「不滅である。」と述べられているものです。難しい話になりますが、この「不滅の血」の粒子とはフランスの科学者ガストン・ナエサンスにより「ソマタイズ」(意味は創造体)と名付けられ、一〇ミクロンにも満たないサイズで様々なものを含みマイクロザイムス等から構成されマイコプラズマ血液の液体部分のようなものです。そしてこの生きて動いているイエスさまの「不滅の血」について科学者クリストファー・バードはこう分析します。



「これら生きている粒子は遺伝物質を含んでいる事が科学者たち関係者によってさえ理解され発見されている。それは本質的には形態を変える事があるポリモーフィックだと解っているが、超高温や激しい毒性の科学物質そのうえ核放射熱さえにも影響されない事が解った。彼らはこれを超マイクロ微生物細胞代生体であり、再生する実体であると説明しており、多くの科学者が信じているのは、これがDNAの先がけで地球上の生き物の基盤だということです！」

WAR所長のリチャード・ライブスはこの微生物粒子の存在に注目し、尿培養におい

て通常では分割増殖するところのバクテリアがないと突然どこからかバクテリア細胞が現われてくることを発見し、バクテリアの様な形に成長する事ができる代細胞パーツの存在について調査、結果これら微生物が尿サンプルの中で完全に存在し、バクテリアが存在しないときにもバクテリアの様な形に成長して実在し、これらの粒子はどんな再水和血液にも現われることを発見しました。

このような訳でイエスの血潮の生きた動きとは単なる混入した雑細菌繁殖ではなく、本当に生きた不滅の血の粒子そのものだったのです！。

「すべての肉のいのちは、その血が、そのいのちそのものである。」

(レビ記 17:14)

「それで後のことを予見して、キリストの復活について、「彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。」と語ったのです。」(使徒 2:31)

「永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエス。」(ヘブル 13:20)

では、十字架の真下、さく裂下約六メートル下方にまでも届くことのできる大量の出血とは一体どこから流れ出たのでしょうか。イエスさまの手足から流れ出た血潮だけで充

分だったのでしょか。その解答がここにあったのです。イエスさまのわき腹から流れ出た血潮です。イエスさまがゲッセマネの園で血潮の汗を流して祈られた死の苦難から始まり、精神的に疲労困憊され、圧迫された心臓が、やがて十字架上で破裂し、その後、ローマ兵によりわき腹に槍を刺されて流れ出た、その時の流血があまりにも大量だったので。

人間の心臓は総延長九万六〇〇〇キロにもおよぶ全身の血管が一生の間つまらないように絶えず流し続ける強カポンプのような器官ですが、そのすべては意外に不釣

合いなほど繊細で貧弱な交感神経と副交感神経によって支配されており、これらの神経が脳や全身からのメッセージを受けて心臓のペースと強さをコントロールする司令塔となっています。そのため、大脳で生み出された人の心とは、そのままこれらの神経を通って心臓に直接伝えられることから、心臓とは心を映し出す鏡とも言われます。そして人間の体内では最大の大動脈と最大の下大静脈のいずれもが心臓に集中しており、心臓の収縮によって肺動脈や大動脈へ送り出される血液量は一分間で安静時の成人で五～六リットルもあり、激しい緊張や運動時には心拍数も上がり二〇〇回に達す

ると毎分一六リットル以上にもなり、人間の体内血液のほとんどは脳と心臓に集中し、この血液の供給が何時間かストップするならば死のダメージをそのまま受けることにもなります。通常、人の血液の量は体重の約一三分の一であり、仮に体重が八〇キロなら約六・一五リットルです。そのうち、イエスさまのように激しい心の痛みが直接原因して、粉々に割られた鏡のように神経を取り巻く心臓を破裂させた場合は、そこから流れ出る出血量は一から二リットルもの血が赤く見えるどろどろした赤血と水のように見える透明な血清とに、時間とともに分離しておき腹の辺りにある心臓下部の周りの膜の内側

にたまるといえます。

「兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。」(ヨハネ 19:34)

このわき腹から流れ出た血と水こそ、イエスさまの死因が十字架の釘打ちや暴力による外傷的ショックや出血多量あるいは呼吸困難によるものではなく、筋肉の中でも強力な心臓の壁が極度の精神的苦痛に耐えきれずに破裂したという人として最も過酷な死をとげたことを物語っています。そしてこの大量の血潮と極度の緊張状態で全身から心臓に集中していたすべてのイエスの血潮が

死後、ローマ兵のするどく長い槍によってわき腹から突き上げてつらぬかれたため、大地震で真下の大地が裂けて現われた契約の箱のあがないのふたにまで注がれ出る大量な流れとなったのです。

私はイエスさまのわき腹から流れ出た血潮が岩のきれつにそって六メートル真下まで充分届くほどの分量なのかこれを実験してみました。近所で径しい変なおじさんになるといけなから、人気のない夜中の三時ごろマンションの凹凸がある壁ずたいを選んでペットボトルで一リットルの水を壁に付けながら徐々に約六メートルある三階の高



さから放水しました。すると水は広がりを見せながらも自然と落ちて行き、確かに1階の六メートル真下まで充分届く量であることがわずか一リットルでも確認できました。ましてイエスさまの十字架上流され続けた大量の血潮は契約の箱まで注がれて、あまりある量だったと催信します。

ここでイエスの血潮の大量の流れと、その御力を静かに考え、かつての預言者カタリナ・エンメリックの預言のとおり、契約の箱の真下にアダムの骨が本当に眠っていると考えて見ましょう。

すると熱い感動が心に走ります。それは実

に長い歴史を超越した偉大な神の摂理の中で、最後のアダムなるイエスの脇腹からだけでも一から二リットル、額と手足、背中をも加えるとそれ以上に大量に注がれたすべて血潮が、十字架の真下に眠る人類の祖、最初の罪人アダムにまでも充分注がれ落ちたかもしれないからです……。確かにイエスの聖なる血潮は、神学的にも実際的にも全人類の原罪の根源にまでさかのぼって、ことごとく根本から洗い清めた永遠の救いの力だったのです。ハレルヤ！

神の摂理はあまりに偉大で、驚嘆するばかりです。そして契約の箱は製作の際、主

の命令により大量に用いた純金製であったため（出エジプト 25:10～22）、非常に強固であり二千六百年間、経っても朽ちることもなく、人の容易に入れない未知の洞窟内、ほぼ完全な状態のまま保存され、そこに注がれたイエスの血潮も、暗い洞窟内の適度な気温と湿度により、腐りはてることなく二千年間もちこたえて契約の箱にそのまま黒くはりついたままだったのです。

契約の箱は輝く純金でおおわれています（出エジプト 37 章）。神さまがあえて契約の箱を沢山の純金でつくらせた本当の理由は、当時の神さまの偉大な栄光に加え、数千年先の後の時代になっても朽ち果てることなく、

やがて注がれるはずのイエスさまの純金よりも尊い血潮をそのまま受けて保存して証しすることのできる唯一の朽ちない受け皿となるためだったのかもしれませんが。

やがてDNA鑑定技術がさらに飛躍的向上した世の終わりの一番ふさわしいころ、多くの人々の預言するとおりの契約の箱が再び出現し、今度こそ全世界の注目を浴びることになるでしょう。ある人々の視点は値段がつけられないほど高価な遺物、その純金の物質的資産価値と巧みなケルビムの装飾による芸術性に目を見張ることでしょう。しかし、私たちクリスチャンが最も大きく目を見

張るのは輝く黄金以上に尊く価値があり、巧みな純金製の最高傑作を受け皿にしてもまだ足りない、そこに黒くはり付いているイエスさまの十字架の血潮の霊的資産価値に視線が釘づけとなるのです。

人間の血潮のDNAは、大変丈夫であり、冷凍や洞窟のような特定条件の下では永遠に保存でき、超高温や激しい毒性の科学物質や核放射熱に当たっても破壊されにくい非常に強固な構造をしているように、イエスの血潮は今日も迫害をものともせず乗り越えて、力強く生きて働きかけ、私たちに十字架のあがないを語り続ける、永遠

に変わらぬ確かな現実証拠です。

「あかしするものが三つあります。御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。」

(第一ヨハネ 5:8)

では今から先、一体いつ、どのようにして契約の箱とイエスの血潮は全世界に再び現わされるのでしょうか？これはあくまで推測です。もともと、ゴルゴダの丘自体も地表に現われていなかったものがエン・メリックの預言によると、ノアの大洪水後、全地から水を引くために起きた山が上がり谷が沈む地殻大変動の地震が起きた(詩篇 104:5~9)その時から人手によらず現われた丘であるといえます。

また、ノアの箱舟にしても、もともと地表に現われていなかったものが、一九四八年度のアララテ山脈一部の地震の際、埋もれていた地中から人手によらず現われたものです。箱船はある意味で主との間、一つの船形の契約の箱とも言えますが、これが終末期の今、再び世界に地中から地震の力で現われたことは預言的な出来事かもしれません。

ダニエル書二章四五節では、イエスの空中再臨を「人手によらず山から切り出された一つの石」と表現されていますが、主に関わる神聖な出来事は、いつも人手によらず神さまより直接現わされるのかもしれません。

そう考えるとエゼキエル書三十八章一九、二〇節では七年患難時代の幕開けロシアのイスラエル侵攻のその日、全世界の注目を浴びるイスラエルの地には山々がくつがえる程の大地震が起きると聖書預言されていますが、この大地震の力こそ現在埋もれたままの契約の箱を人手にはよらず、地表と全世界に現わす神さまの手段ではないでしょうか…？

もし、この時タイミングよく契約の箱が公に出現すれば、第三神殿の建築は早急かつ確実なものとなるでしょう(エゼキエル四〇章)。あるいはこの時の大地震以外、可能



性として七年患難時代末期に預言された最強の地震(黙示録 16:18)、他にイエスさまと私たち携挙されたクリスチャンが共に地上再臨し、オリーブ山が二つに裂けるその時の地震(ゼカリヤ 14:45)により契約の箱が世界に出現する可能性もあるでしょう。

旧約時代、一年に一度のあがないの礼拝の日に、大祭司は午前九時から始まって明るい太陽の下で洗盤で自らを清めて、祭壇上のいけにえをほふり、その周りに血を注ぎました。ここまで少なくとも三時間はかかり、やがてこれが終わると次に残りの血を器の中に入れて手にし、さらに奥深い至聖所へ

と入っていきます。「チャリン。チャリン。チャリン」外の大庭では鈴の音が祈りながら大祭司を待つイスラエルの民の間にこだまします。聖所そして至聖所へ、そこは本来真っ暗な光のない場所であり、最も聖なる場として大祭司の務めはさらにここでも厳粛に三時間はかかりました。こうして、大祭司が契約の箱のあがないのふたに血を注ぎ終わり、一切のあがないを成し遂げるとあがないの使命が今年も無事に果たされたことを確信した大祭司は誤って殺されなかったことにもホッとして長いひもを引きずりながら再び民の待つ明るい大庭へ戻っていきます。「チャリン。チャリン。チャリン」イスラエルの会衆の

前に無事戻れた大祭司はそこで大胆に宣言します。

「テテレスタイ(完了した)」これにより民はいけにえの血が神さまに受け入れられ、罪赦されたことを確信し、あがないの礼拝が完了します。

ちょうどこれと同じことが十字架でも起きました。イエスさまはご自身が神の小羊として十字架の祭壇でほふられて、血潮を流されたお方であり、午前九時からの三時間は明るい太陽の下で十字架にかけられ、昼の十二時から息を引き取る午後三時まで最後の三時間は、驚くことに光なき至聖所の真っ

暗闇のように、太陽が日食状態で光を失ない、全地が暗闇に包まれました。

「そのとき、すでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。太陽は光を失っていた。また神殿の幕は真二つに裂けた。」(ルカ 23:44、45)

これは世界がイエスさまを捧げるための神聖なる至聖所と同じ環境になるため太陽は光を失ったのです。主の御前、全世界が暗い至聖所となったのです。そのため赤くならめした雄羊の皮や赤くならめしたジュゴンの皮などに完全に覆われた真っ暗な至聖所内(出エジプト 26:14)で契約の箱に血が注

がれる時、超自然的に明るい神さまの栄光の臨在の雲が現われてそこに満ちたように、今は、雄羊やジュゴンの赤い皮のような赤いイエスの血潮をあがめて、その血潮に覆われた時その環境こそ神さまの至聖所となつてその臨在、聖霊さまが全世界のどこでも下ることができる明るい新時代と変えられたのです。このような目的で暗闇が世界を覆ったのですが、あがないの犠牲はあまりにも大きく全地はあたかも父なる神さまが御子なるイエスさまのお苦しみを見るのに絶えかねて、目をつぶられたかのようにでした。

すべての被造物は御子の死により、喪に服

し、色を失ったかのようなのです。こうして全地は真っ暗な光なき至聖所となって全世界という至聖所の只中、世界の中心に立てられた十字架からあがないの務めが成し遂げられ、最後にイエスさまは叫ばれました。

「テテレスタイ(完了した)」こうして息を引き取られるや否や、聖所と至聖所を仕切る七・五センチもある神殿の垂れ幕は人手による下から上ではなく、超自然的に上から下まで見事に引き裂かれたのです。それはちょうど、イエスさまの御体が人手によらず、天の父なる神の御心で引き裂かれたよう입니다。そしてこのように息を引き取られたイエスさまのわき腹から流れ出た血潮と水は

あがないの血潮と実にひとり子さえも与える  
ほど私たちを愛された父なる神の涙でもあ  
ったかのようにでした。

今は、すでにイエスの血潮が契約の箱に  
注がれ、父なる神に受け入れられた証拠の  
聖霊さまも暗い全世界に注がれた希望の  
時代です。暗い至聖所内で大祭司が聞いた  
イスラエルの民へのおごそかな御声のよ  
うに、注がれたイエスの血潮に答え、まこと  
の至聖所なる天国の父なる神さまの御座か  
らも大きなみ声が全世界に響いております。

「大きな声が御座を出て、聖所の中から出

てきて、『事は成就した。』と言った。すると、  
いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があ  
った。」(黙示録 16:17)

十字架で肉体という垂れ幕を裂いて血潮を  
流し「テテレスタイ「完了した」と叫ばれたイ  
エスさまの死と復活に答えて、今や天上で  
は正義の裁きがこの乱れた世界に対して始  
まろうとしています。

「島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなっ  
た。」(黙示録 16:20)

日本列島という「島」も例外ない七年患難の  
裁き、それに続く第一の死、第二の死という  
地獄の裁きが現実化します。しかし、聖書



では全く同じイエスさまの注がれた血潮のゆえに、もう一つの別なメッセージも同じ父の御座から大きなみ声として全世界に響いております。

「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」

(黙示録 21:3、4)

これは父なる神と和解し、神さまの子供となり、天国へ入る新しい生ける道、復活のイエスさまを信じる命の道です。ここに預言された来たるべき天国で父なる神ご自身が直接、彼らの目の涙をすっかりぬぐいとってくださるといふ「彼ら」の中には今この世で涙する私たちの将来だけでなく、実に将来のイエスさまご自身も入っているのです。イエスさまはかつて聖餐式を変わらない記念に定めて弟子たちの前で誓願されました。

「みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。ただ、言っておきます。わたしの父の御国で、あなたがた

と新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」(マタイ 26:27~29)

御座におられる父なる神さまの叫ぶ大きな二つの御声、それは地獄の裁きか天国の祝福、二つに一つです。今は右に座す真の大祭司としてぶどう酒の喜びではなく、残された私たちの救いのために目から涙を流しながら本気でとりなし祈るイエスさまの切実なる願い、それはたった一つの思い、父なる神さまと同じ聖霊さまと同じ思いです。それは、「地の果てのすべてのものよ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。

他にはいない」(イザヤ 45:22)。

全世界がイエスさまの十字架を仰ぎ見て、その血潮によりて救われることです。和解の道、命の道、天国の道です。これを選択して右にも左にもそれないで主イエス・キリストの道だけを進むことです。

「忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解放し放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の

父である神のために祭司としてくださった方  
である。キリストに栄光と力とが、とこしえに  
あるように。アーメン。」

(黙示録 1:5、6)